
嗤う魔性のデュアルフェイス

是音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嗤う魔性のデュアルフェイス

【コード】

N8410Q

【作者名】

是音

【あらすじ】

「劇的な悲劇が欲しい」

ころりころりと迷い込んだ実が始まりだった。

地図に載らぬ街、並折。

魔都に潜む土着の伝奇。魔都を裁く首輪無き獵犬。魔都に跋扈する異形の数々。魔都を導く死使十三魔。

ある初夏の朝。少女、あまみやざくら天宮柘榴達は、並折の街を訪れようとしていた。

達魔 おはようございます

「ご機嫌如何ですか？ お久しぶりです」

「私達の事、覚えておいでですよ？ 実に八万七千六百時間ぶりですけど！」

「いいえ。確固たる自信を持ちまして、初めまして」

【達魔 おはようございます】

部屋の壁に掛けられた幾つもの蝋燭が暗い部屋を仄かに照らす。それでも床に敷かれた絨毯の模様すらはつきりとしなない明るさで、やはり暗い部屋という表現の域を出ない。

絨毯の中心にはクロスで覆われた正方形の机と、椅子が三つ。他に部屋の内装を説明するなら、それ以外の物が無いといったところか。

「土着の伝奇なんてものは千差万別なの。似通った点はあるかもしれないけれど、その土地その土地の歩んだ歴史に伴って改変ないし脚色付けは施されているでしょうね」

外界の音も届かないようなこの部屋には、三人の女が居た。

一つの椅子に座っているのは、髪が床に着いてしまいそうな程に長く伸ばした、肌の白い成人女性である。その髪は青く、蠟燭の明かりに怪しく照らし出されている。

彼女は、決して喋り慣れているとは思えない小声で話を続けた。

「怪談というものは昔の人の目撃談として記録されるもの。当然ね、奇怪に遭遇した者の証言でなければ嘘の作り話なのは解りきった事子供とて噂話をする時は『友達の友達から』 『知り合いの従兄弟の話では』と、知恵を絞って信憑性を高める前置きを加えるでしょう。ところが 今から話すのは、そういったものが一切無いの。なにせ登場するのは妖怪だけというもの」

純白の、飾りっ気のないドレスが揺れ、彼女は一つ息を吐く。そんな青髪の女性を、期待感溢れる真ん丸な眼で見つめる少女が二人。彼女の正面に座っている。

背丈も顔のつくりも、挙動すら、どこからどんな角度で見ても瓜二つの少女達だった。解り易い程に 双子。しかし立ち居振る舞いを見るに、彼女らが見た目ほど若くないのも明白。更にこの双子は、質素な青髪女性のドレス姿と違い、使用人が着用するようなエプロンドレスを着ていた。しかしながらこの二人は使用人という立場では無いのだから、おかしな話だ。

衣装趣味は多種多様なので置いておき、青髪女性の話に夢中である彼女らは興味津々だった。

「へえ、登場するのは妖怪だけですか」

「それはつまり、信憑性の有無はさほど重要ではない怪談である。という意思の表れでしょうか？ ^{ツガイ} 番様」

最初から作り話として、信用させようともしない事を前提に作られた怪談話とは。珍しいものだ。

青髪の女　　番は、にこりと微笑み、続けた。

「題目は確か……『百奇夜行と、のっぺらぼう』だったかしら」

「のっぺらぼう。私、聞いた事があります。化け狸が顔のない人間を演じて人を驚かしたという」

「違うよ　みそら。正確には貉^{むじな}。狸ではなくアナグマよ。そうですよね、番様？」

番はこくりと頷き、真ん中から二つに分けた長い青髪が揺れる。

「それも正しい。でもね　しずね、日本ではアナグマの事を狸と呼ぶ事も、狸の事をムジナと呼ぶ事もあるの。地域毎にね。では私の話では、ムジナとしましょう」

ね？　と首を傾けて二人を見る。

しずねとみそらは互いに互いの顔を見合い、にっこり頷く。

「なにも『むかしむかし』から始まるわけではないから、どう話しているのか迷うけれど……ちょうど今、みそらが言った通り　のっぺらぼうというのはムジナが化けて顔の無い人間になり、驚かすという話が有名ね。しかしこの話にはムジナは出てこないの。それに初めは　カオナシと呼ばれていた。のっぺらぼうの呼び名が有名になった為に題目も変わったのでしよう」

「なら、本来のタイトルは『百奇夜行と、カオナシ』？」

みそらは丸い瞳をぱちぱちと瞬かせて問う。

「ええ。話の主人公は、そのカオナシ。カオナシ自身の体験談という形なの。カオナシはその名の通り、顔が無い。目も耳も鼻も口も何も無い。何も無い故に、見る事も聞く事も嗅ぐ事も話す事もできない」

これにしずねが小さく笑った。

「体験談も何も、それじゃあどうにもならないですよ」

それには番も可笑しく思い、口元に手を当てて小さく笑った。

「いいところに気が付いたわね、しずね。そうね、有名なのっぺらぼうが話の中で当然のように喋っているのも、妙な話ね」

言われ、そういえば『こんな顔?』と言うお決まりの文句があるのをしずねは思い出した。

「この話が妙に現実味を帯びているのはその点。カオナシは一切喋らない。そう考えると何者かが化けたのではなく、そういう妖怪だったのでしょうか。カオナシは器用な妖怪で、化粧をするのが上手だったらしいわ」

「化粧……」

ほう、と虚空に視線を浮かべたみそらが頬に手を当てる。こう聞けば彼女のように大抵は可愛らしい印象をカオナシに抱いてしまうだろう。そんなみそらを見て、しずねが姉の耳元へ「化粧は元来、魔力を宿らせる儀式として使われたものなのよ姉さん」と囁いていた。

「現代でも女性は魅惑の粧を塗って外出するけれど 貴女達はどうかしら?」

訊かれた双子はどちらも眉を吊り上げて目を大きく開き、「人並みには……」と小さく頷いた。

「ふふ。それで カオナシも自分で自分の顔を描いていたの。ただしカオナシは六つしか部位を描くことができなかった。だから左右対称にくつついている目と耳と鼻だけを描いた」

左右対称。

その単語を聞いて双子は若干、顔をしかめた。

自分達が並んで立ち、「左右対称だね」なんて言われる事は頻繁にあったし、自覚もしている。だから別にそういった理由でその単語が苦手というわけではない。

彼女達が、あまり好ましく思わない奴。そいつが、よく「左右対

称なんて嫌いだ」と口にするからだ。左右対称という単語を聞く度にそいつを連想してしまい、彼女達は不快に思うのである。

ともかく、今の話とは関係の無い事なので彼女達も思考からそいつの醜い顔のイメージを追い出し、番の話を聞く至高の時間に集中し直すことにした。

「 どうしてカオナシが化粧をしていたのかというと、やはり外出する為だった。百奇夜行を見に行きたかったのよ」

「人間味のある妖怪ですね」

「なんだかその百奇夜行も祭囃子に囲まれていそうです」

語る番は笑い、先程から机の上に置いてあった紙とペンへ手を伸ばそうとした。が、ペンが見当たらない。いつの間にか みそらが胸に抱き締めるようにして持っていたのだ。

番は「ありがとう」と礼を言っ受取った。

彼女は話を中断し、時折何かを思い出しながら紙に図を描いている。地図だろうか。

大きな丸。彼女は「駅よ」と言い、紙の左上の隅に一つ書いた。更に丸の中に『きのえと』という名称を書く。

その右下に、少し小さめな丸。「これも」と言った。丸の中には『ひのえと』。

またその右下に、同じく丸。『つちのえと』。その右下にもまた丸を書いて『かのえと』。

見事に四つの駅は左上から右下へ一直線に並んでいる。

計四つの駅を描き、最後 紙の右から左へペンを一直線に走らせ、「川が一本」と言いながら『蝉乃川』と書いた。

あとは下方にぐにやぐにやと境界線のようなものを書き、斜線で塗りつぶす。これはおそらく海だろう。上方には山の範囲を書いている。

どうやらこの地図の街は、怪談の伝わる地元の地図のようだ。山と海を含んだ高低差のある広い場所らしい。

番は出来上がった簡単な地図の一番左上 『きのえと』を指しながら「ここからだっただかな」と言い、そこから山や他の駅や川へと、すすいすいペンを走らせた。

成程、夜に行く百奇はそのルートで、列を連ねて歩いたのか。と双子は頷くも、番が口元に手を当てながら「えつと……たぶんこんな感じ」と呟いた為、出鱈目にペンを走らせていた事が判明し二人は拍子抜けしたのだった。

番は最後に、百奇夜行の到達点を指し、妖怪力オナシの結末を述べた。

「力オナシは目と耳と鼻を手に入れ、百奇の仲間に入れてもらおうとした。しかし力オナシには口が無く、自分を名乗ることもできなかった、入れてほしいと訴えることもできなかったの」

力オナシは、ただ百奇夜行を見守るだけだったという。

「山を下り、海へと向かう列。百奇は夢中で行進する。故に、このまま海へ入り溺れてしまうことに誰も気付いていない。気付いたのは力オナシだけだった。しかし口が無いから注意を促す事ができなかった。結局 百奇夜行は海へと入り、みんな溺れ死んでしまった……」

語り終えた番は、疲れたのか胸に手を添えて大きく息を吐いた。間髪入れずにみそらが質問を投げ掛けてくる。

「それが並折という例の街に伝わる怪談ですか。それで、力オナシはその後どこへ行ったのです？」

「わからない。もしも誰かが力オナシに気付いてあげたら、結末は変わっていたかもしれない。そして、今話したこの怪談自体も時代を経て多少なりとも変わってしまったているかもしれない。ちなみに、

この物語を綴ったのがそのカオナシだといふのだからおかしな話ね」

「よ、妖怪が綴った話？」

「文末には『俺、顔、無し』とあったそうよ」

双子はなんだか不気味な心持ちだった。妖怪カオナシ。そいつ自らが文章として残すに及んだ、どうしようもない孤独感とやるせなさに感情移入してしまったからなのだろうか。

そう。この怪談からは、悪意は感じられない。誰もどうしようもなかった為に迎えてしまった悲劇的な結末だ。

再び静けさを取り戻した部屋。

そんな中、しずねが少し迷うような素振りを見せた後、意を決したのか口を開いた。

「番様が、その、つまり ええと」

しかし言葉がなかなか出てこない。

番はしずねの言いたい事を悟ったのか、問われる前に答えていた。「そうね、きつと、作り話じゃないかもしれない。今もまだ カオナシはどこかに居るんじゃないかしら」

しずねは申し訳なさそうに肩をすくめ、みそらは納得したように何度も頷いていた。

「妖怪は決して幻想じゃないわ。事実、貴女達の目の前に居るわけですもの」

番はインクの凍ってしまったペンを人差し指で撫でるように転がす。

「雪女が。ね？」

？

PUNICA【六月の果実】 1

【六月の果実】

乗り換えた始発電車はまだ人が少なかった。

窓の外を眺めると、少し寂しさを覚えるような古びた建物が、錆びた色を帯びて流れている。この寂寥感は一瞬、私個人の感覚に囚われるものだ……と思う。

私は活気のある場所が好きだ。この時間で活気を求めるべきではないのはわかっている。しかし私の視界内を流れるその場所は、きつと、どの時間も、このままなのだろうなと思う。狭い車道を挟むのは雑草の生い茂る歩道や、何年も前に潰れてしまったガソリンスタンド、看板の剥がれたビル。私はこんな場所を歩きたくは無い。たとえ古くとも、人の気配が欲しい。この電車に乗り換えた駅が活気溢れる場所だっただけに、この景色は一層私を寂しく思わせる。

まあ、この電車という箱に包まれている以上、それは他人事のような感想である。あの場所はこの先何年もあのままだろう。でも、私には関係ない。

窓から目を逸らし、腰を更に前へずらす。我ながら、なんともだらしない姿勢だ。

それにしても 煩い夜行列車だった。どうやら私が乗ったのはモーターを積んだ車両であるらしく、夜行列車だというのに向いて眠れなかった。更には車両一番前の座席で、トイレへと立つ乗客が何度も往復しやがる。

車両の扉を開けたり閉めたり開けたり閉めたりドツタンバツタンドツタンバツタン！ もっと静かに動かさせや夜行って事は寝たい人

も居るんだぞ、いやむしろ睡眠中の乗客が多数居る事が当然だろう、自然だろう、大前提、常識、想定範囲内ですよ。それをどいつもこいつも無遠慮にドツタンバツタンドツタンバツタン。

百回死んで九十九回だけ生き返ってる　と、今更愚痴をこぼしたって意味は無い。あの指定席券を買った私の運が悪かったのだ。とにかく窮屈な座席に縛り付けられて一睡もできないまま関東から六時間。六時間！　よく耐えたものだ。

そして苦痛の夜行列車を降りて乗り換えた電車は、素晴らしい乗り心地だった。余裕のある空間というのは大切だと改めて思った。二人掛けの座席。背もたれは大きく稼働し、二人ずつ向かい合わせる事もできる。乗客は少なかったので私は贅沢にも四人分のスペースを独り占めにし、はしたなくも足を大きく伸ばしていた。

これが、つい二十分前までの貴重なリラックスタイム。

そんな時間をぶち壊し、私の気分が滅入ってしまう原因となったのは、目の前で声高に得意げに満足げに舌を回す　この女だ。

「便利なのは結構。だが勘違いするなよ、この電車も、車も、貴様達弱肉が普段から至極当然のように使用しているありとあらゆる物は、それを最初に作り出した能有る者のおかげであるという事だ。在って当然と思うなよ。人間はな、その自覚すら無いカスが増えすぎた。有能が作った環境で、無能が生かして貰っている。だから人間は増えすぎた！　臆病な、自然界の害が、群れて群れて有能に隠れて生きている！　老衰だあ？　老衰を許されるのは有能のみ！　そう思うだろう弱肉？」

「うるさいから黙れ」

彼女の紹介も、端を折ってしまえばこの一言に尽きる。

うるさいから永劫黙っていて欲しい女、だ。

出会って二十分で、私にここまで嫌悪される存在ということだ。

始発に乗ったとはいえ、しばらく駅を経由すれば乗客も増えてくる。まだまだ満席とはいかないが、端であるこの一号車両も通勤、通学とみられる利用者が乗っていた。私も席を独占することなく姿勢を整えた。隣には若いサラリーマンらしき男性も座った。

そこへ 二号車両の方から移ってきた女が、こいつだった。

女は長い黒髪を揺らし、軽快なステップで歩いて来たと思いきや車両の中間で立ち止まり、周囲を見回す。その眼は獲物を求めるように研ぎ澄まされていた。ただ席を探すだけだというのに。

そうして不幸にも 私の正面に座ったのだ。

向かい合わせにしていたのが失敗だった。いつも私は、後悔と共に生きている。後悔先に立たず。当然だ、向かい合わせの座席を直さなかったから後々面倒な事になるなんて、誰が予想できる。

正面に座った女が、直後首の関節を鳴らしながら、車両中に聞こえるような大ききで「弱肉だらけで涎が出るね！ 餌は餌らしく隠れてやがれ！」と叫ぶなんて、誰が予想できる。

隣に座ったサラリーマンも萎縮してしまい、顔を伏せている。朝から気分を害する乗客に鉢合ってしまった、さぞ不愉快だろう。

私は、彼の膝の上に堂々と組んだ片足を乗せる女を舐めるように睨んだ。編上げのブーツの底が彼の太ももに食い込んでいる。嫉妬してしまいそうな脚線美を際立たせるカプリパンツ。ゴムのような質感をした黒いタンクトップの上に、ジャケットを羽織っている。そのボディラインを前にして目のやり場に困っているのも、彼が顔を伏せている理由だろう。そもそもこの女、二人分の座席を当然のように陣取っていやがる。

「おはよう弱肉系男子」

濃厚且つ醜悪な汚泥を爽やかさと美貌で包み込んだような笑顔。新商品『悪女まん』と名付けよう。その笑顔で女はサラリーマンにウィンクした。

彼の膝に乗せたブーツが、撫でるようにもう片方の膝へ移動する。若いサラリーマンは困ったように下を向いたまま会釈するだけだ。

そんな時　彼の携帯電話が鳴った。

私は持っていないが、電車の中では電源を切っておくのが常識だ。彼は慌てて携帯電話を取り出し、電源を切ろうとした　のだが。液晶画面を見た彼の顔が青くなる。

どうやら、電話を掛けてきた相手が、まずかつたらしい。

サラリーマンは私と女に「す、すみません！」と小声で謝りながら、肩をすくめて携帯電話を耳に当てた。

そんな様子を女は特に興味もなさそうに眺めている　と思いきや、何かしでかすつもりなのか腰を上げやがった。

「はい、もしもし」

「ゆうーだあーくうーん！」

私にも伝わるほどの大音量が端末の向こうから聞こえた。

「なに、君、今どこに居るのー？」

「えと……電車中です。企画の関係で遅れてしまいましたが」

「ああ、ドミノ倒しのやつ？」

「はい。言われた通り企画の修正もしました」

「うんうん。あつ、じゃあ娘も一緒？」

「そ、それが、その……先程まで僕の傍に居たのですが、駅では、はぐれてしまっ」

「はああああ？」

「えっと、はぐれたというかちょっとした喧嘩を。ちゃんと同じ電車に乗っていますので」

「あ、そう。ああ驚いた」

そういえばこのサラリーマンは機材のような荷物を足元に置いている。どこかへ取材に行く途中なのだろうか。

と思っっている間に、肉食系女は身を乗り出し、電話中の彼に顔を近づけていた。ただの変質者だ。サラリーマンも仕事の話中だろうから女には何の興味も示さず、ただ鬱陶しがって喋りながら席を立つ。

「はい、はい。大丈夫です。到着したらまた連絡入れますけどえ？ はい、並折です」

直後 私は身体を硬直させていた。楽しそうに男へちよっかいをかけていた女も、表情を強張らせてびたりと身を凍らせている。しかしサラリーマンはそんな私達を気にするわけでもなく、二号車の方へ行ってしまった。追うべきか？ 追うべきかもしれない。並折という街へ向かおうというのなら、彼は止めるべきだ。

「やめときな、弱肉娘」

制したのは目の前の女。彼女はサラリーマンの座っていた場所つまり私の隣に上げた腰を下ろした。

この女もだ。並折と聞いて反応した。

「あの男は本当に弱肉だ。喰われて終わりね」

そう言いながら二本の指で挟んだ紙を一枚、私に見せてきた。

『湯田 直哉』

サラリーマンの持っていた名刺だ。手癖の悪い女め。会社もどこかの映像スタジオなのだろう、名刺のデザインが凝っている。

彼はきつと、命を落とす。並折という街は一般人が興味本位で立ち入って良い場所じゃない。きつと、

「ふん。表側の都市を取材するつもりが、手違いで並折を知ってし

まった。ってところかね」

女は私と同じ考えを口にしていた。

並折は知られざる街だ。この国の地図を隅から隅まで探したとしても、見つける事は出来ない。並折は裏の都市。表の、地図に載っている都市と重なった場所。だから並折という呼び方はされても住所は別の土地名が用いられる。隠語のようなものだろうか。

故に並折の住人は、普通ではない。普通ではない世界に生きる者であり、並折は普通ではない場所だ。

「貴様もこつち側だったのね、弱肉」

「……貴様とか弱肉とか、随分と見下すわね」

「当然さ！ 私様よりも劣った奴らを私様が見下すのは自然じゃないか！ それなのに貴様のようにああたこうだと文句を垂れるから人間は自然にとって害なんだよ。お、わ、か、か、り？」

「そう思うのは貴女の勝手。あたしにも天宮柘榴あまみやばくろうという名前がある。口に出すなら弱肉とかじゃなく名前と呼んで頂戴」

ふうん、と。彼女は片目を閉じて私を観察する。

それから 片手を差し出してきた。

「私様の名前は、守野三桜もりのみおづ。いやあ私様も実は並折を訪れるのは初めてでね。もつと言えば、日本へ帰ってきたのも久しぶりなんだ。

弱肉……じゃなくて柘榴、貴様も訳ありで並折へ向かっているんだろ？ 訳が無ければ行ってはいけないからね、あそこは」

「詮索は嫌いだ」

「おっとそうかい、お互い気が合いそうだね。弱……じゃくろ」
「略すな」

差し出された手を私は甲で弾き、さつきから私の足を踏みつけているブーツを蹴った。

守野三桜。並折へ向かうには 一人より二人が安全だろう。好

きにはなれないが。まあ構わない、どうせ並折へ向かう者なんて、後ろ暗い連中ばかりだ。三桜にも何か理由があるに違いないけれど、それは私も同じ。馴れ合って我が身が守れるのなら、いくらでも馴れ合うさ。

聞けば、三桜も関東からやって来たのだと言う。だが彼女は私と違い、あの窮屈で退屈で拷問じみた苦痛を味わうことなく、新幹線に乗り、一時間でこの中部圏へ来たそう。実に羨ましい。

そして　少し引つかかったのは、彼女の苗字だ。

守野……。

なにもそう珍しい苗字ではない。けれど、気にならざるを得ない事情が、この国には存在する。

純血一族　　そう呼ばれる日本の裏組織。

裏組織は世界中に大なり小なり存在するが、その世界中が危険だと口を揃え、世界中が関わりを避けたがる。それが純血一族だ。

この組織は、全部で十三の家系から成っており、その全容を知る者は少ない。私のような者が知っているのはせいぜい二、三家系。だからこそ、その知っている家系の中に守野家という単語が含まれているからこそ、気になった。

連中の何がそれ程に危険なのか。それは、その名の通り、純血だからである。とはいえ当然、ただの純血ではない。連中は、遙か昔から自分の血を呪わせているのだ。呪われているのではない。呪わせている。そして呪詛は人では到底持ち得ない力を、与えるのだ。血が濃ければ濃い程に、呪詛は見返りを与えてくれる。故に　純血一族十三家系は、身内で種を増やし続けているのだという。

摩訶不思議な話だが、連中の超常たる力の前に消滅した機関は数知れないのも事実。

呪詛　　というものを操る術を手に入れ、試行錯誤の末に『人を超えし人』を生み出すに至ったという狂気。そしてそんな事を考え付いた家系が、十三もあつたという恐怖。挙句、現代に於いて……その十三家系が統一され、一つの殺人集団として猛威を振るつていくという惨劇。

純血一族が、世界危険勢力の一角と目されているのも当然だ。

そう。私が気になり、同時に表に出さずとも恐怖すら抱いているのは、今、肩が触れんばかりの至近距離で、欠伸なんかをしているその女が　純血一族守野家の人間なのではないかという件なのだ。考え始めると一層勢いが増してしまう。三桜の言動　他人を見下し、まるで己が人を超えているとでも言うような態度。振る舞い。言うようなではない……彼女は他者を弱肉と言いつ捨てている。この電車内でも、わざわざ人の少ない一号車を選び、移動し、気を張って座席を探し、人を寄せ付けない言動を吐き散らしたのは、純血一族特有の殺人衝動に因るのではないか？　殺人衝動を抑えるために、わざと人を寄せ付けないようにしているのだとしたら。

とどめは守野三桜が、純血一族でもなかなか正確な所在を掴めない魔都　並折へ向かっているという事実。魔都を知るのは裏で生きる者。純血一族でない者が、純血一族と同じ名字で生きていられるわけがない。

私は心の中で深い溜息を吐いた。

確定だ。辻褄が合い過ぎる。

守野三桜は、純血一族の人間だ。

「そろそろ着くんじゃない？」

三桜の声で我に返り、車内の電光掲示板へ目を送った。確かに、名前は違うが並折の駅は次だった。いつの間にか幾つもの駅を経由していたらしい。

「あれ？ でも三桜、さっきの駅を出てから車内アナウンスって流れた？」

問い掛けると三桜は視線を斜め上に向けて首を傾げる。

「そついえば……聞いてないかも。忘れてんじゃないの」「うーん」

どうにも落ち着かない私は席を立ち、隣に座る三桜の頭越しに車両内を見回してみた。

最前の一号車両。運転士の後ろ姿を眺める。特に変わった様子はない。外の景色も、変わりなく流れている。

今度は反対側 二号車両へと繋がる扉の方へ顔を向けた。窓越しに見える二号車も、乗客の様子に変わりはない。

そわそわしすぎかな。やっぱり気のせい 「ん？」

「どうした柘榴？」

三桜の声を無視して目を細める。

二号車の乗客が突然、一斉に頭を上げた。

ほぼ全員が、私に後頭部を向けている。

と、次の瞬間 三号車両とを繋ぐ扉が乱暴に開かれた。

男性か？ 学生服姿の少年が何か大声で叫んでいる。

彼は二号車の乗客には目もくれず、今度はこちらへ駆けてくる。目を細めて見ていた私でも、彼の表情がだんだんとわかってきた。

泣いている。汗だくだ。恐怖を顔に張り付けている。

ついに学生は一号車両へと飛び込んでくる。その荒々しい扉の開け方に、やはり一号車の乗客も一斉にそちらを振り返った。彼は息も絶え絶えに何かを伝えようとしている。

「一番後ろ……車両……」

彼は、運転士を含む一号車両全員に聞こえるよう、大声で叫んだ。

「最後尾の乗客がみんな死んでる！」

PUNICA【六月の果実】 2

『人間が生きている』

これは三桜の言葉だ。

最後尾車両で乗客が全員死んでいる、という男子学生の咆哮で一
号車両は静まり返り、直後 その後ろから二人三人と続いてやっ
て来た者達は同じ言葉を口にした。

後部車両から駆けてきた数人は勿論、赤の他人である。一時は静
寂に包まれた一号車両も、混乱の声が次々に上がり始めた。

黙ってその様子を眺めていた私が三桜の様子を窺った時 彼女
は懸命に窓の外へ視線を向け、生唾を何度も飲み込んでいた。
酔ったのか？ だらしないなあ肉食系女が。

そう冷やかそうと彼女の肩に手を乗せる って痛、痛い。

待って、痛い痛い。なに、え？

ちよつと三桜、なにしてんの痛い痛いつてば。

腕に爪が食い込んでる。そんなに長い爪付けてたっけ？

え？ え？

三桜？ おい、肉食系って本当にそういう意味じゃないよ？

「み、三桜！ なんであたしの腕、かじるの？ 痛いつて！」

三桜はびくんと痙攣した後に我に返り、吸った上に口腔内で弄ん
でいた私の中指を解放した。

頭おかしいんじゃないのこの女。

涎に塗れた中指を自分のスカートで拭くと、齒でも立てやがったのか血が滲んでいた。

彼女は完全に引いてしまっている私の存在など気にも留めず、片手を顔に当てて汗を拭う。そして耐えきれずに言ったのだ。

「人間が生きている……」

頭おかしいんじゃないのこの女。と思ったら案の定頭おかしかったですよ。

顔が高揚して興奮状態だぞ。変態ここに極まれり、だ。

と　こいつが最初から普通の女だと知っていれば、最後までただの変態妖怪『指舐め女』で済んだのだが。

守野三桜は血に呪詛を宿した変態一族の末裔なのだ。ただ指を舐めるだけの変態ならまだ可愛いものさ。こいつが私の腕を引つ掴んで指を口に含んだのは、指を舐めたいという欲求に因るものなんかじゃあない。

人を殺したいという欲求に因るものだ。

下手をしたら私は指を噛み切られていたかもしれない。

一層頬をひくつかせて一步下がる私に向かって、三桜は変態音声を発せ再生し始めた。

「心ならずも決まった時間に起床し、機械的に食事を摂り、何気なく、誰もが恒久的に、うんざりだとすら思いながら過ごすだろこの時間。現代に於いては、うんざりだと思ふ事すら放棄してしまう奴も多いこの時間。どいつもこいつも生きちゃいない。私様の目には、くっそ不味そうなジャンクフードに見えた。ところがどうだい、この光景……」

空っぽの人形に魂が宿り、人間として生きているじゃないか。

そう言いながら三桜は異様に長い舌で唇を舐めたのだった。

次の駅で電車は停車し、乗客は全て降ろされた。

私と三桜はこの駅で下車するつもりだったのでそのまま改札の出口へ向かえば良いのだが、電車を降りた私達の目の前ではパニックを起こした乗客がそこらじゅうで喚き、駅員は縦横無尽に走り回り、野次馬は集まってくるばかり。

全八両編成の電車の最後尾で事件が起きたのだ。

事件・事故が一つ起きると、その情報は日本中へと配信される。これだけの死者が出たのなら確実だ。

しかし並折がそれを許さない。

幸い、乗客の大半は此処で事件を知り、見てしまった者は此処で死体を見てしまった。

並折という結界の中で。

並折は別に異次元のファンタジックワールドではない。並折という結界を知る者だけが並折の結界を活用し、何も知らぬ一般人と日常を共にする街。

何も知らない此処の一般人達は、たとえ目の前で人が殺されようと、たとえ抱き締め合う途中で相手の首が吹き飛ばうと、それを異常と捉える事はできないのだ。何の感想も抱かず死体を踏み付けて歩行を継続し、何の反応も示さず恋人の死体を置いて着替えに帰る。まるで街に意思があるようじゃないか。

ああ、これは外界に漏れてはいけない。という現象は、日常から隔離してしまう。

並折は、そんな街なんだ。

だから、今この場で悲鳴を上げている連中も、事件だと動き出した警察機関も、少し経てば八号車両で何が起きたのかなんて忘れてしまう。興味も失せてしまう。

犠牲者達はどうなるのか。遺族は心配しないのか。しない。

街はまるで運命の糸を握っているように全てを手繰り、全てを無理矢理に無へと改竄する。

この街の恐ろしいところは、そこだ。

この街で死んでしまうと、並折の住人の記憶以外から、存在は抹消されてしまうのだ。

だから八号車両で死んだという者達は　もう外界では存在すら消されてしまった事になる。親族は無意識に遺物を捨て、部屋を片付け、住民票を始めとする個人情報、弄る事のできる立場の人間が灰にしてくれる。無意識に積極的に一個人を消しに動いてくれる。まるで神様。

一生物のトラウマを刻み込まれた目撃者の悲鳴も、私はさほど気にしていない。すぐに解放されるのだから。

電車は八号車両だけを切り離し、『現在　分遅れで云々』と通知しながら平常運転に戻る。

溢れ返らんばかりの恐怖や、混沌と入り乱れる感情は、魔法のようにサッパリスッパリ彼らから消え去るのだ。

八号車両まで様子を見に行った私と三桜は、その凄惨な光景に言

葉を失った。

車両の窓が 血で染まっている。

助けを求めた被害者の手形がいくつも残っており、ガラスに付着した体液は様々な色。停車直後に見に行ったのでまだ場を取り仕切る係員も集まっておらず、私達は車内の様子も見る事が出来た。

入口の前で立ち止まり、顔をしかめる私を置いて、三桜は中の様子を見に行ってしまう。

現場は最悪。吊り革から手首がぶら下がり、床には飛び散った骨や歯が肉を付けたまま転がり、肋骨を剥き出して内臓を吐き出す胴体が座席の上で横になっていた。

生々しい。まだ瑞々しさを保った塊が、まるで河原の石のごろごろと。これ何人分あるの……？

三桜が摘まみ上げて観察しているのは 下顎だ。顔の上半分が無く、下へ引き千切ったような痕跡があった。首の皮が一緒に剥がれている。

原形を留めている死体は一つもなかった。

老若男女区別なく、この車両に乗っていた全員がジャムにされている。ああ嫌な想像した。しばらく朝食にパンは控えよう。

「こいつの歯、見てみる」

三桜が見せてきた下顎。何を見ると言うのか。

「奥歯が割れている。歯を食い縛った為に割れたんだ」

「なに……どういうこと？」

三桜は私の問いを無視して幾つかの胴体を蹴って転がす。

サッカーボールのような扱いで集められた胴体はどれも頭部や四肢を失い、柔らかくも長い腸が巻き付いていた。彼女はそれらの首元を引つ掴み、滑りを帯びた断面に指を突っ込んだり広げたりしている。

「うむ……やっぱり上手に取り除かれています」

こんな場所で鑑定士を気取るのはよせ。

「何が」

「声帯」

あっさりと言った三桜は近くの座席の、かろうじて汚れていないシートで手を拭う。その表情は、体液に手を汚した不快感など微塵も抱いていない、嬉々としたものだった。

「やってくれるね。ここまでやられちゃうと悔しくなっちゃうね」

「だから、どういう事なのよ。こんな、形を失った肉片を楽しそうに調べて　一体何がわかるっていうの？」

若干の苛立ちを含めて、もう一度問う。

今度は三桜も答えてくれた。

「この犠牲者達、手足もがれてもまだ生きてたって事だよ。あの死体も、この死体も、腹を裂かれて皮も爪も剥がされて骨を磨り潰されてる間も　意識はあつたんじゃない？」

なにそれ……この人達、すぐに死ねなかつたの？

声帯が取り除かれていたという事は……悲鳴を上げられないようにしたという事？

奥歯が擦り減り、割れていたのは、苦痛に悶え、耐えようとしたから？

それって、もう　拷問じゃないの。無差別拷問殺人なんて、質が悪すぎる。最悪よ。

「これだけの所業を、短時間でやってのける事が可能な奴なんて居ない。少なくともこれをやった奴は、痛みに苦しむ様を愉しむ類だ。短時間じゃあ意味が無い筈。それにこれだけの弱肉ミンチを、どんな機械を持ち込んで作り上げるってんだ」

どの肉片も、鋭利な刃物で切られたような断面じゃない。むしろ凹凸のある器具で擦切られたり、捻じ切られたり、千切られたりしたような痕跡ばかりだ。皮を剥がされ、大きな針孔を空けられたモ

ノまである。

男女の区別なく、上半身から 下半身まで、徹底的に弄繰り回されたのだろう。こんな死体、私でさえも目を背けたくなる。楽しそうな三桜だつて頬を引き攣らせているくらいだ。

残虐非道を極めた地獄絵図が、この車両の中に描かれていた。

なのに……。

なのに……どこにも、そんなあらゆる鬼畜行為に用いられた器具が見当たらない。一つもだ。

「三桜……あたしにはよくわからない……」

「だ、か、らあ」

三桜の口が、耳まで裂ける。比喻ではなく、本当に。

みしみしと骨格が音を立て、女性なのに筋肉が隆起した。

それは一瞬。次の瞬間には元に戻っていた。

しかし彼女の身体は一瞬だけとはいえ、確かに私の目の前で 人ではなくなつた のだ。

「私様達のような、超常の力によって行われた殺戮つて事」

「貴女達……純血一族のような？」

「そ。なんだ私様達の事、知ってんじゃん」

私の予想は正しかった。やはり彼女は世界危険勢力の人間だつたのだ。

「ここで、よくある弱肉の話としては、優秀な頭脳を持った奴がズバツとこの謎を解決しにやってくるのだろうけど、まあ無理だろうね」

「超常の起こした事件だから？」

「イエスイエース。この事件は弱肉のトリックでもなんでもない。

前の駅で車掌のアナウンスはまだ流れていたから、これは駅と駅の

間を電車が走る十数分程度の時間で行われた。つまり 十数分で車両内の乗客全員を解体して苦痛に苦しむ様を存分に愉しんだ後にミンチにできる奴 が、やった事。そういう事。そんだけの事。七号車の乗客に気付かれる頃には全部終わってたなら、なかなか手馴れてるね」

超常……？ これの何が超常だ。下顎を投げ捨てる三桜といい、この現場を作った者といい たとえ人を超えた力を使用する者であるうと、これは、この状況は、異常だろう！ そうだ、異常なんだ！ 超常とか強者とかそんなものはどうだっていい。それ以前にこれは、

「異常だ！」
思わず叫んでしまった。そんな私へ三桜は 侮蔑のような感情を含んだ、静かな視線を送るだけだった。

それどころか。私の反応を楽しむかのように、視神経を伴って転がる眼球を、ブーツの底で一つ一つ踏み潰している。

周囲を潰し終えると 今度は飛散した脳漿の上に足を置き、くちやくちやと音を立ててリズムを刻む。

なんだ……なんなんだ、こいつ。
「解っていないねえ、柘榴」

彼女はルージユのひかれた潤いのある唇を少しすぼめて ちゅ、と私へ向けて音を出した。虚仮にされていると理解した。

嘗めるな。私だつて死体は見慣れている。そういう世界で生きてきたのだ。それでも、私はお前を お前のようなモノを嫌悪する。それでも私の反応は間違っている。きっと、そうなのだ。

この場に於いては。

「そう。勘違いしちゃあいけないぜ。此処はもう、並折なんだ。並折の 『きのえと駅』さ。並折は貴様の思っている通り特殊極まる結界都市だよ、まさしくもれなくその通り。でもこの街へ来たな

ら、それは別段重要じゃあない。貴様、解ってる？ 本当に本当に解ってる？」

びき、びき と、三桜の首元からこめかみへ大きな筋が浮き上がる。

「この化け物じみた結界都市へ訪れる者の中に、貴様のような一般人思考の奴なんて居やしないってんだよ！ 『いやーん死体こわーい』 『やだーこんな事する人が居るなんて、信じられなーい』なんて抜かすパーフェクト間抜け自殺志願脳内お花畑は尻尾巻いて帰れって事だよバアカ！ 解ったか柘榴！」

誰がパーフェクト間抜け自殺志願脳内お花畑だ、こら。

私は眉間に皺を寄せて三桜の襟首を引っ掴んだ。

「ようは、これも通常で平常で日常って事でしょう！ 並折では！ でもあたしは異常だと言い張るね！ お前らのような変態雑食厚顔無恥のファツキンビッチ共なんかと一緒にあって『あら今日も死体が落ちておりますわねホホホ』 『私の殺害記録は云十人ですよホホホ』なんて会話に参加してやるものか！ 一般的思考？ 大いに結構よ！ あたしはこの思考で此処に居座ってやる！ そしてお前は通常と異常の区別が次第につかなくなっていくのさ！ 思わぬタイミングであたしに『異常』と言われて感覚の変化に畏れるといいのよ！ 『いやこれは貴様の感覚でも普通だと思っただ』なんて間抜け面を晒しながらね！ お前こそ解ったか三桜！」

一気に肺から息を吐き出して声を乗せた為、大きく肩が動く。こんなに叫んだのは久しぶりだ、畜生。

「やはり貴様は馬鹿だ」

三桜の喉から音が鳴る。まるで彼女の気管に入った球が震えるような、獣のそれと変わらない唸り声だった。

「並折は隔離された街だ。日常からも、外界からも。言ってしまうば　この街自体が一つの世界だ。たとえ貴様が外界の正常を掲げ、此処で叫び、並折を非難したところで、意味は無い。確かにこの殺戮を並折以外の街で行えば、貴様の言う異常は異常として誰もが認識するだろう。何故ならばそこに生きる者の大多数が殺人とは縁が無いからな。日常では有り得ない光景として認識されている。しかし貴様は別だろう、殺戮も行われかねない日常で生きてきたから、この並折を知って此処まで来た」

襟首を掴まれていた三桜は私の手を弾き、一度両目を閉じた。

次に片目だけ開き　私の額へ指を突きつける。

「貴様は一般人じゃあない」

冷ややかで、嘲笑を含んだ声だった。

「自分は私様達とは違う、だなんて思っていないか？　貴様が生きてきた環境も見てきた光景も描くべき未来も訪れるべき最期も、一般人とは違うんだよ。並折に足を踏み入れる者は総じてもれなく余すところなく、そういう奴なんだよ。だからこの街は、そういう奴しか生きられない。そういう奴しか居ない筈なんだよ。もしも生き長らえたいのなら、パーフェクト間抜け自殺志願脳内お花畑　ではなく、貴様の言う変態雑食厚顔無恥のファツキンビッチであるべきだ。というか、貴様が歩んできた人生は既に変態雑食厚顔無恥のファツキンビッチそのもので、貴様は明らかに変態雑食厚顔無恥のファツキンビッチのくせに『私は違う』と声を荒げている。教会に並んだシスターの一人が突然般若心経を唱えだすくらいの違和感さ」

「お前が言うな。車両に現れた時のお前の姿はハレルヤと叫ぶ坊さんと変わらない違和感を纏っていたぞ。あたしは、お前の言うように殺人が日常に居座る世界で生きてきた。でも、それが当然だなん

て思った事はない」

「……此処を知り此処へ来る立場の人間が、皆同じ感性を持っているとは私様も思っていないさ。私様は忠告をしているだけだ。貴様が弱肉と同じような反応を示し、弱肉の感性に従って行動するんじゃないかとね」

「余計な心配だ。こう見えてお前の思っているほど生温い世界で生きてきたわけじゃない」

「私様と行動を共にするなら面倒は掛けるなと言いたいんだよ。こちらら生肉ぶら下げてサバンナを歩くような真似はしたくねえのよ」

解ってる。そんな事、解ってる。

三桜だって初めて訪れたというのに、彼女は片手を胸に当て、もう片手を背に回し、私へ顔を上げたまま会釈して言った。

「ようこそ、クレイジーな街 並折へ」

私は気付くのが遅れたが、惨劇の八号車両を観察しに来ていたのはどうやら私達だけではなかった。一人の男性と、二人の女性。その三人組もまた、私達とは別の乗車口から中を観察していたのだ。たった今、三桜が言ったように、此処はもう並折なのだ。駅のホームで吐瀉物を撒き散らす人達とは、住む世界が異なる。あの三人組もまた、並折の住人なのだろう。

そこまで考えないと動かない私は 実に愚かだった。

さほど多くない荷物。その中の、私にとって最も大切な物の存在を、ここに到ってやっと思い出したのだから。

三桜のような超常の力を持っていない私が、単身この並折へ来られたのは、その物の存在があるからに他ならない。自分の身を守る武器だ。

それは小さな折り畳みナイフにすぎない。しかし、勿論、ただのナイフではない。これがあれば大抵の危機は乗り越えられる代物だ。危険地帯に足を踏み入れた今。その存在こそが、私の命綱である。肌身離さず持つておくべきだ。手さげのバッグなどではなく、上着のポケットに移動させておくべきだ。

そう慌ててバッグの中に手を通す込んだ私は、直後 脳に直接、液体窒素を吹き付けられたように、思考が硬直した。

同時に視界も真っ白になる。

「ない……」

私の命綱が、消えていた。

三桜が誰かと話している……。

ああ、さっき見た三人組だ。その中の男性と話しているのか。

男性は 学生か？ 若い。もしかしたら成人しているかもしれない。深く被ったニット帽からはみ出た黒い髪が覗いている。

「ほほう、貴女達はこの電車に乗っていたんですか」

「まあね。とはいえコレをやった奴は見えないどころか、到着して初めてこの有様を見せつけられたのよ。貴様、その様子だと並折の住人だな？ 弱肉」

「弱肉つて……ええ、並折の住人です。もつと細かく言えば、結界寮の住人です」

ここで三桜の眉がピクリと動いたのを私は確認した。

青年の後ろでは、残りの女性二人がなにやら話し合っているのが見える。その女性の片方を見て 私はぎよつとした。

女性にしては背が高く、細身のスーツに包まれている。髪は短め、あれはシャギーボブというのだろうか。前髪は斜め左分け。ここまですで特に変わった点はない。だが問題は顔だ。いや、綺麗な人ではある。目つきは鋭く男勝りな印象を受けるが、十分美人と言えようともすれば……彼女の化粧が問題だった。

両目の周囲に青いアイシャドウを塗っているのだ。その範囲が広くて私は驚いた。瞼の陰影を際立たせる効果や顔の立体的印象を与える効果など無視したように。それはもう化粧というよりフェイスペイントと言っても過言ではないように。

パンダ と、そう表現しようとして試みたが、何故かパンダのよう

には見えない。自分でも訳が分からないが、とにかく彼女に似合っ
てしまっているのだ。奇抜な化粧でも似合う彼女の顔立ちを、畜生、
羨ましく思った。私は女なので確信は持てないけれど、なんかこう、
こういう女性に蔑むように見下されて喜ぶ者も居そうだ。私は何を
考えているのか。

えー、対象は変わりましてもう一人の女性。

こちらは派手な化粧など施しておらず、質素な美しさがあった。
アイシャドウの女性とは全く異なる。

長い髪を三つ編みで一つに纏め、クラシクなロングワンピース
を纏っている。そして……その上に家庭用のエプロンを掛けていた。
表情は穏やかで、若干垂れ目気味だ。相方と話してはころころと可
愛らしい笑顔を零している。なんだか母性溢れる印象を受けた。

待て。人間観察をしている場合じゃない。

つい観察させられる容姿を目の当たりにした所為で、思考を持っ
ていかれた。

私は誰にも悟られぬよう、もう一度、自分のバッグの中へ手を入
れる。どこを撫でてもあるべき感触が無い。小さな折り畳みナイフ
といえど、さすがにこれだけ手探れば 結論を出す段階だ。いつ
までも中を探してたつて見つかりっこないんだ。

武器を無くした。

車両の中に置き忘れたのか？ と思ったが、私は席を立つ際は自
分の座っていた場所を確認する癖が付いている。それはないだろう。
うっかり落としたか？ それこそ有り得ない。私の武器 鎖黒^{トザクロ}
は貴重な物だ。バッグの中に備わっている内ポケットの中に入れて
いたから、落ちる事はまずない。

電車に乗り、一息ついた際に鎖黒があるのを一度確認している。

さつさと結論を出すべきだな。ようは……盗まれたんだ。御丁寧に内ポケットのボタンが外されているのだから、最初からそう思ったさ……。

ならば盗んだのは行動を共にした三桜 ではない。サラリーマン含む私の近くに座っていた奴らには警戒していたので、バッグに手を伸ばせた奴は居ない。

盗まれたのは一号車両を降りてからに違いない。

最後尾で事件が起きたという情報に意識が集中してしまい、そこから私の周囲に対する注意力は散漫になっていた。何故なら殺気や怪しげな気配を身に纏っているのはむしろ私や三桜の方だったのだから。ホームに溢れかえる乗客達を避け、八号車の光景を目にした時などバッグを抱えている感覚すら失せていたと思う。三桜が私の目の前で肉塊を弄っていた時もだ。あのタイミングなら十分、私のバッグの中に手を突っ込んで漁る事が可能だ。我ながら間抜けで恥ずかしい話だが、自信を持って言える。

ぐうぐう、犯人を捜そうにも……容疑者はホーム内の奴ら全員。それならまだ良い。あれから時間が経ってしまった。つまり頭が正常な奴なら、とつくに逃げてしまっているということだ！

鎖黒が無ければ私は無力だ。

三桜に言わせれば、ただの弱肉だ。いや、三桜は今もそう思っているだろうけど。

本当の弱肉になってしまった私は、もう並折に居る。危険だ。引き返すか？

冗談じゃない！

なんとか鎖黒を取り戻さないと。手掛かりなんて無いけれど。それまでは 極力、目立たないように立ち回ろう。うん、それは最初からそのつもりだったけど。

密かに胸の内で悲鳴を上げる私の元へ、三桜が戻ってきた。

「おい柘榴」

「弱肉で良いわよ……」

「はあ？」

気味の悪いものでも見るように眉をひそめた三桜は続ける。

「あの連中、結界寮だ」

「なにそれ」

「き、貴様は、そんな事も知らずに此処へ来たのか」

悪かったね。私は純血一族という大きな組織に属す三桜とは違う。

三桜は簡単に結界寮と呼ばれる連中について教えてくれた。

「結界寮つてのは数年前から並折にできた、文字通りの寮だよ。そこらへんの宿と一緒に。そこらへんの宿と違うのは、その性質。結界寮は、表で言うところの警察みたいなもんだな」

「警察？ ああ、普通の警察機関じゃ並折は仕切れないもんね」

「そう。異常超常、裏稼業、そんな連中の集まる並折は放っておけば無法地帯だ。だから結界寮が並折の監視、管理を始めた。とはいえ警察とじゃ全く仕組みが違うがね」

「だってその、普通じゃ警察でも抑えられない連中 三桜も含む超常つてのを抑えられるから成り立っているんでしょ？ どうやって？」

「結界寮の住人達が力を振るうのさ。私様の知る限りでは『結界屋』『傀儡屋』なんて希少な裏稼業も結界寮には居るらしい。おまけに管理人は以前、世界危険勢力の一員として名を馳せていたという噂もある」

……結界屋も傀儡屋も世界危険勢力同士の抗争に駆り出されるような裏稼業だぞ。警察に例えるより軍隊に例えた方が適切じゃないか。いくら並折といえども、そんな奴らが目を光らせては無法とは

縁遠くなる。

そして、世界危険勢力の元構成員の存在。

成程……純血一族ほどの組織が大々的に手を出さない事実には納得した。並折の街は既に一勢力として完成しているのだ。これは三桜でも迂闊に目立つ行動はできまい。

「で、今あそこの結界寮ボーイに話を聞いてきたんだけど」

三桜は先程まで話をしていたニット帽の青年を親指で示す。

「あいつらもこの駅を調べに来て、八号車両惨殺事件に遭遇したそう。電車が停止してそれほど時間が経っていないうちにだぞ？ どうやら結界屋の感知結界は並折全体を覆っているらしいな。街中に結界寮の目があるようなもんだ」

……うん？ 今の話、ちょっと引つかかる。

三桜は当たり前のように話しているけど、結界寮の連中は八号車両の事件を感知して此処へ来たわけではないのか？

そのまま疑問を彼女にぶつけてみると、あっさり頷かれた。

「結界屋が感知するのは刃物や銃火器等の危険物なんだとよ。今回の場合、屋外　しかも駅で反応があった。んで異常の可能性ありと判断したから来たそうな」

まさか。

結界屋が感知したのって、私の折り畳みナイフ？

もしそうだとしたら、結界屋なら私のナイフの在処がわかるかもしれない！

暗闇の中に光明が差し込み、なんとか結界寮の連中と関わることはできないものかと彼らの方を見やる。

結界寮の三人は、この場を去ろうとしていた。

二人の女性と青年が何かを話している。

「小僧！ 車両の中身はもういい。私と林檎りんごは、これをやった奴を追う」

アイシャドウの女は、見た目通り気の強い人物だった。

小僧と呼ばれた青年は困ったように腰に手を当てる。

「梵おんさん、いい加減その小僧って呼び方やめてくださいよ」

どうやらアイシャドウの女は、梵という名前らしい。もう一人は林檎か。

「うるさい。私は気に入った奴しか名前で呼ばん。お前なんか小僧だ小僧」

悪戯つぼくしかめつ面めんで舌を出す梵という女の横で、もう一人の温厚そうな女性 林檎が青年を宥めている。

「ごめんね伊佐乃君、梵ちゃんってこういう子だから……許してね」
「むっ」

明朗と呼ばれた青年は、ふてくされたように口をすぼめていたが、林檎に言われるとすぐに顔が緩んだ。わかりやすい男だ。いや、私もあの林檎という女に見つめられて頼み事でもされたら聞き入れてしまうかもしれない。

「まあ……いつもの事なので気にしてないですよ。梵さんと林檎さんはこのまま追跡を続けるんですね。じゃあ僕は？」

「要らん」

梵が吐き捨てるように言うと、明朗はにこやかに笑いながらも青筋を立てた。

「ああ、そうっすか！」

梵は明朗を無視してそのまま改札出口へ足を踏み出す。

隣で二人のやり取りを見ていた林檎は明朗にもう一度「ごめんね」と言い、梵に追従した。林檎が両手で梵の腕にしがみつく様は、まるで恋人のようだ。この女性同士は仲が良いらしい。

そのまま後ろ姿を目で追い、二人が改札を出たところで　　どうやら彼女達は仲が良いどころではなさそうだと思った。

女同士のキスなんて初めて見たよ私。

あの二人は行ってしまい、残された明朗は目的を失ってしまったので呆然とその場に突っ立ったままだ。

ようやく駅の前に数台のパトカーや救急車が停まり、警官が何人もホームへと駆け込んで来るようになった。どうせ全ては結界都市によって徒労に終わるのだろうが。御苦労様だ。

幸い　　ではないが、私は持っていた唯一の武器を盗まれてしまったので聴取を受けても問題は無い。が、三桜がどう動くかわかったものではないので早々に立ち去った方が良さそうだ。

「三桜、行こう」

まだ明朗の方を見ながら、隣に居る筈の三桜へ声を掛けた。

しかし返事は無い。

「三桜？」

視線を隣へ向けると、彼女の姿は無かった。

見回すと、三桜は少し離れた場所で背を丸めてホームの地面を凝視していた。ポケットに両手をつっ込んで誰かに話しかけている。横で同じく背を丸めている女性に絡んでいるのか。あっちへチヨロチヨロこっちへチヨロチヨロと、忙しない女だ。

それにしても二人合わせて実に奇妙な光景だった。

「なに？　何か美味しいもんでも落ちてんの？」

「い、いえ。指輪……指輪を無くしてしまって」

「どんな？」

「玩具の指輪なんですけど……」

「オモチャだあ？　そんなもん必死に探してんの？　貴様」

「大切な物なんです！」

「あ、そう。そこでこの辺に落としたの？」

「多分……この辺りじゃないかと」
「この辺？」
「はい」
「どの電車から降りたの？」
「え。あつちの……路面電車です」

路面電車？ ああ、たしか並折を走るのは路面電車だったっけ。
きのえと駅含む四つの駅を繋ぐ路線かな。

「どこ行つてたの？」
「お墓参りです」
「誰のお墓？」
「妹のです……」
「あ、そ。墓地ってどこにあるの？」
「つちのえと駅を降りてすぐですよ」

それにしてもしつけえ女だ……指輪を探す女性もさぞ迷惑だろう。
誰のお墓？ ってお前全く関係ないじゃん。

「ふーん。あつ、もしかして。『その落とした指輪は妹から貰
った物なんです』とか言うなよ？ 言うなよ？ 絶対だぞ？」
「妹から貰った物ですよ」
「言っちゃった！ 言っちゃったー！」

お前誰だよ本当に鬱陶しいな。
いきなり話し掛けてきたかと思えば質問の嵐。しかもその内容は
実にどうでも良いものばかり。そんなに暇なら他を当たれ。

お前が背中を丸めているのはどうせ指輪探しを手伝う為じゃない
だろう。寄せた胸を通行人に見せて反応を楽しんでいる事くらい気
付いているんじゃないか。この雌狐が。

以上、女性の心中を代弁。

「妹可愛かった？」

「ええ、とても」

「そっか」

「あ。そういえばまだ倉庫に写真を残してあるかも……」

「倉庫？」

「ええ。はあ……これからまだ掃除があるというのに……」

「掃除？ どの？」

「宿です宿。使っていないんですけどね、定期的に手入れしないと……」

「えっ、マジ？ 宿？ 貴様の？」

三桜の目の色が変わった。私の目の色も変わっている筈だ。

そう。私達はまだ住む場所を決めていない。三桜の頑張りどころだ。

「私様達、まだこの街に来たばかりでさあ」

「はあ。そうなんですか、ようこそ」

「こう見えて体力には自信がある！」

「ふふ、そう見えます。素敵な身体つきです」

「だから、私様が一緒に指輪を探してあげるよ」

「本当ですか？ 有難うございます！」

「うん、それでさ、貴様の空き宿を借りたいんだけど」

「宿をですか？」

「うん、拒否したら殺す」

うん、最後が駄目。最後だけが駄目。大変残念です。

宿を借りるまでの流れを上手く形成していったにも関わらず、最後が極端に駄目。

女性は三桜の言葉を冗談と捉えたようで、笑っていた。

「あら、それでは拒否できませんね……」

「だろう？」

「構いませんよ、宿の掃除もして頂けると助かります」

「任せておけ」

「では、指輪探しを続けましょう」

「任せておけ」

「ああ、申し遅れました。私、やがみせい矢神聖歌と申します」

「私様は守野三桜」

交渉成立だ。よくやった三桜、宿を確保できたぞ。

あとは指輪探しを頑張れ。

さて……私は、

「宿が決まったようで良かったね」

振り向くと顔の前に明朗青年の姿があった。私と同様、三桜と聖歌のやりとりを見ていたらしい。

たしか結界寮の住人だったな。好都合だ。この男と親交を深めておけば結界屋へと辿り着けるかもしれない。そして鎖黒の在処を突き止めるのだ。

「うん、ひとまず落ち着く場所が決まった」

「まあ、僕が結界寮を紹介しても良かったんだけど……」

何？ 馬鹿三桜め、余計な交渉をしやがって。

「結界寮って、あたし達でも住めるのか？」

「あはは、冗談だよ。君達が平穏を望むのなら、結界寮は避けた方が良いからね。特に此処へやってくる人つてのは、逃亡者が多い。だから無闇に誘ったりしないよ」

ち、それもそうか。結界寮の住人になるって事は、その特性上この街に蔓延る危険と向き合わなければいけない。鎖黒の無い私には

荷が重い。

いや待て。ならこの青年も？

「明朗君だったよね、君も結界寮の仕事を手伝う身なんですよ？」

「明朗でいいよ。うん、そうそう、結界寮の仕事を手伝ってる。でもって、君の言いたい事はわかる。僕も相応の力を有するのかわかって事だろ」

その通り。

「僕は梵さん達のパシリだからねえ……危険に見舞われたら、あの人の影に隠れてるような奴さ。結界寮でもそんな奴、僕くらいだよ」

明朗は苦々しく笑った。つまり無能って事か？ よく生きていられるものだ。いやむしろ、よくそれで結界寮に住もうと思えたものだ。

「ん、まあ、つまりそういう事だから。僕みたいなのは例外。君は宿を見つけたのだから、そっちに住むべきだよ」

だろうね。鎖黒はなるべく自力で見つけるようにしよう。

結界寮には関わらない方がよい。

「あ。改めて自己紹介するよ。僕の名前は、明朗！」

ちよつと待て。自己紹介？ いやいや、だって私はもう結界寮には、

「君の名前は？」

「……天宮柘榴」

いやほんと無駄でしょこの自己紹介。要らないでしょこのやりとり。

「あまみや……ざくろ？」

「うん」

「ざくろって、あの柘榴？」

「そう、あの柘榴」

「学名ブニカグラナナム、開花時期は六月上旬から七月下旬という

ザクロ科ザクロ属の、あの柘榴？」

「そうだよ」

どこかの資料から一文を引き抜いてきたような確認方法は何？
とりあえず相槌を打っておいたが、私は人間であり果実ではない。
名前が果実と同じというだけだ。いちいち確認する事でもないけど
さ。

私の名前のどこに惹かれる部分があるのか皆目見当がつかない。
しかし明朗の感性のどこかに引掛かったのだろう。彼の表情は花
が咲いたように明るくなっていた。

「ねえねえ、僕も君たちの宿へ遊びに行ってもいい？」

明朗はいきなり無邪気にとんでもない提案を持ち掛けてきた。

いやお前……だからね、たった今、結界寮に関わらない方が良く
という結論を出したのに。というか平穩を望むなら云々 と、こ
いつ自身が言っていたではないか。

「いいでしょ？ ちゃんと、あつちのお姉さんにも了承を貰うから」
そう言って三桜を指差す。彼の頭の中では、きつと愉快なBGM
でも流れているのだろう。やたら上機嫌だ。

脳内ライブ会場こと明朗。

彼は、聖歌と共にホームの床を睨み続ける三桜の方へ軽快な足取
りで近付いてゆき、私の時と同様に上機嫌のまま交渉を始め、右ス
トレートを一発貰い、愚鈍な足取りで私の元へ帰ってきた。

「貰ってきたよ」

パンチをね。

「拳に了承の意を乗せて僕に渡したんだよ」

「おめでたい解釈だな」

「万に一つ、百歩譲って、十中一二（十中八九を元にした明朗の造
語）、今のがただのパンチだったとしても。これで彼女はパンチ一

発分の借りが僕にできてしまったことになる」

「質の悪い解釈だな」

最早付いてくる気満々である。

そしてこの後、一時間近く聖歌と三桜は指輪を探していたが結局見つからなかった。

矢神聖歌という女も、やはり並折の住人だった。

その丁寧な物腰からは想像もできないが、外界では相応の事をしていたという事なのだろう。その点については詳しく触れなかった。とにかく外界ではどうにも逃げられなくなり追い詰められていたところを、並折という結界都市を紹介され、命からがら逃げ込んだという。

彼女はきのえと駅を出て宿へと向かう道で、私達に自ら話してくれた。

「だから、私は並折へ訪れる方にはできる限りの協力はしたいと思っっています」

先頭を歩きながら嬉々として語る聖歌。

私はそんな彼女の背中が、少々危なっかしく見えた。

「それはそれで危険な気もするけど……」

私達のように危害を加える可能性の無い者ならまだしも、それなりに危険な奴へ協力など申し出てみる。散々利用された拳句、下手をすれば殺されてしまうぞ。

「柘榴ちゃん、そういった事にならないように僕達結界寮があるんだよ」

まあ、彼女の心遣いが無ければ、こうして宿を提供してもらっ事もなかったわけで。私に彼女の意思を否定する権利は無い。

「ねえ柘榴ちゃん、聞いてる？」

「黙れ弱肉」

「痛い！」

三桜が明朗の内腿へローキックを放った。

そんな光景はどうでもいい。

私は二人よりも歩みを進めて聖歌の隣を歩くことにした。

前だけを見て肩を揺らす矢神聖歌。

きのえと駅で会った時も、不思議な笑顔をする女だと思った。

上品。という表現が適切なのかもしれぬが、その単語一つでくくってはいけない気がした。

私よりも背の高い聖歌の顔は、空を背景に煌めいて見えた。

(デュアルフェイス……)

その一言が頭を過ぎる。

その一言が私の安心を許してくれない。

その一言が聖歌への好意を妨げる。

この聖歌も顔は一つではない。と、卑しき思考回路に導かれる。表情も言葉も一つの顔で、決してそれだけを信じてはいけなないのだ。

人間には顔が二つあるのだから。

矢神聖歌は並折の住人で、過去に並折の結界を求めてやってきた

逃亡者。

並折に来なければならなかった逃亡者。

だから彼女の煌めいて見える顔も偽物だ。

丁寧な物腰も言動も、柔らかい笑顔も、親切な行動も。全部、作り物なんだ。

人間なんて大嫌いだ！

心なんて大嫌いだ！

こんな物があるから偽る。隠す。装う。

そして私のように疑う。怪しむ。嫌悪する。

惑わすくらいなら、顔などなければ良いのに。

……さつき駅前を通った時に私の目を引いた物のように。

それは駅前広場の中心に設置されていた像だ。

なにやら空を見上げて両手を伸ばす子供の像。

まあ、駅前に像が設置してある事は珍しくないのだが、気になったのはその子供の像には顔が無かったからだ。

だからその子供に表情は無く、ともすれば一体どんな表情で空へ手を伸ばしているのかもわからない。

雲を掴もうと必死になっているのか、空の綺麗さに顔を綻ばせているのか、はたまた助けを求めているのか。

像は半被はつびを着ていたので体型がわからなかった。彼か彼女かも区別できない。

とにかく、一体あの像が何を表現しているのかさっぱりだった。

ああいう場所に飾られる像って、何か象徴するものやテーマがあって然るべきじゃないのか？

なんだかもやもやするだけのオブジェクトだった。

左右が対象ってところは好感が持てたし、顔が無い存在は羨ましかった。

象徴……。

顔の無い像が象徴するのは一つしかない。あの像は、カオナシの伝承を象徴しているのだ。だって顔が無いし。見たまんまだ。

カオナシの伝奇は並折へ来る前に番の姉さんツガイから聞いた。

ということは、あの像の子供がカオナシ？ どうでもいい。像に用は無い。

用があるのは、本物の方だ。

ちなみに番姉さんは正真正銘、生粋純粹、實在顕在の、雪女様だ。あの妖怪雪女。

ただし日本で目撃されたから日本でそう呼ばれているだけであり、あの人はどこで誰から生まれて育ったのかは不詳だ。

とにかく番姉さんみたいな、とんでもない能力を持った人間が、妖怪として記録された例もあるという事を私は知っている。

なら妖怪カオナシだって、実在する筈だ。

私が並折へ来た目的は　カオナシ。

そいつを見つける事。

なのだけれど……並折に来て早々、肝心の武器を無くしてしまっ
た。

カオナシ搜索より先に鎖黒の搜索だ。あれがなきや本末転倒。

先が思いやられる……。

(今は、流れに従うしかない)

強い日差しに晒されながらも隣を歩く聖歌の顔はとても涼しげだ
った。

まだ陽が昇り切っていないからでもあるだろう。

私もあまり汗をかいていなかった。

彼女の手元では、線香の束や鉢、マッチの入ったビニール袋が揺れていた。

「妹の墓参りだっけ」

話し掛けると彼女は顔を崩さずそのまま頷いた。

「ええ。今日　六月の二十四日は、妹の命日なのです」

「聖歌は朝一番に行つてたの？」

「ええ。並折を走る電車は、始発便が早く出ますから」

「そうみたいね。あたし達の乗ってきた始発が到着した時には墓参りを終えていたんだから」

「普段はあんなに人が混雑しないから、きのえとに降りた時は驚きました。ホームで大混乱が起きているんですもの」

「八号車両惨殺事件……聖歌はどう思う？」

私が問うと、聖歌は口元を結んで小さく唸った。

「うーん。当然ですけど、あれをやった犯人は、柘榴さん達と同じ電車に乗っていたって事ですよ。そして柘榴さん達と同じく、並折で降りるつもりだった」

改めて考えると、私が気を緩めて一号車両に乗っていた時も八号車両には犯人が乗っていたというのは、気持ちが悪い。

聖歌は続ける。

「どうして八号車両なのか。どうして車両内全員を殺したのか。動機が不明です。無差別殺人に間違いないのでしょうか。外界からの情報でも、そんな無茶苦茶な事件は滅多に聞きません。そもそもですよ　？」

聖歌は顔を横へ　私の方へ向け、視線を合わせた。

「そもそも、並折という結界都市へ訪れるのは、並折の結界に頼らざるを得ない事情がある者ばかりなのです。つまりその殆どが逃亡者。しかし今回の事件は、下手をすればきのえと駅へ到着する前に電車が急停車し、その場で 並折の結界外で事件が拡散してしまいかねなかった。運転士が駅に近い位置だから駅まで電車を運ぼうと判断したから、この件は結界によって外界に漏れずに済んだのですよ」

確かに……聖歌の言う通りだ。

犯人は事件が外界に漏れることなど気にしていなかったという事だろうか。

「考えられるのは、犯人が『頭を盛大に御壊しになられた方』もしくは『逃亡者ではなく、別の目的で並折にやって来た方』であるという事ですな」

どちらもあり得る。

あんな虐殺を行う奴は、正直頭のいかれている奴としか思えない。三桜もその点の異常は認めるだろう。彼女はそういう奴が居る事にいちいち動揺するのをやめると言ったただけだ。

だから聖歌の言う前者 犯人が頭を盛大に御壊しになられた方である可能性は十分にある。むしろあの虐殺を行う者を思い描くには後者よりも前者の方がしっくりくる。

それはそれで厄介だが、もっと厄介なのは後者だろう。

後者は 並折で何かを行うという目的を持って現れた、という事になる。今、聖歌が言ったように八号車両の件は下手をすれば並折で処理されず日本全国へ知れ渡ってしまったかもしれないのだ。それを、目的を果たす前に行ったという事は、己が目的を果たす為にあの虐殺が必要だったという事だ。

「ねえ聖歌。貴女は二通りの考えを出したわけだけど。あたしにはその考え　とても甘ったれて聞こえる」

「そうですね……私の考えは、もっと悪い方へ考える事が出来ます」「あたしなら、『頭を盛大に御壊しになられた方が、逃亡以外の何らかの目的を持って並折に来た』と考えるもの」

「考えたくもない最悪っぷりですよ、それ」

「同感」

「おそらく有り得ないであろう希望的考察は、『犯人は偶然、並折手前で犯行に及んでしまっただけ』といったところですけど」

「そこまであたし達もお気楽な頭をしてないわよね」

「ええ」

聖歌の宿はきのえと駅から歩いた方が早いと言うので、彼女の言う通り私達は四人連なって歩いてしたが、駅から離れるにつれて私達は自然と身体の距離が密になっていた。

広い車道や歩道は駅の周囲だけで、車道から離れた今となっては緑豊かな植木に挟まれた歩道が続くだけだ。

ひたすら長い階段が続くが、しかし疲れを感じさせない穏やかな傾斜。

階段道を上りつつ振り返ると、眼下の景色に心奪われた。

家屋が一定の間隔で立ち並び、街の様子が一望できる。

海岸沿いに走る車道の向こう側には　そう、海だ。

燦々と注ぐ陽光に磨き立てられたように、硝子の粉を撒いたように、輝く海がそこにはあった。

目下に広がる一面の海と、緑と、家屋。私の立つ場所は、随分と高い位置なのだと実感した。

蝉時雨に包まれて、一層夏を感じる。

結界都市、魔都などと呼ばれる並折の街は、こんなにも綺麗で穏やかな自然に囲まれていた。

しかし 八号車両惨殺事件の現場を目撃した直後に、まるで何事もなかったようにこうして感傷に浸る私は、おそらく異常の類なのだろう。

それが少し哀しかった。

更に細い歩道を進んだ先に聖歌の管理する宿はあった。林の中にひっそりと佇んでおり、門に大きな看板が飾ってあった。

羽田立荘と書かれていた。

読み方は、はだたち だそうな。

正門をくぐると、うねる石畳が続き植木の奥に母屋が見えた。どの植木も手入れが行き届いていて、随分立派な庭である。専属の庭師でも居るのだろうか。

興味本位で付いてきた明朗もこれには驚いたようで、緑に挟まれた石の床で棒立ちになっていた。

三桜が聖歌に訊いてみたところ、やはり此処は元料亭だったとの事。

此処が私と三桜の並折に於ける住まいとなるわけだ。

少し気持ちが高ぶった。が、よくよく考えるとこの立派な庭の手入れも私達がしなければならぬという事に気付く。すると高ぶった気持ちは急降下。母屋までの石畳の長さに比例して気も重くなつた。

体力には自信があると豪語した三桜と、とりあえず多少は使えそうな明朗。二人には頑張ってもらおうとしよう。私は……そうだな、屋内清掃を頑張るよ。

「二人だけではこの宿も広すぎますので、私も此処に居を移そうと思います。お食事の支度は任せて下さいね」

小さく拳を握りながらそう言ってくれた矢神聖歌に、私と三桜が歡喜のあまり抱き着いたのは言うまでもない。

どさくさに紛れようとした明朗は三桜が阻止した。

家賃や生活費の心配は、実は要らなかった。

三桜は純血一族という異常ながらも名家の人間なので、そういった心配はしたことが無いらしい。見た目に似合わずお嬢様だった。

羽田立荘の庭を見ても驚かなかった彼女は、もっと立派な庭を見慣れていそうだ。

私もその辺の心配はない。

私の手荷物といえはこの手提げバッグ一つなのだが、その中には十分な量の現金と、鎖黒しか入っていないからだった。

だからこそ、鎖黒だけを盗まれた事が甚だ疑問なのだけだ。

羽田立荘は立地も好印象で、此処ならば腰を落ち着けられそうだ。

しかし 少なくともこの六月は、落ち着いて鎖黒の搜索ができそうにないと悟った。

母屋へ入った私達を待っていたのは、埃だらけの廊下や置物。部屋に到っては障子の張り替えと壁の補修が必要な有様だったのだ。

聖歌は随分長い間、屋内を放置していたと思われる。どうして庭だけ手入れしてあるんだよ……。

逃げようとした明朗は三桜が取り押さえた。

私 天宮柘榴が並折を訪れた二〇〇六年六月二十四日。

魔都と呼ばれる結界都市での最初の作業は、掃除であった。

「だあー、あつちい」

羽田立荘の玄関を抜けた先　ロビーには、テーブルと椅子だけでなく六畳程の畳が敷かれたスペースがある。その上に小さな卓袱台が設置されており、座椅子に腰を落ち着かせられる。

守野三桜はそのスペースに寝転がり、ソーダ味のアイスクャンディを啜っていた。

私はロビーの隅にあつた雑誌棚から新聞を引き抜き、椅子に座つて彼女を一瞥。

そして頬に汗を伝わらせる彼女の格好に深い溜息がもれた。

上はタンクトップ一枚。下は……下着一枚。

はしたない。はしたないにも程がある。

自室でその醜態を晒すならまだ許せる。が、ここは先述した通り玄関が上がつてすぐの場所だ。弁えてほしいものだ。

三桜は構わず畳の上で仰向けになつたり、うつ伏せになつたりを繰り返している。引き締まった体型をしているが、色は意外と白い。庭の掃除をしていたので少し陽に焼けている部分がくつきりと解る。

「ああ、暑い……暑い……」

口からアイスクャンディを引き抜き、長い舌を出して喘いでいる。冷房も扇風機も無いからね。私だつて暑い。

三桜が寝転がる場所の周囲には、木彫りの熊や綺麗な模様の描かれた皿、将棋盤などの置物がごろごろと転がっている。

全て此処のロビーに飾つてあつた物だ。どれも埃を払って布で拭き、見栄え良く並べたというのに。こいつは「ひんやりした物を…

…」とか言って掻き集め、枕にしたり腕に抱いたり、散々弄んだ拳句放置しやがるのだ。

ちゃんと片付けとけよな。

「おーい、クロちゃん」

三桜はにやにやと顔を歪めながら視線をこちらへ送ってきた。

「やめて」

「私様に言っなよ、付けたのは明朗の奴だぜ」

そう　私は、明朗の馬鹿野郎に『クロちゃん』という奇怪な綽名を付けられていた。

私の、ザクロという名前から取ったらしい。迷惑極まりない上にセンスの欠片もない。

面白がって聖歌までクロちゃんと呼ぶ始末だ。

「で、何よ」

「何読んでのかなーって」

「見りゃわかるでしょ、新聞よ」

「じゃあさ、新しいアイス取って来てよ」

何が「じゃあ」なんだ。私は新聞を読んでいると言っているだろう。

三桜はアイスクャンデイの棒を振って白い歯を覗かせる。「おかわりー」ってか。ふざけんじゃねえよ。

「お断り」

「えー。だつて私様、動きたくない。柘榴が行けよー」

「何よ、あたしをパシリだと思ってるわけ？」

「強者の為に弱者が働くのは当然だろうが。私様はアイスクャンデイを御所望だ。機嫌を損ねる前に可及的速やかな行動を勧める」

「勝手に損ねてるコミ」
「コミって……」

悲愴な表情で手からポロリと棒を落とした三桜は無視して、私は新聞を読む。

ふむ……やっぱり八号車両の件は載っていない。

案の定、並折の結界が効果を発揮したんだな。

しかし気になる記事を見つけた。

大きな字で『駅構内でバラバラ殺人』と載せられている記事だ。

私が並折へ来る前日に駅のホームのトイレで死体が見つかったという。並折からなら電車を三、四回乗り継げば着ける駅だ。

被害者の名前は 無い。遺体の損傷が激しく、現在DNA鑑定による身元の確認を急いでいるが、数日前から行方不明となっている百坂さん宅の長男ではないかと予想しているらしい。よく駅を利用する普通の会社員だったさ。

遺体は見出し通り四肢を切り取られた状態だったのだろう。八号車両惨殺事件と似ている。いや、犯行場所からして同一犯の仕業に違いない。

思った通り。あれをやった奴は、逃亡者なんかじゃあない。そして並折の結界など求めてもいない。

明朗は、あの後犯人を追った女達 梵と林檎からは確保したという報告を聞いていないと言っていた。つまり八号車両で大量殺戮を行った奴は、まだこの並折に居るかもしれないって事だ。

結界寮の追跡を回避した事に明朗も驚いていた。

「おいこら、柘榴。私様のアイス」

「わ、びっくりした」

三桜がいつの間にか私の隣まで来ていて、顔を近づけていた。

「気が散るからやめて」

「何をそんなに熱心に……」

アイスの棒を唇で挟み、ぴこぴここと上下に動かしながら、彼女は新聞を覗き込んだ。

畳のスペースから此処まで歩いてきたなら、そのままアイスを取りに行けば良いだろうに。

「ああん？ 六月二十五日の朝刊？ なんでこんな読んでのさ鼻で笑われ、新聞を取り上げられてしまう。」

「雑誌棚にあったからよ。いいから返して」

「まあ聖歌の奴が持ってきたんだろ。それより早く！ アイスイ！ 暑さで私様が死んじまう」

新聞を取り返そうと腕を振る私を面白がって、三桜は飄々と逃げる。

「わかった、わかった……」

諦めた私は椅子から立ち上がる。

納得できないけれど、これ以上付き合つのも面倒だ。

ロビーを離れ、台所へと向かう。

その途中で矢神聖歌と鉢合った。

「あらクロちゃん」

「……洗濯物、干し終わったの？」

もう聖歌は私の呼び名をクロちゃんて定着させてしまっていた。

「終わりましたよ。そうだ、良いお茶が届いてるの。三桜ちゃんも交えて一緒に飲まない？」

「うん、構わないけど。あ、なら台所へ向かうの？」

「ええ」

「三桜がアイスクャンディを欲しがっているから取って来てくれな
いかな」

「アイス？ お茶と一緒に食べるのかしら」

あー。

いや、三桜はエスパーじゃないからこれからお茶を出されるなんて思っていないよね。

「やっぱりあたしが持っていくよ。聖歌がお茶を入れる間に食べちゃうだろっから」

「そう、じゃあ行きましょう」

「ほら持ってきたぞ」

ソーダ味のアイスクャンディを三桜に渡す。

「おお！ ありがとう……うむ、御苦労だったな柘榴」

こいつ滅茶苦茶腹立つわ。

それにしても冷凍庫の中に大量のアイスが敷き詰められていて驚いた。いつの間に。

「私様は暑いのが苦手だからねえ。夏場は必ずアイスを買って込んでおくのさ」

アイスクャンディの角をいきなりかじりながら、何故か自慢げに言う。

「その代わり、寒さには滅法強い」

「へー。冬は平気なんだ」

「平気なんてものじゃないね。全裸でも過ごす自信がある」

「冗談だと信じたい。」

「特に日本の冬なんて私様にとっては寒いうちに入らないさ。極寒の地での任務といえば、守野三桜様。これ常識ね」

いや、そこまで言われるとあながち冗談とも思えない。

純血一族、守野家の能力に関係しているのか。

「極寒の地での任務……雪山とか？」

問うと、三桜は片目を閉じて微笑んだ。

「そうそう。最近あまり引き受けないけどね。十二の時から十一年前か。外国の山岳部隊に雇われてた事もあるんだよ」

若かったねえ。と、年寄りくさい事を言いながら子供のようにアイスを夢中で頬張る。

純血一族、守野家の女。

守野三桜 か。

「な、なんだよ、そんなに見つめて」

「んー？ なんかさ、三桜って変だなあと思って」

「さつきから失礼だな貴様」

「だって変だもん」

「どこが。美しいと言われる事はあっても変と言われる筋合いはない」

「あたしがイメージしてた純血一族の人間とは、違うもん」

三桜は確かに普通とはズレているかもしれないけれど、許容できる範囲な気もする。

「んあ、私様が？ そりゃあねえ……多少の営業スマイルはできるよ。そうじゃなけりゃあ、先遣として並折に送られたりしないさ」

「営業職みたい」

「営業なんかしなくても殺しの依頼は後を絶たないけどね。純血一族は殺し屋さんの老舗だから」

「お金貰って殺す。それが殺し屋でしょ。あんた達はお金貰わなくても好き放題殺しまくってるじゃない」

「おいおい勘違いするなよ。私様達にも理性がある。依頼で殺しを請け負うだけだ。ただ、殺人衝動に負けた奴は無意識の殺戮を起こすけどね。でもそういう奴には当然ペナルティが課される。だから理由なき殺人つてのは一族的には御法度なのさ。一応、ね」

「でも、なんだかんだで殺人が大好きな奴がごろごろ居るのも事実でしょ」

「うん。殺したいから殺す、立派な理由じゃないか」

……結局、殺したくなったら殺すんじゃないか。

二本目のアイスを食べ終えた三桜は、ぺろんと口から棒を引き抜くとそれをゴミ箱の中へ放った。

「お茶の準備ができましたよー」

聖歌の声だ。

三桜は畳の上に座り直し、卓袱台に頬杖をついた。

「お茶？ こんな暑い日に」

「まあ！ 三桜ちゃん、その格好は何ですか！」

「え？」

「女の子がはしたないですよ！」

「だ、だって暑いから……」

「ちよつとは我慢しなさい！ ほらクロちゃんも座って」

聖歌は湯呑を三つとポットを乗せた盆を卓袱台に置き、にこやか

に私を手招きした。

「なんじゃこりゃ」

「キーマンという紅茶だそうですよ。良かった、間に合って」

見慣れないお茶を出された三桜が困惑の声を上げるが、対して聖歌は実に嬉しそうだ。

お茶一つで……。

私も三桜もその点に関しては同じ考えだった。

「どうしてまた……」

「だって今日飲みたいじゃないですか」

「よくわからん」

うん。三桜の言う通りよくわからない。

別にお茶に関して詳しくないから、聖歌の嬉々とした声にもどう反応して良いのやら。

同じ一つのポットから注がれたお茶を三桜が口にしてから、私も湯呑に手を出していた。

これは羽田立荘に来てから常習化させている事だ。

頻繁に台所に置いてある調味料の中身や、棚の中もチェックしている。

聖歌が料理をする際はさりげなく様子を窺うし、買い物から帰ってきたら袋の中を見る。

悟られないようにこれらを実施するのは骨が折れるけど、毒を盛られるよりはマシだ。

(嫌な女だなあ……私は)

その自覚はあった。

「じゃ、私は買い物に行つてきますね」

お茶を一杯だけ飲み終えた聖歌が立ち上がる。一杯で満足したらしい。

「ついでにこれ、出しといて」

三桜が封筒を渡した。

「はい。他に御用はありますか？」

「ないよ。いつてらっしやい」

「クロちゃんは？」

「あたしもないよ」

私も三桜に合わせて首を横へ振った。

なんだかんだ言つて三桜はお茶を三回もおかわりしていた。

玄関を出た聖歌の、誰かに挨拶する声が聞こえた。

「あら、いらっしやい」

「こんにちは聖歌さん！ クロちゃん居ますか？」

この声は明朗だ。

「ロビーに居ますよ」

「ありがとう！ あといつてらっしやい！」

「はいはい」

私はあぐらをかいて座る三桜を蹴っ飛ばした。

「痛！ なんだ急に！」

「服を着てこい服を！」

「ええ……」

「下着も脱がすぞ！」

「わかった、わかったから……」

さすがに全裸を明朗に晒すのは抵抗があるのか、三桜はそそくさと自室へ向かった。

三桜の醜態を目にすることなく、少しして伊佐乃明朗がロビーへやって来た。

初めて会った時はニット帽を深く被っていた彼だが、今日は被っていない。明るく染まった髪はワックスで固められている。その上に大きなヘッドホンを付けていた。

そしてなぜか片目に眼帯。

「こんにちはクロちゃん！」

「目、怪我したのか？」

「え？ ああ、これファッションだよ」

「ペろん、と眼帯をめぐってウインクしてくる。」

結界寮の住人は奇抜な格好を好むようだ。

明朗はスニーカーを脱いで畳に上がると、私の隣に座った。肩までくっつきそうになる距離だ。

「調子はどう？ クロちゃん、もう並折には慣れた？」

もう一度言うが、『クロちゃん』というのはこいつが勝手につけた私のあだ名だ。

「全然。街の地理も把握できてないよ」

この羽田立荘の掃除で手一杯だったからね。

私の返事に、明朗は「そっか」と相槌を打つ。

「僕がすぐにでも案内してあげたいんだけど……まだあまり歩かない方がいいよ」

「どうして？ 聖歌はいつも通り買い物に出かけたじゃないか」

「ああ、えっとね。今は大丈夫だけど、結界寮が最近妙に神経質に

なつててさ……僕でも梵さんと林檎さんから許可を貰わないと外出できないんだ」

「何か、起きているのか？」

「……わかんない。起きているのか、起きようとしているのか、結界寮でも把握に時間がかかっている」

「六月の事件関連？」

「うーん……」

明朗は唸り、近くに転がっていた将棋盤を卓袱台の上に乗せた。同じく転がっていた将棋の駒を幾つか手に取る。

ぱちん。

彼は将棋盤の中心に『歩兵』の駒を置いた。

広い盤の中心に、駒が一つだけ。

「これが並折の保つ秩序。並折という盤の中心に、結界寮という唯一にして絶対の裁定機関が置かれている」

力有る駒は一つだけ。

言い方は悪いが結界寮という脅威が、街を支配しているようなものか。

この構図だからこそ、並折の秩序は保たれているのだろう。

「でも……」

ぱち、ぱちん。

明朗は更に『歩兵』を二つ、隅に置いた。置く場所に意味は無いようだ。

「世界危険勢力の一角。『純血一族』と『死使十三魔』。その関係者が、並折へ侵入した可能性がある」

胸が、大きく鼓動した。

守野三桜と私の事か？

明朗はどちらの素性も知らない。

「うちの優秀な結界屋さんが、把握できない件が増えているんだ」

「純血一族と死使十三魔……」

「そう。クロちゃんは知らないかもしれないけど、世界危険勢力と呼ばれているのは、現在三つだけ。日本の呪詛家系『純血一族』、国境なき少数異鋭『死使十三魔』、最多戦力を誇る暗殺集団『ティンダロスの獵犬』。この三勢力だ」

勿論知っている。が、ここは黙って相槌だけ打っておく。

「あまり声を大きくして言えないけどさ。ここだけの話」

明朗は私の耳元に顔を近づける。

「結界寮の管理人、梵さんと林檎さんは、元『ティンダロスの獵犬』の構成員なんだよ」

「冗談でしょ？」

「さあ、僕も詳しくは知らない。なんでも前線突撃要員だかに居たんだってさ」

「……」

「『無音』と『瞬撃』の異名で知られた超A級のプレイヤーだって自慢してた」

「……」

有名な話じゃないか。

世界的に有名な恐怖神話だろうそれは。

世界危険勢力『ティンダロスの獵犬』

最上級戦闘員で構成される前線突撃チーム。
構成員は七人。その全てが異名持ち。

『鬼人』 『蜘蛛』 『死神』 『旋律』 『無音』 『瞬撃』 『霸道』
今は解散したこの七人一組は、暗殺美という言葉まで生んだ連中
だぞ。

そのうち二人が、こんな街に潜んでいたなんて。冗談としか思えない。

「待つて、明朗、あんた結界寮はその二人が管理してるって言ったよね？」

「そうだよ」

「つ、つまりそれって……」

「結界寮は『ティンダロスの獵犬』傘下の組織つて事。もつと言つてしまえば、並折は『ティンダロスの獵犬』の領地。支配地。占領地。専用獵地」

明朗は将棋盤の中心にあった『歩兵』の駒を摘まみ上げ、
はちん。

裏返して『と金』の駒にした。

「だから、『純血一族』や『死使十三魔』の関係者が並折に侵入するのは、かなりまずい」

ぱち、ぱちん。

他の二枚も『と金』に。

盤の上では三枚の『歩』が三枚の『と金』になった。

「どの勢力にとつても、この結界都市は重要な拠点なんだ。日本を本拠地とする純血一族にとつて、結界寮に占領されている現状はか

なり不安で不愉快だろう。死使十三魔にとって、日本に作る大きな拠点としてこの街はかなり魅力的だろう。でも実際は――

「既にティンダロスの拠点になっている。」と

「そう。その事実には純血一族が気付いたら、どうなるか」

……自国の、懐の、結界都市に敵が陣取っているんだ。
血相を変えるに決まっている。

「だから結界寮は大慌てなのさ。下手をすれば三つ巴の戦争が始まるからね」

み、三桜が居なくてよかった……。

結界寮の正体については伏せておくべきだ。今後も。

「あまり口外するべきじゃないよ、それ……」

「うん」

「というか、あたしに漏らした意味もわかんない」

「いやあ、だってクロちゃんなら大丈夫かなって思ったんだ」

何を根拠に明朗がそう思ったのかは見当がつかない。

見当がつかない上に、明朗は大きな過ちを犯してしまった。

私の素性をよく知りもしないうちに、あまりにも馴れ馴れしいか
ら。

こいつは大失敗をしでかしたことに気付いていない。

不幸中の幸いと言えるのは、私がこの並折を離れるつもりがない
という点だろう。

「ねえ明朗、死使十三魔の事って知ってる？」

「うーん。序列一位から十三位までの少数精鋭ってことくらいしか……」
「そっか」

彼はきつと驚くだろう。

私が死使十三魔の関係者だと知ったら。

天宮柘榴が 序列四位『魔氷の番』直属の部下という事実を耳にしたら。

血鎖 其の一族、複雑につき

「あはははは！ 本当に守野三桜は並折へ行つたのかい？」

「御上からの命令だからな……仕方ない」

「うふ、うつははははは！ 君、恥ずかしくないの？ ねえ八汰^{やたぎ}祁君！ 守野八汰祁君！」

「黙れ……」

世界危険勢力『純血一族』。その家系の一つ、守野家。

守野家の本家は、日本の東北部にある。

今はこの八汰祁がそこで守野家の一切を握り、管理を任されていた。

顔の彫りが深く、皺と傷の混じった初老の男性だ。

彼は、突如やってきた若者の軽口に苛立っていた。

「うっひ、うっひいいい！ 守野の老兵はツラの皮が分厚いんだねえ！ 恥も知らないとは！ いやあ守野は所詮、守野ってことか」

席に座る八汰祁の机越しに、黒衣の若者はひょうひょうと奇怪な動きで煽る。

彼が着ているのは真っ黒に染まった白衣。

よく医者が羽織る白衣の、色が黒くなった物だ。その胸ポケットにはペンが挿され、彼の首には聴診器が下がっている。

黒衣を纏った医者の風貌であった。

「恥知らずはどちらだ。薄汚い昏^{こんくろ}黒坂の精神異常者が」

八汰祁が汚物を見る目で男を睨んだ。

「貴様達、昏黒坂家がしかした失態。よもや忘れたわけではあるまい？」

「失態？ 失態い？ もしかして僕らが死使十三魔と喧嘩しちゃった件？」

「それ以外に何がある」

「んっはあ！ おいおいそれってもう十年くらい前の事じゃん、クツソジジイ超卑屈！」

「ふざけるな。貴様達が」

「ハイ僕たちが死使十三魔ちゃんトコの序列五位ちゃんをボオッコボコにぶちのめしたから、あの戦争が始まりましたね。でももう終わりましたね」

八汰祁は呆れるように息を吐いた。

「よくもまあ、そんな、己らにとって都合の良い解釈ができたものだ」

正しくは、『純血一族』昏黒坂家が序列五位に奇襲をかけ、一度は返り討ちにされた。

その後人数を増やし、裏稼業を掻き集め、罨を張り、不意を打ち、やっとのことで五位に手傷を負わせることができたのだ。

死使十三魔も黙っておらず、報復に出た。

純血一族も昏黒坂家の要請を受け、他家系が合流した。

こうしてティンダロスの猟犬や裏稼業をも巻き込む大規模な抗争へと発展していったのだ。

「あの時、貴様らは御上に真実を伝えなかった。死使十三魔の序列五位が先に手を出し、犠牲者が出たと報告しおった。抗争終盤まで真実を隠し続けおった」

「だから？」

「その所為で、どれだけの家系が、どれだけの人員が犠牲になったか知っているのか！」

「だから、なんなのさ？」

昏黒坂の男は片脚を上げると 八汰祁の目の前に振り下ろした。その脚力で、木製の机に大きな亀裂が走る。

「結局、僕達や殺さなけりゃあ存在する意味は無いんだよわかってねーなクソジジイ。犠牲だのなんだの言ってるのは生き残った臆病者だけ。君だって見ただろ、同じ守野の人間が恍惚の笑みで戦争するところをさ」

「……」

「君は僕らを恥知らずと言いたいのだろうけど、違うね。僕らは欲望に忠実で、欲望に正直なんだよ」

「……ただの暴走だ」

「結構。なんでもいいよ。それよか、今年の五月に大失態を晒した君の家系の方が問題だ。話を戻そうぜ」

「く……」

男は脚を机から下ろし、黒衣を整える。

「おっと自己紹介が遅れた。僕は昏黒坂霧馬。昏黒坂家の使いね」

「ああ、既に聞いている」

「あ、そう。じゃあ早速本題に入らせてもらいたいんだけど、その前に立ったままの嫌だから椅子が欲しいな」

霧馬は八汰祁の部屋の中を見回す。

しかし八汰祁が座っている物の他に椅子は見当たらない。

霧馬は机に尻を乗せた。

もはやなにも言う気が起きない八汰祁は、その態度についても触れなかった。

「本題とは？」

「守野三桜さ。並折に行ったのは本当なんだよね？」

「本当だ。三桜様は御上の命令で日本へ呼び戻され、並折への斥候として送られた」

「……五月、関東で守野家の不完全能力者が暴れてしまった事件。

その責任をとらされて、だよな？」

「うむ……」

「疑問だ。そこがすつごく疑問。いやあ僕もさつきは過剰に表現しただけど、たかだか一人の能力者が暴れて『連続殺人鬼』としてニコラスに出されただけでしょ。その不完全能力者『守野一郎』も殺処分された。それで終わりじゃないか。なのにどうして御上はわざわざ海外から守野三桜を 守野家の『当主』を呼び戻した？ そこまでは程大きな事件だったか？ いやそんな事は無い。僕ら昏黒坂家の方がもつとクレイジーに暴れている」

霧馬の指摘に、八汰祁は唸るしかない。

老兵は驚いていた。

今回の、三桜派遣。この情報を掴んですぐに噛み付いてきたのが、まさか昏黒坂の人間だとは予想もしていなかったからだ。

「教える守野の翁」

霧馬は低い声色で囁き、八汰祁の不安を黄昏の舌で舐めてくる。

「今回、斥候として守野三桜が与えられた仕事は何だい」

「……」

「関東で、同時期にもう一つ大きな出来事が起きたよね。こちらは

闇に包まれているが。それに関連しているんじゃないの？」

「それも掴んでいたか。そうだ、一郎の件と同時期に関東で純血一族の者が負傷している」

「んっふ、んっふふふふのふー。やっぱりね。それで、守野三桜とどう関連する？」

「負傷した者は、関西圏の本家へと撤退中だ。しかし追っ手を付けられていてな……」

霧馬はパチンと指を鳴らした。

「ナルホド。中部圏の結界都市、並折で一旦匿おっつてことか。その仲介役に、三桜が抜擢されたと」

八汰祁が首肯する。

うんうんと頷いて頭の中で一連の繋がりを納得させようとした霧馬だったが、昏黒坂の思考はこれらに納得できなかつた。

「それだけじゃねえだろ」

「いいや、私知ってるのはそれだけだ」

「んっふ、嘘ついても無駄だよジジイ。なんなら君をこれから昏黒坂病院へと招待してあげてもいいんだ。脳漿ぶちまけるまで情報を引き出してあげるよ」

「やってみる。知らんものは知らん」

「……」

舌を打つ霧馬。

指を鳴らし、また舌を打つ。

それを幾度も繰り返す。

(このジジイは本当に知らないな……知らない方がもっと面白い)

ぎゅるぎゅると、霧魔の目の中　瞳孔が蠢いているように見える。

「この僕があ」

霧馬の口が開き、唾液が犬歯から滴る。

「身体の一部を失った程度でどうにかなるとでも思っているのかい？　この昏黒の狂人を、君ごとき老兵がどうこうできるとでも思っているのかい？」

「やってみるか？　若造」

裂けた口から「イヒ」と嬉しそうな声を漏らした霧馬だが、その歓喜はひとまず飲み込む。

（白兵戦・肉弾戦なら純血一族最強と言われる『獣人』の守野家。この空間でやり合ったら僕に勝ち目はないだろうね）

「……望むところ。と言いたいけどさあ。うちの当主からは『穩便に』と釘を刺されているからねえ。だから僕としても穩便に事を済ませたいんだよなあ。もう一度言いますよ。守野三桜様が、お戻りになられましたら、我ら昏黒坂病院へ一報くださるようお伝えください。オツケエ？」

「考えておこう」

「けえ、別に三桜さまに不利益になるような事はしねえよ。きつと僕らの助けが欲しくなる。そんな気がするのなあ」

「貴様らの助けなど……」

「じゃあ御礼代わりに、僕らの掴んだ情報を一つあげるよ」

口を閉じ、にこやかな笑みを作った霧馬が人差し指を立てる。

八汰祁は首を傾げた。

「昏黒坂家は、死使十三魔の奇妙な動きを察知している」
「死使十三魔の？」

霧馬の閉じていた口がまた崩れ、顔がゆがむ。

「序列五位が、日本へ入国した」

「っ？」

「きひ、きひひひ。そして、見失った。中部圏でねえ！」

「お、おいまさか」

「並折へ隠れた可能性がある、僕らは見ている」

「御上に報告したのか？」

「するわけねえだろ、こんな楽しい事。序列五位だぜ？ 昏黒坂の

オモチヤは誰にも渡さねえよ」

「……私は報告するぞ」

「勝手にどうぞ。並折に居るのはまだ確定していない。でもさあ、もしそうだとしたらさあ、んふふふ。やっぱり三桜様は昏黒坂病院に来るべきだよねえ？」

「く……！」

「想像してごらん、君らの大事な三桜ちゃん。今頃どうしているのかな？ 五位の顔も見た事ないんでしょ？ 大変だあ、もしかしたら、偶然バツタリ会っちゃったりなんかして。隣同士で歩いてたりなんかして！」

八汰祁の顔が蒼ざめる。

「どうするよっ？ あんな結界都市の中。借りた宿。一つ屋根の下で暮らしちゃってたりしたらさあ！」

「三桜様に限って、男と一つ屋根の下で過ごすことなど有り得ん」
「……」

霧馬はつまらなそうに、

「人間、持つてる顔は一つだけじゃないんだよ」
そう言ってせせら笑った。

PUNICA【六月の果実】了

PUNICA【あつたかい雨の降る夜】 1

寒いなあ。

寒いなあ。

冷たい床の上で丸くなっていた私は、身に纏ったセーラー服という唯一の布生地を両腕で抱いた。

納屋の中。壊れた屋根の隙間からは、星も月も見えない。

そうか、全部隠れてしまったのか……。

少しの明かりでもあればと望んだ私の顔に、隙間から滴った水が当たる。

ああ、冷たいなあ。

眠る事さえ、できないや。

鼻水が垂れそうになり、すする。

夏の夜とはいえ、やっぱり冷えるなあ。

足が指の先から凍え、両足をすり合わせる。裸足は辛い。

両手は、股の間に挟んだ。

すん、と。すすった鼻に、私の身体のおいが紛れ込む。

身体、洗いたいなあ。

……ちようど雨が降っているし、シャワーの代わりになるかなあ。でも寒いから、嫌だなあ。こんな場所で裸になるのも恥ずかしいし。

こんな場所、誰も来ないのにね。

ここはどこだろう。

頑張つて走つて、こんなところに来て、私は何がしたいのだろう。

足の裏は皮がむけて血が滲んでいる。たくさん躓いて、爪はいくつか割れている。

吹き込む雨が、やたらと顔に当たるようになったので、横になっても居られなくなった。

膝を抱えて、太ももに顔をうずめて、静かに目を閉じる。

前と後ろ。交互に身体を揺らして、即席のゆりかご。

大丈夫。大丈夫。

「だいじょうぶ、だいじょうぶ……」

? 佐々奈、お母さんがいつも味方だからね。大丈夫、大丈夫

!?

身体。やっぱり洗おうかなあ。

佐々奈、お風呂が沸いたから早く入りなさい。

はい。

佐々奈、今度の大会でアンカー走るんだって? お母さん応援に

行くからね。頑張つてね。

うん、絶対に勝つよ。

佐々奈?

なあに、お母さん。

「なあに、お母さん? いいえ佐々奈、なんでもないのでよ」

……お母さん?

「佐々奈は、だいじょうぶ」

私は瞼を開き、顔を上げた。

雨の滴が屋根に反射する小さな小さな音だけが耳に入る。

真つ暗な納屋の中で立ち上がると、足の裏がコンクリートの床に擦れて痛かった。

お腹すいたなあ。

空腹を訴えるように、胃がぐうと音を鳴らす。

片手でお腹をさすり、生唾を飲み込んだ。

髪を結んでいたゴムを二つ外し、足元に置く。

私は歯を食い縛り、意を決してセーラー服とスカートを脱いだ。身体が凍える。

土に汚れたそれらも畳んで足元に置く。

同じように下着も。

ついでに洗ってしまおうかとも思ったけど、他に着る物がないので仕方がない。

納屋の戸に手を掛け、横へ引く。

雨によって浮き上がった土埃のにおいが、私の鼻を通り抜けた。

ひどい降り様だ。水滴のカーテンで、遠くが見えない。

そんなシャワーの中へ、私は進む。

緩くなった土に足が若干沈む感覚は、気持ち悪い。

「あの……こんな姿で、本当にごめんなさい」

私は周囲の墓石へ、何故か会釈なんかをしていた。

墓場という場所の中に、裸体で居るのだ。なんだか墓石に目があるようで落ち着かない。

でも、身体に付いた砂や汚れは一気に流されていく。

はあ……思い切ってみて良かった。

でも、この後どうしよう。

身体を拭くタオルも無い。

火だつて起こしていない。

このままずぶ濡れで納屋の中へ戻つても　セーラー服を着ることとはできない。

畳んだ衣類を前にして途方に暮れる自分の姿が、いとも容易く想像できた。

体が冷えて、さつきよりずっと凍える思いをしながら、全身が乾くまで小さく丸まっているしかないのだろう。

わかつていたことだ。

それでも雨に打たれている今は、そんなすぐ先の事でさえどうでもよく思える。

あーあ。

なんだか、もう、本当に。

「どうでも……いや……」

雨空を見上げるが、映るのは水滴ばかり。

そんな中。

私の心臓が　ドクン、と大きく鼓動した。

張り付いた前髪が片方の目を覆ってはいたが、しかし私は狭い視界の中で確かに捉えたのだ。

墓地を囲む木々の中　よりによって私の近くの木の上だ。

そこに潜み、こちらを窺う白い見慣れない衣装を。

「え……」

呆然とするしかない。

その白い影は暗闇の中ではひときわ目立ち、そして私に視認され

た事も気付いたようだった。

「何をしている？」

言われて当たり前の言葉が飛んできた。男性の声だった。低く、威圧感のある声。だけど若さ溢れる声色。

何をしている。

そうだ、その言葉は意外でもなんでもない。こんな場所で雨の中、素っ裸で立つ私の方がおかしいのだ。おかしい筈なのだ。

白い影は木から飛び降り、私の正面に立った。

私といえば自分の身体を手なり腕なりで隠すこともせず、未だに呆然と男の姿を目で追うことしかできずにいた。

おかしいのは、自分。

だけど私にとっては裸で雨を浴びる事よりも、女として男性に全身を見られた事よりも、彼の姿に驚きと意識を持っていかれたのだ。

真っ白な忍者みたいな格好。

ニンジャ。あの忍者である。

頭部を覆面で隠した、忍装束というやつだ。

勿論、彼もずぶ濡れである。

そしてなにより私の驚きと意識を圧倒的に上回った感覚は 恐怖。

暗闇と降雨の中で爛々と輝き、今すぐにも私を殺そうとしている、彼の目だ。

「此処は墓場。女、こんな処で、何をしている？」

彼は再び問うてきた。

何をしていると訊かれても……。

「み、水を……浴びています」

「墓場で水浴び。それで？ どこから来た」

完全に怪しまれている。

いや怪しいのは彼も同じだ。

それにどこから来たと言われても答えに困る。それでも答えなければ繰り返し訊いてくるだろう。

「そのの……納屋からです……」

おそろおそろ腕を上げ、先程まで雨風をしのいでいた場所を指差した。

彼は納屋を一瞥し、強く息を吐く。

ここで私は恐怖心から解放された。それは、彼の目から殺気が失せるどころか生気まで失せそうになったからだ。

ふわりと浮いた足取りでふらつく白い忍者。

彼の身体。その一部分に視線が集中する。

左手に巻かれた包帯が血で滲んでいる。

彼には左手が無かった。

「女」

「さ、佐々奈……」

「何？」

「佐々奈といます」

「なんでもいい。とにかく……其処を貸してもらっぞ……」

そう呟くと引きずるような足運びで歩き出した。

私は彼より先に納屋へと駆け、戸を開けた。

この人は怪我をしている。消耗もひどい。

というか、手を失うような重傷は初めて見たからなのか私は少し混乱していた。

どうしよう。どうしたらいいのか。

「その怪我、病院へ行くべきですよ」

「構うな……」

「でもこのままだと危険です。なんか感染症とか、そういうの起こしちゃいますし。消毒しなくちゃ」

「消毒……？ ははっ」

間違ったことは言っていないと思うんだけど。小さく笑われた。笑ってる場合じゃないでしょうに。この人、自分の身体がどんな状態かわかっているのかな。

身体を貸そうとしても身をよじられ、手を差し出しても弾かれた。納屋に入り、彼は気づぬ濡れの衣装を着たまま、床に腰を下ろしてしまふ。

とにかく私は服を着よう。

濡れた身体は……スカートタオル代わりに使う事にした。背に腹は代えられない。

下着を身に付けた上に、セーラー服だけを着了た私は、再びおろとした。

この人、放っておいたら死んでしまふ。

病院へ行きたくないのかな。何か理由があるのかな。それなら私が行くしかない。

眉間に皺をよせ、気持ち悪さに耐えながら濡れたスカートに片足を通したところで 納屋の棚にもたれかかった怪我人が声を出した。

「女よ」

「だから、さつき名乗ったじゃないですか」

「ああ……なんだったか」

「佐々奈です！ 江本佐々奈！」

彼は一度だけ固まった。

でもそれはほんの一瞬。すぐにまた声を出す。

「江本佐々奈。某の事は構わなくていい」

それがし？ ああ、自分を指し示す言葉か。格好だけでなく言葉遣いまで時代が違うらしい。

それにしても無愛想極まりない人だ。私を見る目は明らかに冷たい。私の裸を見たって反応も無かった。ちょっとへこんだ。いや、自信があつたわけじゃないけど。

疲れているからとか、怪我をしているからとか、そういう一時的な状況ではあんな目はしないとと思う。

今もその視線は私に向けられているけど、人に見られているというよりもむしろ 監視カメラのある部屋に居る気分だ。普段からこんな目で生きているのかな。そう思うと、彼の機械的な言動に対してこちらは人間的な応答を貰きたくもなる。

「構わざるを得ないですよ。そんな怪我を見せつけておいて勝手なこと言わないでください」

「死になどせぬ。むしろ此処を貸してもらえたおかげで回復へ向かうだろう」

「な、なにを……言っているんですか！ そんな重傷で！」

「いいから構うな。余計な事だ。責様がどこから来て、何故こんな墓地の納屋なぞに居るのかも興味は無い。見たところ、ただの家出娘にしか見えんからな」

言われ、私は言葉を返せなかった。

家出娘……か。

「凶星か。ならば、問題なからう」

そう言って、彼は座ったまま目を閉じてしまった。

偉そうに。怪我して疲れて困っていたくせに。
別にこんな納屋なんて私の家じゃないもん。なにが貸してもらっ
た。勝手に使えばいいんだ。忍者みたいな変な格好で紳士気取りす
るな。

「私にだけ名乗らせて……」

膝を抱えて彼の前に座り、覆面で隠れた顔の中で見える数少ない
範囲 目元をじっと睨む。
隈ができてる。

何日も寝ていなかったのかな。

結局、この人は何者なんだろう。

片手を無くしてるし、普通なわけがない。危険な人だろう。
でも。

目を閉じて肩をゆっくりと上下させる姿は、この人がとても身近
な存在に思えてしまう。

お母さんも、こんなふうに眠っていたなあ。

「響」

「え？」

突然、彼は片目を開き、何かを呟いた。

「織神楽響おりかぐらひびき。某の名だ」

それだけ言うと、彼はまた目を閉ざす。

ふん、と顔を横へ向けてしまった。

やけに冷たい雨の降る、八月の夜。

墓石に囲まれたこの場所で、私と織神楽響は出会った。

PUNICA【あつたかい雨の降る夜】

PUNICA【あつたかい雨の降る夜】2

夏の暑さもいよいよ本格化してきた。陰曆で葉月と呼ばれるだけ
はあり、羽田立荘の庭も緑一色。元の料亭が雰囲気を意識し、林に
囲まれた場所に建てたおかげで蝉しぐれの大合唱に苦しめられる毎
日を過ごしている。

耳栓を買うほど、私は繊細な神経の持ち主じゃない。だからとい
つて自分で自分の神経が図太いと表現するほど女を捨ててはいない。
だからといって私が女である事を主張したり利用したりする場面は、
これが驚くほど少ない。ほっとけ。

まあしかし困っているのは精々そのくらいだというのがまだ救い
ではある。

先月、この羽田立荘にも冷房が設置されたのだ。

この宿には人一倍暑さを苦手とする女が住んでおり、先月のうち
に溜め込んでおいたアイスクャンディを全て消費してしまった程だ。
そう簡単に無くなる量ではなかった。料亭を切り盛りしていた台
所の冷凍庫いっぱい詰り込まれていたのだ。その数は一人が一日
三本ずつ消費したとして、少なくとも三か月は保てそうだと目算し
ていた。

まさか彼女が一時間単位で冷凍庫に足を運ぶとは思わなかった。
ともあれ、そんな彼女にしてこの設備。当然のごとく大絶賛であ
る。

私と、その守野三桜、そして真偽は定かでないがこの宿の持ち主
である矢神聖歌。

それぞれの個室に冷房は設置され、更に大型の冷房がロビーにも
設置された。

資金提供、守野三桜様。

彼女のお気に入りは、ロビーの大型冷房機。

畳敷きスペースが定位置となつてしまつたようで、いつもそこに寝転がつては幸せそうに寝息を立てている。家猫がお前は。

私としても下着一枚でごねながら宿の備品を散らかされることがなくなり、冷房様万々歳といったところだ。

そんな三桜だが、ここ数日は妙に緊張した面持ちをすることが多くなつていた。

時折、ある方向の空を眺めては唸つたりする。

そして定期的なここへ遊びにやってくる明朗に対しても、あまり歓迎するような顔をしなくなった。いや歓迎する顔はきつと一度もしていないだろうが、それでも「勝手にしろ」といった具合に気にも留めていなかったのは事実。

それが、最近はおからさまに表情に出す場面も見られ、明朗もさすがに「嫌われちゃつたかな」と、悲しげに肩を落としていた。

明朗は三桜の正体を知らないが、こうなるのも必然だろうと思う。純血一族という勢力の人間である三桜にとつて、結界寮の住人である明朗に周囲をうるつかれてはなにかと面倒だからだ。

かといつて無理矢理突き放せば、怪しまれる。

韜晦はこの並折に於いて常識なのかかもしれないが、それを悟られないように生きる用心も必要だ。純血一族なら尚更ね。

常に傲岸不遜かつ余裕綽々を気取る三桜は、意外にも明朗に手を焼いているのかもしれない。

まあ……明朗も明朗で、初対面の際に右ストレートをぶちこまれながらも、へらへらとしているような奴だから。三桜だけに留まらず各所で厄介な存在となつてはいるだろう事も容易に想像できる。

なので頻度は減りつつも彼はやはり、ここへ遊びにやってくるの

だ。
何故だ。

そして三桜の方はというと 今日も定例に変わらず、ロビーのガラス戸と網戸を開けてぼんやりと空を眺めていた。

今日はさほど暑くもなく、むしろ少々冷えるぐらいの気温で、空は曇っている。

彼女にとって眺める空の模様に拘りはないということか。

「まったく。昼間と夜の気温差はなんだ……この分だと、今夜も冷えるぞ」

立ったまま呟き、彼女は一つ息を吐いた。

確かに、夏真っ盛りだというのにやけに夜が冷える。

世界を股にかける死使十三魔に属していた私が、日本の四季を詳しく知るわけでもないが、それでも土地の気候を考えてもこの冷え方は少々気になった。

気が向いたら並折の気象情報を調べてみるか。

そんなことを思いつつ私はいつものように大きめの網椅子に腰を落ち着け、新聞を開いたまま三桜の様子をひそかに窺っていた。

「ん？」

すると三桜の目の前に、一匹の野良猫が現れた。迷い込んだらしい。

「うん、うん。ああ、暑いなあ」

野良猫は、三桜の方へ頭を上げて懸命に鳴き声を出している。それに対して三桜が相槌を打っている。

「なんだ貴様、うちのえとから来たのか？ 随分な遠出だな」

あの三桜が足を折り曲げ、縁側に腰を据えた。

猫は夢中で三桜に声を向ける。

私はこんな人間に対して積極的にコミュニケーションをとろうとする猫は見た事がなかった。まるで世間話が成り立っているように見えた。

三桜は鳴き声に対して表情を変えて応答しているし、猫は三桜の言葉を待つてから大きな鳴き声を繰り返す。

不思議に思う私がおかしいのではないかと錯覚するくらい、自然だ。

「成程、家族を連れてなあ。貴様も大変だな。つちのえとで何かあったのかねえ。何、挨拶？ 貴様達、この林に居を移すの？ ふうん。いやいや別に私様の事を気にする必要はないよ。それはそうと林の奥にさあ、小さいけど滝があるじゃん。見つけた？ そっか、後で行ってみなよ。怪我すんなよ。また顔見せに来いよ」

小動物へ一方的に言語を放った後、ひらひらと軽やかに手を振る三桜。

猫は最後に一度大きく鳴き、庭から出て行った。

……少しだけ三桜が心配になった。

「さて、ずっと開けてると冷気が逃げるからな っ、どわああ

！」

「随分機嫌が良いじゃないの」

私は伸びをする三桜を立ち上げさせず、彼女の肩に顎を寄せ、吐息交じりに囁いてやった。

常に大胆不敵で意気揚々と偉そうな態度を振りまく女が、小動物を相手に会話じみたままごとをし、挙句満足そうにしている。

からかうなら、この好機を逃す手は無い。

「ぎ、柘榴っ？ 居たのか？ いつから？」

「いつからって、ずっとよ」

「そうか、私様に何か用か？」

「何よ。いつもは用なんか無い癖にあたしに絡んでくるあんたが。

あたしは用が無いとあんたに声を掛けちゃいけないわけ」

「いや別に、そういうわけじゃ……」

「それとも、あたしが猫の鳴き声を出さないと、駄目？」

「き、貴様という奴は……」

「野良猫相手に、随分とメルヘンチックなやりとりしてたわね」

「す、数百年と生きた人間は猫語を理解するようになるのだ」

「あんた何歳よ」

「二十三くらい……」

「いろいろとおかしいじゃない。いつもの事だけど」

「最後のは余計だ」

私の顎を肩に乗せたまま、三桜は溜息を吐いた。

……なんだ？ やけにおとなしいじゃないの。

本格的に心配になってきた。

「どうしたのよ三桜らしくない。最近のあんた、一層変よ」

「一層って言うな」

「猫とじゃれていた事を差し引いても、変。毎日外ばっかり眺めて

さ。毒入りの食べ物でも拾って食べたんじゃないの？」

「毒……」

やっぱりおかしい。

また遠い目をしている。

「暑さで頭が……さらに残念なことに」

「貴様のその毒を吐く口はなんとかならんのか」

三桜が人差し指で私の唇を撫でてきたので、おもわず肩が痙攣した。

いきなり何をするんだ気持ち悪い。まさに猫撫で声じゃないか。彼女は飛び退くように離れた私を、これまた色っぽい目で見てくる。迂闊だった。こいつが変態だって事をすっかり忘れていた。

過去に一度、指を舐められるという体験をしていたというのに。学習せずにまた接触した私が悪いのか。

いや、変態が悪い。

怯えて警戒する猫のように、私は三桜と一定の距離を保つ。

果たして彼女の言う毒とはなんなのか。それは三桜の抱える事情であり、はつきり言って私が首を突っ込むべきではない。

学習しろ。私はいつも後悔ばかりしていた筈だ。

そもそも私は他人の事を気にしていられるほど余裕のある立場か？

自問に対する自答は、否だ。私にも探し物があり、探し人がいる。

三桜が誰を待とうが、任務に行き詰まるうが、それは彼女自身の問題であって彼女自身が解決するものだ。私には関係ない。

羽田立荘に居付いてからひと月が経ってしまった。私も進展がない。のんびりと並折の自然に囲まれた生活を満喫している場合じゃない。

「あら？ 三桜ちゃんとクロちゃん、相変わらず仲がいいのね」

ロビーの中に耳触りの良い声色。

三桜を警戒し、自分の怠惰さを反省していたところに、矢神聖歌が現れた。彼女の声は気に入っている。なんだか安心する。

聖歌は羽田立荘の中にいるときは、常にエプロンを着ている。だ

が今は着ていないという事は、外出でもするのだらう。

そういえばこの一ヶ月……炊事も洗濯も、掃除でさえ彼女一人に任せきりだったと気が付き、自己嫌悪の感が加速した。

お嬢様気質の三桜は気にもしていないようで、聖歌へ軽い挨拶の言葉を投げ掛けてから、開けっ放しだったガラス戸を閉めた。

「ん、聖歌。出掛けるのか？」

聖歌のエプロン姿を見慣れていたのは三桜も同じだったらしく、違和感から彼女が外出するのだと悟って言う。

私と三桜が同じ思考をするということは、どちらも似たり寄ったりのぐうたら生活を送っていた証拠だ。猛省の必要あり。

こんな怠惰な女を二人も抱えて、それでも文句ひとつ漏らさない聖歌。名前に劣らぬ女神様が。

「買い物に行つてきますけど、三桜ちゃんは何か要る物や用事ある？」

「私様はないなあ」

「クロちゃんは？」

「あたしもない」

「そう、じゃあ夕飯の支度に間に合うよう帰ってきますから。お留守番、お願いしますね」

三桜は右手を挙げてビシリと敬礼。

私もつられて敬礼。何故だ。

「いつ明朗君が来るかわからないので、鍵は掛けずに行きます。不審な人が訪ねてきても中へ招いちゃ駄目ですよ。危ないと感じたら、すぐに逃げる事」

三桜は左手も挙げて両手で敬礼……つてアホか。そもそも、この三桜より危なくて不審な奴を探せという方が難題だ。

考えてもみる。自称凶悪強盗殺人犯が、この羽田立荘へやってきたとする。正面からでも、裏口からでも、屋根からでもいい。侵入したとする。

どんな成りゆきを思い描いても結末は一つしか思い浮かばない。純血一族の末裔 守野三桜が、返り血を浴びて笑っている姿だ。両手で敬礼するこのアホな警備員は、最強の変態なのだ。だから聖歌は安心して外出するといいい。

「じゃあ行つてきますね」

三桜のダブル敬礼には微々とも反応せず聖歌は玄関へと歩いていく。彼女は彼女でなかなかの強者だった。

そんな聖歌の後ろ姿に「待った」と言う警備員。

「傘持ったか？」

「傘？」

「ほら」

三桜が後ろ指でくいくいっと指した先は、先程閉めたロビーのガラス戸。

数拍置いてから ぽつり、ぽつり、と。雨が降り出した。

「すごいわ三桜ちゃん！ どうしてわかったの？」

驚いて手を合わせ、目を丸くする聖歌。

私もさすがに驚いた。

預言者じみた芸を披露した三桜は、得意気に自分の鼻先を指で叩

く。

「ニオイでわかる」

犬がお前は。

聖歌は傘を持って出掛けて行った。玄関の戸が閉まるまで彼女の背を見送った私は、そのまま隣へ視線を移す。

そこには当たり前のように両手を挙げて敬礼もどきを続ける女の姿。なんで私が、背の高いこいつの醜態を見上げなきゃいかんだ。

「もういいよ警備員さん」

「諸手を挙げて、不審者を歓迎するであります！」

「歓迎するなよ」

両手を挙げて歓迎するのは、少なくともそんな物騒なものではない。

「コホン」と、咳払いした三桜は腕を下ろし、首を左右に倒す。

ボキ、ゴキ。

これが関節の音かと問いたくなるくらい豪快な音だ。

「さて柘榴。貴様にお使いを頼もうじゃないか」

ふざけるな。

もう一度言う。ふざけるな。

お前はつい今しがた聖歌に用事はあるかと尋ねられて首を横に振っただろうが。

「お前は生粋の馬鹿かよ！ 聖歌に頼めばよかったじゃないの！」

「私様は私様だ！ 馬でも鹿でも犬でも猫でもない！」

「なら豚か！ 雌豚か！」

「それは興奮する！」

「やめろやめろやめろ！ その返しはやめろ！」

なにこいつ怖い。誰か私を助ける。こんな女と一緒に居たら何をされるかわかったもんじゃやない。もうこの際、明朗でもいいから！目を固く閉じて腕をがむしやりに振る。

「柘榴、貴女あなたに頼みたい事があるんだよ」

「おいよせ！ さりげなくあたしを貴様呼ばわりから格上げするな！」

「わかった、落ち着け。落ち着くんだ。ちゃんと理由も説明するか」

足音だ。

三桜がこちらに歩いてきている！

「ちょっと待って近寄らないで うわあ！」

何故だ、何故私はこんな変態と一つ屋根の下で生活しているんだ。薄々感付いていたが、これで確信した。

三桜は 同性を好む女だ。聖歌に対しても、私に対しても、やたらと色目を使っている。逆に明朗にはとことん冷たい。

そういう冗談だと今まで思っていたが、もう冗談だとは思いつく難くなくなった。

「まさかこんなに耐性がないとは思わなかったよ」

私の顔は、弾力のある丘に埋まり、両側から包まれていた。

抜け出そうにも三桜は私の頭を抱えてしまっている。

「ほーら、ことうすれば落ち着くだろ」

「もー……もー」

視界は三桜の胸によって覆われてしまい、呼吸もしづらい。

あ、足……片足を触られている。

三桜の手が、私の太腿部に触れている。他人に自分の肌を触られるというのは慣れていないからなのか、己の意識とは別に身体が震えた。抵抗しようにもいざという時に思考と身体が連携できていないこの歯がゆい感覚よ。

更に膝の上まであるニーハイソックス。その生地と肌の隙間に指が滑り込み、そのまま手がゆっくりと臀部へ移動し始める。

臀部？ 臀部というのは、つまりお尻って事だ。

私の 天宮柘榴のお尻。お、お尻……が、なななな撫でられている。

(ふ、ふざけ……やがって……)

顔に熱を持っているのがわかる。なのに三桜の胸はもっと熱い。

荒い吐息はそこでぐもり、息苦しさに頭がぼんやりしてきた……。

肩が強張ってされるがまだ。彼女のタンクトップを握り締めるので精一杯なのが悔しい。

視界を奪われると妙に他の感覚が研ぎ澄まされる。気にもしていなかったのに雨が戸を叩く音が聞こえ、外の雨が激しさを増している事に気付く。懸命に取り込む空気には三桜の香りが混じっている。少し甘い香りだ。

「柘榴はあまりこういう事に慣れていないんだな」

「や、め……」

スカートの中に手を入れられ、最後の布を侵略

「やー」

「おっと」

されそうになったところで、三桜の手は止まった。

「箱入り娘ってところかい？ 可愛いね」

「うっ……」

屈辱だ。

もはや呻き声しか出ない。

「じゃあ改めて言うからな。頼みたいことは、聖歌の件だ」

「もっ……？」

発した言葉すら、でかい胸に埋まった。

苦しさが増し、私は助けを求めるように彼女の背に腕を回す。

「矢神聖歌を 尾行して欲しい」

なんだって？

ここで三桜は私の頭を抱えていた腕の力を緩めた。

「ぶはっ」

顔を上げると当然ながら至近距離に三桜の顔があった。

「尾行？ あたしが？ どうして」

と、ここで三桜の片手がまだ私のお尻に触れている事に気付き、それを引きはがす。

「どうして聖歌を？」

……疑問と興味が先行しているために質問を優先しているが、私と三桜は抱き合ったままの状態だ。
まあいい。それよりも三桜の発言が問題だ。

「柘榴。貴様と私様は六月、聖歌に出会ったな。そこで彼女はなんと言っていたか、覚えているか？」

「と、言われても……」
「妹の墓参りに行っていた。と、そう言っていたよな」

ああ。言っていた。

私は素直に首肯する。と、ぶよん、と顔が弾力に跳ね返される。これ腹立つわ。

「どうしてあの日に行ったのかも、聖歌は言っていたよな」

「うん。あの日はちょうど、妹の命日だって」

「命日だから墓参りに行った。命日ってのは、一年に一度だよな」
「そうよ」

すん、と一度鼻に空気を通した彼女は、自分の額を私の額に当てて 囁いた。

「……聖歌から、墓土の臭いがした」

はかつちの……におい？

私は聖歌の近くでそんなにおいを感じた事はない。
むしろ香水も化粧もほとんど使わない彼女自身は、石鹸が混じった清潔な香りを纏っている。

そんな彼女と、墓の土など、どうやっても結び付かないだろう。

「いつ嗅いだの？」

「ずっとだ」

「……ずっと？」

「そう、ずっと。出会った日から、今日 さっきまで。最初は妹の墓参りへ行っていたと説明されたから納得していた。けど、いくら日を経ても、まるで染み付いているかのように聖歌は墓土の臭いを連れている」

「さっきの雨を予知したように、あなたの異常に敏感な嗅覚がそう感じたの？」

「まあね。私様はこれでも純血一族の人間。どこに私様の顔を知るやつが居るかわからない。だからあまり尾行には向かないんだ」

そうか。なるほど。

この三桜も、一応は矢神聖歌を疑って過ごしていたんだ。

私よりも確信性に富んだ理由と、彼女なりのアプローチで、聖歌の怪しい部分を明確にしたのだ。

疑いつつも怪しい部分など見つけられなかった私とは大違いだな。

「わかった。三桜、あなたの言う通りちょっと聖歌の後を尾けてみるよ」

「うん、頼む。聖歌はいつも《きのえと》駅で路面電車に乗り、隣の《ひのえと》駅で降りて買い物をする筈だ。商店街があるからね」

ええと。並折の地理は、たしか明朗に教えてもらったぞ。

此処が《きのえと》だから、路面電車が次に停車するのは、その商店街があるとかいう《ひのえと》で、その次が 墓地のある《つちのえと》だ。

よし。予習は大丈夫だ。

約一ヶ月間、ほとんど引きこもっていたから路面電車に乗るのも初めてだ。

ちなみに引きこもっていたのは、明朗の忠告があったからだ。き

のえと駅へは定期的に通っている。あそこで鎖黒トザクロを失ったのだ。手掛かりとなる場所はあの駅しかない。

「早速、聖歌の後を追うわ」

「ん……む」

私が頼みごとを承諾したというのに、何故だか三桜は浮かない顔だ。

「私様としては、この続きをしたいところだけど」

そう言いながら、私のお尻を再び触り出した。

「続きがあるの？」

「うわー初々しいなあ可愛いなあ。私様は恋心を抱きそつだ」

変態の言動にだんだん慣れてきた自分が嫌だ。

「じゃあ柘榴、私様の部屋へ うごお！」

ボディブローを打ち込んだ。

「早く聖歌を追いかけないといけないんだから。あんたが言い出したことのように」

「そ、そうだったね……」

「いってきまーす」

「いってらっしやい。傘を持っていくんだぞ」

私は愛想笑いとわかる愛想笑いを顔に張り付け、三桜に手を振った。

羽田立荘に常備されている番傘を開き、勢いを増す雨のなかを出掛けて行った天宮柘榴。

ウェーブがかかったセミロングの髪とスカートを揺らすその後ろ姿を見送った守野三桜は、玄関からロビーへと戻った。

三桜の目に先程まで読まれていた新聞が映る。

それを手に取ると、おもむろに天気図なんかを目の前に広げた。

ここで柘榴と違って愛想笑いだとわからぬよう顔に張り付けていた愛想笑いを剥がした彼女は、「シィ」と鋭い吐息を噛み合わせた歯の隙間に走らせる。

「……この雨天。ただの雨じゃないな」

彼女は渋い顔で、定位置である畳敷きのスペースにあぐらをかく。

(響との合流予定日から、かなり経ってしまっている。合図の狼煙は依然として上がらない。そろそろ織神楽家と、御上から催促の手紙が寄越されそうだ)

三桜は与えられた情報の一部を思い出していた。

織神楽響。

彼は純血一族織神楽家の当主として、今年の五月、家系最重要任務を遂行すべく関西から関東へ出向いていた。無論、彼一人ではなく多くの部下を引き連れてだ。

毒爪の織神楽。

そう呼ばれる彼ら在必死で追い求めた人間がそこに居たからだ。

その人間は、《解毒》の爪を持つ者だった。

（解毒爪の能力者。幼い子だったと聞いている。なんでも母親と二人で織神楽を抜けたとか）

純血一族では身内同士で結婚し、子孫を増やすという鉄の掟が存在する。

その掟を破った母親は、一般人の男性と結婚し、娘と共に暮らしていた。

無論、それは御法度である。

結果的に涼子すずこという名の母親は、夫ともども織神楽家によって殺害された。

残ったのは解毒爪を持つ、目的の娘だけ。

しかし、

（ふふ）

あろうことか織神楽家は少女の回収に失敗したのだ。

（同じ当主として 御上の式神として、響の無様さは恥ずかしい
つたらないね。拳句、この私様がズタボロにされた響の撤退援助
は）

織神楽家は十分な戦力を準備して任務に赴いた筈だ。

それが結果を見てみれば 当主の響は重傷を負わされ、しかも
追っ手まで付けられて命からがら逃げ帰る途中。部下達はすでに本
家へと帰還してしまった。

（何があった？ 傷を負ってから部下を先に帰還させるわけがない
よな。あの馬鹿、どうせ慢心に苛まれ予期しない事態に遭遇したん
だろっ）

失敗した原因。織神楽響という純血一族屈指の猛者が重傷を負わされた事由。それは本人に問うしかない。

帰還した部下からの情報では、死使十三魔の名が挙がっていた。

（序列入りした奴と交戦した、と考えるのが妥当だろうねえ。新参の式神という雑魚の分際でいきがるからだ。この分だと織神楽家が喰われるのも時間の問題だな。果たして腹を満たすのは、日向か昏黒坂か九条か、はたまた私様達　守野か）

舌なめずりをした彼女だったが、ガラス戸を叩く雨の音が気になったのか、そちらへ顔を向けて目を細めた。

（それにしても　まるで抑圧された感情に、圧迫された涙のように）

まだまだこの雨は勢いを増すだろう。

三桜の鼻は、そう感じ取る。

（こんな降りかたをするこの天気は一体。確かに水を操る厄介な追っ手を付けられているとは聞いているがニオイが違う。呪詛を感じない。殺意や執念もない。見たまんまだ）

グルル、と三桜の喉が鳴った。

（響の奴　もう一つ、厄介なもんを引き連れてきたんじゃあるまいな）

PUNICA【あつたかい雨の降る夜】 3

改めて主張するが私は他人を完全には信用しない。

番姉さんであろうと、だ。

だから当然ながら三桜を信じきっているわけでもなく、その言動ひとつひとつに疑いを持っている。

聖歌が墓土の臭いを纏っているから尾行しろと三桜は言った。それが真実かどうかはこれから確かめればよいことなのだが、私が尾行する必要はないのだ。

三桜は、自分が純血一族の人間だからあまり出歩かない方が得策だという理由で私に行かせた。そりゃあ三桜の顔を知る者に遭遇したら面倒になるだろうとは思う。

しかし三桜はそこまで迂闊な女だろうか？

実のところ彼女が純血一族であるという事を理解しつつも実際の目で純血一族たる姿を見ていないわけだが、それは置いておくとして。純血一族のような裏世界を跋扈する人間が、尾行もまともにできないとは思えない。

守野三桜という女が守野家の中でどんな地位に就いており、どれほどの実力を備えているかは知らない。それを踏まえても尾行くらいはできそうなものだ。

ようするに三桜は私に行かせたい理由があると、私は推察している。

私が外出したことで羽田立荘には三桜が一人だけ残ることになる。彼女は羽田立荘の中で何かをしようとしている。そんな予想も、大いに有り得るのだ。

矢神聖歌と守野三桜。

どちらも何かを腹に秘めている。その間で私が浮遊している状態だ。

なぜなら私は今のところ二人の事情に興味がないからだ。二人が

各々なにかを企んでいたとして、私に何か影響があるとは思えない。しかしながら三桜の方は純血一族の事情だろうと予測できるが、聖歌の方は全く以て予測できない。どちらかというところ、私に影響を及ぼしかねない奇妙な綻びを出した聖歌の方が気になる。三桜には純血一族としての目的があるのに対し、聖歌は並折の住人であるということしかわからないのだ。

いとも容易く羽田立荘を私達に提供した彼女。そんな親切な人が、並折に居るか？ そう疑いを持っていた時に現れた一つの綻び。だから私は素直に三桜の言葉に従った。

そして今 矢神聖歌はきのえと駅へ向かって歩いており、私はその後ろで気付かれぬよう距離を置いて歩いていた。

赤い番傘は大きく、若干目立つ。激しい雨で音と視界と気配は紛らわせられるが、用心するべきだろう。

(……歩行速度が遅い)

私は六月に聖歌に先導されて初めて羽田立へ向かった際、彼女の後ろと隣を歩いた。彼女の歩行速度は記憶している。

(尾行し辛い。いつでも後方を振り返られる速度だ)

案の定、聖歌は道を曲がる際に高確率で後方に視線を送ってきた。後方だけではない。度々周囲を見回している。

意識的ではなく不安感に因る無意識の挙動だろう。ただ買い物へ行くだけの人間がする挙動ではない。

(これは、クロかな)

きのえと駅に着くと、彼女は慣れた足取りできっぷ売場へ赴き、

きつぷを購入。

ここで問題が発生した。

きのえと駅は多くの路線が停車する駅だが、それほど大きな駅でもない。だから路面電車の発券機は二台しか設置されていない。聖歌は電車を待つ間、改札口へ入らずにそのすぐ近くに位置取ってしまったのだ。

これでは私がきつぷを買えない。

こういう時は改札口に顔でも出して駅員から直接購入する方法もあるが、残念ながらきつぷ売り場は改札口のすぐ隣。聖歌の視界内にある。

きつぷを買っての乗車は無理か。

いや待て。そもそも並折を走る路面電車は一両だ。そこにばれることなく聖歌と同乗できるわけがない。

私はタクシー乗り場へ向かった。

ひのえと駅に先回りすればよいだけの話じゃないか。

羽田立荘の玄関に鍵を掛けた守野三桜は、矢神聖歌の部屋に居た。箏箏と化粧台、押し入れの中には畳んだ布団があるだけ。移り住んで一ヶ月とはいえ、飾らない質素な部屋だった。

三桜は衣服の散らばった自分の部屋と比べて苦笑する。

その中へ足を踏み入れ、まずは部屋の中心に立つ。

周囲を見回す彼女の視力は繊維と繊維の隙間ですら確実に認識できるほどのものだ。

繊維　そう。守野三桜は、天宮柘榴に教えた墓土の臭いとは別

に、もう一つ矢神聖歌を怪しむ点を見つけていた。

通常生活を送る上で繊維を認識したところで特に気にするものではない。しかし日常的にそういったものをも視認できてしまう三桜は、小さな奇異を容易に見つけてしまう。

その奇異もまた、やはり矢神聖歌の身体に見られたものだった。

それは、

「あつた。バイオレット……モノフィラメント。やっぱり医療用だったか」

化粧台の引き出しから三桜が手に取ったものは、医療用の密封されたパッケージだった。

モノフィラメント。それは手術の際に縫合用として用いられる糸である。織物や衣類、テニスラケットのガットまで様々な用途に使われるものだ。

三桜はこれの切れた一本を、聖歌の衣服に見つけた。見つけたとしても怪しむ類の糸ではない。しかし三桜は、それがすぐに医療用縫合糸だと気付いた。

バイオレット。糸の色である。縫合の際に視認しやすくするため、大抵は色の付いた縫合糸を用いる。

そして糸を構成する芯糸と側糸。その中に非吸収系のナイロンが用いられている事まで、感触と視覚だけで気付いた。

ただしそれだけではまだ疑うまでに至らない。

決め手となったのは、拾った糸の部分。三桜が拾った糸は単純にちぎれ落ちたもので、いわゆる三重結びという結び目があったのだ。モノフィラメントは拡張力はあるが、結節保持力に不安がある。

外科ではそういった合成糸、特にナイロン糸を縫合糸に用いる際は結節の緩みを防ぐ為に三重で結ぶのだ。

そこで三桜は注意深く聖歌を観察し続けた。

するとやはり聖歌が度々モノフィラメントの欠片を衣服のどこか

に付け、しかも目を追う毎にその頻度が増していることに気付いた。

三桜は少し前に、一度さりげなく聖歌に「外科のある病院はどこか」と尋ねてみたことがある。

病院の場所を教える返答はあったものの、「私も並折に来てからは医者にかかったことはありませんので」などという言葉も引き出した。

更には一緒に風呂に入ろうと誘ってみたこともある。

これは拒否され、天宮柘榴から冷たい視線を向けられた。「広い風呂なのだからいいじゃないか」と、ごねたのを三桜はよく覚えていた。

そういった不可解な事情が重なり、ついに今日、聖歌の部屋を調べてみようなどと思いついたわけである。

（縫合が必要なほどの怪我をしたとは思っていなかったが……これは……）

引き出しを開けたまま、三桜は固まっていた。

一つの引き出しいっぱい医療用縫合系のパッケージが入っているとは、さすがに思わなかったからだ。

「聖歌。お前は一体なんなんだ……？ 傷を負っていたとしても縫合系なんていずれ不要になるものじゃないか」

首を傾げて引き出しを閉じた三桜は、台の上に置いてあった写真立てに目を向けた。

置いてはあるが、それは伏せられていて写真が見えない。

三桜は手に取ってみた。

「ふむ。だいぶ前に撮ったものだな。持っている荷物からして家族旅行の写真かねえ。父親と、母親と。これが聖歌だね。それにしても随分古いな」

写真は駅前で撮られたものだった。三人とも笑顔で身を寄せている。

駅名は 『ひのえと駅』とあった。三人の背景には一体の像も立っている。これはきのえと駅前でも見た顔の無い子供の像とまったく同じものだ。

きのえと駅だけでなく他の駅前にも同じものが建てられているのだろう。

どうやら聖歌は昔、並折を訪れたことがあるようだ。

「ま、あいつの家庭に興味はないや。さて次は倉庫でも漁ってみるかね」

写真を置き、部屋から去ろうとしたところで 三桜は足を止めて少し舌で唇を舐め、「うん？」と声を漏らした。

「聖歌。たしか妹が居たはずだよな？」

ひのえと駅に路面電車が到着しても、聖歌は降りてこなかった。

ひのえとは駅の正面にすぐ商店街の入り口があり、私は駅から出

てくる乗客が見える場所で傘をさして立っていた。

出てくる人は一人残らず確認したから、間違いない。聖歌はひのえとで降りなかったのだ。

ここで降りなかったのなら、やはりつちのえとまで乗っていったという事だろうか。乗車賃はどこまで行こうと一律同額なので、聖歌がきつぷを買った時点ではどこへ行くのかわからなかったし。

しかもこういう時に限ってタクシーが無い！

すぐにつちのえと駅へ先回りしなければならぬというのに！

並折の路面電車は速度が思ったよりゆっくりなので急いでタクシーを捕まえれば間に合うと思う。私を乗せてここまで来たタクシーの運転手はひどく無愛想で、少し待っていてくれと言つ間もなくさつさと清算して私を降ろして行つちまいやがった。万死に値する。

このままひのえと駅に張り付いて、次の電車も待つて聖歌が降りてこなければ、それはそれで彼女がひのえと駅に降りなかったという事実を確かめられたわけで十分なのだが。

できれば彼女がどこへ向かったのかも確かめたい。

雨天の中じつと待ち続けたからなのか、身体が冷える。

特に脚。スカートは風通しが良すぎる……。

肩を抱きながらタクシーを捕まえられそうな場所を探していると、駅の前に気になるものを見つけた。

(カオナシの像……！ ひのえと駅にもあつたんだ)

しかしきのえと駅の物とは様子が違い、少し首を傾げる。

それでもきのえと駅で見た顔の無い子供の像が、ここでも見られた。嬉しくなつてもつと近くで見ようと移動しながら、どうして嬉しくならなければいけないのかと自分の感情に野次を飛ばした。

確かに此処は初めてくる場所だし、知人も居ないし、それどころか通行人すら見当たらないし、雨は容赦なく降つて気温をさがらせ

ている。見覚えがあるだけの像に嬉しくなるくらい陰鬱になるのも無理はないだろう。

孤独には慣れてる。こんな孤独はむしろ楽しい。

このくらいの寂しさで動揺するような私ではない。十年も私は独りだったのだ。薄暗い部屋で、眠り続ける番姉さんと鎖黒を守り続けた。あの孤独に比べたら他の孤独など些細なものだ。

私はこの並折に来て、やっと自由を得られたのだ。寝起きするのも私の意思のまま。食事だって楽しい。何もしたくないと思えば何もなくていい。

私は天宮柘榴だ。もうグレナデンではない。

長く続くとは思えないけれど、今はこの、私の意思で私が動ける状況を満喫したい。

だから私の意思で招いた孤独は、喜んで受け入れよう。

「あれ？ クロちゃんじゃないか！」

像を眺めていた私は、掛けられた声に驚いて振り向いた。

そこには透明のビニール傘を高々と掲げて手を振る明朗の姿があった。

「明朗っ？」

「奇遇だねクロちゃん！ まさかひのえとで会うなんて！」

おもわず顔が綻んでしまい、近付いてくる明朗に悟られまいと片手で覆う。

「うん、ちょっと用事があった。明朗は？」

目を泳がせながら問うと、彼は「ふふん」と口の片端を持ち上げて得意げな笑みを見せた。今日の彼は缶バッチがいくつも付いた二ツト帽を深く被っている。

「僕は結界寮の作事中。つまり任務。ミッション！」

「へーそう。どんな？」

「僕に任されたのは人探しなんだけど……。でもこれがまた大きな任務でね、危ないからひのえとの住人は屋外へ出ないように結界寮が勧告を出しているくらいなんだ」

「それは大掛かりね」

「だからクロちゃんも、早いとこ帰った方が良いよ。なにせ純血一族の当主なんて大物が潜んでいるんだ。鉢合ったりしたら一瞬で殺されちゃうよ！」

純血一族の 当主？

と、当主？

それは、つまり、あの《式神十二式》と呼ばれる奴らのことか？

「純血一族の当主だなんて……一大事じゃないの」

「そう！ だから処理しないとイケないんだ」

「つまり、殺すって事？」

「そうなるね。戦闘狂の梵マユさんは大張り切りさ」

大張り切りって、そんな馬鹿な。

以前明朗から聞いた話では、あの梵という女性はティンダロスの元戦闘員。無音の異名持ちだそうだが。

それでも無謀の域を出ない。

ティンダロスの猟犬は、純血一族と死使十三魔とでは質が異なる組織だ。

たとえばティンダロスの猟犬という暗殺組織で名を馳せていたとし

ても あの組織に呪詛能力者は居ない。奴らは道具と技術を使
する 人間なのだ。

対する純血一族は、血に呪詛を宿し超常の力に磨きをかけた
化け物。

「呪詛能力者を相手に……大丈夫なの？」

「梵さんは強いからね、きっと大丈夫だよ。それに純血一族を相手
にするのはこれが初めてじゃない。今までだって並折の調査に送ら
れた純血一族の間者を、彼女と林檎りんごさんは何人も葬っている」

対呪詛能力者戦闘には慣れていて、ということか。

いやしかし今回はそう簡単にいかないだろう。式神十二式 つ
まり当主が標的なんだろう？

式神の力を他の純血一族と一緒にするべきではない。

純血一族は、十三の家系が集まって成り立つ組織。

そして純血一族は、《統一家系》と呼ばれる一つの家系によつて
束ねられている。つまり構成としては頂点に君臨する家系の下に、
十二の家系が位置しているということだ。

各家系には当主という長が存在する。

実力主義の純血一族だ。長は年功序列で決まるわけがなく、やは
り実力。

各家系の、十二人の当主。

統一家系を守護する十二の鬼神として、彼らは《式神十二式》と
呼ばれている。

その実力は計り知れず、新進気鋭の死使十三魔が、その組織名を
そこからなぞったとも言われているほどだ。

大物も大物。本拠地であるこの国でなければほとんど縁のないよ
うな、遙か高みの存在だ。

死使十三魔の序列入りした者でさえ……太刀打ちできるかどうか

……。
それに死使十三魔は式神によって甚大な被害を被った過去だつてある。

例を挙げるなら、

私がグレナデンというコードネームで死使十三魔に居た頃。つまり序列四位、魔氷の直下部隊に在籍していた頃だ。

死使十三魔は少数精鋭の組織とはいえ、序列入りした人間には様々な者が居る。魔氷こと番姉さんのように膨大な力を備えながらもあまり活発に動けない人や、動きたがらない人、行方すら掴めないような気分屋まで。とにかく異色の性格が揃っている。

だから、手駒となる部隊を抱えている者もちらほら居るといっわけだ。

もうかれこれ七、八年前になるか。

序列十二位に《魔盾》の異名を持つ者が居た。そいつは異常なまでの面倒くさがりで、個人の部隊作って任務をさせていた。

その直下部隊が、式神に壊滅させられた事件があったのだ。しかも魔盾まで殺されてしまった。十二位の席には今は違う者が就いている。

たしかその時の相手は……純血一族、九条家の当主だったと聞いている。

死使十三魔の序列入りはヤワではない。少数精鋭と呼ばれているのだから。魔盾も一騎当千の実力者だったのだ。

それを駆逐してしまった九条家の当主　式神一人の力は死使十三魔として重要警戒対象。

「……ねえ明朗、あたしなんか口を出すことじゃないかもしれないけど。もっと慎重になるべきよ。純血一族の当主がどれほど危険なのか。そのくらいあたしだって知ってる」

油断すると、梵は命を落とすことになる。
明朗は私の言葉に素直にうなずいた。

「わかつているさ。梵さん含め結界寮は、式神と呼ばれる彼らの危険性は熟知している。だからこそ、手負いの今を逃す手はないとも言える」

「手負い……？ 手負いなのか？」

「そう。毒爪家系、織神楽。その当主にして式神十二式の一角、織神楽響！ 白毒雷^{びやくとくらい}なんて仇名で呼ばれる猛毒使いの男だ。万全の状態ならこちらも手出しを躊躇するけど、どうやらひどい傷を負った状態で並折に入り込んだらしい」

「ひどい傷って。それじゃあその、織神楽響という式神は、別に並折や結界寮を探ろうとしてしているわけじゃないのよね？ ただ逃げているだけでしょ。どうして躍起になって殺そうと」

「何を言ってるのさクロちゃん。並折を探ろうがそうでなかるうが、世界危険勢力の重要戦力だよ彼は。以前の話と今回の件は別物だよ。なにせ織神楽響は うちの結界屋さんが並折に招いてあげたのだから」

「じゃあ式神をわざと並折に？」

「そういうこと。追っ手を付けられていたらしいから、先を越される前に結界屋さんが隔離したんだ。追っ手の人には悪いけど、これも並折の堅固さを世界に知らしめる良い機会ってわけ」

『純血一族の当主を並折が仕留めた』

その事実には絶大な効果をもたらす宣伝となるだろう。

死使十三魔も一層手を出し辛くなる。

純血一族とて報復に出ようにも、未だ並折は謎に包まれた領域。

しかも式神まで仕留められたとあっては報復どころか調査派遣すら踏み止まるようになる。

並折は結界寮の　ティンダロスの領地としてこれまで以上に確固たる地盤を築いてしまおうわけだ。

織神楽響は、勢力同士の間合いを左右する、重要な立場にあるということがある。

そして結界屋が細かく情報を掴めていたように、織神楽響の負傷と逃走の報せは、既に出回っていると考えるのが妥当。

ならば各勢力は、もうなんらかの行動に出ている筈。動き方は、わかりやすい。

死使十三魔はいちはやく仕留めたいだろうし、純血一族はなんとかしてでも生還させたいだろう。ティンダロスは先述の通り並折の地盤強化。

ふうん。

読めてきたぞ。

追っ手を付けたのは死使十三魔で間違いないだろう。今は並折の結界　結界屋によって隔離されて失敗に終わりそうだが。

そして純血一族が打った手は　そう。

守野三桜だ。

あいつは、この為に並折へ送られたのだ。

ようやく三桜の目的が読めた。

守野三桜は、織神楽響を回収し　生還させる為に、この並折へやってきたのだ。

三桜のやつ、ここ最近落ち着かない様子だったのは響となかなか合流できないからだだったのか。共有する合図でもあったのだろう。

これは面白い。
実に面白い。

三桜にこの非常事態を教えてやるか、それとも黙っているかで、この重大局面が揺らぎかねないわけだ。

このまま黙っておいて織神楽響が仕留められたなら、三桜は任務失敗。こんな重要な任務なんだ。彼女はただでは済まされないだろう。

結界寮の正体ごと教えてやればすぐに彼女は羽田立荘から血相を変えて飛び出すだろうし、もしかしたら並折を血の海に変える大暴れを見せてくれるかもしれない。

勢力のいざこざなんか興味はない。知ったこつちやない。
けれど。

これは、面白いね。

「クロちゃん？」

おっと、少し顔に出てたかな。

「ま、そういうことだから。用事が急ぎじゃないなら日を改めるべきだよ。羽田立荘まで送っていいこうか？」

「御忠告ありがとう、大丈夫よ一人で帰れる。それにしても並折に入り込ませたのは結界寮なのに、見失ったの？」

「……まあ。あちらも一筋縄じゃないから。結界屋さんもひのえとで感知したのを最後に行方が掴めなくなっただらしい」

「だからひのえとに明朗が居たってことね」

「僕だけじゃないよ、結界屋さん和管理人二人以外はみんな出勤してる」

まさに総動員というわけか。

「じゃあ、僕はもう行くよ。くれぐれも寄り道なんてしてはいけないよ。結界寮の住人だって危険な人が居るんだ」

「だろうね。気を付けるよ」

「……やっぱり、送っていいこうか？」

心から気を配ってくれているのだろう。明朗はじつと澄んだ目で私を見つめて話をし続けていた。私はもう一度「大丈夫だから」と言い、明朗の肩を叩く。思ったよりがっしりとした体格だった。

渋々この場を去ろうと背を向けた彼に、私は聞きたい事があったのを思い出して「あ、ちょっと待って」と呼び止めた。

首を傾げてこちらを振り返る明朗に、私はすぐ近くにあったカオナシの像を叩いて見せる。

「この像、きのえと駅の物と違うよね。顔の無い子供と　この、子供を正面から抱こうとしている女性の像」

そう。きのえと駅は子供の像だけだったのだが、此処の像は二体居る。子供が両手を挙げて女性に抱きつこうとしている構図だ。しかも子供とは違い、女性には微笑む顔がちゃんとある。

明朗は「ああ」と片手を腰に当てて傘を回した。

「そついえばそつだね、此処　ひのえと駅の像も他の駅の像も、元々は一体の子供だけだったんだよ。でも街の住人から、なんだか寂しそうだという意見が多く出たみたいだね。随分前に女性の像が加えられたそつだよ」

「随分前って、どのくらい？」

「かれこれ四十年くらい前になるんじゃないかなあ」

女性の像もやたら古いと思っただが、そんなに昔からあったのか。カオナシの伝奇になぞって建てられたものだとしたらこの女性は不要だろうに……まあ、役所の人間も街の人間も、この像が建った由来について知らなかったということだろう。

寂しそう　ねえ。

顔の無い子供の像がどんな感情を抱いているのか、勝手に想像して勝手に蛇足を加えるとは。四十年前の人間も随分と身勝手なものだ。

「色々ありがとう明朗。いつも気に掛けてくれて、感謝してるよ」

「へへ、構わないよ！　また何か訊きたい事があつたら訊いてよ。」

クロちゃんに並折を案内してあげたいし」

「うん。願います」

「じゃ、ばいばーい、また羽田立荘に顔を出すよー！」

手を振り、雨などものともせず駆けてゆく彼の背中を、私もまた手を振りながら見つめ続けた。

彼は本当によくしてくれる。結界寮の住人の中では、戦う力を唯一持たないと言っていたけれど。でもなんとなくわかる気がする。

傍に居てくれると　って。

何を考えているのか私は。

冷静になってみるとまた顔が綻んでいるじゃないか！

（ああもう！　どういふことだこれは！）

ばんばん、と片手で頬を叩き、深呼吸。

そのままカオナシと女性の像に触れてみた。

この女性の像、一体誰なんだろう。

髪がとても長い。若干屈んでいて、髪が地面に付いてしまっそう

だ。

しかも左右に分けられた前髪。線のように細い目。ゆったりとして、飾り気のないドレス。

これではまるで、

(番姉さんみたいだ……)

よく似ている。

そう考えるとこの女性像が番姉さんにしか思えなくなった。

「でもこの像は……後から付けられた物なのよね」

カオナシの伝奇には 余計な物。

「綺麗な人だけど、あつてはならない像なのよね」

「ならば破壊すれば良い」

(つ ?)

突如として聞こえた、予期せぬ応答。

私の独り言は、独り言ではなくなった。

「な、なに？」

さすがに動揺を隠しきれず周囲を見回すが、私の近くに人影はない。それどころか私の視界内には人が完全に消えてしまっていた。

人通りは少なかったが、それでもまばらに確認できた筈だ。明朗と話す間も人が皆無ということはなかった。

それなのに、私の耳には至近距離で放っているであろう男の音が続いていた。

「不要な物、余計な物、邪魔な物、それらは総じて少数が多数の意に反して生み出した物。そういった物は排除されてしかるべきだ。ただし」

コッソ。と、私の番傘が何かに当たった。

傘をどけてみると、頭の上に足があった。

白い 脚。

白い 着物。

白い 覆面。

その男は雨に打たれながら女性像の上に座っていた。

「ただし 少数が多数に勝る場合は、その限りではない」
「誰だ！」

私は咄嗟に像から離れ、傘を投げ捨てて身構えた。
気配がなかった！

私は弱いが、気配を感じ取ることは自信がある！

これだけ人の居ない場所だ、微々たる気配でも容易に感じ取ることができた筈だ！

それなのにこいつには……気付かなかった。

只者じゃない。纏っている衣服は忍装束というやつか？

「ふむ。純血一族の者 と言つて、貴様は理解できるか？」

「な……」

最悪だ。

「できるようだな。良し。某は純血一族の織神楽家で当主を務める者。名を」

最悪だ。
最悪だ最悪だ最悪だ。

「織神楽響という」

（し、式神……！ 本物……！）

「娘。貴様に選択肢を与えてやるう」

「せ、選択肢？」

膝が震え、男を見上げる首の筋肉が痙攣した。

織神楽響。彼の両手は呪文の書かれた布で巻かれ、その片方は形が違う。おそらく片手を失っているのだろう。

その呪文布の隙間から何かが漏れ出ているのが視認できる。緑色の湯気のような 呪詛によるものか。

たしか織神楽家の能力は 毒爪。

ならばあの漏れ出ているモノは、呪詛毒か。

「窒息死。失血死。溶解死。感染症及び寄生虫症。呼吸器結核。悪性新生物。老衰以外のありとあらゆる死因で殺してやるう。さあ、選択肢は多い。選べ」

容赦がない。鉢合ったら希望なんて抱く間もないのは本当だ。

さつさと私を殺してどこかへ去るつもりか。

いや 違う。

純血一族なら声も掛けずに殺す筈だ。

それなのに、私に声を掛けた上に名乗った。

つまり彼は、少なくとも私に何かを期待しているということだ。

「も、守野」

「なに？」

「守野三桜という女性を……知っています」

私は弱い存在だ。強い存在に狙われた時、媚びへつらうことで難を逃れようとする。

女である事を利用できるものなら利用しただろうし、身代わりになるものがあつたのなら迷うことなくその陰に隠れただろう。

今回だって同じことだ。

守野三桜が織神楽響を探していることを知っている私は、同時に織神楽響がこの並折に於いて協力者を得なければならぬ状況だということも知っている。

よくしてくれる明朗の 結界寮の面々が、この二人の合流を良しとしないことも、わかっている。

だけど弱者が強者の前に餌食として晒された時、弱者が助かるには 強者の期待に応えるしかないのだ。

三桜は並折へ来た当初、私に言った。『私様の足手纏いになるな』と。

つまり三桜もまた強者として弱者のこういった特性を知っているから、ああ言ったのだと思う。

事実、私は誰かの足手纏いになることでしか自分の身を守れない。

私は貴方を助けに来た同じ純血一族の女を知っています。情報を持っています。だから殺さないでください。

そうやって三桜をダシに使い、結界寮側の足を引っ張り、織神楽響の脅威から逃れようとしているのだ。

「なんだと貴様」

思った通り、織神楽響は動揺を見せた。

しかし……その動揺の仕方は、私の予想していたものとは大きく

違った。

彼は片手で額をおさえ、呻きながら怒りに肩を震わせたのだ。

「ふざけおって……守野三桜だと……？」

彼は女性像から飛び降り、私にずいと近寄ってきた。

ぎらぎらとした鋭い眼光は近付けば近付くほど、私を束縛の呪いに引きずり込む。

そのまま恐ろしい怒りを含んだ視線で私を見下ろし、毒の溢れる手で私の肩を掴んでくる。

ジャツ。

肩には掴まれた感覚ではなく、むしろ布が擦れるような感触があった。

次に訪れたのは、ひやっと強く冷えた感覚。もちろん氷を当てられたわけではない。この感覚は、これから訪れる最悪の未来を知らせるものだ。

私の表情を作る筋肉は、きつとこの溢れだす恐怖に追い付いていないだろう。

「ひ」

擦るように空気を吸い込み、身体が強張り耐える準備を行う。けれどそれらは全て中途半端で、心の準備とか身体の準備とか、そんなもの待ってはくれなかった。

「いいっ！」

目を見開いた私に襲いかかったのは、

凄まじい 激痛だった。

服の肩が一瞬で焼け消え、私の皮膚が異臭と共に溶けていくのがわかる。

恐怖に理性を削がれ、痛み悲鳴を上げた。

「い、やあああああああああ！」

肺を一気に潰し、押しだされた空気を全て叫び声に変えた。

甲高く荒んだ私の悲鳴。

とにかく意識を散らしたくて腕を抱いたまま身体をくの字に折り曲げ、地に頭や顔を擦りつけて叫ぶ。

「痛い痛い痛いいいいいいいいいいいい！」

「答える。守野三桜が、並折に居るのだな？」

「ひい、ひいひい、ぎやあああああああ！」

「答える！」

「います……います……います……う……う……う……」

「チィ。神経毒の調節を誤ったか？」

舌を打ちながら響はすぐに手を放した。

私は患部を手で押さえ、その場にうずくまって嗚咽を漏らした。

「ヒュー、ヒュー」と自分の掠れた呼吸が雨水の溜まった地面を何度も這う。

触られたのは肩だけだというのに全身の皮を剥がれるような痛さに襲われた。見れば肩は赤黒い肉が剥き出しになっており、じゅくじゅくと体液が滲んでいる。

よく見ると骨まで確認できてしまいそうで、それを見るのは怖くて目を背けた。

「ふ……うう……」

痛い。ずっと痛いのが続いておさまらない。痛いよう。痛い、痛い、痛い。涙が止まらない。

座り込んだ私の下腹部と脚が暖かい。ちくしょう、漏らしちゃってる。毛穴は開き脂汗が滝のように流れ雨に流され、粘つく唾液を垂れ流した上に膀胱まで空っぽにしている。

最悪だ。聖歌を追いかけてこんな目に遭うなんて。

「つく、うう……ひっ、く……」

下着が気持ち悪い。というかもはや全身水浸しだ。もういやだ。恥ずかしくて消えてしまいたい。

「おい」

「ふええ……」

「おい貴様」

怒鳴り声に怯えて肩を震わせながら、男を見上げる。

彼は呪文布をきつく巻き直しているところだった。

「ただの溶解液だ。浸食、感染する類の毒は出しておらぬ。喚くな、立て」

「うう……腕が……痛いよう」

「馬鹿者が。皮膚が少し焼けた程度だ。痛みは神経毒に因るもの。そう酷う無いわ」

響が私の怪我した腕を乱暴に掴み、「ぎゃっ」と声が漏れた。

しかし彼は緩めもせず力づくで立たせ、内股でふらつく私を片腕で抱いた。

「此处ではあの連中に見つかる。場所を変えねばならん」

「み、三桜に会わないの……？」
「場所も知っているのか？」

私は感覚が麻痺してきた腕を撫で、涙を拭いながら頷く。
すると彼は私の頭を撫でてきた。信じられなかった。

こんなに酷い目に遭わされたというのに、あの式神が私の 木
つ端元雑魚戦闘員の頭を撫でたという事に感動している自分が居て、
なんだか納得がいかなかった。

だって番姉さんは、一度もそんなことしてくれなかったから。偉
い人は、そんなことしないと思っていたんだ。

「ふん。奴に頼るのは……癩だが……案内しろ」

響は私を肩に担いたので、慌てて片手でスカートをおさえる。

そのまま彼はぐん、と脚を曲げて踏ん張り 跳躍した。

凄まじい身体能力。その筋力はもはや人間のものとは思えなく、
一個体を兵器として認識せざるを得ない。これも呪詛で強化された
ものだろう。

しかし呪詛……果たしてそれは人間を超常の存在に昇華させるだ
けの都合の良いものなのだろうか。そうは思えない。

呪詛とはこの世に未練を抱きながら死んだ者の残滓だ。そのほと
んどが憎悪や怨恨に塗れている忌まわしいもの。なんらかの代償を
伴うに違いない。

同じ呪詛能力者の集まりである死使十三魔でも、呪詛を宿してい
るのは序列入りした者くらいだ。私はその効果と影響を知ること
はない。

どれだけ時を経ようとも全く変化を見せず美しい姿であり続ける
番姉さんを見れば、呪詛を宿するという行為がどれほど常軌を逸して
いるのかくらいわかる。

彼女もまた、相応の代償に苦しんで生きているのだから。

織神楽響は女性像の頭に片足を乗せてもう一段跳躍。

ひのえと駅の屋根に乗り、また跳躍。

まるで身軽な猫のように、猫よりも軽々と、様々な建物の屋根を跳躍して進む。

「もう痛みは失せたらう」

「……まだ、痛い」

彼は呆れるように舌を打ち、溜息を吐いた。

「軟弱な。まあいい。貴様、天宮柘榴といったな。あの守野の三桜嬢が貴様のような一般人を傍に置くとは、いささか信じられぬが。同時に興味深くもある」

「三桜は……」

「ん？」

「ただの、変態よ……」

「……」

響は一瞬だけ言葉を失い、直後 「ふっ」と覆面の下で息をこぼした。

「変態、か。相違なし。某も同意だ」

「……………」

「彼奴（きやつ）のことだ、貴様もあの野生の獣じみた言動に困惑させられたらうて」

矢神聖歌を尾行しると頼まれて出掛けた雨の日。

私は、とんでもない劇物を連れ帰ることになってしまった。

PUNICA【あつたかい雨の降る夜】4

食べ終わった五本目のアイスキャンデーの棒を床に落とし、守野三桜は片眉を上げた。

『江本正志』

紐で括られた紙束の一枚目にはボールペンで名前だけが書かれている。

羽田立荘を使う事になった際、裏庭の倉庫は矢神聖歌が片付けと掃除を担当していたので古びた倉庫の中はあまり埃っぽさがなかった。

聖歌の自室を後にした三桜は、冷凍庫からアイスキャンデーを調達したついでにまだ見たことのなかった倉庫へ足を運び、そこでこの紙束を見つけたのだった。

紙束はいくつもあり、段ボールの中にまとめて詰め込まれていた。しかしこの 江本正志と記された紙束だけは、最近閲覧されたのだろうか閉じられたダンボールの上に無造作に置かれていたのだ。

(江本正志。 えもと……まさし。 えもと?)

引っ掛かる。

三桜の記憶は、その名前が初見ではないと彼女に告げている。

どうにも名前を見ただけでは思い出せず、彼女は束になった紙に記憶を呼び覚ますきっかけを期待してめぐり始めた。

記載されているのは、この男が企業経営者であったということ。

既婚者であり娘が居たということ。二年前から出張で家に戻っておらず、別の女性とその連れ子と同居していたこと。そして 今年の五月に死亡したということ。それだけだった。

特に変わった経歴ではない。彼の死因が不明という点は気になるが、企業経営者が浮気していましたよ、という心底どうでも良い情報だった。他にもどこで調べたのか自宅住所やら携帯電話の番号やらの個人情報がかかれていてだけで、三桜の満足する内容ではなかった。

この紙束は個人情報が記されているだけのものなのか。
ひどくつまらなそうにもう一枚紙をめくり、
そこで三桜は眉をひそめた。

『提供報酬』

そんな題を付けた、奇妙な表。

そこには謎の文字が綺麗にずらりと書かれており、それぞれ隣に金額が付けられている。どうやらこの紙の記載者が江本正志に支払った金額だと思われる。

いったい何を売買していたというのか。

「なんだこりゃ？ B S k u) m d) 、 B C l a (d) 、 B
S c a (d) 、 B S t e) m (「 ? 」

取引材料はすべて隠語で記されており三桜にはとても知り得ない。

(何かの頭文字か?)

《B 》というジャンルだけでもかなりの量だ。この表が分厚い紙束のほとんどを埋め尽くしている。それらすべてを合計したと思われる数値に さすがの三桜も目が回りそうになった。

「こ、こんな額の金が動いたのか？ 江本正志とかいう男の為に？」

紙束はまだ終わっておらず数枚を残している。
それは赤い文字で書かれていた。

『当方の検査により提供材料と希望材料の不一致を確認』

『取引は一応成立とする。しかし違反により提供報酬を大幅に削減』
『見本として送った矢神聖歌を至急返却するように』

『二〇〇六年四月、返却を確認。送金完了。提供者控えを送付』

小さく『買取側控え』と書かれ、紙の端には『pygma』というサインが施されている。買取側の名前だろう。

記載内容からすると、どうやら何かの提供者である江本正志は違反を犯したらしい。

しかし減額されながらも取引は成立していた。

(最後に閉じてある数枚は手記か?)

これだけは手書きで、まるで日記のように綴られている。

『五月、提供者の死亡により提供者控えが返送されてきた。他に受け取り手がないだろうから必然だ。とにかくこちらは送金済みなので、契約通り直接提供材料を回収してきた。モノがモノだけに結界寮の結界屋がうるさかったが、管理人の錫杖梵しやくじやうぼんに話をつけてあったので特に揉めることもなかった』

『材料の状態は まあ次第点といったところか。多少の損傷は想定内だ。やはり一番欲しかった物ではないのが悔やまれる。これでは今までと変わらない。そこで私は、かねてより実現させようと考えていた試みに手を出すことを決めた。今回の作品は実験も兼ねたものになる。非常に楽しみだ』

『鎖黒トサクロの情報もあつたので、できればそちらを使いたかつたのだが回収できる目途が立っていない上にあまり時間が経つとさすがに材料の腐敗が進行してしまう。今回は豊房トヨフサを使うことにした。鎖黒はいつか手に入れたいので機会を待とう』

『豊房をどこに仕舞つたのかは覚えていたので、さっそく取り出してきた。随分長い間放置していたから苦労した。羽田立荘の倉庫がかなり散らかってしまった。そのうち片付けにでも行こうと思う』

『製作にあたりあらゆる解毒方法を準備しておいたのだが、どうやら必要ないようだ。どちらも死因は毒ではなかった』

『せっかく私と似た材料なので普段ならできない方法を試みる。二体作つても良いのだが、母親の方は使用不能な部分が多く、今回は豊房の実験もあるという理由で無理な使用を避ける。なるべくなら珪素を用いたくない。それにしても江本正志にはもっと品質に気を遣つて欲しかった。娘の方も各所に骨折や内臓の破裂が見られる。交通事故死だろう』

『作品は大方仕上がった。この時点でやはり人格が形成され自我を持った。少し気になる点はあるが問題はないだろう。相変わらず私の製作速度は神業の域に達していると言つても過言ではない。先代でもここまで速くはなかった。最後の仕上げとして点睛に豊房を用いる』

『とても笑える結果だ。それはさておき、私は完成した作品をどれも自分の傍で愛で続けたいという思いが強く、いつもこの時が苦しいものだ。結界寮に置いておくかと思つたが、既に置いてある作品があり錫杖梵あじむつじょうに断られた。次からは藍澤林檎あいなわかしんに交渉を持ちかけよう。使われていない羽田立荘に置くか？ いや、それでは作品が可哀想

だ。また狭くなってしまうが工房に置こう。それがいい』

『名前は、ベースとなった娘のものを使用する』

『今回も素晴らしい作品が出来上がった』

『六月二十日。お誕生日おめでとう、江本佐々奈』

……手記はここで終わっている。

《pygma》という者もしくは業者が、江本正志と取引して何をしていたのが、手記によって理解できた。そして《pygma》はこの羽田立荘を所有している、もしくはそういった権利を持っているということも明らかだ。さらに矢神聖歌はこのことについて知っている。

知っているどころか紙束に彼女の名前が載っていた。《見本》などという奇妙な呼称で。

《pygma》が《製作》している《作品》。

その《見本》として挙げられた矢神聖歌。

作品というのは。

三桜は顔をしかめて想像を中断。

(待てよ……)

紙束を置いた三桜は、その場で顎に手を当てた。

(思い出したぞ。江本……)

「織神楽涼子と、その娘 解毒爪を持つ織神楽音々子^{ねねこ}。その二人

が織神楽家から抜けてしばらく名乗っていた苗字だ。脱走したのは二年前。時期も一致する。江本正志と同居していた女と娘は……涼子と音々子のことか！そして江本正志は今年の五月に、織神楽家によって抹殺された！そしてこの《pygma》と取引していたのは……本妻と娘の……死体か？」

まずいまずい。これはまずいぞ。

三桜の脳内はその言葉をひたすら反芻し、「やられた」と齒ざしり交じりに漏らした。

（響の馬鹿野郎め……殺害対象の身辺調査を怠りやがったなあ！この《pygma》って奴が個人か団体かは知らんし、やっていることにも興味なぞ無い。だが、問題なのはこいつが並折の人間ってことだ！

こいつは手記に解毒の準備をしていたと書いた。織神楽家が毒を扱うと知っていて、しかも江本正志を織神楽家が狙っていることまで並折に居ながら把握していたんだ。それで本妻と娘も織神楽家にまとめて毒殺される可能性があると考えた。だからあらかじめ解毒の準備をしていたってわけかよ。

もしこいつが織神楽家の任務事情をも把握していたなら、どこから情報が漏れている可能性がある。それは後で考える。つまりそこまで把握しているなら、当然ながら響が傷を負って逃走していることも知っているはずだ。そんな機密性を欠き穴が開いた駄々漏れの情報で並折に入った私様と響は 畏にかかった事になる！人為的に並折へ誘い込まれた可能性が高いぞ！九条家の諜報部は能無ししか居ないのか！）

そして、

「矢神聖歌……あのアマもグルだ畜生がああああああああああ

純血一族　　守野家が当主。

獣人　　守野三桜。

彼女の獵刻が、始まる。

織神樂響と私は、私の案内で羽田立荘に到着した。

彼は人間が通るような道ではなく林の木々を縫うように駆けたので、頭には木の葉や枝がくっついていて取り払うのに苦労した。

彼に抱えられてわかったことが一つある。

先程までは動揺して観察眼がまったくと言っていいほど働かなかったが、よくよく彼を至近距離で見ると　彼の覆面は赤く染みっていた。

吐血によるものだろう。雨でも流されなくらい染み付いている。こんな怪物が片手を失い、吐血するほど追い込まれた事情が想像できなかった。

とにかく屋内へ入ろう。このままでは身体が冷え切ってしまう。

玄関の戸に手を掛けた私は　それが開かない事に困惑した。

「あ、あれ？」

がたがたと乱暴に横へ動かそうとしても開かない。鍵をかけられているのだ。

私は激しく戸を叩いた。

「三桜！　ねえ三桜！　鍵なんてかけないでよ！　聞いてるの？
三桜ってば！」

待っても返事はない。

戸のスモークガラス越しに中の様子を窺うも、暗くてわからない。ロビーの明かりも消されている。

三桜の奴、外出したのか？

いや鍵は聖歌しか持っていないから、外側から鍵をかけることは三桜にはできない。

なんだ？　様子が　羽田立荘を包む気配がおかしい。

それを私よりもはっきりと感じ取ったのは、織神楽響だった。

「……殺気だな。だが三桜嬢が本当に此処に居たとして、争いが起こればこの建物が原形を保っていられるわけもなし。殺気だけを残して三桜嬢は消えたのか？」

殺気。宿に残っていたのは三桜だけだ。誰かと争ったわけではないとしたら、この殺気は三桜のものか。

……やはり三桜は宿に残ってなにかを調べていたのか？　その結果、殺気を撒き散らして外へ出るに至ったということか？

それは屋内に入ってから考えよう。

私は響を連れてどこかから入れないものかと建物の周囲を巡り裏庭で入口の大破した倉庫を目にした時は言葉を失った。

「なによこれ」

「……ふむ。あそこの勝手口が開いているな」

倉庫の件は一旦置いておこう。今は見なかったことにしよう。

三桜が開けっ放しにしたと思われる勝手口から羽田立荘の中へと入った私は、まずは織神楽響を浴室へ案内した。

私も彼もずぶ濡れの状態だし、彼は何日も汚れた状態で過ごしていただろうこともわかる。

冷静冷酷、無情無表情、致死毒の塊。そして純血一族の当主という身分である彼が、私なりの気遣いに対してどんな反応を見せるかと戦々恐々としていたが、意外にも彼はあっさりと私の言葉に従った。

そういえば一応いつでも使えるようにはしてあるが、羽田立荘の男性浴場を使うのは彼が初めてになるか。明朗もまだ泊まっていたことはないし。

男性浴場の入り口と女性浴場の入り口の前で、響と私が立っているこの光景は、なんとというか……非常にシユールな図だ。

「えっと、これ……タオル。着替えは此処の浴衣が用意されているからそれを。脱いだ衣服は……問題が無ければあたしが洗うので籠に入れたままにしておいてください。あ、あと洗剤は浴場内にあるので」

「……」

彼は無言でタオルを受け取ると、さっさと中へ入って行ってしまった。

よ、ようやく。ここでようやくあの怪物から解放された……怖いし痛い目にも遭わされたけど、三桜との仲介役として殺されずに済んだ。

安堵の深い溜息が自然にこぼれ、タオルを抱えた私も女性浴場の脱衣場へ向かう。

脱衣場は広く、ただの料亭だったにしては多人数が利用できる設計になっている。

おそらく宿として開業するにあたり浴場部分も改築されたのだろう。使い慣れてしまった感は否めないが、宿にしては良い物だと思う。

塗れて身体に張り付いた衣服を四苦八苦もがいて脱いだ後、目の前に掲げて眺める。肩部分を失って台無しだった。お気に入りだったのに……。ニーハイソックスも膝の部分が破れてる。新しい服買わないといけないなあ。

洗うのは下着とスカートだけか。あとで靴も乾かさないと。

しまった替えの下着を持ってくるのを忘れた。

まあ、いいか。自室に戻ったら着替え直そう。

えっと……多分、響も替えの下着に困るかな。いや、その、男性の下着はよくわかんないけど。此処に予備があればいいが。

いい機会だから今度明朗に見せて　もらえるかつーの！

(アホか私は)

よくよく考えてみれば、織神楽響だって食事は摂るし入浴もするんだよね。人外だ超常だ化け物だ怪物だと表現しても、彼だって結局は人間だ。体力は常人を凌駕するだろうけど疲労もするだろう。

まったく別の生き物というわけじゃあない。一人の、男性だ。

そう思ってしまうと、彼の前で粗相をやらかした自分が余計に恥ずかしくなってきた。しかもそんな状態で抱えられて　。

(うわああああ)

もうやめよう。これ以上は自分を追い詰める。

仕方ないじゃないか……痛かったんだから。

裸体になつた私は脱衣所に備え付けられた姿見に自分の全身を映してみた。

両脚の膝小僧がすりむけて赤くなっている。皮膚を溶かされた肩も気持ちの悪い赤黒さだ。響の言つた通り骨まで溶かされるようなことはなく、せいぜい皮膚の表面を焼かれた程度。擦り込まれた神経毒が、私にあんな痛みをもたらしたのか。

患部が彼の手形状に肩を覆っている。親指と思われる部分が脇の下まで溶かし、擦れる度に痛んだ。

頬に付いた砂を腕で拭い、浴場に入る。

設置されたシャワーは五つ。肩の神経毒がまだ残っているかもしれないのでよく洗い流し、それから頭と身体を洗った。

いつもなら大体このタイミングで浴場へ三桜が飛び込んでくるのだが、今回はそんなことがなく安心だ。わざわざ隣のシャワーを使い、私の胸の大きさにいちやもんを付けてくる迷惑な行為にも遭わずに済む。

思い返せば改めて奴は変態で最低だと再認識した。

響と三桜。同じ純血一族でも違いが大きすぎる。家系の差か？

いや守野家にだってマシな奴は居る筈だ。それに響の方は純血一族の当主様。殺人集団ではあるが連中は名家でもある。厳格を全身に貼り付けたような立ち居振る舞いをしていた彼のことだ、三桜なんかと違って礼儀作法を重んじて生きていたに違いない。

(三桜は何を調べていたんだろう)

桶にためた湯を頭から被り、備え付けのシャンプーで髪を洗う。

(倉庫で何かを見つけたのかな。結界寮の動きに気付いて響を探しに出て行ったとか？ 気付くきっかけがないからそれは有り得ない。

響じゃないとすると、あいつが此処を飛び出す理由は 聖歌か？)

石鹸を泡立てたタオルで身体を磨きつつ、真正面に設置された鏡越しの自分と目があった。

どう思う？ どうだろうね。

なんて、首を傾げたりしながらの自問に自分で応ずる。

なんだろうこの突発的な騒がしさは。

- ・ 延々と止まない並折の雨。
- ・ 矢神聖歌の奇妙な行動。
- ・ 織神楽響の逃避行。
- ・ 結界寮の響討伐。
- ・ 守野三桜の残した殺気。

各々が慌ただしく動いている。

私は無関係の筈なのに、こうして各々の行動を把握できてしまうような 渦中に居る。

胸騒ぎがする。

各々自分の目的に集中している現状、ここまで把握できているのは私くらいだ。そんな私が一連の動きを突発的だと思った。それはつまりタイミングが揃っているように思えたわけで。実際にこれらは一日で起きた出来事なわけで。

(結論を出すには早いけれど)

全部が繋がっているように思えてならない。

「ふっ」

頭の上にタオルを乗せたまま湯船に浸かると身体の疲れが一気に

抜けてゆく感じがした。ここ最近ぐうたらしていて身体が鈍っていたからなのか、はたまた出来事が出来事だけに必要以上に疲れをためてしまったのか。

とはいえ全部が繋がっていると仮定するにしても、どう繋げるといふのだ。

響と結界寮の繋がりは明朗に聞いたから良いとして、聖歌がひのえと駅で降りなかったことが織神楽響とどう関係する？ 並折の一人住人である聖歌と純血一族なんて接点などありはしないだろう。

三桜の行動も気になる。羽田立荘の倉庫なんかで何を見つけたというんだ。殺気を残して倉庫を破壊して。そこまで彼女を激昂させるものがあつたというのか？

……この羽田立荘。ただの宿か？ 矢神聖歌は何者だ？ 遡って考えると疑わしいものはいくらでもあるわけだが。そもそもこの街自体、裏世界の人間で溢れかえる場所だしなあ。

長い雨天についても調べるか。私の部屋には六月から昨日までの新聞が保管してあるからね。いつもロビーで三桜に読むのを邪魔されて自室に持ち帰って読むからんだけど……。捨てずに置いておくうちに溜まってしまった。

「うっ……眠くなってきた……」

ええと、お風呂を上がったら、

とりあえず洗い物を回収して、

響の様子を窺って、

倉庫の状態を確認して、

新聞の気象欄を抜き出して、

あれ、今って何時だっけ　　ゆうはん　　したく　　。

聖歌　　帰って　　くるよ　　ね　　。

ひのえとの商店街を巡回し、再び駅前まで戻ってきた伊佐乃明朗。結局、織神楽響の所在は掴めないまま。

彼は眉間に皺を寄せながら、天宮柘榴とばったり会った駅前広場の像に背中を預けていた。しかしながら皺の寄った眉間と曇った表情は、織神楽響を見つけれなかった不満によるものではない。

彼の足もとには羽田立荘の番傘が転がっていた。

天宮柘榴が持っていたものだ。

「クロちゃんの身に……何かあったのか？」

こんな雨の日に自ら傘を放り出すなんておかしい。

明朗は番傘を拾い上げると、取っ手を強く握った。

駅前だからと油断していた。路面電車ですぐにきのえとまで戻れるからと、彼女を一人にした。結界寮の住人でありながら情けない。天宮柘榴に偶然会った嬉しさに、気持ちが浮いていた。

「ギリ……」と明朗の食いしばった奥歯が軋む。

（まさか織神楽響と遭遇したのか？　すぐに羽田立荘に行って帰宅したか確認をとらないと。聖歌さんは出払っているだろうし、残っ

ているとすれば三桜さん……か。彼女が何者かはわからないけど、協力してくれるかな)

天宮柘榴と仲の良さそうな彼女のことだから、きつと協力してくれる。明朗はそう自分に言い聞かせ、路面電車に乗るべく駅へ向かおうとした。

路面電車は一時間に二本。目の前にはちょうど駅に到着した電車があり、彼は慌てて足を急がせる。

ひのえと駅の改札口へ急ぐ透明のビニール傘。

その先で揺れたのは 赤い番傘だった。

「……あら、明朗君？」

「せ、聖歌さん！」

矢神聖歌が、明朗を見つけて声を掛けた。

「そちらの状況はどうですか？ 織神楽響は見つかったの？」

普段と変わらぬおだやかな表情で彼女は問い、立ち止まった明朗は彼女の言葉を聞きながら、扉を閉じて動き出してしまったきのえと行き路面電車を見送ることになってしまった。

諦めて溜息を吐いた明朗はあらためて聖歌の前に立つと、かぶりを振って見せた。

「いいえ、こちらは駄目です。おそらくもう別の地域へ移動してしまっただかと。聖歌さんの方はどうですか？ つちのえとにある工房に行ったんですよね」

「ええ。搜索を手伝えなくてごめんなさい」

「気にしないでください。いつも思っんですが、どうして工房を墓

の近くに建てたんです」

「……火葬ではなく、埋葬だから。ですね」

にこやかにそんな事を言う聖歌に、「うへえ」と明朗は目を背けて唸った。

「そ、そうですか。それで見つかったんですか、逃走したという江本……なんてしたっけ」

「佐々奈よ。江本佐々奈。私の方も収穫なしですね」

「まずくないですか？ 梵さんの耳に入ったらどやされますよ」

苦々しく眉をひそませる彼に対し、聖歌はやはり変わらぬ笑顔で手を振った。

「これは私だけの問題なので、梵さんは何も言ってこないですよ」「はあ。まあ《pygma》は直接結界寮とは関係ないですし別にいいですけど。ひのえとで降りたってことは、これから買い物ですか」

「ええ。クロちゃんと三桜ちゃんがお腹を空かせているでしょうから、早く帰らないと それよりも明朗君、とても慌てていたみたいですけど。どうしたの」

ここで明朗はハツと目を見開き、首を傾げて頭上に疑問符を浮かべる聖歌へさらに接近した。

「そうですよ！ クロちゃんが危ないかもしれないんです！」

「クロちゃんが？ どういうこと？」

「実はひのえと巡回中に駅前でクロちゃんに会ったんですけど、後で戻ってきたらそこにクロちゃんの傘だけが落ちていて……」

慌てて事態を説明し、聖歌はとても落ち着いた様子でそれを聞いていた。しかし彼女の表情はおだやかさを崩して少しだけ曇っている。

織神楽響に遭遇した可能性があるので早く羽田立荘に行つて確認を取らなければ。そう言う明朗の顔を見ながら、聖歌は別の事を考えていた。

(クロちゃんが、ひのえと駅に?)

小首を傾げる。

(どうしてクロちゃんがひのえと駅に居たのかしら。あの子がきのえと駅に行くのならわかる。鎖黒トザクロを探しているでしょうから。行つても見つからないとは思うけど。そもそも 盗んだのは私ですもの)

盗んだはいいが、直後に盗まれてしまつて聖歌にも在処がわからないからどうしようもない。
それは置いておくとして。

(私に何か用事でもあったのかしら。まさか……!)

聖歌の目と眉間に力がこもる。

(また、三桜ちゃんに使い走りさせられたの……? 可哀想に。有り得る。有り得すぎるわ。夕飯のメニューに希望ができたから私に伝えてこいとか、そんな感じだわきつと)

頬に片手を添え、嘆きの息を吐く。

聖歌から見ると三桜と柘榴はとても仲の良い姉妹のようで、いつ

も微笑ましく過ごしている。時折、三桜が柘榴をからかったり使い走りをする姿も見受けられるので、今回もすぐにそうだろうと予想したのだ。

三桜と柘榴が姉妹のようであれば、聖歌は母親のようであった。

実のところ聖歌は彼女達の素性を知らない。たしかに鎖黒を手に入れるべく天宮柘榴に接近はしたが、柘榴個人に関しては特に情報を貰ってもいなかったし興味もなかった。ただ鎖黒を盗んだ直後にまた何者かに鎖黒と指輪を盗まれてしまい、そして柘榴の同行人らしき守野三桜に指輪探しを手伝ってもらったのが羽田立荘を提供するに至った理由である。

きっかけは鎖黒だったわけだし、天宮柘榴を傍に置いておけばまたその在処が掴めるかもしれないという思惑はあったが、それは後で思い立ったことである。つまりところ聖歌は本当に御礼のつもりでその時に羽田立荘を提供したのだった。

普段なら並折の住人である彼女はそんな真似はしないが、その日がちょうど妹の命日だったこともあり、その気になってしまったのだ。

「話はわかったわ明朗君。すぐに羽田立荘へ向かってクロちゃんが帰っているか確認しましょう」

「はい。あの、買い物はいいんですか？ 鍵さえ渡してもらえれば先に僕が行って確認しますけど」

「クロちゃんの一大事に、買い物なんてしてられないわ」

「まだ決まったわけじゃないですよ。もし居なければ織神楽響に遭遇したと判断して結界寮が総出でクロちゃんを捜索します。梵さんと林檎さん、結界屋さんも駆り出させます」

「ほんと 貴方は頼もしいですね。クロちゃんが羨ましい。と、同時に、貴方の結界寮に於ける意見力が少々怖いです」

「大袈裟ですよ。聖歌さんだってその点、僕よりも自由じゃないですか。《pygma》のことや、聖歌さんが結界寮の住人でもある

こと、クロちゃん達に話してないんですよ」

「あの子たちを不安がらせるだけです。明朗君だって初めは随分と警戒されていたじゃないですか。それに私は彼女達の素性を知らずとは思いませんし」

「ふうん……ま、それで上手くいつてるなら僕が口出しするのは野暮ですね。じゃあ、僕は先に行っています。事態が悪ければ伝言役を送りますよ」

「ええ。はい、これ宿の鍵。クロちゃんのこと、お願いします」

鍵を受け取った明朗は「お任せ」と言い、発券機の方へ身体の向きを変えた。

「あ。伝言で思い出した。聖歌さん」

急に彼の声のトーンが下がったので動揺したが、聖歌は平静を維持した。

「どうしたの」

「……梵さんから伝言を預かっているのを忘れていました。返事も貰ってくるよう言われています」

「私に？ なにかしら？」

明朗は傘を閉じ、先で床を叩いて雨露を払った。

「この雨のことですよ。『聖歌。お前もしかしてトヨフサを使ったんじゃないだろうな？』だそうです」

さすがに鋭い女ねえ。と、聖歌は心中心底感心し、肌身離さず持っている一本の筆に意識を向けた。

その存在を知っているのは、せいぜい結界寮管理人の梵と林檎

あとは住人がちらほら程度だが知られたところで問題はない。先ほど明朗が言ったとおり境界寮は《pygma》に参与しないからだ。豊房は《pygma》関連の件。どう扱おうが聖歌の自由。

「御名答。と伝えておいて」

「……わかりました。それにしてもこの長い雨天は聖歌さんの仕業だったんですね。まったく、どういつつもりかは訊かないですが勘弁してください」

「あら。私はきっかけを与えただけで、私だけの仕業ではないですよ」

「意味が解りません」

あっけらかんとした聖歌の態度に、明朗は肩をすくめる。

続く雨天にうんざりしているであろう彼の肩を叩き、聖歌は「またすぐに晴れますから」となだめた。

とにかく今は柘榴を心配する気持ちが大きいのか彼はすぐに元の調子に戻り、聖歌はその姿に笑みを見せて二人は別れたのだった。

さらさら。雨粒は傘の表面を撫で、

しとしと。雨粒は像の曲線を伝い、

くすくす。聖歌は傘で表情を隠し、笑っていた。

「ああ可笑しい。でも素敵。喜怒哀楽は私の力で与えられますが、涙はどうしても無理でした。けれどあまりにも流したいと懇願されたので豊房の力で点晴してみたわけですが。まさかまさか雨だとは。

ふふ、ふふふふ」

いやはや未知なる道具は実に興味深い。

これなら同じ怪遺産である鎖黒トザクロにも期待感が増してしまっただけではないか。

「蘇り顕現した妖怪は雨女ですね。雨女、江本佐々奈。これは面白い作品に仕上がりました。流星は私、上出来です」

矢神聖歌。その通称は《pygmaピグマ》。

そして結界寮に属し裏世界に轟くまたの名は

傀儡屋。

神の領域を犯し、芸術の至高を求め、生物の歪曲した模倣を現実させる女。

師は禁術を解き禁忌を嘲笑い禁断を掻き集めた傀儡屋。世界に七人しか存在しない禁忌タブクリエーター執行者。矢神聖歌はその弟子にして二代目であつた。

「あまり涙を流し過ぎると、眼球そのものが洗い流されてしまいますよ。まあいざれ え？」

曇った空に呟き掛けた聖歌。

傘から何気なく覗かせたその目だったが、直後まばたきする事も忘れて見開くことになった。

聖歌の目には、空を横切る影が映つたのだ。

見間違い？

違う。見間違いではない。

何度も影が自分の頭上を猛烈な速さで通り過ぎていく。

何度も。何度も。右から左。左から右。縦。横。斜め。

影は 完全にはつきりと明確に、矢神聖歌だけを意識して飛び跳ねている。

そう。跳んでいるのだ。

縦横無尽に、あらゆるオブジェクトを踏み台にして跳躍を絶やさない。

そこまでわかるくらい目が慣れてきたというのに、雨による視界の悪さと影そのものの速さが相俟っていまだに影を影としか認識できない。

しきりに首を振り身体を動かしその姿を追っていた聖歌もさすがに疲れてきたのか、傘を投げ捨てた。

「何者ですか？」

向けた声の先 ひのえと駅の屋根には影があつた筈だが、もうどこかへ移動して見当たらない。

駅前の像に背を付けた聖歌は、自分の投げ捨てた番傘の近くに同じような番傘が転がっていることに気付いた。明朗が言っていた柘榴の傘だろう。

像があるのは駅前広場の中心。

影の跳躍は駅の屋根から像を対称とした商店街の入り口にある門まで届く。

つまり 駅前広場という檻に、聖歌は閉じ込められたのだ。

()

目を左右に動かすも影を捉えられない。

しばし翻弄された後、影はやつと動きを止めた。

屋根の上に立ち、白い歯を覗かせたのは 背の高い女。

守野三桜だった。

「シィ」

鋭い吐息が聖歌の鼓膜に届いたと同時に、三桜は屋根から何度も前宙をまじえて駅前広場に降り立った。

聖歌は言葉を失うしかない。彼女も傀儡屋として裏抗争に駆り出されて多くの超人を目にしてきたが、たった今見た動きはその《慣れ》をも揺るがすものだった。

一度の屈伸で、およそ五十メートルは跳躍した。それを絶え間なく何度も高速で継続させた。跳躍開始時はあまりの速さで姿が消えるほどだ。

聖歌は自分の中の超人という言葉が急激に下落してゆくを感じつつも、その超人感を凌駕した者があるうことか守野三桜であったことに周章狼狽した。

「み、三桜ちゃん……?」

「見いつけたあ」

三桜は長いうしろ髪を片手で払うと、ぐっしりと濡れた自分のジャケットを破り捨てる。

現れたラバー質のタンクトップは彼女の女性部分を強調するとともに、隆起した腹筋まで浮き上がらせていた。

あからさまに剥き出している殺気。

獲物を推し量る野生の視線。

理不尽なまでに広大な 獵域。

「眼球は洗い流すものじゃあない。割り貫くものだ。矢神聖歌あ」

「どういうことなの……？ 三桜ちゃん、どうしたの？」

「あまり純血一族を嘗めるなよ弱肉てめえ」

「……純血……一族……って」

「響は私様が回収する」

「なるほど。なるほどね。なるほどそういうことなのね、三桜ちゃん。貴女は」

「餌に納得は無意味。弱肉強食はこの世の理。嘗めた餌は、即刻喰われるんだよ。来世ではよく覚えておくんだな」

バツ　と両手両腕を開いた三桜の指先から、スプリングでも仕込まれているかのように長い爪が飛び出した。

弱肉と見下す守野三桜に対し、矢神聖歌は　やはり笑う。

しかしいつものような笑いではない。

鋭くも座った冷淡な目と、普段なら見せはしない三日月形に歪んだ口から歯を覗かせた笑顔。それは三桜の言う通り。

嘗めに嘗めて嘗めきつた、嘲笑だった。

「守野家なんて、初めて知りました。マイナーすぎるのかしら。弱すぎるのかしら」

「……表情も行動も発言まで嘗めきつてやがるな。てめえが白痴なだけだ」

「貴女が純血一族だったとは。そうだ、次の作品には貴女の血液を流し込むとしましょう。これはいい考え。これがいい考え」

聖歌は自分の左手親指を顔の前に立てて、その爪を噛んだ。

そのまま手を前に動かすが、爪は歯に挟まれたまま。

爪は剥がれ、指から離れ、爪と指の間には　ピン、と一本の細いワイヤーが伸びていた。

「貴女という材料。傀儡屋、矢神聖歌が頂戴しましょう」

PUNICA【あつたかい雨の降る夜】 5

?なあに? 並折の話に興味を持ってしまったの、グレナデン?

?ああごめんなさい。柘榴と呼んで欲しかったのよね。グレナデンの呼称は嫌なの??

?私の……番ツガイという名が漢字だから? 仕方ない子ね。二人きりの時だけよ?

?うーん。そうねえ、カオナシの話に百奇夜行という言葉が出てきた通り、並折に潜んでいた妖怪はカオナシだけではなかったのよ。結局はみんな海へと沈んでしまったのだけだね。それでも、並折の伝奇にはまだまだ多くの謎が潜んでいる。妖怪達が跡をにごさず消えてしまったのなら言い伝えなんて存在しない。カオナシの話も、言うなればカオナシという妖怪自身が残した手記があったことで今も尚、伝えられている?

?妖怪達の遺産。思い出の品々。怪遺産なんて呼ばれるわね。それらが、まだ並折に在るとしたら。妖怪は、そういった連想の糧さえあれば何度でも蘇る。空想にして顕在。模倣であれ虚言であれ、遺産の持ち主の名は語り継がれることになる。とはいえ……並折の妖怪も人間であったのだから、化け物として描かれ、語られるのは快く思わないかもね。もちろんいくつかの品は失われてしまったかもしれない。だけど、どのような形であれ残った怪遺産も存在する。この鎖黒トサクロもその一つね。正確には《結永刃・鎖黒》と呼ばれる怪遺産よ?

?……鎖黒は並折に在ってはいけない物。だからこうして並折

の外にある。そんな怪遺産は鎖黒だけに限らない？

？遺産で妖怪が蘇るといふのは、あながち空想でもない場合がある。例を出すならば、豊房トヨノサという筆ね。《安永筆・豊房》という怪遺産。ええそつよ、鎖黒のように武器の形状をしているわけではない、一見するとただの筆だからまだ残っているかはわからない？

？あわよくば、残っていて欲しくない代物？

？私が雪女と呼ばれていたことは柘榴も知っているわよね？妖怪も、一人の人間にすぎない。そして私達は、己の力をよく理解し、悪用する者はほとんど居なかった。なんというのかしら……むしる他の人間と異なる部分、つまり能力を、嫌悪していたの。特異な力を持ってしまった人間は村八分にされ化け物だと忌み嫌われ、酷い目に遭って生きていた？

？ヒトの心を持っていたの。少なくとも並折に集まった妖怪達は？

？私は自分の力で多くを殺し、凍らせ、こうして死使十三魔の序列四位として今も尚、殺人集団の力になっている。だから私は並折の妖怪ではない……？

？とにかく、並折に居た者達はみな互いに助け合い、祭りをしたり、あたたかい生活を送っていたのよ。強い力を持った妖怪だつて居たけれど、決して悪用しなかった？

？安永筆・豊房はね、そんな彼らの特異な能力を蘇らせてしまふ筆なのよ？

? 力の持ち主の妖怪が自分の意思で封印していた、力だけをねだから豊房によって蘇り顕現した能力は、豊房の使い手に委ねられてしまう?

? 豊房を遺した妖怪は、並折の妖怪達が姿を消した後も、自分たちの力が役に立てばと思つて遺した。けれど哀しいかな後の世では豊房を善行に用いる者は少なかった?

? 昔はちゃんと祀られていたのに。災害に見舞われた時、人々は豊房の力に頼つていたというのに。私が最後に並折を訪れたときにはもう祀つていた社は廃れて朽ち果て、壊されていた。豊房も盗まれて姿を消していた……?

? だから、どうせ今もどこかにある豊房は、碌な使われ方をされていらないのしょうね。昔も今もただの人間どもは妖怪を蔑ろにする。あまつさえ外道たる方法で人工的に得た能力を、開き直つたように行使して衝動のまま殺人を繰り返す純血一族などという集団まで蔓延っている。役立つよう願つて遺された豊房も、結局は危険な怪遺産として、こうして語られている?

? ……少し表情が険しくなつてしまつたわね。ごめんなさい。いえ、別に人工的に得た能力を嫌っているわけではないのよ。他の序列を批判するつもりもないの。ただ、目的もなく産む者の勝手に能力者を産む純血一族が気に入らないのは事実よ。産まれてくる子は己の意思など無関係に呪詛を宿して生まれてきてしまうのだからしかもそんな 血に呪詛を宿して能力者を産み続けられるようにした一族の形態ですら、そもそもが超人による支配を目的としたのが起源だという。まさにヒトの腐った心を象徴したような連中?

? ……並折も昔のような温かい妖怪達の過ごした場所ではなく

なっているわ。この世界も然り？

？だから柘榴、貴女はここに居なさい。私の傍に、ずっと居なさい？

？いい子ね。待ち続ければ、序列一位の目指す世界に変わる。
あの方はその器を持っている？

？偽りなき世界？

？約束の刻？

？訪れたその時こそ、豊房を正しく使って私達がみなを迎えに行つてあげましょう？

(う……寝てた……？)

湯船に浸かったまま寝てしまったのか。

気が付けば頭の上に置いていたタオルが底に沈んでおり、私は自分の腕を枕にして湯釜の縁に顔をうつ伏せていた。息苦しくなつて起きたらしい。

(夢というか、昔の記憶を見ちゃった)

「はあ……」溜息が出た。

生まれつき能力を持ってしまった存在　　かあ。まあ妖怪つてのは、この国の誰かさんがそういった人達を勝手にそう呼んだだけなんだよね。

純血一族だつて、言ってしまうえば現代に生きる妖怪集団なんだろうなあ。

番姉さんは並折に訪れたことがあるのかな。あるのよね、きつと。並折の妖怪達は平穩に暮らしていた。けれどカオナシ伝承の通り、みんな海へと沈んでしまった。

きつと番姉さんはその時に並折には居なかったんだ。

みんな居なくなってしまった並折。残ったのは妖怪達の遺産と、ただの人間達。

それでも並折は結界都市として現代も特異な地として利用されている。

どうしてだろう……結界屋がこの都市に結界を張ったわけではないのか？　結界屋が居るなら、どこだつて結界都市になる筈だもの。

この地はまだまだ謎が多い。

番姉さんが持ち出した鎖黒は、もとはといえば並折で作られた。怪遺産と呼ばれる特別な代物だ。並折にはあつてはならない鎖黒を私は持ち込んだ。姉さんの言いつけを破り、彼女の元を去った。

……カオナシを見つけなければ。カオナシなら番姉さんを救ってあげられるかもしれない。

ユキオンナはカオナシのことをよく話した。

でもカオナシ本人ではなく、カオナシに纏わる話ばかり。

ユキオンナと、鎖黒と、カオナシ。

きつとこれらは堅く繋がっていると思うのだ。

「ともあれ今は目の前の問題を片付けないとね」

ぱん、と両手で一回顔を叩いて立ち上がり、浴場を後にした。

浴衣に着替えて女性浴場から出た私は、その足で隣の男性浴場に向かう。

男性用更衣室の中は照明が消されている。響はもう上がったのだろう。

さて彼の衣服はどこだろうかと籠を見て回るも、回収するべき洗い物が見当たらない。まさか響はあのおずぶ濡れて汚れた忍装束をまた着たというのか？ まさかね。

そもそも彼に渡したタオルも見当たらないのだ。

ここで私はヒク　と頬を引き攣らせた。

「ちょっと待って嘘でしょ……」

裸足のままでドタバタと廊下を駆け、洗濯機の設置してある場所へ急ぐ。

ゴウン、ゴウン。

ゴウン、ゴウン。

洗濯機が、起動していた。

あんぐりと口を半開きにするしかない。

「な、ん、て、こと」

凄まじい罪悪感が全身を支配した。

あ、あああ、あの、式神に……洗濯をさせてしまった。

純血一族の当主。当主だぞ。絶対とし、式神として崇め敬まわれ

て生きる人間だ。

私は純血一族の人間ではないけれど国をも裏で揺れ動かすような名家の当主様に、自分で洗濯物の処理なんてさせられない。させたくはない。

「ぐ……っ」

私は抱えていた自分の洗濯物を隣りの洗濯機に放り込み、すぐに反転。

再び廊下を駆けぬける。

彼は、ロビーに居た。

「随分な長湯だな。天宮柘榴」

開けた浴衣の胸元から覗く褐色の肌。左右の盛り上がった胸筋の上を、痛々しい大きな残り傷が走っている。

覆面で隠れていた表情はやはり冷徹さに覆われており、目つきは鋭い。髪は長く後ろで縛ってまとめられていた。しかし若い。声も若かったが、想像よりももっと若い。成人……しているよね？

これが 織神楽響。

彼はいつも三桜が定位置としている畳敷きのスペースに座り、こちらを見上げている。

ぱくぱくと口を動かすだけだった私は、慌てて彼の前に両膝を付けて座った。

「せ、洗濯物……！」

「洗濯物？」

「か、か、か……か……！」

舌がうまく回らない。「かご」に舌を回す文字は含まれていないのだが、声がかどもつていると自分で表現したくないのだ。うまく言えないと思いきや身振り手振りで拙い連想ゲームを勝手に始める私。実に滑稽である。

「籠？ 脱衣所の籠か」

「そう！ 籠の中に……！」

「ああ。勝手に洗ってしまった。すまん」

恐れ多すぎるわ！

「お、置いておいてくれればあたしが洗いましたけど……」

「そうか。まあ些細な事よ」

重大な事でしょうが！

「それよりも天宮柘榴……これを見る」

「へ？」

響は卓袱台の上にあったソレを、呪文布の巻かれた片手でぱしんと叩いた。もう片方の手はやはり使えないのか浴衣の中に突っ込んでいる。

卓袱台の上には、なにやら分厚い紙の束があった。私が湯船で寝ている間にこれを読んでいたのだろうか。

彼は乗せた手を横へずらして紙束を移動させたので、私は畳に膝をついて忠犬のように彼の隣へと移動した。

「これは？」

「貴様が遅いので、先ほどの壊れた倉庫を少々調べさせてもらった。

三桜嬢の殺気も倉庫の中に充満しておったしな
「むむ……」

どうやら紙束は倉庫から持ってきたものらしい。強い力で握り締められたからなのか、紙に折り目がついていたり皺がよっている。表紙にはボールペンで『江本正志』と書いてあるだけだ。聞いたこともない。

「この紙束だけが入口に落ちていた」

「江本正志って書いてあるけど、なんだらう」

「江本正志は、我々織神楽家が五月に殺害した男の名だ」

「ん、え？」

ど、どうということなのか。

これは羽田立荘の倉庫にあったものでしょう？ どうして織神楽響の事情に関係するものがあるのだ。

「内容は……」

「ふん、どうやら別件で江本正志と取引していた者が居たらしい。

この紙束の内容は要約すれば、江本正志の個人情報と取引内容の明細と事後記録といったところだな」

「じゃあ偶然、関わりがあった人の名前があっただけ？」

「否」

ぴしゃりと私の言葉を両断した響の一言。

混乱に目を泳がせる私に対し、紙束を見下ろす彼の目は変わらず冷たかった。

「事後記録に軽く目を通したが、おそらくこの《pygma》という輩、某の動向を掴んでいる」

「びぐ……ま」

はて、ピグマ。ピグマ。

なんだっけ私知ってるような気がする。

「ここに矢神聖歌という人名らしき単語が記載されているが、貴様この名に心当たりはあるか？」

「矢神聖歌？ 知っているも何も、あたしと三桜に羽田立荘を提供した人よ」

「……そうか」

彼は浴衣の下で両腕を組んで唸る。そしておもむろに紙束の最後の方をぺらぺらとめくっていく。

私はというと、これがもうさっぱり状況が掴めていない。まるでわけがわからない。

江本正志が誰なのか知らないしそいつの個人情報も私にとってなんの役にも立たない。そんな紙束に聖歌の名前があったとしても「ああそうなの」程度にしか思わない。

でも織神楽響も関係しているのが問題だ。

「江本……佐々奈。だと？」

響はとある一枚を開いた状態で硬直した。

おそろおそろ彼の顔に自分の顔を近づけて紙の内容を覗いてみると、たしかに紙の最後には『六月二十日。お誕生日おめでとう、江本佐々奈』とある。江本正志の親類だろう。

ああ、そういえば私が並折に来たのって六月の二十四日だったなあ。どうでもいいか。

「……江本正志。その妻、江本美香子。娘、江本佐々奈。この取引

内容からすると美香子と佐々奈は死んでいるのか？ 馬鹿な。確かに同居していた江本涼子は殺害した。正志も殺害した」

なにやら低い声で呟いている。

「だが本妻の美香子と娘の佐々奈だけは、事後処理を簡略化すべく生かしておいた筈だぞ。家族が全員死亡するとなにかと面倒だからだ。こちらは脱走した涼子の殺害と、その娘 解毒爪を持つ音々子の回収、音々子を守ろうとして我々を裏切った正志の殺害。その目的さえ果たせば十分だったのだ。美香子と佐々奈には、正志の死亡記録を曖昧にすべく織神楽が指示を与えていた。その二人が……死んでいるだ」と

チィ、と舌を打つ響。

直後その視線が私の方へと向けられる。

「この宿を提供したという矢神聖歌は何処だ」

「え、あ、今は買い物に出ている……」

「そやつ、ただの人間ではないぞ」

「え？」

「三桜嬢がこの紙束を読んで激昂するのも無理はない。矢神聖歌は某が並折に逃げ込んだ事情を知っている」

「え、え？」

「純血一族の人間が並折に入るといふ事を把握しているといふことだ。その上で三桜嬢と貴様に宿を提供したのなら……」

「聖歌は、三桜が純血一族だと知っているかもしれないってこと？」

「仮定にすぎんが、極めて確定に近い。矢神聖歌は《pygma》という者と関わりがあり、その《pygma》は結界寮と密接な関わりを持っている」

差し出された紙束の開かれた部分。その一部に響の指が当てられた。

そこに書かれた手書きの文を私は目でなぞってゆく。

「見本として　矢神聖歌を　返却　？　サインは……　p y g
m a」

なに見本って。これじゃあまるで聖歌が、無機物のような　商品のような書き方じゃないの。

聖歌は確かに生きているのよ。一緒に食事したり紅茶飲んだり、味について語り合ったりした。味覚が無ければできないことだ。彼女が汗をかく姿も見だし、包丁で指を切って血を舐める姿も見た。人間でないものと一ヶ月も、私と三桜が共同生活を送るわけがない。

ふざけているのかこの p y g m a とかいう奴は。聖歌に対して物のような扱い方をしやがって。

「提供材料？　結界寮、結界屋、錫杖……梵」

たしかに結界寮の関係者だ。

材料。作品。母親。娘。取引していたのは……まさか死体？
材料というのは人間の死体？

「ちょっと見せて貰います！」

「ん……ああ、構わん」

読んでいた部分をそこでいったん閉じて自分の方へ引き寄せ、最初から紙をめくった。

江本正志の個人情報もういい。

私が見たいのは取引の明細　材料の内訳だ。

「 B S k u (m d) 、 B C l a (d) ……」
「その表に書かれているのは隠語だ。某にもわからぬ」
「……………」

こんなのただの頭文字だ。

B S k u (m d) 。

B o r n s k u l l (m o t h e r · d a u g h t e r) 。

つまりこれは骨部頭蓋 (母・娘) という意味。

B C l a (d) 、これは骨部鎖骨 (娘) 。

B S c a (d) 、骨部肩甲骨 (娘) 。

B S t e (m) 、骨部胸骨 (母) 。

Bは骨という分類。わかり易く頭頂部から部位を書き出している。

この書き方をする奴を私は知っている。

これが人体の全てを書き綴った大量の紙束でなければもっと早く気付いていたかもしれないけど。でも似たような手紙を受け取ったことがあった。

それは人形制作に協力してほしいという一文から始まっていたのだが、読むにつれて私はだんだんと嫌悪感が膨れ上がっていったのをよく覚えている。あるうことが番姉さんの身体の一部が欲しいという、くそ馬鹿げた内容だったので握りつぶしてやった。

(あの人形偏愛症、生きていやがったのか)

軽々しく死使十三魔の序列四位にコンタクトを求めてきたうえに、肉体が欲しいと抜かしやがる大馬鹿者。

当然、私は番姉さんの直下部隊に指示を出して始末させた筈だった。

同一人物ならば、まさか並折で生きていたとはと驚きを禁じ得ない。

奴は今もこの街で死体を使って人形を作り続けているというのか。

「大方の把握はできたな」

そう言いながら響が音もなく立ち上がる。

「三桜嬢は倉庫でその紙束を閲覧し、pygmaもしくは矢神聖歌が自分を嵌めたと気付いたのだろう」

三桜の奴……聖歌を殺すつもりなのか。

いやすぐに殺しはしないだろう。聖歌はpygmaの指示で動いていた可能性もある。大元であるそいつの居場所を聞き出してから殺すつもりだ。

ここで一つの疑問が浮かぶ。

三桜は響を捜さないのか？

嵌められて怒ったのはわかる。でも三桜の任務って、響と合流して回収することでしょう？ いや別に捜しに飛び出したのならこの疑問も不要だけどさ。

仮に、響そつちのけで聖歌のところへ向かったのなら。それはおかしいじゃないの。

……………。

「響……さん」

「なんだ」

「三桜が、いえ、誰かが並折まで助けに来るといいう情報は、知っていたんですか？」

「否。貴様に聞いたのが初めてだ。一応、各地の潜伏先で合図を出

してはいたがな」

.....。

.....。

「訊きたい事はそれだけか。某は行くぞ」

「どこへ？」

「装束を取りに行く。洗っている場合ではない」

「ちょ、ちよつと、どういう」

「結界寮がうろついているこんな状況の中では、さすがの三桜嬢でも一人は危険だ。それに pygma とやらには某も用がある。つまり矢神聖歌という者を探せば両者に辿り着けるといふ事。しかし某はその矢神聖歌の顔を知らぬ。貴様、案内できるな？」

羽田立荘で三桜を待つより、こちらから出向くべきだという判断か。

私としてはここでじっとしていたのだが、この男を前にそれは許されないだろう。私の命は織神楽響の手に握られているのだから、首肯するしかなかった。

そうと決まれば浴衣一枚では動けないので着替えなければならぬ。
い。

私も立ち上がって、自室に戻ろうとした。

しかし、突然、羽田立荘の玄関を叩く音がロビーに響く。

ドン、ドン。

ドン、ドン。

私と響は顔を見合わせたまま硬直。
そつとロビーから半分だけ顔を出し、玄関の方を覗く。
スモークガラス越しに人影が見えた。

「クロちゃん！ クロちゃん！」

この声は…… 明朗？ 明朗だ！

私の表情は明るくなり、すぐさま飛び出していきたかった。私の背後で息を殺し、殺気に満ちる劇物から解放されたかった。

「居ないのー？ 入るよーっ？」

がちやがちやと、不慣れに鍵を通そうとする金属の音。明朗は羽田立荘の鍵を持っているのか？

響は私の口に背後から手を当て、「声を出すな」という意思を告げてくる。口に当たった手はいつでも毒を出せる凶器だ。必然、恐怖で全身が震えた。

そのまま後ずさるようにロビーの奥まで連れられてゆき、階段を上がる。

階下を覗き見られる位置に私と響は隠れた。

「……誰が来たのだ」

彼の小さな吐息が耳を撫で、私も小さく応えた。

「知り合い。よくここに来る人」

「血を見たくなければ去るまでおとなしくしている」

ほどなくして開錠された玄関が開き、明朗が入ってきた。

「クロちゃん！ 帰って来てないのかな」

「……どうかな。明かりは灯ったままで」

明朗と、もう一人分別の声。来たのは二人なのか？ 誰？
というかロビーの電灯を消していない。気配を探られてしまう。

「三桜さん！ 三桜さんも居ないんですかー？」

「天宮柘榴、結界寮の統界執行員だ。伊佐乃明朗の要請を受けて保護しに来た」

ゴトン。ゴトン。

明朗の足音とは違い、もう一人の足音は重々しいものだった。

「うわあ、カザラさん！ 土足じゃないですか駄目ですよ！」

「相変わらず細かい男だなお前は。わざわざ付き添ってやったんだ文句を言うな」

「だってきのえと駅の近くを巡回していたのカザラさんしか居なかったから……」

「居なかったから……なんだ？ 俺ではなくアリスにでも付き添いを頼んだ方がよかつたか？」

「それこそ土足を注意するどころじゃありませんよ。それに中まで付いてこないでください。いつも言ってるでしょう、貴方達は人目に付かないようにしてもらわないと」

「いちいち口喧しいことだな。女々しいぞ」

「なんとも言ってくください」

二人の会話を冷や汗交じりに聞いていると、明朗の足がロビーに入るのが見えた。

その後から、大きな黒革のブーツが続く。なんだろう、黒い前垂れを付けているらしい。両脚の前で布が揺れている。

二人が畳に近付くと、頭のすぐ後ろで舌打ちする音が聞こえた。

おそらく響が倉庫から持ちだした紙束を見られることを危惧して

いるのだろう。そこは優秀な私が、響の前で浴衣の胸元を開く。
紙束の角が顔を覗かせた。

「でかしたぞ」

そう。私はロビーの電灯こそ消し忘れたが、紙束はちゃんと回収してあったのだ。これは私の、席を立つ際は元居た場所を一度確認するという癖によるものだった。

だから二人が紙束の存在を知ることはない。

これで再び頭を撫でてもらえたのだから得した気分である。

「……うーん。ロビーには居ない。自室に居るのかな？」

「おい小僧。アリス・エイリアスから連絡だ」

「カザラさんまで僕を小僧と呼ばないでください！ それで！ アリスさんから連絡って何ですか！」

「そう怒るな。傀儡屋がひのえとで交戦中だよ」

「交戦中？ 聖歌さんが？」

「ああ。アリスもすぐに向かうと言っている。相手は織神楽響とみていいだろう。お前はすぐに梵と林檎を呼びに戻れ」

「でもクロちゃんは……」

「織神楽響に連れ去られたのだとしたら天宮柘榴もそこに居るだろう。心配なら俺がこのまま残って建物内を搜索する」

ロビーから離れて相談しているみたい。階段の方へ顔を向けていないので、こっそりと顔を出せば二人の姿が見える。

明朗はひのえと駅前で会ったからその姿に感想を抱くことはないが、もう一人の出で立ちにはおもわず息をのんだ。

ブーツ、手袋、前垂れ、硬質的なコート、そして頭部の下半分を覆うマフラー。

全部黒一色。

私の季節感覚が混乱してしまうような格好だ。

妙な呼吸音に加えてやたら声がかくもって聞こえると思ったら、その男は見慣れない装甲で頭部を覆っていた。錆びた鉄のような色をし、のっぺりとした顔の中心部に赤いガラスのような球体。そこから視界を確保しているのか？

たしか統界執行員とか名乗っていた。

明朗の仲間、つまり 結界寮の戦力ということか。

成人男性の平均的な身長を有する明朗が見上げて話すような大男。禍々しい姿は正直人間とは思いがたい。ヒトの形をした化け物だ。

今のところ明朗と一緒に私を探しに来てくれたみたいだけど……果たしてあの男が織神楽響に対抗できるのか。

私はべつに響に協力したくて行動を共にしているわけではない。そんなわけがない。殺されないよう最善の選択をしたまでだ。

今、響の隙を突いて助けを求めたとして、私があの手手によって蝕まれることなく救い出される保証はない。

ここは息を潜めているしかない。

(う………なんだか気分が………)

視界がぼやけ、明朗と男の姿が揺らいだ。

織神楽響を背後に忍ばせ、密着状態で潜んでいるから息苦しいのか？ めまいがする。吐き気も少しする。

「よせ。あまりアレを見るな」

共に様子を窺っていた響が後ろから手を伸ばし、私の視界を遮った。

「アレって、あの大男？」

「……ひのえとをうろついていた連中と似た格好をしている。黒の

前垂れと首巻。どれもまともに相手をしたくない奇妙な違和感があった」

響でさえ気味悪く思う統界執行員。このめまいと吐き気は、あのカザラとかいう男を見ていたからなのか？ でも明朗は違和感なく会話している。

結界寮。ますます胡散臭い。

「小僧、さつさと判断しろ。俺もできればきのえと駅を調べるアリスに合流したい。だが俺はお前に従うよう言われている」

「わかりましたよ戻りましょう」

「で、ここはどうする」

「荒らされた形跡もないし、とりあえず書き置きだけ残していきま
す」

「了解だ」

明朗は上着の中から出したペンでなにやら紙に文字を書いてそれを卓袱台の上に置いた。

統界執行員は先に建物から出て行つたらしく、廊下を踏みしめるブーツの音と玄関を開く音が聞こえた。

後ろめたそうに卓袱台を見下ろしていた明朗も、男に続いてロビ
ーを後にする。

「クロちゃん……」

明朗……ありがとう……。

本当はすごく助けてほしい。

今この場で明朗の名を叫びたい。

響の腕を払いのけて、明朗のところへ飛び出して、盾となった統
界執行員が響と対峙し 仕留める。それが理想。でも叶わない。

有り得ない。

二人が私を助けに来たのなら、私は人質でもある。今ここで私を傍に置いた響と彼らが合流したところで、不利になるのはむしろ彼らの方。

それに私自身、そんな勇気が出ない。

一度あの痛みを味わった私は身に染みついてしまった。織神楽響に対する恐怖心は尋常ではない。一挙手一投足、些細な動作に反応しては怯え、表情を窺う情けない動物となってしまうた。彼の言葉に従順となる暗示のようなもので縛られてしまったのだ。

まさしく私と響の関係は、純血一族の理想たる支配の形なのだろう。

明朗も出て行ってしまった。

気配も遠のいたのを確認すると、響がくつくつと肩を震わせながら笑った。

「この織神楽響が身を潜め続ける屈辱。本家へ帰還したあかつきには万倍にして返してくれよう」

彼の片手は階段の手すりを握り締め、まるで泥のように削ぎ消してしまった。

「……………」

「急いで着替えてこい。奴らの話ではひのえとで戦闘が起きているとの事。三桜嬢に相違あるまいて」

「……………」

「どつやら三桜嬢と擦れ違ったようだな。統界執行員どもが集まる前に、彼女と合流せねばならん。急げと言っている！」

最後の強い口調で私は跳ねるように立ち上がり、転がるように階

段を駆け下りる。

その勢いのままロビーに入って卓袱台から明朗の書置きをひったくって胸に抱く。

階上から見下ろす響の視線に怯えながら、自室へと逃げた。

まるで悪夢のような現実。

どうして私がこんないざこざに巻き込まれなければならないのか。結界寮と純血一族が勝手に争えばいいのに。

あんな奴ら、番姉さんにかかれれば簡単に凍結させられるのに。

私はほんとうに弱っちい。

自室の戸を閉め、そのまま力が抜けてへたりこむ。

この世界は力がすべて。力のない私は、痛くて怖くて辛い目に遭いながらこうして身を伏しているしかない。

やっぱり世界は私にとって絶望でしかないよ番姉さん。

胸に押さえつけた明朗の手紙……何が書いてあるんだろう。

綺麗な字だなあ。意外。

『クロちゃんが心配なのでお邪魔しました。待っていようと思ったけれど用事が出来たので戻ります。帰宅したらそのまま屋外へ出ないようにしてね。きのえと駅にも近寄らないようにね。あと』

明朗……。

『三分後に、統界執行員という結界寮の戦力が一人、突入するので安全な場所に避難して』

ありがとう……。

震える手で手紙を読み終え、顔を上げた瞬間、

羽田立荘の正面玄関で、大きな破砕音が轟いた。

PUNICA【あつたかい雨の降る夜】 6

ひのえと駅に停車した路面電車。

そこから降りてきたある女性は手首に巻いた時計を見ながら改札口を出た。手さげのかばんは空っぽで、これから商店街へ買い物に向かうのだろう。

夕日も落ちかけている。

店が閉まってしまわぬうちに済ませなければと、その足を急がせる。

花柄の模様が描かれた傘を開き、雨霧によって薄暗い駅前広場を横断しようと踏み出す。

彼女の意識は商店街の入り口に向けられていたのだが、妙な違和感を受けて反射的に足を止めた。

「あれ？」

目をぱちくりと瞬かせ、鼻先に当たった雨粒を指でなぞる。

傘がない。

握っているのは柄の部分だけで、肝心の雨を避ける部分が消えていた。

それは風に飛ばされて駅の構内に舞い戻ってしまったのだが、彼女は気付かなかった。

チ、ピン。

小気味の良い、弦を弾いた音。

直後、女性の視界が縦に一回転。

「
」
高速で回転する世界の中、彼女は自分の身体を俯瞰した。
肩から上の部分がない。

瑞々しいピンク色の断面。

そんな映像が流れ、また視界が一回転。

次に　そして最期に彼女が見た光景は。

自分の顔に迫ってくる、女性物のブーツ。

その靴底だった。

「
？」

「邪魔くせえ！」

駅前広場を縦横無尽に駆ける影。

首のない胴体をハードルのように飛び越えるついでに、守野三桜は跳ね上げられた頭部を蹴り飛ばした。

右足で前へ弾き、それからすぐさま左足で横へ。

サッカーボールのように、しかしサッカー選手ですら到底不可能な動作で、人間の頭部を二回蹴った。

無論ゴールなどない。女性の頭部は駅舎の壁にびしゃりと激突し、放射状に脳漿を撒き散らしながら貼りついた。

転がり落ちた眼球はもう世界を視認することはできないが、尚も視線を回転させながら自分の胴体が微塵に切り刻まれる姿を捉え

他の通行人に踏み潰されてしまった。

頭部を蹴った三桜はそのまま疾走の勢いを殺さず継続。

胴体を刻んだもう一人　矢神聖歌は広場の中心に位置取り、疾走する影を逃すまいと目で追いつける。

聖歌の十指はすべて爪がない。

剥がれた部分からは血が滴り、そして肉の中から細いワイヤーが伸びていた。

ワイヤーは長く、今やこの広場全体に張り巡らされている。ただ今、戦闘領域に侵入した通行人の傘を切り跳ね、首と胴体を分断し、残った胴体をも地に積もる肉塊に変えたのはこれである。

しかもただ張られているだけではない。聖歌は器用という表現では収まらない巧みさで十指を動かし、十本のワイヤーを操っている。

人間どころかその他の動物と比較しても勝っているであろう守野三桜の脚力。それを以てすればこの戦いの決着はすぐにつく筈だった。

しかし現実とは違った。

この状況、獲物である矢神聖歌に近付くことすらできず、回避に徹する守野三桜の方が苦戦している。三桜のカプリパンツはいくつもの切れ目が走っていた。

対して聖歌はロングスカートに長袖のシャツという決して動きやすい服装ではないにも関わらず三桜から一度も傷を負わされていない。

「貴様、慣れてるな」

「傀儡屋は裏稼業の中でも数少ないですからね。並折の外では引っぱりだこの人気者なんですよ。大半を抗争の中で過ごしていたくらいに」

三桜が走りながら屈んで転がる小石を三つ、片手に握った。

「確かにその辺は疑われないよ。私様の速さにすぐ適応できたんだ。自慢していいくらいだ」

言いながらシュピツ、と腕を振る。

走り続ける脚もそうだが、三桜が筋肉を使う際は瞬間的に肥大している。そこから生まれるパワーはやはり絶大で、獣人という能力者の認識がその語感とはほど遠いものだと思い知らされる。人間が獣に近くなるというより、人間と獣よりもグレードの高い新たな種族と認識すべきなのだろう。

守野家は織神楽家のように毒を出す能はない。純粹な肉体性能の飛躍的向上という、シンプルなものだ。

その向上した性能の高さが、半端ではないわけだが。

矢神聖歌はそんな守野三桜の性能に対して、脅威に思わない。

性能の向上？

それこそ、クリエイターの土俵だ。

呪詛ごときの恩恵に、世界有数の人間改造師である傀儡屋が劣ってたまるかという思いが浮き出てくる。

「私にも、見えるんですよね。この程度」

銃弾並の速度を与えられた三つの小石。ただの人間であれば目で追うことも避けることもできない。弾速に近い速度で動き回る守野三桜を目で追い続ける聖歌は、ただの人間ではなかった。

穏やかな印象を保つよう常に細めていた目を見開く。

その双眼から機械的な音が発せられた。それはカメラのレンズを絞る時に発せられるものと酷似している。

疾走行動を継続する三桜は聖歌の目とそこから出る音など気にもしないが、瞳の中では虹彩と水晶体の大きさと形が、確かに変化していた。それはきつと有機的な物質で構成された虹彩と水晶体ではないのだろう。

顔面めがけて放たれた三つの小石を、聖歌は最小限に首を動かすだけで避けてしまった。どうやら彼女の肉体も、三桜のものとは違った手段で性能が向上しているらしい。

そもそも広範囲に展開する長いワイヤー、その一本一本を指先一つで操作しているのだから容易に想像がつく。

「呪詛なんか頼らなくとも、私なら強化改造なんていくらでもしてあげられるのに」

「御免被りたいね。身体切り裂かれて人形になるのは嫌だ」

「人形は素晴らしいですよ。愛しくてたまらない。この世界もすべて人形だったならなんと素敵なお世界になったことでしょう。人形ならば三桜ちゃん、貴女も本当に愛してあげられるのに」
「……」

本当に愛してあげられるのに。

人形であったなら。

三桜は伸びてきたワイヤー二本の間を縫うようにくぐり抜け、側宙の体勢で聖歌を睨んだ。

この程度の攻撃ならまず三桜には当たらない。当たりはしないが無視もできないから動き続ける。動き続けているが、依然として聖歌との距離は縮まらない。聖歌との会話を愉しむ気など微塵もない。可能ならばさっさと片付けてしまいたいのだ。可能ならば。

追ってくるワイヤーは多くて三本。残りは三桜が掛かるのを待ち受けるべく各所に張られている。

これが苦戦の要因。

雨霧の視界の悪さとワイヤー自体の細さで認識し辛い。それが七本、長さを利用して形状問わず潜んでいる。これでは機動力をこっそりと削られてしまい、厄介極まりない。

そしてこの雨天。

これも苦戦の要因。

雨水は臭いを洗い流してしまう。雨霧は視界を悪くする。雨音は雑音として邪魔をする。

たかが雨のもたらず影響だと思われるかもしれないが、五感の発達した三桜には鬱陶しくて仕方のないもの。それが集中している状況なら尚更。

もちろんそれを克服した彼女ではある。克服はしたが感覚除去はできるわけもない。やはり余計に集中力を削がれる。

戦場の環境が悪ければ悪いほど、矢神聖歌には有利なのだ。

「裏稼業、傀儡屋か。貴様がそこまで人形に固執する気配なぞ見掛けなかつたがな」

「羽田立荘には持ち込んでいませんでしたからね。その代わり、毎日のように工房へ通っていましたけど」

「またも飛んできた小石を見送りながら口を動かす。

「まるでおままごとをしている感覚で、羽田立荘の生活も楽しかったです」

こいつ、人形と人間に対する感情があべこべになっているのか？
笑顔を貼りつけて語る聖歌とでは感性の不一致が見られる。

三桜はそんなことを思った。

どちらも異常の域に入る感性の持ち主であるので一致する方が珍しいというのに。

「戦闘に用いる筋力は発達していないからとタカをくくっていたが、中身が別物だな。大方、体重計をぶつ壊す重量してんじゃないの貴様」

「否定はしませんけど不愉快な言い方ですね」

「まさか貴様が人外だとは思いませんでした」

「貴女に言われたくはありません」

「難儀なもんだね」

「ええ。難儀なものです」

キユピア！

地に流れる水を弾き上げ、弾力をもつて張られたワイヤーが三桜の疾走方向に飛び出す。

「ぐう！」

仰け反って滑りながら下をくぐったが、更に二本、進行方向を先読みした線刃が待ち受けていた。

これでは勢いを殺すしかない。

回避方向の再考をする間もなく、もう一本、更にもう一本と、次々に三桜の周囲で聖歌の線刃結界が形成される。

ついに三桜は捕われてしまい、腕組みをして溜息を吐いた。

「ほんとうに難儀ですよ。つい半日前まで、貴女と私は仲良く過ごしていたというのに。この世界に身を置く以上、こういつた関係になるのも避けられません。貴女は純血一族。私は結界寮に所属する傀儡屋。最初から互いに知っていれば……」

「知っていて私様に羽田立荘を提供したと思っていたが、違うようだな」

「知りませんでしたよ。貴女も、クロちゃんも。知っていたらこんなに心を痛めませんもの」

「それにしては随分と嬉しそうに笑っているじゃないか」

「あら、わかります？ 純血一族を材料にした人形を作るこの期待感、尋常ではありませんもの。一度は諦めたのにすぐ機会が巡ってきたのですから、笑うしかありません」

「やっぱり貴様 pygmaは、最初から織神楽音々子を欲して

いたんだな」

織神楽音々子。

その名前を聞いた聖歌の顔から、笑顔が剥がれた。

「……なにやら事情を把握してしまわれているようですね」

「羽田立荘の倉庫なんか記録を残してりゃあ当然だ」

「ま、いいでしょう。こういうこともあります」

おぞましく線の垂れた指の関節を鳴らし、聖歌は捕われの獣人に近寄ってくる。

その視線が三桜の視線と交わることはなく、ひたすら引き締まった肉体にばかり惹かれていくようだ。

「ちなみに pygma というのは私の商売名です。矢神聖歌は私の商品名。つまるところ pygma も傀儡屋も矢神聖歌も、全部私ということですよ」

「おまけに結界寮に所属か。ならば織神楽響を並折に呼び込んだのは……」

「ええ。お察しの通り私の立案ですよ。解毒爪を持った便利な人形の制作計画は、江本正志の一方的な拒否によって破綻しましたし。折角なので純血一族当主の人形を作ろうとしたのです」

「江本正志の一方的な拒否？」

濡れた髪の下で三桜の眉がぴくりと動いた。

聖歌は隠すこともなく肩をすくめて話を続ける。むしろ愚痴を聞いてほしいといった表情と態度だ。

「そうです。もともと江本正志と私は商売上の知り合いでした。そんな彼がある日、『自分ではどうにもならない事態に巻き込まれた』

と言つて私に助けを求めてきた。浮気していた愛人とその娘が、裏世界に名を轟かせる純血一族の脱走者だったらしく、織神楽家に娘を引き渡すよう脅されていると」

「……………」

「私はその母親と娘をこちらで引き取つてやると言いました。そうすれば彼は織神楽家の標的から外れる。わざわざこの傀儡屋が標的として庇つてやると言ったのですよ。まあ、それくらい価値のある母娘だったからなのですが。しかしいざ見本として彼の元へ向かい、同時に母娘を回収しようとしたところ、彼は猛烈に拒否したのです。『話が違つ』と言つて」

「それは貴様が引き取るという名目で、親子を材料にしようとしたからだろう」

「あらら、意識の擦れ違いというやつですか。難しいですね」

「白々しいな。そんな表情じゃあ悪意があつたのが丸わかりだ」

「…………」。彼は私の手の届かぬ場所に親子を隠してしまいました。探し当てるのは少々時間が掛かります。それに二人を欲していたのは私だけではなく、私よりも広域の情報網と人手を持った織神楽家も動いていましたから。先に辿り着かれてしまうことは容易に想像できました。その時点で涼子と音々子は諦めたんです」

「けれど手ぶらで帰る気にはなれなかつたと」

「その通り。だから代わりに彼の妻と娘を頂くことにしたのです」

「それでは貴様自身で書いた記録と食い違つじやないか。あれには正志が織神楽親子と江本親子をすり替えたという旨の記述がされていたぞ」

「ああ、そうでしたっけ？　ま、私が残す記録ですからどう書こうと私の自由です。正志が殺害されるのは明白でしたし。あんなものは夢日記程度で感覚で筆を躍らせるだけでいいんですよ。形式です形式」

舌まで躍らせる傀儡屋は一方的で、聞く側である三桜のリアクシ

ヨンなど気にもしていない。

話す間に三桜が汚物を見る目で睨んでこようが、唾を吐きかけてこようが、聖歌は変わらぬ表情で衣服に付いた唾を拭いて話を続けていた。

「そんなわけで江本正志の奥様と娘を回収することにしたのです。素早く意識を切り替えることは大切ですね。もたもたしていたら江本親子まで織神楽の手に掛かってしまいますからね。一応、解毒準備は万端でしたが、どんな毒で殺されるかわからない以上、解毒作業が必然面倒になってしまうのですよ。材料自体は生きていても問題ないですし。その場合は搬送が面倒ですが、たまには新鮮な材料というのも良いものです」

「その時点では生きていたのか」

「はい。ところが……ところがです！ いやはや、まさかそんな夕イミングで江本親子が死んでしまうとは思いませんでした」

「貴様の妄想日記には死因が交通事故死、とあったが？」

「交通事故死ですよ。私が御宅を訪問したら血相を変えて飛び出しましたね。そのまま車道で親子揃ってトラックにドーン。後で調べたところ、どうやら事前に私 傀儡屋の事が伝わっていたようですね。私が来たら逃げろ、と連絡されていたようです。迷惑な話でしょう？ 余計な事をするから材料に損傷ができてしまったのです」

「交通事故死と記載したのは、目の前で親子がはねられる光景を目にしたながら、それでも死体に違和感があつたからなのか？」

「違和感といえますか……その時のことを詳しく言うと、実は訪問した際に飛び出したのは母親の方だけでして。娘は母親に抱えられていただけなんです。ぐったりしていましたので、おそらく」

「貴様が訪れる直前。母親が、心中しようとしていた。」

「そう考えたわけです。一応死体の解体作業中に確認を試みましたが、結局よくわからなかったというのが本音です。私にとってそれは重要ではありませんから。事実、親子を材料にした人形は問題

なく出来上がったのです」

「それが」

「作品、江本佐々奈」

ピシヤン！

雷光に照らされた矢神聖歌の顔は、江本佐々奈の名を口にしたまま甘美な余韻に浸っていた。

つまるところ江本正志は同居していた織神楽涼子・音々子親子も、別居していた妻と娘も、材料として提供するつもりなどなかったのだ。

それを聖歌は半ば強引な解釈と、身勝手な行動で、江本母娘を手に入れた。

「貴様はべらぼうに屑だなあ」

「よく言われます」

にこやかに返す聖歌。あまりにも自然なその笑顔には嫌悪感すら抱く。

「で、貴様自身も作品ってか」

「私は私の作品ではないですけどね。私は先代の傀儡屋、つまり私の師匠が作った人形ですから」

「体内に切断用ワイヤーを仕込んだり、その師匠は随分と悪趣味な奴だな」

「悪趣味……確かに、そうかもしれませんね。でも、今では感謝しているんですよ」

ピン、ピン。と指先から切断されたワイヤーが抜け落ちた。

彼女はおもむろに自分の袖をめくった。

腕に走った縫い目が露出する。縫い糸の色からして、三桜が見つけたバイオレットモノフィラメントだろう。

さらに少し屈んでロングスカートの端を掴み、ゆっくりとたくし上げはじめた。

あまり見る機会のなかった彼女の細い脚があらわれる。

膝も見え、太もも全体が露わになっていく。

ついに下着が見える位置まで　下半身すべてを、三桜に見せた。スカートを右腕で胸の前に抱えた聖歌は、もう片方の、左手で自分の右太ももを撫でた。

雨に濡れた手は上へ上へと滑り、指が下着に引っ掛けられる。

そのまま艶めかしい指遣いで少し横へずらした。

「っ」

「ご覧の通り、さすがに子供は作れません」

見せられた聖歌の股関節から太腿の部分に、三桜は言葉を失った。

三桜の反応をよそに聖歌は衣服の中を次々に見せる。

シャツの中。腰部や胸部、腹部まで。

矢神聖歌の全身を走るバイオレットの縫い目は数えきれない。

そして肌の色が、それぞれ違う。

「一応、作られた当初は透明の縫合系でしたけど。この方が、人形味溢れるでしょう?」

聖歌は自分の身体を見せて悲惨さを伝えたいのではない。

自慢しているのだ。

とても嬉しそうに。

人形としての自分を自慢している。

もはや呆れるしかない三桜は顔をしかめて首を横へ振った。

「並折へ家族旅行に訪れたあの日。私の家族は、先代の傀儡屋によって殺されました。父親は使用不能だと言われて廃棄され、残った母と妹と私、三人分の死体で、矢神聖歌が作られたのです」
「部屋にあったあの写真は……」

「ああ、あんなものまで見ていたのですか。そういった詮索は感心しませんよ、三桜ちゃん。あの写真は、私たち家族の生前最期の写真です。撮影したのは私ですね。妹とは双子でしたから、よく似ていたでしょう?」

「随分長生きだな」

「そうでしょうか? まだ四十数年ほどしか生きていませんよ。師匠は変わらぬお姿で百年近く生きておられるのではないのでしょうか」

これはこれは。獣人である私様と比較しても遜色ない人外ではないか。いやいやこんな無機的な物と比べるなんて怖気が走る。

三桜は心中嘲笑った。

「矢神聖歌、貴様にはがっかりだ」

聖歌との会話は三桜にとってあまり心地の良いものではない。

べつに人形に対する狂気を帯びた思考と行動が、三桜の心情を左右することなどない。実際彼女は「ああ、いるよねそういう奴」程度にしか思っていない。

だが彼女が獣人であり弱肉強食を信条とする以上、矢神聖歌という存在のある点に対してひどく不快に思い失望するのは当然だろう。

人形は 食べられないのだ。

恣意的な思考をする者の多い守野の人間にとって、そればかりは

例外的に、一貫して合理的に、通う血液によって機械的に、こだわ
りを持つ。

人肉食、いわゆるカニバリズム。

これは守野家に見られる風習で、宗教的な慣習ではない。

純血一族総勢十三家系に共通した思想『人間を超えた人間による
支配』。その証明として獣化能力を身に付けた守野家が行ったのが、
人間の捕食である。

つまり人間に対して弱肉強食の現実を示す為の見せしめという意
味合いが強い。

無論、その食欲は他の動物にも向けられるだろうが、彼らは人間
以外には積極性を持たない。やはり血に宿している呪詛の残滓に因
るのだろうか。

どんな呪詛を宿したのか。それを知るのは当主である守野三桜く
らいであろう。彼女自身もそればかりは他言しないようにしている。

ゆえに人間の形をしながら人間ではない矢神聖歌は、守野家にと
ってひどく不愉快な存在。

「超常の力を持っていたとしても、人間の肉であれば人間として認
識したけどね。貴様の肉はどうだろうね。貴様の身体を構成するの
は死肉だろう？ それも一人じゃない。三人分の死肉。この私様に
そんなもんを喰わせようとは、無礼にも程があるだろう。貴様はも
はや弱肉ですらない。そうだな 腐った残飯だ」

線刃結界の中で嘲笑を続ける三桜に合わせてなのか、聖歌も「ふ
ふふ」と笑い声を出した。

目は全く笑っていないかったわけだが。

「知った事ではないです」

冷めた目つきで口だけをにたり歪ませる。
状況は圧倒的に聖歌が有利。それでも口の減らない三桜が、聖歌は気に入らなかった。

「怯えないのですか？ 私がほんの少し操作すればこの線刃結界が一気に収縮し、貴女を押し切ってしまうというのに」
「なんだ怯えてほしいのか。どんな声がお望みだい？ ただし私様は馬でも鹿でも犬でも猫でもないぞ」
「……………」
「正解は雌豚でございましたブヒブヒー」

鼻先に指を当てて鳴き真似をする女に、聖歌は軽蔑の表情を見せた。

ワイヤーの一本が鋭く突き出て三桜の頬に切り傷を付ける。

「このあばずれの……腐れ売女」

「残念でしたこう見えて私様は処女だ。それに腐っているのは貴様の死肉の方だろう」

「腐ってなどいない」

「死んだ者の肉体は腐り朽ち果てる。それが理なんだよ。防腐剤を使って腐蝕を防ごうが、魂を失った肉体は、腐蝕の道を辿るしかない。それは生ける者なら誰もが受け入れなければならない現実であり、己の魂を収めていた器に対する敬意でもある。貴様は器を腐らせながら未練がましく漂い続ける死霊だよ」

「黙れ！ 貴女はそんなこと言わない！ 言わない筈なの！」

「……………は？」

「私の身体を 妹を侮辱する人間が居るものですか！ 三桜ちゃんはそのようなこと言わない！ 言わない人間！」

おそらく、聖歌はまだ半日前の三桜と目の前の三桜を同一視でき

ていない節があるのだろう。

ただ並折の結界を求めて訪れただけの逃亡者。

そう思っていた女が、実のところ異常に異常を上乗せしたような世界屈指の殺人集団の一員。キシキシと線刃の擦れる不協和音に包まれても尚、毛ほども動じない超常者。

半日前までの日常を過ごす姿は、人間として想定内であった。それが突如として豹変した今。自分で『この世界に身を置く以上、こういった関係になるのも避けられません』と言ったにも関わらず、それに適応できていない自分が居る。

人を人形のように見なし、人形を人のように見なす傀儡屋。人形ヒケマリオ偏愛症コンプレックスの塊である聖歌には振り幅が大きすぎ、急すぎたのだ。

「あれ？ 自分の身体を商売道具にしていた貴様こそ、まさしく腐れ売女なんじゃないか？ その点、私様は同性しか愛さないピュアな女だからなあ。もうあれだ、貴様の腐敗臭と私様の純潔な香りでは比べるのも阿呆らしいよ」

「……………」
「だからさすがの私様でも貴様は愛せないね。見本として送った先で、文字通りの愛玩人形にされていそうだもん。愛玩人形、わかる？」

「……………」
頬をひくつかせる傀儡屋。
少し生かしておけば人形らしく線刃に怯える様を見せてくれるか
と思っただのに。

「妹をこれ以上侮辱されるのは、許せない」

ワイヤーを指先に繋げ、結界収縮の構えに入る。

あとはゴム管に包まれた銅線。これは指先のワイヤー射出・巻き取りギミックの一部だろう。

よくもまあ、あの細身の中にこんなものを仕込んだものだ。

傀儡屋の技術に素直に感心してしまう。

面積の少ない脂肪層。細胞も健在。聖歌の言う通り、それは確かに腐っていない肉体だ。

しかし三桜は腐った死肉であるという言い分を取り下げつつもりなどなかった。

肘から千切れた腕を持ったまま、彼女は自分の人差し指を立てる。ペティナイフほどの長さまで伸びた爪を、腕のちょうど真ん中あたりの位置。その柔らかな皮膚に差し込んだ。

爪が骨に届いた感触。

そのまま聖歌の腕を回し、一周する切れ込みを入れた。

切れ込みに爪を四本差し込み、骨だけ残して肉を削ぎ取る。

爪にこびりついた脂肪や粘液、血液を払い、削がれた肉片と共に血だまりのできた地面へビチャリと落とす。

骨の剥き出された部分は雨で血を洗い流され、三桜は黄白色をじっくり眺めた。

骨には、紋様が彫られていた。

「古代の異端術法。それも異端中の異端。禁術つてやつか。この紋様が死肉に生きていると錯覚させていた、いわゆる動力源。初めて見たが……こいつぁ、クレイジーだ」

顕現したと錯覚させる現実に近い幻想。

骨から離れ、地面に落ちた肉片は瞬く間に変色し、異臭を放って腐っていた。

あるべき姿に、戻ったのだ。

「む……」

骨の空洞から垂れた鋼線がピクリと動いた。
鋼線の続く先　聖歌が埋まっている砕けた石塊。そこが微弱に揺れている。

「精巧な上に頑丈ってか。しぶとい人形だ」
「か……かはっ……」

積もった石が次々に転がる。
そう。巨大な石塊の直撃を喰らい、押し潰されても、矢神聖歌はまだ動いていた。

「早く死ね。ああ、もう死んでるのか。どう言えばいいんだ」
「うぐ……うぐうぐ……」

砕けた石塊の隙間から一本の腕が伸び、そのさらに奥から視線が伸びてきた。

「なんて……ちからなの……」
「純血一族を嘗めすぎだろ貴様。あんなモンで動きを封じられると思っていたのかよ」

「な、なみおりの……け、けっかいは……じゅ、呪詛を……」
「あ??」

「呪詛を……弱効化……するはずなのに……」
「おお確かに」ぼん、と手の平に拳を当てる。「そういえば完全な獣化ができなかったから、妙だと思っていた。なるほどね、純血一族の諜報員がことごとく殺されたのは、呪詛弱効化という境界効果があるからなのか。いいこと聞いちゃった」

状況は逆転。

三桜は石の上に座り、肩を揉みながら首を回している。勝敗は決した。そういうことなのだろう。

「か、かんぜんな……獣化ですって……？ あなた……まだ余力を……」

「当然だろうが。どうして私様がたかだか人形遊戯ごときに本気を出さなきゃなんのだ」

「……………」

「私様もいい歳なんでね。お人形さんと遊ぶ時期はとうに過ぎているんだよ」

「て し、る」

「ああ？」

まともな発声すらできていない聖歌に、三桜は耳に手を添えて聞き返す。

石と石の隙間から覗き込み、「聞こえんなあ」と大声で伝える。

「 回しる」

「ちゃんと喋りやがれ残飯人形！」

「撤回しろと言っているんだあああああああ！」
「な っ！」

プンプンプン！

反射的に両腕で顔を覆った三桜は後方へ飛び退いた。かろうじて切断を免れたものの、彼女の腕や脚には深い切り傷ができています。

五本のワイヤーは唐突に石を貫いて突き出てきた。
まるで生きているようなうねり。

まるで感覚器官を身に付けているような挙動。

五本の蛇のように、すべてのワイヤーが三桜を切り裂いたのだ。

「許さない許さない許さない」

ビュン！

ビュルン！

石の下から突き出たワイヤーは狂乱する。

「人形遊戯……！ お人形遊び……！ 私の業が、戯れだと……！」

パシン！

パンパンパンパン！

鞭のようにしなる五本が石を叩きまくるその光景は、頭を打ち付ける狂人の姿を連想させる。

「殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる」

距離を置く三桜の目の前で石が切り刻まれてゆく。

言葉を発する間もない。

ものの数秒。歪だった石塊は、小さな小さな綺麗な綺麗な、断面の整った欠片になってしまった。

その下からようやく傀儡屋の女は上半身を起こし、姿を現す。

もはや人間とはほど遠い。

矢神聖歌とはほど遠い。

皮膚の大半が剥がれ、各所から鋼線の飛び出した異形。

悲惨で哀れな、人間に成りすました人形の、なれの果て。喉の亀裂から荒い呼吸音を出す聖歌。彼女は完全に発狂状態だった。

対して三桜の方は、

呆れ冷めた眼差しで壊れかけの人形を眺めていた。

興味なんて失せていた。

放っておいてもこいつは勝手に壊れる。

喰えもしない人形の相手など、もう興奮めてしまった。

「遊びだよ遊び。貴様そのものが玩具。おもちゃの国からやって来たお人形さん。もはや壊れかけの貴様に、なんの価値がある？ 貴様の遊びに付き合わされた私様の身にもなれよ」

顔に付いた血を乱暴に腕でぬぐい、手の甲に付けられた切り傷の患部をペロペロと舌で舐めながら言った。

脚が潰れて、へし折れて、無数の鋼線が絡み合って、移動などできるわけもない矢神聖歌の哀れな姿。広場の中心で荒々しく肩を動かす彼女から離れるように、三桜はゆっくりと後退する。

「待ちなさい……待てよ守野三桜お！」

聖歌は叫び、残った唯一の片腕を力いっぱい振る。

ぶち。ぼとん。

縫合糸がすべて切れ、その腕も空しく地に落ちてしまった。

「撤回しろ。撤回しろお……」

「やだね。純血一族に手を出し、嘗めた真似をした報いだ。ついでに貴様のお遊戯に大勢を巻き込んできた報いも受ける」

「お願いだから、撤回しなさい……。妹が……。私の妹まで……。私の

妹への愛情まで……否定しないで……」

絡まった下半身によってバランスを崩し、聖歌は全身を水の溜まる地面に打ち付けた。

受け身すら取れないしたたかな衝撃。痛覚機能の停止した聖歌はそれでも顔を上げ、背を向けて歩き出した女を呼んだ。

振り向きもしない。

ついには首の接合部が鈍い音と共に折れ、顔面が水飛沫を上げて地に激突した。

聖歌の全身はもう言う事をきかない。

溜まる水に顔が沈んでゆく。

顔の無い子供の像と女性の像が、地にへばりつくがらくたを見下ろしている。

通行人が広場に少しでも足を踏み入れれば命を落としたというのに、中心に位置する像には傷一つなかった。

絡まる鋼線に巻き込まれた無線機。ノイズ混じりに傀儡屋の名を呼ぶ声。応答者はなし。

雷の鳴轟と爆光を腹に抱えた雲が、今後も容赦なく涙雨を流さんと並折の空に腰を据えている。

(どつして……)

ひたすら雨粒を全身に受け続ける矢神聖歌が、二度と晴天を目にすることはないだろう。

(私は、なにも、悪くなんて……)

眼窩や鼻腔から垂れ流れるのは、後頭部の亀裂から入り込んだ雨

水。

（私はただ、姉として姉姉姉と姉と聖歌お姉ちゃ姉ちゃんがかが…
…）

回線はショートし、頭蓋骨の中でなにかが弾け、

（あの子の……すすす好き……にん……ぎょ……う）

脳髄も機能を停止。

（
）

偽りの表情を模していた瞼も頬肉も動くことはない。動かす思考
回路もない。

しかし最後に意思なき彼女の唇だけが水中で微動した。

「と、もも……かか……智……歌……」

誰にも聞こえることのない溺れた呟き。

固定された眼球。その視線の先には、千切れた片腕。
爪のない指の一本には、

「……………」

指輪の跡が残っていた。

PUNICA【あつたかい雨の降る夜】7

羽田立荘の濡れた庭。

瑞々しく水滴を湛えた芝生の上に座り込む。

いつになったら止んでくれるのか。前髪からぼつぼつ滴るしずくに問い掛けてみる。

問うまでもなく答えは全身に返ってきていた。

今日はよくずぶ濡れになる日だ。水を吸った浴衣がべったりと身体を締め付けてくる。

少し前までの、あの凄まじい音が嘘であったみたいに、庭は静かなものだった……。

周囲にたちこめる異臭が鼻をつく。

未だ雨に流されることなき臭い。

でも嫌悪なんてしない。

顔をしかめたりなんてしない。

「人形は、なかなか死ねないから困る……」

頭だけになってしまった大男が、私の右腕の中に抱かれたまま、
呟いた。

私を助けに来てくれて、式神などという化け物を相手に単身挑んだ化け物。

弱い私は、敬意を表して、彼らのことを化け物と呼びたい。

統界執行員カザラ。

私が彼に抱いた第一印象はあまりよくなかった。

何故ならば、その姿を受け入れられなかったからだ。

日常を送るにふさわしくない頭部装甲と、どれだけの血を染みこ

ませたのかわからないコートと前垂れ。

純血一族の守野三桜や、結界寮の梵や林檎や明朗だって、日常と同化しても違和感のない居姿をしている。これは私のエゴであり並折に於いては場違いな思考でもあるが、それでも私は、忍装束姿の響を含むそういった異常を体現した姿に怯えてしまうから、嫌いだった。

響よりも禍々しい格好をしたカザラが、普段着の明朗と共に立つ光景を見て、ひどく悲しかったのだ。

明朗の書置きを見た直後、裏の勝手口から飛び出した私を保護し、彼がすぐに助けてくれた。

それなのにそう思ってしまったのは、本当に申し訳ないと思っている。

「カザラ……さん」

私が呟き掛けると彼は「おや俺の名前を覚えてくれたのか」と、嬉しそうに赤い光源を点滅させた。

庭じゅうに散らばった彼の身体達は、注ぎ込まれた毒の影響で異臭と共に腐敗している。

「傀儡屋の作品として、罪を償い続けてきたが、ようやく解放されるな」

「傀儡屋って、聖歌のこと？」

問いには点滅で返し、肯定の意を示してきた。

「事情は知っている。この宿で共に過ごしていたそうだな、天宮柘榴」

頷いて応える私が、傀儡屋としての聖歌に対して悲愴な面持ちをしていたからだろう。カザラは「矢神聖歌は人形だ。自分も人であると信じ込んだ、な」そう言った。

聖歌はやっぱり人形だった。

正直信じられない。聖歌が人形である証拠を目にしていないから、信じるかどうかは私の自由だ。

聖歌は私にとって姉のように思ってた。傀儡屋だと聞かされても、それが変わることはない。三桜とは違って、私は彼女が結界寮の人間だったとしても然したる影響はないもの。

たとえ人形だとしても……私は聖歌と同じように接すると思う。けれどいくら私がそう思っている、きっと聖歌はもう帰ってこない。そんな気がした。

私。三桜。聖歌。

羽田立荘は三人で使っていた場所だ。私だけが、気にしないよと言ったところで意味なんてない。三桜は二度と聖歌と相容れないだろう。

聖歌が三桜を純血一族だと知っていたのかはわからない。響は知っていると予想していたし、傀儡屋が純血一族の能力者を材料として欲していたのも事実なのだから、知っていたのかもしれない。

……間違っているのは私だ。

誰もが あの子でさえ警戒して過ごすこの並折で、私は……普通の生活に重きを置いている。この時点で間違っているのだ。こんな考えを三桜が聞けば青筋を立てて怒りを示すだろう。

割り切れない。

甘ったれ。

私だけが場違いの馬鹿女。

『傀儡屋が交戦中』たしかカザラがそう言っていた。胸が締め付けられる思いだ。

聖歌と三桜は戦っているのだ。

結界寮と純血一族として。私なんかと違って割り切っているのだ。間違っている、こんな……いやだ。

生きたい。情も保ちたい。

『ならば並折になんか来るな』三桜にそう言われちゃいそうだ。

なんとか頑張つて、三桜に迷惑にならないように、この意志を曲げずに、この場所で生きたい。できなきゃ死ぬ。当然だよな。

私は右腕に抱く頭を見つめた。

こんな大男が、こんな姿になつてしまう場所なのだから。

「聖歌がカザラを作つたのね……」

「二百八十五体目の作品だ」

「そんなにたくさん……全部、死体や生きた人間を材料に使つたのよな……」

「彼女は、そうだな……悪い人だ。そして悪いことを悪いと思えなくなつてしまつた可哀想な人形でもある」

「貴方は」

「俺も悪人さ。傀儡として蘇生させられると、生前の記憶が混沌とねじ曲がつてしまう。だから俺は覚えていないが 悪行を働いて処刑された死体なのさ」

「統界執行員は、みんなそうなの？」

「そうなの？ というのは、みんなが悪人なのかという意味だ。」

この問いに、点滅は返つてこなかった。

彼は今わの際であっても、聖歌のことを話し続けた。

「彼女 いや、矢神聖歌は、彼女達と呼んだ方がいいな」

もはや独り言なのだろう。赤い光源はその光を弱めている。

私を認識できていない。

「聖子と智歌。二人で……聖歌。人形が好きだった妹。妹が好きだった姉。人形と一つになつてしまつた妹。妹と一つになつてしまつた姉」

機械音に近い声になつてきた。私にはあまり聞き取れない発声だ。

「そして 己の家族を皆殺しにした傀儡屋に、憎悪の念を抱く母親の身体も少し混じっている」

カザラの頭部にも毒が染みこんでいた。
頭部装甲の内側から、中身が腐る異臭が昇ってきている。

「全部混ぜ込んで　矢神　聖歌　」

光源の赤が消えた。

声を掛けても、カザラは応えない。

彼は彼なりに罪を償うという目的を持って人形であり続けた。それはきつと彼自身で見出したことだ。

ならば聖歌は……傀儡屋は……人形を何の為に作っていたのか。蘇生させられた人形の、その後を考えていたのか。復活させられてしまった人格は、記憶が混濁して生前のような生き方すらできないんだぞ。

悪いことを悪いと思えなくなってしまった可哀想な人形……矢神聖歌。カザラは辛かった筈だ。他の人形だって。

聖歌……これじゃあ本当に悪人だよ。最低よ……貴女。

カザラが動かなくなつたその直後。

私の左腕で抱えていた、もう一人の身体が揺れた。

真っ白な忍装束。

赤に濡れた忍装束。

織神楽響が目を覚ましたのだ。

「む……ぐ……」

「動かない方がいいです。助かりたいのなら」

カザラと響。この二人は、私が危惧していた通り、戦力差がありすぎた。

片手しか使えない響に、カザラは手も足も出なかったのだ。しかし、

「自爆とは、やってくれる」

カザラは捨て身の攻撃で、響に重いダメージを与えたのだ。

響は驚いただろう。まさか自分がこんなに手痛い傷を負うなんて思ってもみなかった筈だ。

戦う間、響はカザラを罵倒し続けた。

跳躍力に劣り、反射速度に劣り、成すすべもなく全身に毒爪を刺されまくったカザラを、ひたすら虚仮にした。

毒の回りが遅いカザラが人形だと気付き、さらに罵倒した。

私の知る響らしからぬ形相で、声を荒げながら。

『貴様は雑魚だ!』

『勝算はない!』

『未来などない!』

『絶望して死ぬしかない!』

『最期は独りだ!』

『惨めに独りだ!』

『助けに期待するな!』

『期待するから惨めなのだ!』

『期待は期待した分だけ絶望に打ちひしがれるのだ!』

『裏切られて絶望するのだ!』

『絶望を覚悟してなお期待したところで!』

『要らぬ駒として貴様は捨てられる!』

『 某のようにな』

まるでカザラを罵倒しているのではなく。

自虐しているような、そんな光景だった。

でも私もカザラも、彼の心の内を知るわけがない。

四肢を腐らせながらカザラは『たしかに勝算はない』と認め、しかし『敗算ならある』と言った。

直後 空中で密着していた二人が爆発。

自爆という、敗算。

実力で式神にのしあがった響が相手だったからこそできた、その反射神経と機動力を使わせない、最適の算段。

そんな滅茶苦茶な結末。

カザラは残骸と化し、織神楽響も致命的な傷を負って、どちらも私の腕の中に居た。

致命的な傷。

致命傷。

そう……響が爆発によって受けた傷は、深かった。

カザラの破片が刺さっている。肋骨の隙間から内臓 おそらく

肝臓に届いている。もし傷つけていたら死に至る。肋骨も何本か折れているみたいだし、これが同じく刺さっていることも考えられる。爆発の衝撃で内臓が破裂している可能性だって無視できない。

とにかく近距離であんな爆発を受けたのだ。致命傷になりうる要素が身体の各所に発生している筈。

一応、私は彼にそう教えてあげた。

「すぐに治療すれば間に合います」

「……」

「並折の医療機関が駄目なら、この地を離れないと」

「……」

「すぐにでも三桜に合流して」

「たわけ」

赤く染まった覆面が小さく動き、さえずるような一言。

私の膝に頭を乗せている彼は、右腕側に抱かれたままのカザラを一瞥し、それから私を見た。

「たわけ者だ。貴様は」

撫でるような口調。威厳ある彼のものとは思えなかった。

たわけと言われて困惑するが、それが結界寮のカザラと純血一族の響を両腕に抱いた私の姿に対するものだと思いつく。

彼は疲れ切った、ひどく眠たそうな目で、空を仰いだ。

細い溜息を吐き、「もう助からぬよ」と、私の膝を叩いた。

「どちらにせよ。な」

「どちらにせよ？」

「貴様の検分通り、おそらく肝臓に傷が付いておる。ここを傷付けられると出血量が多いからな。純血一族は、皮肉にも輸血に手間がかかる。本家から同族の血液を調達するには、いささか時間が足りまいて」

「もしかしたら三桜が並折の外に織神楽家の者を待機させているかもしれないよ」

ぼんやりと上を向いたまま下から私の顔を見つめ、また笑われてしまった。

諦めてしまっているのか。

式神という、いくつもの修羅場を超えてきた響が。

「どちらにせよ助からぬと、言っておるうに」

どうして。

どうしてそこまで悲観的なんだ。

私は響の人質という身であるにも関わらず、こうして助かる手段を提案しているんだぞ。

それをたわけ者と言われたって、私は構わない。

そりゃあ、この人は怖いし解放されたくて仕方なかったよ。

でもそれは、この人なりに並折で生き抜こうと。

結界寮という集団から逃げ延びようと。

生きようとしたからでしょう？

どうして、ここで諦めるんだ。関東からここまで、追っ手を付けられながらも単身逃げ延びてきた貴方の執念は、そんなもんじゃない筈でしょう？

「困惑しているようだ。なぜ、某が、こつもあつさりと観念したのかわからんようだ」

「わかりません」

「たしかに三桜嬢ならば、並折の外に純血一族の医療班と輸血の準備まで手配するかもしれぬ」

「だったら……！」

「《三桜嬢が、某を並折から生きて出そうとしていたなら》な
「はい？」

言っていることの意味が解らなかった。

三桜は、響を回収する為にやって来たのではないのか？

「貴様の言う通り、三桜嬢は某を回収しに来た。おそらくそれは間違いない」

ほら。響だつてちゃんとわかっているじゃないの。

あいつは響が中部圏に入った頃。つまり六月から並折に来ていた。明朗と話した時に思ったように、響の逃走情報は純血一族だつて掴んでいただろうし、式神という重鎮を放っておくわけがない。

三桜が式神の響を助けに来たと考えるのは当然じゃないか。

そう述べてみても、彼は「少し違う」と言う。

なにが違う！ どこが違う！ 《三桜嬢は某を回収しに来た》。

そう認めたのに、そこから《三桜嬢が、某を並折から生きて出そうとしていたなら》という言葉が出てくるのはおかしい！

「ああ……そうか。貴様は……」彼はようやく私の困惑する原因がわかったとしても言うかのように頷いて、

「組織というものの複雑さに、あまり触れたことがないのだな」

血を纏った舌遣いで言った。

うむ、と響は何に納得したのか数拍置き、続ける。「ようするに

「

ようするに？

「回収はするが、助ける気はない。そういう事だ」

響を回収はする。

でも、響を助ける気はない。

あまりにも彼が平坦な口調で話すから……。

これがとても辛い内容だと、私は気付けないでいた。

響の口から、それを言わせてしまう事。それはきつと今後も私の

心を締め付けるとは露知らず。

呆けた顔で彼の口の動きを、ただ見つめるだけだった。

「守野三桜は織神楽響を、殺しに来たという事だ」

だから、たとえ急げば助かるやもしれない傷であろうと、急ぐ意味がない。

並折の外には、医療班も治療の準備も、用意されていない。

三桜に合流する。それは 首を差し出すのと同義。

彼は独りで逃げ続けるしかなかったのだ。

いや……三桜が来ていると知ったのは、私と会った時だったのだから。その時点で諦めていたのか？ 観念して三桜に首を差し出す心積もりだったのか？

「響さんは式神なのに……純血一族はどうして助けようとしらないの……」

「べつに三桜嬢を派遣したのは純血一族十三家系の総意ではなからう。おそらく織神楽家の何者かが某を煙たがり、今回の絵図を描いた。名目は《救出》。しかし本意は《殺害》。命令を下す御上と三桜嬢の間に、織神楽が入ればこうなることも納得だ」

……なによ、それ。

織神楽響を殺そうと企てたのが、同じ織神楽家の人間ってこと？

で、でも。いくらなんでも織神楽家だってわかっている筈よ。並折で響が死んだという結果は、織神楽家ひいては純血一族全体にとって宜しくないってことくらい。

そんな結果が出回ってしまえば……純血一族が並折に対して一步引いてしまう　つまり士気と積極性が下がってしまう。
それに並折が他勢力に対して牽制する恰好の宣伝材料になってしまふ。

身内の謀略の為に、組織全体が後々不利になるようなこと、さすがにできるわけが　。

あ。

……ああ。

……そうか。

だから、三桜が響を回収して直接手を下す必要があったってわけか。

死体が並折で見つかりさえしなければ、どうとでもなる。
そういうことなのか……。

「ひどい……」

こんなの、ひどい。あんまりだ。

「組織は往々にしてそういうものだ。純血一族も、血が繋がっていたところで小綺麗な関係とは限らんよ。某の、当主の座を欲しがる者として大勢居る。そんな織神楽内のいざこざを外から見ても楽しむ家系もある。あれだけの大所帯ならばむしろ円満な方が不自然だろうて」

「も、もう喋らない方が……」

「任務に失敗し、負傷したのは事実。実力主義のこの世界、己が撒いた種だ。悔やんだところでどうにもならん」

これ以上は死期が早まる……！

「響さ」

「見くびるなよ天宮柘榴」

織神楽響は 私の膝から頭を離した。

この状態で動けるのか……なんて耐久力なのだろう。

立ち上がったその足はふらついているが、纏う空気はパリッと張られている。

呆然と見上げるだけの私に、彼は背を向けた。

歩き出す。

どこへ……行くの。

もう、貴方が行く場所なんて……。

もう、貴方が帰る場所なんて……。

「某を見くびるなよ。守野三桜には捕まってなどやらんよ。くく……組織内に確執が生ずるのは避けられぬ事。そうは言ったが、それを実行に移すは反逆。わかるな？」

織神楽家の中で、当主を謀殺しようとする輩がいた。

そいつは実行に移し、こうして響を死へと向かわせた。

「三桜嬢はあれでも立場のある人間。他家系の三下や、たとえ権威のある者であっても、彼女を動かすことはできん。彼女を並折へ送る命を下したのは御上であろう。だが御上が、御上を守護する某という式神を消す理由がない。つまり」

「上からの命令が、三桜へ伝わる間に、変えられた？」

「で、あろうな。三桜嬢は海外に居た。伝令役の中に織神楽の息が掛かった者でも居たのだろう」

上からの命令は、本当に響の救出だったかもしれない。

だが、海外の三桜へ伝わる途中でその内容は改竄された。
響を邪魔に思う奴の 謀略によって。
ならば三桜は巻き込まれたただけだ。
利用されたただけだ。

「三桜は」

「気付いておらんだろうな。ゆえに、どちらにせよ三桜嬢はこの後、御上によって処分を受ける。彼女が本当に謀略に嵌まり、その手で某を手を掛けてしまった場合、彼女はただでは済まん。しかし某がこのまま逃げ切り、人知れず死したならば、彼女の罪は軽くなる」
「結界寮に死体を回収されるかもしれないですよ？ そうなれば結界寮の思惑通りになって、純血一族は困るのでは」

「……某に、言わせるのか？」

「……あ」

響は……純血一族の益よりも……三桜を助けよう？

「ふん、彼女には言うな。それにまんまと謀略の通りになるのは腹が立つ。貴様の思う通り三桜嬢も利用された身。彼女の破滅もシリオに含まれている筈だ」

「一体誰が……そんな真似を」

「さてなあ」

彼にしては珍しく、ぶっきらぼうで投げやりな口調だった。

そのまま羽田立荘の庭から出てゆき、ふらついた足取りのまま林に消えて行くこうとする。

林の中で死が訪れるのをひっそりと待つつもりだというの？

「あ、あたしも」

「来るな！」

立ち上がろうとした私を恫喝が押さえつけた。

「貴様が付いてくると、迷惑だ」

「そんな」

「統界執行員がここに居たのだぞ。仲間が戻ってくる。貴様の行方が知れぬままだと、結界寮は貴様の搜索を続けるだろう。貴様をここに置いていった方が、時間が稼げる」

「人質……ですもんね……」

「……………」

本望。これは彼が私を解放したということなのだから、本望なのだ、

なのに。

どうしてだろう。

嬉しくもなんともない。

「天宮柘榴」

「……………はい」

「この街は危ない。某はここで消えるが、今後もこの街で生きようと思っっているなら、情を捨てるべきだ。捨てられぬならせめてすぐに切り替えられるように常に構えておけ」

「……………はい」

「ひのえと駅前でそうだったように、あまり呆けていると、また結界寮の輩に首を跳ね飛ばされそうになるぞ」

「……………はい？」

ひのえと駅前？

たしかに考え事をしてたし、ぼーっとしていたかもしれないけど。結界寮の誰かに狙われた覚えはない。

疑問符を浮かべる私を無視して彼は足を進める。

「風呂と枕を貸してもらったこと、感謝する」

うまく聞き取れなかったけど、たしかに彼はそう言った。

そう言って、私の前から消えてしまった。

枕って。私の膝か。

そういえば。

響は三桜が自分を殺すつもりだと、すぐに悟っていたんだよね。

私に会った時点で、彼は三桜と合流しなければならぬとは思わなかった。それでも説得しようとして合流しようと思ったのか？
癪だけ頼ろうとか言っていたし。

でも合流してもしなくてもよかったのは事実。うーん。

つまり私は、どうして生かして貰っていたの？

うーん。謎ね。

まあいいや。結果的にこうして私はまだ生きているわけだし。

「……」

響はどこへ行ったのだろうか。

林の中で何を思うのだろうか。

こんな雨の中で。

番姉さんは彼ら純血一族のことを、外道でヒトの腐った心そのものだと言いつけていた。人間として見るな。心があると思うな。そう言っていた。

織神楽響と出会ってそれに納得しながらも、その反面、番姉さんの言葉が決して射ているとは思えなくなった。

たしかに彼らは殺人集団だ。それに関しては全く以て納得する。でも衝動のまま殺戮を行っているとは正直思えなかった。響に限った話だから、純血一族全部がそうだとは言わないけど。うん……純血一族全部が、彼みたいな者ばかりではないんだろうなあ。番姉さんの言葉を否定できるほど彼らを知らない。

彼の最期の時を一緒に過ごそうなどと思ってしまった私は、甘いんだろうなあ。

身の程知らずで、出しゃばりで、浅はかなんだろうなあ。

「ああ……なるほど」

ひのえと駅前で、他にも通行人が居たのに私の前に現れたのは。明朗と話した後も私が呆けていて、結界寮の人間にマークされていたのに気付かなかったからか。

『結界寮の住人だって危険な人が居るんだ』

明朗はちゃんと忠告してくれていたのにね。

『また結界寮の輩に首を跳ね飛ばされそうになるぞ』

響は私を助けてくれたんだね。

「ほんと……身の程知らず」

ひのえと駅前。

これだけ濡れてしまえば雨宿りなんて意味ないのだが、守野三桜は駅舎の屋根の下まで歩き、そこでようやく「ふうっ」と息を吐いた。

水を滴らせる長い後ろ髪を胸の前でしぼり、本当の意味で死ぬことのできた矢神聖歌の亡骸を遠目に眺める。

哀れな女。

傀儡屋に殺されて傀儡にされ、そして自分も傀儡屋として傀儡を作り続けた。彼女そのものが皮肉を体現した作品。

駅舎から傘を開いて帰路につく人々は、傷だらけの三桜に見向きもしない。並折の結界効果だ。無論、戦闘領域に足を踏み入れてしまったがために肉片と化した、不運な死体にも。

聖歌の残骸も例に漏れずあのままだろう。結界寮の住人に発見されるまで、気付かれることなく薄暗い空の下、雨ざらしで放置され続ける。

水を吸ってしなびた手さげの買物鞆がゴミのように転がっており、なんだか儂げだ。

聖歌は夕飯に何を作るつもりだったのか。そんなことを考えてしまっ。

感傷に浸ろうとする自分の心を、三桜は鼻で笑った。

「勘弁してもらいたいね。お前が結界寮の傀儡屋だと知っていれば、私だって一緒に暮らさなかつたよ」

様付けせずに呟く。

「……互いに普通の人間として出会ったなら、楽しく仲良く過ごさせていただろっね」

もつと小さくそう呟いた。

「ただの手向けだ。私がこんな事を言っただなんて、誰にも言うんじゃないぞ」

ピツ、と。人差し指を聖歌に向けて弾き、「おっと」「三桜は駅構内の柱に身を隠した。

聖歌の残骸に、誰かが近付いたからだ。

結界寮の人間だろう。思ったより早い到着だ。

三桜がぐつと集中して聴覚を研ぎ澄まし、やってきた二人の会話を聞き取るうとした。

「情けない。こっちの到着より先に殺されやがって」

一人は聖歌の頭をつま先で蹴りながら言う。背が低い小柄の人間だ。

「気の小さい奴だねえ。まー、確かに足止めもできなかったようだけどさあ」

そう言うもう一人の人間は、背が高い。マフラーと前垂れを装着しているようだ。

二人は傘をさしている上に雨霧のせいで顔までは見えない。シルエイトからするにどちらも細身だ。

「おい、カザラから連絡来たのか？ アリス」

「反応が消えたよー。自爆でもしやがったね」

「なんだと。助けに行かなくて良かったのか？」

「もうこっちに到着する頃だったから無理だつてえ」

「明朗が同行していたそうだな」

「明朗は無事だよー。さっき確認したー。明朗が言うには、カザラ

と戦っていた方が織神楽響じゃないか、だってさ」

「……じゃあこれって」

「別の奴ってことかねえ」

「結界屋の連絡だと、傀儡屋の相手の方が純血一族の筈だろ」

「だからあ、こつちもお、純血一族の仕業ってことでしょ」

「チィ」

「舌も打ちたくならあね。ウチの戦力しか殺されていないじゃーん最悪じゃーん」

「奴ら探すぞ」

「それがねえ、結界屋の感知していた呪詛反応はどちらも読めなくなっちゃったんだってさー」

「なんだと！ 役に立たん奴だな！」

「いやいや仕方ないよ。それに織神楽響の方は傷の影響で呪詛を少なからず垂れ流していた。それが弱まったってことは、死にかけているってことだよお。だからもう追う必要はないのだー。勝手に死なせときゃいいのだー」

「おいおい……」

「だってえ。そもそも織神楽響の死体を欲しがってたのってえ」

アリスという女は、聖歌の頭を踏み付け、ねじり、押し潰した。

「こいつだけでしょ？ 結界寮にはあ、織神楽響が並折で死んだという結果が欲しいだけなわけであ、死体はどーってでもいいんだよねえ」

「確かに」

「立案者本人が死んじゃったんだからあ。ぶつちやけた話、この件もお開きにしちゃいたいよねえ。梵と林檎が許してくれないだろうけど」

「とりあえず結界寮に帰るぞ。梵と林檎に伝えないと」

「ほいほーい。傀儡屋の死亡を、かっくにーん。アハハハハ」

なんとという連中だ。

矢神聖歌の亡骸を回収せず、あるうことか好き放題に蹴り蹴り散らかし、そのままにして帰ってしまいやがった。

あれが結界寮の組織色。

互いが互いを、己すらも駒と認識する。義理もへったくれもない。役に立たなきやその場で切り離すということを前提とした連結形成思考。

再び柱に身を隠した三桜は目を細めた。

（あんな集団がどうして集団としての体を維持できているんだ？ ああいうのは大概、私利私欲を求める個人の寄せ集めにすぎない。傀儡屋なんて貴重な人材だろうに……惜しくないとみえる）

自分達と同じか？ と、顔を曇らせる。

純血一族と同じ。それはつまり、それぞれがどんなに歪曲した性格をしていようと力で無理矢理まとめていくという意味だ。

家系のそれぞれが支配欲を優先していた純血一族。それを一個組織としてまとめあげられたのは一つの家系が頂点に君臨した時からだった。

これは有り得ない現象の筈だった。

守野家をはじめ、織神楽家、昏黒坂家、九条家、その他含めて総勢十三家系。

これらすべては、過去に超常の力を手に入れた者達。情報伝達が発展していないほど昔にその起源をもつ。

彼ら十三家系に共通しているのは「血液に呪詛を流し込み、能力

を得た事》、《血の繋がりを通して能力を伝播させるという事》、《能力を得ようとした理由が、超人による支配を目的としたからである事》。これらである。

注目すべきは三つ目の共通点。それぞれが支配欲の塊という点だ。己が家系こそ頂点に君臨すべきだという思考を持ち、圧倒的な力で捻じ伏せようとしたからこそ、人を超えし人と成るに到った。

各家系はそれぞれの地元を中心として支配に成功していた。

しかし 情報化が進むにつれ、彼らは知ることとなったのだ。

『自分達の他にも超常の力を持つ連中が居る』

それも十三もの家系が。

無論、相容れぬ彼らは争った。

過去の日本国内裏抗争《十三家血斗》。

その終結は、家系の多くが絶対に望まぬものだった。

争いは当然ながら泥沼化し、一つの家系に絞られるまで続くと思われていた。ところが、十三家系のうち他の十二家系とは違い参戦を渋っていた一つの家系が介入したことで流れは大きく変わったのだ。

その介入した家系こそ、先述した現在の純血一族の頂点家系だ。統一家系とも呼ばれるが、敬意と支配を象徴すべく大抵は《御上》と呼ばれる。

争いは御上の手で終結に向かった。十三家血斗の終盤は記録が残っていないために曖昧だが、力によって十二家系を捻じ伏せてしまったという説が有力である。

力による圧倒的支配を目指し実行していた十二家系を、更なる圧倒的な力で支配してしまったということだ。

傘下十二家系にとっては屈辱極まりない結末である。滅ぶことも許されなかったのだから。

これが、純血一族という組織が生まれるに至るまでの歴史。

守野家の当主たる三桜は、今も続く屈辱を思い出したからなのか
ギリツ、と奥歯を噛み締めた。

今でも組織は維持している。しかも、中には御上に心底心酔して
しまった家系まである。

三桜は、未だ守野家を頂点に君臨させたいという野心を持ってい
た。

(つまり……結界寮も、私様達のように力で支配しているのか……
?)

その可能性は大きい。

結界寮は純血一族よりも統制の取りづらい個人の寄せ集めだ。傀
儡屋や結界屋などという、目的と性格が異常なまでに傾倒した個人
まで含んでいる。傀儡屋は戦ってみてわかった通り、誰かの指示や
命令ですんなり動く性分ではない。実力も並ではない。

傀儡屋よりも有名な結界屋は尚更だ。言うまでもないが、傀儡屋
と結界屋が互いに仲良くやっていけるわけもない。

しかし少なくともこれら二つの裏稼業が同勢力に所属しているの
は事実。あまり信じたくないが、事実なのだ。

(結界寮の頂点は、あの管理人共か)

錫杖梵。

藍澤林檎。

三桜には聞いたこともない名前だ。無論、彼女は二人がティンダ
ロスの猟犬に居たことも知らないし、異名と一致させることもない。
それでも傀儡屋矢神聖歌や、広大な結界を張る結界屋、不気味な

統界執行員達をまとめているのはこの二人。

要注意。兼、要調査対象。
報告しなければならぬ。

煙草を吸おうとしている通行人の手から、箱とライターをふんだくる。

「ちい」

肺に影響を及ぼすので基本的に三桜は喫煙を避けるが、吸わなければ落ち着かないのだろう。

紫煙を吐きながら、きのえと駅行き路面電車を待つことにした。

「あいつらの話からすると、柘榴と響が一緒なのか？ ふうん。相手をしていた統界執行員が自爆したってことは響も無事じゃないかもね。それならそれで丁度いいや」

手負いに手負いを重ねた響。式神同士だから多少は苦戦することを覚悟していたが、楽に仕事が終わるそうさ。

そんな呑気な考えをする三桜。

仕事が終われば、こんな街からはおさらばだ。さつさと本家へ帰り、また海外へ出向き、別の仕事に取り掛かれる。

彼女は自分の今後をそう予想していた。

だが、そうはならない。

たしかに彼女はその後、並折を離れて本家へ帰るだろう。

しかし彼女はそこで《任務失敗》を告げられることになる。

守野三桜。

彼女はこの時にはもう、

並折という魔都に絡みつかれてしまっていた。

翌日。

統界執行員アリス・エイリアスの報告により、結界寮管理人《錫杖梵》から結界寮の討伐活動の終了が指示された。これを以て、並折に侵入した純血一族当主《織神楽響》の討伐は、一旦の終結を迎える。

『織神楽響討伐の件。』

以下を最終報告とする。

傀儡屋、矢神聖歌 死亡。

統界執行員、カザラ・イグニール 死亡。

今回の件で結界寮の住人が二名、死亡した。

矢神聖歌と交戦した者に関しては今後も調査を続ける模様。

本件の中心人物 織神楽響。

その死体は翌日の早朝午前六時に《つちのえと》の墓地で発見された。

墓地の整備に用いられる道具を収容する小さな納屋の中で、胸に草刈鎌を突き立てた状態だった。凶器の草刈鎌は納屋にあった物で

あつたと、墓地の管理者の証言で確定した。

響の死体には、寄り添うように少女の死体が横たわっていた。響を殺害した後、後頭部に剪定バサミを突き刺して自害したものと思われる。剪定バサミも納屋にあつた物だ。

二人の死体を回収後、結界寮の検証により少女が人形であることが判明。

傀儡屋矢神聖歌の最終作となり、行方不明になっていた《江本佐々奈》だった。

結界寮による検証・独自解剖では奇妙な点も見られた。

織神楽響の推定死亡時刻は、深夜午前二時頃。

江本佐々奈の推定死亡時刻は、午前五時頃。

響の顔 覆面を外した頬には、幾つもの乾ききっていない水滴が付着していた。

これは雨の成分ではなく、矢神聖歌が人形に用いる疑似体液と同一のものだった。

しかし江本佐々奈の後頭部裂傷でその体液が漏れることは考えられず、後頭部の傷は単に人形の基盤を破壊する目的で付けられた物だ。

では疑似体液はどこから流れ出たのか。

解剖の結果、江本佐々奈の眼球から漏れ出たということが判明。眼球の一部に、特殊な染料で着色された箇所が見られた。傀儡屋の用いる禁術紋章とは異なる紋章である。

錫杖梵は、矢神聖歌が行った《安永筆・豊房》の実験に関連したものだという見解を示した。

矢神聖歌が紋章で顕現させた妖怪は 雨女。

工房の設計図と記録から、並折の長い雨天の原因がこれだと判明。江本佐々奈の《哀》の感情に合わせ、並折に雨を降らせていたということだろう。

長く続いた雨は 江本佐々奈の冷たい涙。

最後は能力の過剰行使によって紋章ごと眼球が破損。

皮肉にも、死の間際で体温の混じった疑似体液を響の顔に垂らすことになった。

人形が流す筈のない、あたたかい涙。といったところか。

江本佐々奈が織神楽響を殺害した動機に関してはこれから調べを進めるが、羽田立荘の倉庫に保管されている資料を見るに、十分たる動機があると見ていい。傀儡屋の製作した人形は総じて生前記憶の混濁が生じるが、生前の記憶が一部残り、復讐心が芽生えたと思える。

ただ、戦闘機能を備えていない江本佐々奈に対して、織神楽響がなんの抵抗もしなかったのが謎である。カザラの自爆で体力も尽き果てていたとしか考えられない。

織神楽響の遺体は、純血一族へ引き渡すという判断が管理人より下された。

本来、結界寮の管轄である並折に侵入した拳句、統界執行員一名を殺害した響を引き渡すことは有り得ない。しかし結界屋の結界が完全に機能しなかったために響が入ってしまったという、こちら側の不備を責められる場合も考慮しての判断である。

どうか結界寮住人の皆様には御納得いただきたく。

無論、あちらが引き取りを拒めばこちらが並折で丁重に葬るつもりである。

以上で報告を終了する。

PUNICA【あつたかい雨の降る夜】 8

「んーっ」

洗濯物を干しながら、あまりの気持ちよさについつい伸びを
しまっ。

八月ももう終わりかあ。

空は快晴。雲一つない。これが並折の本来の姿だ。

この暑さも、もう少し続くかな？

青々と鮮やかな色の葉。たくさん葉を纏い、一斉に揺らす木々。
少し前までの雨天が嘘のように、並折全体にはからっと乾いた空
気が流れている。

雨天……。

あれから、もう二週間が経ったのか。

破壊された羽田立荘の正面玄関と裏の倉庫は、結界寮の住人達が
わざわざ出向いて修復してくれた。

響とカザラによって荒らされた庭も今では整備されて元通り。

建物は確かに元に戻った。

でも……矢神聖歌は、二度と戻ってこなかった。

彼女は死んだと、明朗に聞かされた。

あの時……彼女を尾行してきのえと駅で見たのが、私にとって彼
女の最後の姿だった。

羽田立荘はこのまま使ってもいいと明朗が言ってくれたので有難
く使わせてもらっている。聖歌はピグマとして個人で活動しながら
も、結界寮の住人でもあったそう。だから羽田立荘は結界寮が
というか、明朗が宿主として面倒を見てくれることになった。

「よいしょっと！」

ちよつと重い布団も干して、陽の光を浴びせる。

こうやって私達の世話をしてくれた聖歌ももう居ない。これからは私が頑張らないと。

風が少し強いので、干したタオルはそれぞれ洗濯バサミで固定してある。これなら飛ばされることもないだろう。

バタバタと音をたててなびく私の衣類や、三桜の衣類。それを眺めながら、織神楽響のことを思いだした。

(洗濯、してあげられなかったなあ……)

彼は私と別れた翌日、死体として結界寮に発見された。

江本佐々奈という名の人形と一緒に、墓地の納屋で倒れていたらしい。

何の縁だろうか。江本佐々奈は、父親の仇と一緒に最期の時を過ごしたのだ。

「佐々奈と……響……」

「響がなんだって？」

ぼんやり呟いた私は、背中から声を掛けられて振り返る。

縁側に守野三桜が座っていた。

相変わらず暑さには弱いようで、爽やかな笑みを顔に張り付けていても汗が浮かんでいる。

「ん、別に」

「なんだよ連れないな。そういえば柘榴、貴様は響と一緒に行動していたんだよな」

「そうよ。人質みたいなものだったけどね」

「よく殺されなかったよな。私様の知る織神楽響と、貴様の言っていた織神楽響とじゃあ随分印象が違うんだよ」

「あなたの知る響はどういう人なのよ」

「傲慢な奴さ。私様よりも、もっと質の悪い形で他人を見下す嫌な奴だったよ。常に冷たい目をしててさ、その奥には何かこっ　弱
い奴は見境なくぶち殺してやりたいって言いたそうな感情が滲み出ていた」

ふん、と鼻で飛ばす三桜。

「たしかにあんたの言う通り冷たい目つきをしていたけど……あたしが会った響は、なんだかあたしを仲間のように扱おうとしているように思えたよ。うーん、仲間というか、あたしの驕りかもしれないけど、あたしをなるべく見下さないように困惑しながら応対していたような」

「……へえ、あいつが。何か心境の変化でもあったのかねえ。まあ実際、江本佐々奈なんて奴にトドメ刺されてんだから、あながち嘘でもなさそうだな」

江本佐々奈。明朗の話では、聖歌によって妖怪雨女的能力を付与させられた人形だとか。あの長い雨天は、佐々奈が流した涙だと言っていた。

涙……か。

後に私は新聞の気象情報欄を抜き出して、ある事に気が付いた。それは雨天の期間。

織神楽響が並折に侵入した日と、彼が死んだ日。それに完全な一致が見られたのだ。

無論、響の死んだ日というのは佐々奈の死んだ日でもある。

江本佐々奈はどうして泣いていたのだろうか。

響が許せなかった？ そうなのかもしれない。

それだけではないのかも……しれない。

父親は織神楽家に殺され、母親と自分は傀儡屋に殺されたも同然。それが 無理矢理復活させられて。しかも傀儡屋の作品として。

泣きたいに決まってるよね。

聖歌は工房に作品を置く傾向にあった。

佐々奈はそこで、結界寮の情報を聞いてしまったのかもしれない。

『織神楽響が来た』なんて情報を。

涙は豪雨となって並折を包んだ。

佐々奈はとめどなく涙を流し続けた。

カザラの言っていたように、響なんて覚えていなかったかもしれないけど。それでも佐々奈は響の胸に刃を振り下ろした。織神楽の名に反応したのか。

「なんだか……みんな救われないね……」

「やけにセンチだなあおい。貴様が気にしたってどうしようもない事だろう。並折ってのは救われない街だと考えておかないと。これから先も何が起こるかかわからないのに。いつか感情に押し潰されて自滅するぞ」

「……うん」

手で顔を仰ぐ三桜。

彼女はあぐらをかいて座りなおし、両肩を上げて私の方をじっと見てきた。

「柘榴、ちょっといいか」

「なによ改まって」

「私様も、この羽田立荘を離れることになった」

「え？」

動揺はした。したけど、予想はしていた。

三桜は響の件でひとまず任務終了なのだ。一旦戻るのは当然だろう。

「そっか。三桜も居なくなるのね」

「おいおい、そんな顔をされると嬉しくも寂しくもなるだろ。別にサヨナラってわけじゃないよ。多分、少し間を空けてまたここに世話になると思う……」

「……………」

私は響が去り、三桜が羽田立荘にびしょ濡れで帰ってきたあの時、響の言っていたことを話してやった。

三桜は織神楽に利用され、間違った任務内容を遂行していたと。

彼女は怒らなかつた。感情を完全に消して「そっか」と呟くだけだつた。

後に彼女に手紙が一通届いた。

私は内容を知らない。だが想像はつく。

そして今日、ついに三桜に帰還命令が出たのだらう。

「任務を失敗した三桜。」

「響を助けられなかつた三桜。」

「大丈夫なの？」

私は素直にそう訊いた。

彼女は不敵な笑みを見せ、肩をすくめて応える。

「心配ないさ。ちょっと気が重いけどね。貴様は私様の心配なんかせずに、自分のことを気にしてりゃいいんだよ」

「わかつたわよ。じゃあ早く戻ってきなさいよ。ここは一人じゃ広すぎるんだから」

「へいへい。さーて、帰り支度でもするか」

ぱん、と自分の太ももを叩いて立ち上がる。

私は抱えていた洗濯籠を置いて、縁側に駆け寄った。

「ねえ三桜。えっと……聖歌のことなんだけど」

三桜が聖歌を殺したのは知っている。結界寮には内緒にしとけと言われた。

「聖歌がどうした？」

「……ううん、やっぱりなんでもない」

頭を振る私の肩を、三桜は軽く叩いて笑顔を向けた。

「聖歌も楽しかったってさ。柘榴も私様も、家族みたいだった。そう言ってたよ」

「そっか……」

「それでも殺さなきゃいけない。そういう世界に私様達は生きてる。柘榴から見れば私様の考え方は気に入らんだろうが、そうしないと私様も生きていけないんだよ。響だつてそうさ。上から指示があれば殺さなきゃいけない。私様はそれを疑いもしなかった。関東での任務に失敗して傷だらけになって追っ手まで付けられてる奴なんぞ、実力主義の純血一族には戦力として不要だ」

「でも……」

「そう。今回は私様の方が間違っていたんだよね。これも仕方ないと言ってしまえばそれまでなんだが」

苦々しく笑う三桜はその感情を払拭するようにこちらへ手を伸ばしてきた。

私の肩だけでなく、頭、腕、胸、腰、脚　つまり全身をぺたぺたと触りまくった。

「ちょっと……」

「いいじゃないか減るもんでもない」

オッサンがお前は。

満足げな顔をして自室に行ってしまった。

触るといっつか、ほとんど揉んでいた。やはり変態だ。

「……………」

……聖歌も居ないし、これで三桜も居なくなる。

しばらくは私一人か。

また一人、か。

「でも！」

孤独じゃあない。明朗だって来てくれるし。

なにより此処は、こんなにも明るい陽光が差し込む場所だもの。

新しく買ったホットパンツのお尻をポンと叩いて背筋を伸ばす。

「結界寮がどんなものか把握できたし、もしかしたら多少の協力だつて望めるかもしれない。独りで感傷に浸ってる暇はないわ。本格的に鎖黒を探すわよ」

式神と呼ばれた屈指の強者。あの響でも命を落としたこの並折。

彼との出会いと共に行動した経験は、私に並折での生き方を理解させてくれた。

強者は強者。弱者は弱者。それぞれ立ち回り方を弁えるべきなのだ。

強い奴だけ生き残れる場所じゃない。この結界都市は無慈悲なほどに平等なのだ。

呪詛能力や磨いた技術で他者を退けて生き延びる感性を捨てなければならぬ。外界では通用するだろうが、この結界都市ではほとんど無力となる。

三桜が聖歌から知らされた結界による呪詛弱効化。

並折全体が手に取るようにわかる結界屋の感知結界。

つまりとこる響はこれらの効果によって命を落とすに到ったと言っても過言ではない。

呪詛の弱効化によって毒の操作がままならず、カザラを仕留めきれず自爆を受けてしまった。彼が私に神経毒を注入した時に『調節を誤ったか』と言ったことから、彼は弱効化に気付いていなかったのかもしれない。

どこへ行こうと感知する結界寮の手が回り、碌に休むこともできない。

なまじ外界で圧倒的な強者として君臨していたがゆえに、彼は並折の呪縛に捕らわれてしまったのだ。

だから、重要なのは力の強さじゃない。

上手に立ち回ることこそ、並折で生き残る最良の術。

当たり前のことだけど、実力に重きを置き、押し通るを良しとする世界に生きていると案外これが難しい。

独特の閉鎖、独特の管理、独特の現象。これらが成り立っている街、並折。

まず何がどう独特なのか理解しなければ始まらない。

閉鎖 結界という壁に覆われた空間。

結界とは何か？

誰が、何を目的として形成したのか。

結界屋。本当に結界屋が並折全ての事象に関わっているのか？

単純な対人目的の結界効果はこの裏稼業の仕業であると思う。

結界寮が一勢力として成り立つべく外界から超常者の侵入に制限をかけるのも理由としては十分に値する。

ではその基準は？

私は入れた。三桜も入れた。

並折の存在を知る者なら誰でも入れるのか？

物理的には一般人でも土地に足を踏み入れることは可能だ。しかしその後、この土地の真の姿を認識できる者とできない者に分かれる。

私がここへ訪れる際に電車内で出会ったサラリーマンは、一般人であるのに認識できる者として分けられてしまっていた。なんらかの手違いがあったのだと考えると、この閉鎖は不安定なものなのではないかという予想もできる。

管理 結界寮による監視と執行。

結界寮の詳細は？

世界危険勢力『ティンダロスの猟犬』が裏で影をちらつかせているのは、明朗の話でわかっている。

その規模、所在地、管理目的は不明。

構成員は把握しているだけでも特徴にばらつきがある。

結界寮をまとめる管理人。梵そよぎと林檎りんご。この二人が元ティンダロス構成員だという明朗からの情報で、結界寮の裏に危険勢力の意思がばやけて見えるようになった。

住人とも呼ばれる者達。種類は様々で、明朗のような能力のない者も居れば、結界執行員という不気味な戦闘要員も居る。傀儡屋、結界屋という裏稼業も属している。

統界執行員のカザラという男が傀儡屋の作品だったり、並折の秩序を保つべく結界屋が結界を張り巡らしたりと、個性的な裏稼業でも結界寮へ協力している点から、結界寮は一つの勢力としてなかなかの力を蓄えている可能性がある。

さしも危険な純血一族や死使十三魔すら手を焼いている事実を鑑みるに、並折という土地の中では世界危険勢力と同等なのではないだろうか。

現象　これは結界効果に因るものと、土地に因るものに分けられる。

呪詛弱効化。純血一族や死使十三魔にとって致命的となる結界効果だ。

呪詛及び危険物の感知。武器になりかねないもの　それがたとえ小さなナイフであろうと感知する結界効果。感知された場所と照らし合わせて危険度を推し量っていると私はみている。

これら結界効果は結界屋　つまり結界寮による防衛機能の一部だろう。脅威となる呪詛能力者の対策に抜かりがない。たとえ侵入者が腕の良い裏稼業であっても、結界寮には世界屈指の裏稼業（傀儡屋・結界屋。少なくとも二人）が所属している。感知結界と併合すれば十分処理が可能だ。

土地に因る現象は不明瞭な部分が多い。

鎖黒や豊房のような怪遺産もこの土地の産物であり、また豊房によつて顕現した妖怪もこの土地所縁の雨女。長い雨天現象はこれが原因だった。

私が恐れているのは、百奇夜行という言い伝えのように、こんな自然に影響を与えるような力が数多く顕現しかねないということだ。豊房を矢神聖歌が持っていたことに驚いたが、今は再び所在不明。三桜の話からするに、結界寮に回収されたかもしれない。

一度滅びた妖怪達の脅威が未だ残っているのも怖い。が、忘れてはならない。

並折には、滅びていない妖怪が一人、まだ潜んでいることを。

『懐かしいな、番』

『お前が居なくなつてどれくらい経つただらうか』

『今年の八月は懐かしいものが見られたよ』

『雨女だよ。覚えているか？』

『お前が居て教えてくれないから、折角の雨も聞こえないし、見えないし、においもわからない』

『今年はこの街も、あの時のように騒がしくなっている』

『きつとたくさんの異形が死ぬ』

『そうしてまた、取り残されるのさ』

『妖怪一人、並折に残り……』

『繰り返される百奇夜行』

『口がないから、また伝えられず』

『流れに流され滅びゆく者達をまた見送るだけ』

『いつまで経つても俺には顔が無い』

『なぜ俺を置いて並折を去った』

『なぜ俺にこんな仕打ちをした』

『俺の愛した雪女よ……』

守野三桜、貴女が人外だとは、私は知りませんでした。

矢神聖歌、貴様が人外だとは、私様は知らなかったぞ。

織神楽響、貴方が仇怨だとは、私は知らなかったです。

江本佐々奈、貴様が人形だとは、某は知りもしなかった。

、 が だとは、 は

。

五戒と誤解に後悔する者はなし。

今はもう、遠き遠き空のむこう。

『また……生温かい血の雨が降る……』

PUNICA【あつたかい雨の降る夜】了

逢魔 黒いのは腹だけですか？

揺らめきもしない蝋燭の灯火は触れば凍ってしまいそうだった。壁に掛けられている筈の燭台に火は灯されることはなく、テーブルの上だけほんのりと一つの光源に映し出されている。壁は暗闇に溶け、部屋の広さもわからない。

机と、椅子に座る女が一人。たったそれだけの空間。

無心で灯火を見つめていた女は、青く長い前髪の下でピクリと瞼を上げた。

灯火が揺れた。

部屋の中と外の温度に差があり、空気が動いた。

扉が開き、誰かが入ってくる。

来客に対して彼女が立ち上がったって純白のドレスの裾を摘まみ『ようこそ』と言うわけがない事は当然であり、来客者も承知しているようだった。

しかしながら彼女 番は来客を区別なく拒むような性格ではない。にも関わらず、今回の番は開けられた扉へ鋭い眼差しを向けていた。

「相変わらずこの部屋は深海のように冷たいな」

開口一番。番に向けられた言葉はそれだった。

外の明るさと中の暗さによって番からは来客者の黒いシルエットしか見えない。

それでも聞き覚えのある声色と、なにより不快な視線に部屋を侵蝕されたことで、来客者が誰なのかは把握できていた。

何をしに来たと言わんばかりの凍った視線に当てられ、来客者は肩をすくめる。そのまま扉を閉め、番の正面 テーブル越しにあ

る椅子に座った。

縫い糸で両目の瞼を縫いつけられた男の顔が灯火に照らされる。

「おはよう番。久しぶり」

「……まだ生きていたとは驚きね」

「夕凧姉妹にはもう会ったようだね。新しい序列十位と十一位。仲良くやってくれれば幸いだ。できれば私とも」

「貴方とは無理ね」

「ふむふむ、身体に異常はなし、目立った汚れや劣化もなし、と。随分献身的な侍女が傍に居たようだ」

「……」

男は黒いルージュの引かれた口元を歪ませ、親指の爪で右目の縫い糸を弾く。その爪も長く、黒く塗られている。

何度も右目の弦を弾きつつ、時折鼻で笑いつつ、ぶつぶつと小声で呟く。

「おや？」

男は親指の動きを止め、首を少し傾けた。口が一層大きく歪む。

「番、心配事や悩みでもあるのか？ それとも肉体凍結の後遺症か？ そうか、新しい侍女になったからか。食事の栄養バランスに関してはきちんと話し合った方がいい。雪女とはいえ、肉体の機能は常人とあまり変わらんだろう？ 部下達に笑われてしまうぞ。序列四位、魔氷の番は《お通じが悪い》など笑い話も甚だしい」

顔を背け、目線を逸らしていた番は青白い頬を若干赤くして男を睨む。

凍結の代名詞のような女のその反応に男は驚いたのか肩を震わせ、て笑い、縫い糸が干切れてしまいそうな瞼を指で押さえた。

「だから貴方は嫌いな」

「そう言うな。私は死使十三魔の身体検査役だからな」

「自称、でしょう。この変態。さつきから私の服の中を這いずっているこの不愉快な物をさっさと消しなさい。さもなければその瞼ごと壊死させるわよ」

「失礼した。やり方は反省する。しかし私が君の身を案じていることは事実だ」

「私の身を案じている？ 本当にそれだけかしら」

「どういう意味だ」

「貴方は恐怖している。序列八位、魔眼の《アニメ》。臆病者の貴方は、こうして各序列を隅々まで調べないと気が済まないのよ。そうでしょうアニメ？ 私が怖いでしょう？ 貴方は貴方自身の能力に精神を蝕まれてしまったのよ」

高揚した頬は既に冷めきり、番は嘲笑を浮かべて頬杖を付いていた。

「千里眼は便利。遠い安全な場所から一方的に様子を窺う事ができる。便利すぎて便利すぎて、貴方は貴方という本体をより脆く尊い物に思えてしまう。世界中の誰よりも安全な場所に居なければ気が済まない。だから貴方は死使十三魔の中に隠れた。世界屈指の猛者達を防壁とし、己の力を防壁の強化に用いることだね」

言われたアニメは、それでも笑みを崩さず聞いていた。

「その通り」あっさりと認め、「私の力がなければ少数精鋭もここまでのし上がることはなかったろう」余裕たっぷり背もたれに体重を預けた。

「事実。事実。番もアニメの功績は認めている。彼女が眠っている間、寝床を守るのにも一役買ってくれた人物だ。」

「でも」「番は冷気を吐き出す。」

「誇らしかったその魔眼も今では衰えたわ。未来視、過去視は

もう使えないのでしょうか？」

「……」

「そろそろ、序列八位も席を空ける頃ではなくて？」

冷たい言葉はさすがにアニマを凍りつかせた。

死使十三魔は純血一族とは違う。役立たずは不要と捨てるような真似はしない組織である。引退を勧めるにしても、番の言葉は棘が立っている。

死使十三魔に貢献し、実績も積み重ね、序列八位に名を連ねる男に対する引退勧告にはあまりに不適切。全盛期より能力が衰えたから序列を去れという、純血一族に似た思考だ。

「言うようになったな番」

「別に貴方を捨てると言っているわけではないのよ。ただ、千里眼程度の能力では死使十三魔がこれから進む道を後押しできないの。無論、アニマ、貴方の実力は認めているし感謝もしている。身体検査役だって、今後も続けてもらえたら幸いよ」

「前線からは離れる。そういうことか」

女は頷く。

アニマにとって悪い話ではない。序列という肩書きは強さの象徴であると同時に、死使十三魔最高戦力という重鎮の表れ。つまり狙われやすい。自身の安全を望むアニマは肩書きを外していたほうが得策である。

「……」

しかし彼には、即座に頷けない理由があった。

疑わしい。

たしかに能力の衰えは死使十三魔の戦力に影響する。代えられる

ものなら、より優れた魔眼使いを招き入れた方が良い。もっとも、アニメほど熟練した者に匹敵する能力者を探し出すことすら至難の業だろうが。

何故、このタイミングで引退を持ち掛けてきた？ アニマが気になる点はそこである。

彼は自身も認める臆病気質であるゆえ、死使十三魔という組織内の事情も可能な限り把握しておきたがる。その結果、彼はここ最近の序列の動きが活発であることを怪訝に思っていた。

まず、そもそもこの女 番だ。序列四位。魔氷の異名を持ち、起きている姿を見ることの方が珍しい雪女。前回この女が覚醒したのはおよそ十年前。死使十三魔の序列五位と純血一族の昏黒坂家が衝突して起きた戦争だ。

番はその際に序列一位の命令によって覚醒させられ、各局地戦を凍結させて回った。

戦争が終結の兆しを見せ始める頃には再び氷結睡眠に入っていた。魔氷の番とは永遠を歩む者であるが、長く覚醒してられない者でもあるのだ。

そんな女が、今、目の前で頬杖なぞ付いてこちらを見ている。この女が覚醒するとはつまり何かが起こる予兆でもある。

次に序列十位と十一位の件。

関東に於いて純血一族織神楽家の当主によって十一位が殺害され、十位が再起不能に陥った件だ。十位は《魔槍》、十一位は《魔斧》と呼ばれていた死使十三魔の攻撃象徴。アニメああの二人の強さは比類なきものと一目置いていた。

それが、当主とはいえ毒爪使い一人に負けるか？ 一対一ならまだ納得もしよう。だが序列入り二人掛かりなら式神と呼ばれる当主が相手だろうと負けるのは有り得ない。

しかも二人の後釜が……少女。双子の少女だ。

夕凧みそら。夕凧しずね。

呪詛も憑いていない。序列全員が呪詛使いの死使十三魔に於いて前代未聞だ。

アニメでも未だその能力を知らない上に、なんと彼女達を序列一位自らが受け入れたという。

極めつけが、死使十三魔最悪最狂の問題児。序列五位。

あれが日本国に入国し、行方が分からなくなっているのは大問題だ。

序列の多くは居場所の掴めない者が多い。だが、奴だけは、常に行動を監視していないといけない。

十三魔の監視役は、主に序列三位がやっている。しかし三位は日本国関東地方の一件の直前に一度だけ序列十位と十一位に面会していた。その隙を突いて五位は姿をくらましたのだ。

その五位は、あるうことが各勢力が目を見光らせている日本国中部地方の結界都市に入っているという噂だ。

結界都市 並折。

つい最近、純血一族織神楽家当主、織神楽響がそこで殺害されたという情報が各危険勢力中に出回ったばかり……。

純血一族絡みの案件が多すぎる。

死使十三魔が引つ掻き回されている。

アニメはそう感じていた。

『黙して動かず、世界を静観する頂点。序列一位』

『千里眼を以てしても姿を見たことがない二番手。序列二位』

『日本国で駆け回る狂い焔。序列三位』
『覚醒させられた氷結の麗女。序列四位』
『縛鎖を解かれた十三魔最強の殺戮狂人。序列五位』
『一位の側近である守護者。序列六位と七位』
『ここにきて引退を勧められた魔眼。序列八位』
『衰えた千里眼ではもはや行方などわからない奔放なる凶器。序列九位』
『失われし槍と斧。序列十位と十一位』
『他勢力へ潜伏中の伏せ札。序列十二位』
『切り札。序列十三位』

「前線からは、まだ離れられん」
アニマは静かにそう答えた。

死使十三魔は不安定な状態になりつつある。そして各序列は各々が思うように行動している。三位が世界中を駆け回っても、一度組織の流れが乱れ始めれば一人では足りないだろう。

衰えはすれど、アニマは指折りの魔眼使い。各序列をまとめる際にその力が必要になる筈。

安全ではありたい。しかしアニマはこの組織を大切に思う気持ちも強かった。

彼の返答を受けた番は優しく目を細めて「そう」と呟く。

内心アニマは番の腹の底に何かどす黒いものがあるように思えた。この女の言葉に従うのは得策ではない。

「臆病だけれど、やはり死使十三魔の序列八位ね。魔眼のアニマ」

番の言葉は流し、アニマは縫い糸で閉ざされた瞼を少しだけ持ち上げて薄目を開けた。ゆらめく蠟燭。彼の目には映らない明るさ。

彼はその奥にある番の顔を虚像の魔眼で俯瞰し、黒い唇を動かす。

「私は君に挨拶をしに来たわけでも引退勧告を受けに来たわけでもない」

「あら。では私の身体を愉しみに来たのかしら？」

「……結界都市、並折の件だ」

「並折？ 貴方もあの街に興味があるの？ 珍しいわね」

「私は以前よりあの街を探るよう命じられていたのでな。君が目覚める少し前から動いている」

詮索を好むアニマのことだ。番と並折の関係も多少は知っているのだろう。

だからこうして彼女のところへ足を運んだというわけだ。

「それは意外。でも私はあまり役に立つ情報を持っていないわよ」

「まあ、まずは聞け。私は魔眼の能力であの街へ居を移す人間の視界をジャックしていた。住人の目を通して並折を探ろうとした」

「無理ね。一般人では並折の真の姿を目撃する事は出来ない」

「君の言う通りだ。私がジャックした日本人女性は並折へ移り住んでもなにも変わらなかった。並折という二文字単語でさえ、一度も目にしなかった。あそこを支配する結界寮の住人もだ。見えない、もしくは意識できないようになっていているらしい」

「無駄足もとい無駄目だったのね」

「いや、そうでもない」

「？」

「その女性が、死んだ」

「あら、そう」

「織神楽響の死亡した前日にな」

興味なさげに余所を向いて聞いていたが、おもわず顔をアニマの

方へ向けた。
男は続ける。

「その日の夕刻も相変わらず長い雨天の最中だった。女は夕飯の買い出しに《ひのえと》という駅で降りた。傘を差し、その駅から出て広場へ出た。その直後　彼女は首を跳ね飛ばされた」

「……巻き込まれたの？」

「ああ。跳ねた首は更に何らかの衝撃を受けて駅舎の壁に激突した。凄まじい力だ。脳漿は飛び散り、私と繋がった眼球も転がり飛んだ。女性は死に、意識は無くなった。そこでようやく、彼女の目は私だけの目になったのだ」

「なるほど。貴方の目なら並折の姿を見られる」

「すぐに眼球は踏み潰されてしまったがな。だが確かに私は見た。

雨の中、女が二人。指先からワイヤーを垂らした女と、もう一人とんでもない大物の姿を」

「大物？」

番は顔を蠟燭に近付け、アニマも同じくした。

「純血一族、守野家の当主だ」

「え……」

「ミオウ・モリノ」

雪女は言葉を失った。

守野三桜。

織神楽響だけではなく、守野三桜まで。
知る者ぞ知る獣人の親玉だ。

純粋な身体能力では純血一族の獣人、守野家が群を抜いて優れている。その親玉、守野三桜は白兵戦闘部門最強。

序列三位もこれには頬をひくつかせた。

「ミオウ・モリノ……どうしてそんな女が並折に？ たしか私が目覚めた時に貰った状勢情報では日本国外で活動して　そう、南米の武装勢力を相手に暴れていた筈でしょう？　ティンダロスの構成員も相手に雇われて……」

「とつくに壊滅して焼け野原だ。化け物相手に金をケチった結果だな」

「まあいいわ。それで、その化け物を相手にして白兵戦をやっていたというもう一人の愚か者は？」

「さあな。だが完全にミオウの猟域内だった。遊ばれて終わりだろう。無知つてのは恐ろしい」

アニマの言う通り三桜の力を量り損ねていたのならば、相手はもうこの世に居ないだろう。それは良い。それでも良い。問題はそれではない。

負傷した響が並折に侵入することは別に不自然ではなかった。織神楽の本家は関西。関東から関西へ帰る途中、中部の並折を通る。これは十分有り得る。この程度のいざこざはどこにだってある話だ。

「ついに仕掛けるつもりね……純血一族……」

絶対に零度を越えない吐息は強く吐き出された。

アニマも大きく頷く。

ついに仕掛ける。

海外から白兵戦最強戦力を呼び戻し、投入したのなら、そういう事なのだ。

並折という重要拠点。魔の結界都市。

多くの勢力が欲し、ここ数年内偵を送って様子を窺い続けた危険特区。

番だけでなく多くの序列が予想していた《純血一族の先手介入》。当然だ。自国の土地なのだから。

ゆえに死使十三魔も敢えて様子見を継続していた。

先に純血一族が手札を見せてくれるなら、それに越したことはない。現在の並折を支配しているのは結界寮という集団。そこ純血一族が正面きつて対決を開始するならば、慌てて死使十三魔まで介入するのは愚策。これは頃合いを見計らって双方を横合いから一撃必倒するのが得策。

我慢の限界か。

番とアニメは、血気旺盛な殺人集団を嘲笑う。

「愚かな連中。自国の土地だからと綽々然としていた結果がこれとはね。海外の勢力拡大に集中し、いざ自国に巢食っていた腫瘍が大きくなったら海外戦力を自国に呼び戻す。それでも先手を打ったつもりでいるのかしら。奴らの参謀 たしか九条家だったかしら。無能極まりないわね。兵が優秀でも、将がこれでは……ふふ」

「当主を動かせる立場は、まさしく将だろうな。それも大将だろう。君の言う通り、たかが知れる。純血一族当主の動向など、あらゆる勢力がマークしているに決まっているではないか」

「うちの魔眼も嘗められたものね」

「ならばそれ相応の痛みを見舞ってやるだけだ」

「あら、その様子だとなにかもう手は打ってあるの？」

「私自身は君も知っている通り戦闘にふさわしくない。あそこの住人にいくつか《目》を付けてある。つまり」

「奴らの踊り狂う様を傍観できる上に……絶好のタイミングは、こちらが握っている。ということね」

「その通り。踊り狂う。ずばりの確だよ番。奴らは滅茶苦茶だ。ミオウ・モリノまで投入しているこの状況で、家系間・家系内のいざこざが各所に見られる」

「なあにそれ。こんな場面で内輪揉め？ 面白いじゃない。詳しく聞かせて頂きたいわアニマ。貴方の魔眼はどこまで情報を見知っているの？」

番はアニマを前にして初めて愉しげに声を躍らせた。

正面の男は片目を、瞼が千切れんばかりに開き、空虚な眼球を縫い糸の奥から覗かせた。

「くふ。くふ。まあ私の目で見ずとも容易に想像できることでもあるのだがな。現在、並折に関わっているのはまだミオウ・モリノとヒビキ・オリカグラの二人。つまり守野家と織神楽家だ。その守野家、当主不在の間はミオウの側近が長い間取り仕切っていたな。その間に、守野家の中で当主派と側近派という内部派閥ができてしまったんだよ」

「側近というと……ヤタギ・モリノ？」

「そう守野八汰祁。君が前回覚醒した時 十年前、当主だった男つまり先代守野家当主だな。あの時であの歳だ。今は本家で事務処理みたいなのをやらされている老兵さ」

「……昔はあんなに幼かったのに。そう……あの子もそんな歳になったのね」

老いを知らない雪女は目を細めた。

「八汰祁は野心家だ。以前からその狡猾さは多少なり私も耳にしていたが、老獪というやつは厄介だな。三桜を当主から引き摺り下ろして、己を慕う者を当主に担ぎ上げようとしているらしい。そして三桜自身は、己の家系に派閥が出来てしまっていることすら知らないときた。まあ仕方ない、彼女も一族の例に漏れずその常軌を逸した実力でのし上がった女。そして勢力拡大の要として当主になって間もなく海外最前線に駆り出されてしまったのだからな」

「腑に落ちないわね。組織としてそれは避けて当然でしょうに」

「実力主義と異常なまでの支配衝動の組み合わせが招いた結果だ。」

連中の国の企業を例にすると　凄腕の営業マンがのし上がって企業の支店を率いる立場になり、尚その凄腕で利益を得ようと企業のトップが三桜という支店長を最前線で営業回りさせるようなものだ。支店を引退間近の副支店長に任せて、な。

すると社員はどうなる？　支店長の顔すら知らない者も居るだろう。支店は完全に副支店長の天下だ。普通ならこのくらい容易に想像できて支店長にそんな真似はさせんよ。

だが純血一族のトップは、させる。平気でさせる。支店長　まあ例はもういいか。守野家の当主がどうなろうと知ったことではないんだよ。守野家自体が存続させられればそれでいいという思考だから守野の家系内部で派閥形勢が起きようと、統一家系は意にも介さない。八汰祁が何かを企んで三桜が引き摺り下ろされたとしても新しい当主が決まるなら、なべて事も無し。実力主義という言葉で終了だ」

「統一家系が守野家の内部事情を把握していたら　いえ、貴方が把握しているくらいだからきつと知っているでしょうね。ならば並折に投入されたミオウ・モリノは捨て駒扱い？」

「かもな。もう一度言うが、老獪つてのは厄介だ。容赦がない。あれこれ理由を付けて三桜を好き放題動かすだろう。それこそ骨と皮も残らぬまで、朽ち果てるまで、あの貴重な娘を贅沢に使うだろう」
「それでいきなり並折に投入したのかもしれないわね。ミオウ・モリノを死ぬまでぶつけて結界寮の戦力を徹底的に削がせよう」と

「彼女一人でも強烈だが。もう一つ」

アニメは指を一本立てる。三桜投入という純血一族の一策を表しているのだろう。

そこに、もう一本指を立てた。

「守野八汰祁が、三桜を並折に向かわせている間に、ある家系の人間と接触した。」と言って、接触したのは八汰祁の方からではない

ようだがね」

「ある……家系？」

「昏黒坂だ」

番は顔だけでなく全身を凍りつかせた。そんな雪女の姿は文字通り氷像のようでもある。

「吐き気を催すくらい面白いじゃないの」

凍った無表情で言うのだから、ますます感情が解らない。

「純血一族、昏黒坂家？ もう言葉から血生臭さが滲み出るわ。部屋中が汚らわしい空気で満ちてしまったわ。その名前を記憶から削ぎ取りたいくらいよ」

「おいおい、番……」

「アニマ貴方この部屋で私に吐瀉物をぶちまけさせたいの？ 考えただけでもぞつとするわ。昏黒坂、ああ、昏黒坂、最低な響き。ぶちまけた吐瀉物を舌でなぞり舐め啜りそうな言葉」

「君の言いたい事はよくわかる。前回の戦争では」

「そつよ多くの部下を奴らに殺されたわ。生き残った子でさえ狂って廃人になってしまった。貴方、見たことないでしょう？ 私の部下が目の前で火かき棒を握り締めて何かわけのわからない言葉を叫ぶのよ」

「……………」

「熱せられて先端が赤くなった棒を素手で握り締めて肉の焦げる臭いが私の鼻を衝くの。あの光景。忘れられるはずもない。目の焦点も定まっていない。片目は一度自分で指を突き入れて失明していた。あの子は……大きな声で……………」

『頭の中から黒い蟲がたくさんたくさんたくさん。目玉が黒く

濁って私の恥ずかしい目玉。昼も夜も恥ずかしくて私は壊れてしま
って恥ずかしい姿は全部黒い蟲、蟲、蟲！ ああ！ ああああ！
うわあああああ私の！ 私の目が！ 鼻が！ 口が！ 嫌あああ
ああ！ 齒が！ 蟲！ 噛むとじやりじやりじやりじやりじやりじ
やりじやりじやりじやりじやり！ やだあ！ あーあ。のうみそが
むしになっちゃったのお。わたし。むしなのお。きちきちちつて
ね、ほら、むし。むし。むし！ 言ってるでしょ！ ねえ！ おい
！ 聞いてんのかよてめえ！ あああああ？ ぶっ殺してやるか
らな！ ぶっ殺すって言っただよあああああああああああああ
ああああ！』

「もはや悲鳴よ。直後、狂ってしまったあの子は棒を鼻の中に挿し
入れて奥へ奥へ突き入れて 棒を引き抜いた鼻からは……脳が……
どぼどぼ滴って……可哀想な……私の……大事な……」
「……………」

「それを私はこの凍った表情で見届けた。感情の昂りもなかった。
魔氷は、大切な部下の死を前にしても溶けなかった」

「君はあの頃より感情を露わにできるようになっているよ」

アニマの口調には同情の感情など乗っていない。

お前の事情など知ったことかというのが本心だろう。

「……ごめんなさい。大丈夫続けて。その、昏黒坂とヤタギ・モリ
ノが接触したのよね」

「昏黒坂家は純血一族内でも嫌われる家系だ。無論、家系同士の仲
が良いわけではないが、昏黒坂は一際他家系から白い目で見られて
いる。理由は簡単さ。奴らと関わりと碌な事がない。そんな家系に
接触された守野八汰祁も迷惑に思っているだろうが、そんなことは
どうでもいい。昏黒坂家が接触した理由がああの結果都市絡みだとい
うのだから私もぞっとした」

「守野、織神楽に続き、さらに昏黒坂が並折に介入しようとしている？」

「守野と織神楽は上層部の指揮下で動いていた。統一家系の把握している動きだ。だが昏黒坂は違う。統一家系の指示に従うことなど滅多にない。つまり 独自に介入しようとしているという事だ」

織神楽響が関東の一件で負傷し、撤退中に並折に入った。

響と合流すべく、守野三桜が並折に入った。同時に並折の本格介入を始めた。

ここまでは統一家系も把握している。

だが昏黒坂家。奴らがどうして首を突っ込んでくる？

御上の指示にも従わない連中だ。身勝手な自家中心的な連中だ。

ならば深く考える必要はない。

わかりやすいではないか。奴らがこのタイミングで動くという事はつまり、奴らの興味を惹く何かが並折に在ることを知ったからだ。その何かは、土着伝奇のカオナシではない。周知の結界でも結界寮でもない。

今。

今なのだ。

以前からの存在には興味を惹かれなかった。

昏黒坂家が自ら興味を抱き、調べ、並折に介入した守野家の八汰祁に接触するほどの、何か。

何かが、今、並折に在る。

何かとは何だ？

それは 奴らの宿敵だ。

「死使十三魔、序列五位」

番の呟き。

対するアニマの首肯。

昏黒坂家は前回の戦争からずっと序列五位を目の仇にしている。当然だ。戦争の起源は昏黒坂と五位の接触だったのだから。そして終戦を迎えてもこの両者に決着は無かったのだから。

「なんとも迷惑な家系ね。純血一族を横合いから叩くための伏せ札を、嫌われ者の家系が暴いてしまった」

「まあ、暴かれやすい伏せ札だからな、五位は。それに五位もまた我々の意から外れて勝手に伏せた札だ」

「しかし死使十三魔も動き辛くなるわ。いいえ、五位と昏黒坂が再び揉めたら結界都市どころではなくなる。すぐに三位へ連絡して五位を連れ戻してもらわなければ」

「まあ待て」

今にも椅子から立ち上がりそうな雪女を、アニマが制する。

「たしかに五位と昏黒坂の接触は火薬に火を近づけるようなものだ。が、五位は並折に入ってから目立った動きを見せていない。あの五位が騒ぎも起こさず落ち着いているということは、何か理由がある。それが何かはわからんが、とりあえず火は点いていないと考えていいだろう。それに」

じとりと湿った舌で黒の口紅を舐め、長く黒い爪を五本、雪女の顔の前に突きつける。

「五位が並折へ行くきっかけを作ったのは君だろうか？」

「どうしてそれを」
「私には御見通しさ」

顔を掴むように、催眠をかけるように、アニマの指は奇怪な動きをした。

盗み見る事こそこの男の得意分野。

序列四位と序列五位が会する場面を見逃す筈もない。

「カオナシだったかな？ 五位はそれに興味を持って並折に向かったのだろう？ 君は悪い女だな。五位の居場所も目的も知っていないから隠すとは。三位が聞いたら何と言っただろうか」

「なるほど、脅しのつもり？ 純血一族の本格介入、昏黒坂家の独自行動、五位の潜伏。そこまで把握して、一体何が目的？」

「だから、並折さ。あの結界都市を死使十三魔のモノにする為に、一肌脱いでやろうと言っているんだ」

「どうするつもり？」

「カオナシを探してやる」

「……」

アニマの口から出た一言。
番の胸は大きく鼓動した。

「どうにもその妖怪が気になるのでな。君も随分とそいつに御執心だそうじゃないか。君だけではない。五位も、夕風姉妹も、たかだか顔の無い人間に何をそう夢中になるのかはわからんが、並折に巣食う妖怪であるなら結界都市の秘密に繋がっている可能性は高い。君は知っているのではないのか？ カオナシと、結界都市の、関係を」

「……知らないわ」

「そう答えるのも予想していたよ。隠し事が好きな女だな。まあい

いさ、どちらにせよ君も並折から離れて大分経っていることだし、カオナシの所在が気になるだろう。私とその居場所を突き止めて五位に回収させて君の目の前に連れてきてやる。土着の妖怪だ、結界都市の秘密も知っていると私は思っている。純血一族はそいつの存在も知らんようなのでな、もし我々が先んじて結界都市の核心に触れる事ができたなら、また一つ連中より有利な位置に立てる伏せ札が手に入るわけだ。三位も五位を回収できて胃薬を服用しなくてもよくなるだろうし、君も昔の知人と語りたい事もあるだろう。夕凧姉妹も満足する。死使十三魔の乱れかけた足並みは多少なりとも揃うだろうよ」

「貴方、カオナシが並折の重要人物だという確信を持っているの？ たしかに、仮にカオナシがあの特種な結界の鍵となっているなら純血一族の件も些細な事でしょう。カオナシを回収し、結界を操る事ができるようになれば死使十三魔があ魔都を手に入れたも同然だもの。でも、もし違っていたら？ カオナシがただそこに住んでいるだけの存在で、結界とは無縁だったら？」

「それならそれで、我々が不利になるわけでもない。君に引退勧告を受けるような隠居間近の男が、勝手に妖怪を招待した。それだけの事だ」

番とカオナシの間に特別な感情があることを知ってなのか、いやアニマが知っている筈もない。それでも彼は皮肉めいた貌で笑っていた。

疑い出したらキリがないのは番も重々承知していることであり、基本的に人間は多かれ少なかれ腹の内に何かを秘めているものである。だからアニマが何を考えていようと、番にそれを止める理由がない以上は黙っているしかない。

下手に口を出して腹の内を探られるのも好ましくない。

この男はただ死使十三魔の為に動こうとしているだけなのだ。

「わかったわ。貴方のしたいようにするといい。私に会いに来てくれたというのに、有益な情報をあげられなくてごめんなさい」

「いやいや、実のところカオナシという妖怪が危険か否かを確かめたいだけだったのだ。君の様子では並折から連れ出したところで問題はなさそうだ。十分有益な情報だよ」

「わざわざ 深海のように冷たいこの部屋へ来たのも、それだけの為なのね」

深海のように。

番は、アニメが訪れた際に使った表現を流用した。

「ふふ。この部屋は本当に冷たい。この空間が深海ならば、君はなんなのだろうね」

「私は……そうね、深海魚と言いたいところだけど、この部屋を暗く冷やして深海たらしめているのは私自身。だから正確には私とこの部屋が深海と言うべきかしら」

「なるほど。ならば私が深海魚かね」

「ええ、そうなるわね。貴方にとって居心地は悪くない筈。深海……即ち暗黒の世界。視界も遮られ、信ずるは己のみの世界」

視界。

目の下に人差し指を添える番の様は、明らかに目を塞がれたアニメへの皮肉を表していた。

男はそれを気にすることもなく、鼻で笑い飛ばし席を立つ。

「では少々、遊んでくるとするか」

扉が開き、冷えた空気が移動し、またも蠟燭の灯が大きく揺れた。

アニマの去った後も、彼が訪れる前と変わらず番は蠟燭と向き合っていた。

違うのは、無心だったのが今は思考を働かせている点だ。

それもすぐに終わり、彼女の中では結論が出たのだろう。白い顔の、頬肉が耐え切れずに震えた。

「今のところは、カオナシの思惑通りか。いつも通りね」

結界都市は餌。

餌に釣られて集まる超常の者達。

そして、

「全部喰らうカオナシ」

呪詛憑き、純血、十三魔、裏稼業、エトセトラエトセトラ。

「何度も何度も同じことの繰り返し」

冷えた部屋なのにアニマとは違い彼女の吐く息は白くない。

「でも今回はわからない。今回こそ貴方に引導を渡す事ができる。

天宮柘榴が鎖黒を持って並折に入ったのなら、もう貴方に安息は無い。あの子が結界都市の形式に気付き、魔都を解放したその時。それがカオナシの最期。カオナシが不憫で孤独な妖怪？ ふふ……そんなわけない。奴こそ古の妖怪達を皆殺しにした張本人なのだから」

『お帰りなさいませアニマ様』

「その名前で呼ばなくても良い。今は周りに誰も居ない」

『わかりました霧人様』

「……………」

『……………』

「……………ぷふっ」

『……………くくっ』

そこは朝も昼も晩も、

春も夏も秋も冬も、

今も、昔も、

そしてこれからも、

昏き森。

「ぎやはははははは！ あー毎度毎度、固苦しいっいたらねえぜ！」

『あはははは！ んはははははは！ 仰る通りです御頭！ 死使十三魔と純血一族の二足の草鞋ってのは大変そうですね！ で、魔氷はどんな様子でした？』

「最高だぜ、昏黒坂の名前を聞いた途端に憤りを見せやがった。まさか目の前にその当主様が座つてるとも知らねえで、馬鹿な女だぜ。ぎやはははははは！」

『死使十三魔の序列八位が、実は純血一族の昏黒坂家当主、《昏黒坂霧人》。まさか純血一族が組織内に潜伏しているとは思わねーですよ』

陽の光を知らぬ土。

檻がごとき木々の並び。

縦横無尽の有刺鉄線、茨道。

自然の結界は近寄る者を拒む。
そんな暗黒の森に、昏黒坂家の大きな屋敷はあった。

「奴ら疑いもしねえ。魔眼のアニメあ？ きひひ、これっぽっちの能力で序列八位に立てるんなら、死使十三魔なんか所詮は使い捨ての駒にすぎねえよ」

「いやいや未来視と過去視はさすがに御頭にしかできないですよ。ま、それも僕達にや必要ないですがね」

「まあな、結構疲れるしよ。だから怠くなって使うのサボってたら番の奴、『能力が衰えた』とかぬかしやがる。頭パーにも程があるだろ」

「あははははは！ 傑作じゃないですか」

「クソ長え間、冷凍庫に引き籠ってるアイスウーマンなんざその程度よ。脳味噌まで凍ってやがる。相手にするだけ無駄だった。んで、そっちはどうなんだよ霧馬^{きしま}？ 八汰祁のジジイは乗ってきたんだろ？ 序列五位をぶち殺す算段はできてんだろうな？」

「んー、まあまあです。とりあえず現状は、守野三桜が帰還して、御上の処分待ちって状態ですわ」

「構うこたあねえ、昏黒坂病院まであのアマ引っ張ってこい。並折は奴と一緒にやなけりや入れねえからな。御上から入り方を教えてもらってんのは奴だけだ」

「ジジイが渋っているようですが、大丈夫でしょう。五位をぶち殺す算段は　まあ、まずは例の《突攻兵器》でも並折にぶつけてみようかと思ってます」

「ああ？　なんだそりゃ」

「ほら、居たじゃないですか。うちの家系で使い物にならないあの」

「おお、てめえが実験台に使うとか言っただけで生かしといた奴か。まあ適役だわな。てめえの事だ、どうせ散々いじくりまわしてんだろ？ 突攻兵器としてすら使い物にならなかつたら承知しねえぞ」

『あはは……腹ん中に爆弾でも仕込んでおきますかね……』

閉ざされた障子戸の前で片膝をつく昏黒坂霧馬は、一度だけ暗闇に溶けた庭へ視線を向け、それから再びほんのり明るい障子戸の向こう側へ戻す。

中を窺うことはできないが、その部屋は広く畳の敷かれた空間。灯火の前に立つ当主　昏黒坂霧人らしき人間のシルエットがロ―ブを脱いでいた。

それから霧馬の耳に何本もの糸を千切るような音が聞こえた。次に畳まれた衣服を振って広げる音。帯紐を強く結ぶ音が聞こえ終わると、

「あーあ」室内の影はずどんと腰を床に下ろした。

「さてと、どうしたもんかねえ」

中からの声は霧馬に向けられたものではないらしい。

「本格介入大いに結構。だが、どうにも特定の標的だけを射殺すつてのは俺達にや不向きなんだよなあ。多数混戦に発展した時にどさくさに紛れて五位が死にしまったらたまったもんじゃねえ。おい霧馬あー！」

『はい』

「五位と純血一族の接点をもうちよい探れ。昏黒坂との因縁だけじゃねえかもしんねえ」

『となりますと、十年前から更に遡った情報ということになりますな』

「おう。切り口はどこからでもいい。五位からじゃなくて、他の家系から洗ってもいい。特に九条家、守野家、日向家、螺旋ねじがね金家。この辺が頻繁に海外で活動していた連中だ」

『……承知しました』

九条、守野、日向、螺旋金。

家系間の連絡係として昏黒坂では珍しく顔の広い霧馬だからこそ、霧人は頼んだ。本人はそれもわかっている。

霧馬は優秀な人間だ。昏黒坂らしく狂気を帯び猟奇的でありつつ、霧人に劣らぬ頭の切れを持つ。当主補佐として長く昏黒坂家を支え、そしてなにより当主の霧人を敬う。そんな男だった。

（ようするに僕達の他に因縁を持つ奴。個人を探しゃあいい、ってことだな。そいつを餌に五位を一族本家の目から引き離しておく算段。僕達や安心して喰えるってわけだ）

『霧人様はこれからどうなさるので？』

「俺は若い衆に守野八汰祁を攫わせてくる。しばらく《入院》してもらえば三桜も《見舞い》に来るだろうよ」

相変わらず大胆なやり方をする当主に、霧馬は頬を染めた。

いや、このくらいではまだ大胆とは呼べないか。とも彼は思う。

なにせ昏黒坂病院には最近、新しい入院患者が入って来たばかりなのだ。

患者の名前は《織神楽轟》。

兄が死亡し、新たな当主となった翌日に入院したという、《不運な患者だ》。

《診断結果》では《余命三日》とされている。

いや、されていた。

（お悔やみ申し上げます。ってか）

患者の真つ黒な臍物を思い出した霧馬は静かに嗤った。

PUNICA【カオナシとは】 1

PUNICA【カオナシとは】

? 《妖怪》などと呼ばれたこともあった。

外を歩けば石を投げられ。

顔を伏せれば道を塞がれ。

顔を上げれば逃げられた。

たくさんたくさん傷つきながら、男は自分の畑で作物を育て、村の外れでひっそりと暮らしていたのだ。

【カオナシとは】

?

?

羽田立荘のロビー、そこにある畳敷きの小さなスペースはどういうわけか非常に人気のある場所だ。

訪れる人はそこに座るべきだと本能的に察しているかのように靴を脱ぎ、卓袱台の前に腰を据える。もちろん広いロビーには座椅子もあるし木造のテーブルだって置いてある。だがそれを利用するのは大抵唯一の住人である私だけだった。

今日の来客も例によって畳の上に座り、私の出した湯呑を片手に卓袱台に肩肘を置いてくつろいでいた。

「お主の知りたがっている例の……ええと、なんだっけ、あれだ」

「カオナシ」

「うむ、そう、それぞれ。カオナシに関する言い伝えは『ひのえと』の図書館に文献が残っているかもしれないとのことだ」

御渡瑠架子^{みわたるかこ}は、まるで起伏のない平坦な口調で言い、茶をすすずと啜った。

彼女の言葉から感情を読み取るのは至難の業であり、こちらが意識を向けていないと誰に話し掛けているのかすらわからず結果的に無視してしまう場合も多々ある。

今だつて私は座椅子に座つて新聞を開きつつも、記事の内容なんてまるで頭に入っていない。

じゃあ瑠架子の前に座つて会話に集中すればいいじゃないかという話になるのだが、彼女の前に座つたとて彼女の口調に変化があるわけでもなく。ただ独り言のように口から流される奇怪な語尾交じりの言葉を私が必死になつて耳に入れようとする光景が出来上がるだけだ。なんか嫌じゃないのそれって。

だから私は新聞を読む傍ら、ゴザル女の話の片耳で聞いていますよ。という体裁にした方が気楽なのだ。気楽なのだ。そういうことにしておこう。

「ひのえとの図書館か。明日にでも行つてみようかな」

「それがいいでござるよ。拙者が得意とするインターネット検索でも数万件ほど引つ掛かつたのだが」

「数万件っ？」

「これほとんどがアニメーション映画のキャラクターでござつた。残念無念」

自称侍がパソコンにかぶれた有様がこれ。

御渡瑠架子。彼女は結界寮の住人で、先月知り合つた女性だ。彼女の放つ言葉はどれも変な語尾が付いていて、若いのに趣味も渋い

のだろうかと思いきや好物はマンゴー&チョコクレープというふざけた人である。着ているのも着物とか浴衣とか半纏とかではなく、《シヨップ店員と考えたコーディネット》らしい。愛読書は女性ファッション誌。たまに女性週刊誌。好きな場所はコンビニエンスストアで、月曜日と木曜日は必ず立ち寄りらしい。少年漫画を立ち読みする為だそう。

さすがに敬愛する人物は歴史上の偉人だろうと思って訊いてみた

『セフィロスでござる』

誰だよ。もうわけがわからなかった。

そんなゴザル口調の女性、御渡瑠架子。

見かけたらマンゴー&チョコクレープを奢ってあげよう。

『今日の拙者はマンゴー&チョコクレープアイスがいい。温かいのは嫌でござる』

と、いちゃもんを付けられるだろうから。

ちなみに今日彼女に出した湯呑の中身は、砂糖ありありの紅茶。

「少女柘榴殿、図書館へ行くのは明日にすると申されたか。なにゆえ今日行かぬでござるか」

「べつにいいでしょ」

「特に理由はない、と。ははぁん、さては明朗少年に同行してもらおうという魂胆でござるな？ お主もなかなかやりおるのう。心配なさるな明朗少年はこの後フリーでござる。そして拙者もフリーでござる」

「貴女関係ないでしょ」

「あたた、これは辛辣な言葉を浴びせられたでござる。一人より二人、二人より三人。三人寄ればかしまし娘でござる」

「文殊の知恵、ね。あと明朗は男だから三人揃ってかしまし娘じゃ

ないわよ。三人寄れば文殊の知恵。文殊の知恵。文殊の知恵！」

「あたたたた、この人真つ向から捻じ伏せにきたでござる潰しにきたでござる。その文殊の知恵を働かせるには糖分が必要でござるな。たしか図書館へ行く途中に」

「クレープ屋があつたから貴女だけそこに居なさい」

「おや拙者、がま口を忘れてきてしまった。これは失念」

「素直に《クレープ奢ってください》って言えばいいじゃないの」

「クレープを奢って頂きたいでござる」

「いいーやあー」

「鬼じゃ、この女子は鬼じゃ」

そうか、明朗の予定が空いているなら今から行くという選択肢も視野に入れようか。

瑠架子も私が羽田立荘に一人では寂しいだろうと思って結界寮から足を運んでくれている（と思っていた）から、奢ってやるくらいはどうってことない。それに瑠架子には先月 九月に一つ厄介事があつた際に助けて貰っている。そう無下にはできないというものだ。

「わかつたわよ……奢るから。明朗を呼んできて」

「心配無用。彼もじきに来るでござるよ」

「あら。手回しが早いのね」

「侍でござるからな」

理由になっているのかは知らない。

それにしても……。

（なんだか、ずいぶん並折に馴染んでしまったなあ）

ここへ来た当初は力オナシの手掛かりがあつたらすぐに飛びつくくらいの心持ちだったのに。鎖黒だつて見つからないままで、もしかしたらもう私の中で諦めの気持ちが生まれ始めているのかもしれない

ない。

こうして羽田立荘の掃除をしたり、並折の住人と世間話をしたり。意外にも落ち着いた日常を送る事ができる街。私が欲していたものとは、実はこれなんじゃないか。そう思えてくる。

そりゃあ身に危険が迫ることだってあるけどさ。結界寮が管理している現状、私の抱いていた並折の印象よりもずっと危険が少ないってことがわかった。織神楽響なんて大物の呪詛能力者が侵入すればそれなりに張りつめた空気にはなる。犠牲者だって出る。でも結果は？ 犠牲となったのは結界寮の住人二人だけだ。カザラさんと聖歌には申し訳ないが、式神でさえこの程度の被害しか作れなかったのは事実だ。

並折と結界寮。

魔都と呼ばれた此処は、その実、世界危険勢力でも手を出せない裏世界安住の地。

私は何をしに此処へ来た？ カオナシを探すためだ。

どうしてカオナシを探す？ 番姉さんを救うためだ。

何が番姉さんを苦しめる？ 永遠という名の束縛だ。

番姉さんを救うとは何か？ 彼女を殺してあげる事。

番姉さんをどう殺すのか？ 私にはわからない。

でも彼女を知る旧き知人 妖怪カオナシなら、その方法を知っていると思った。

雪女とカオナシは旧知の仲である。番姉さんはカオナシの棲む並折の事をよく話した。でも決して行きたがるうとはしなかった。並折は酷い街だ、と内容が傾倒していた。

永遠を歩む彼女にそれだけの印象を植え付けるのだから、妖怪雪女にとって縁深き土地なのだろう。だったら そこに彼女を殺す方法を求めるのは無謀ではない。

だから私は此処へ来た。

でも……今の私は、それをもうどうでもいいと思っているのだからか。

番姉さんは永遠を歩めばいい。私は安息を生きる。それでいいんじゃないかな。

「瑠架子はさ、どうして並折に来たの？ どうして結界寮に居るの？」

頭の中は甘いものでいっぱいだったのだろう。相変わらず呆けた眼差しと表情だったが、瑠架子はいつもより若干素早く顔をこちらへ向けてきた。

「拙者は人斬り。しかし好んで斬ることも無いし、好まず斬ることも無いでござる。つまるところ斬殺愛好家ではないのでござるよ。あくまで仕事としての人斬り。ところがこの仕事を続けていると、感覚が変になっていくのでござる。これは拙者特有のものなのかもしれないが、見かける人が人に思えなくなってくるのでござるよ」

感覚が麻痺してくるということだろうか。

「ちよつと違うでござる。たしかにその感覚も無いとは言いが、拙者はそれよりも仕事を前提にしまうのでござるよ。感覚が麻痺した場合、一人の人間を見た時にその人間をどう斬り殺すか最初に考えてしまふ。拙者の場合は、まずその人間に対して価値を模索するのでござる」

「価値？」

「口にするのは抵抗あるが……《殺す価値》でござる。もっと言えば、《その人間を斬殺する事で拙者にとって益となるか否か》でござる。まず有り得ないでござるが、もしその人間を依頼で斬ること

になった場合、どれほどの依頼金を用意され、どれほどの手間が掛かり、どのような人生を斬り捨てることとなるのか。考えてしまうのでござるよ」

「麻痺するより質が悪いわね」

「で、ござる」

「というか、瑠架子はそのままで依頼金とかに貪欲なわけ？ たしかに裏稼業 殺し屋《艶斬り瑠架子》としてそこはしっかりしておきたいのはわかる。あたしも裏稼業についてとやかく言えるほど知ってるわけじゃあないけど、そこまで神経質になるものなの？」

「否。拙者として、見かける人間それぞれの人生に興味を持つことは無意味であることを承知している。依頼金云々も、いわゆる皮算用であることも重々承知している。他の裏稼業とてこんな感覚になることはまず無いでござるよ」

だつたら何故。

「拙者は、人間をやめようとしていたのでござる」

「へ？」

「人斬りとして仕事をするうちに、己を人間とは思わなくなっていたのでござるよ」

「じゃあ貴女はなんなのよ」

「《刃》でござる」

その一言を、彼女は私から視線を逸らして放った。

なるほど。そりゃあ瑠架子もあまり口に出したくないだろう。

彼女は、この並折に《逃げてきた》のだ。

自分の弱さを認めて、折れてしまったのだ。

彼女は人斬りもとい、裏稼業にはもともと向いていなかったのだろう。この世界で生きるには、《あまりにも人道的な面を持ち過ぎていた》。

だから自分がただ肉を断つ刃なのだと思いつき、そして無意識が感覚として表に出てきた。依頼金とか、手間とか、殺害対象の人生とか。《人道的な殺し屋》くらいしか気にもしない些細極まりないことが気になりだした。

それでも彼女は（彼女の人生は知らないが）人斬りとして生きるしかなかったのだろう。だから自分はただの刃で、感覚として気になるあれこれは刃を振る誰かが気にする事。と、無理矢理割り切ったのだ。

刃を振る誰かとは誰なのか。そこを埋めるために、瑠架子は並折に来了。

瑠架子という刃を振ってくれる、結界寮を求めて。

「わかった。瑠架子にとって、やっぱりここは安息の地なのね」

「折れた刃の負け犬風情が唯一生きていられる場所でございますよ」

「あら、ネガティブになっちゃった。まあいいじゃない、甘いもの食べて暮らせているんだから。瑠架子にとっては正解ってことですよ」

「うむ、そうでございますな」

自分の意志を捨ててしまった女性。

瑠架子もまた、結界寮の駒の一つなのだ。

いずれ捨てられる時が来る。

刃は振らなければ、ただの鋼だ。

この女性も結界寮に命を握られた人間の一人。

カザラさんや聖歌のようにいずれ居なくなってしまうのかな。

結界寮は並折を管理し、守ってくれる。だけど瑠架子のように深く関わってはいけない。今の私のように、他人事みたく話を聞ける立場が一番良いのだ。

「では今しばらく明朗少年を待つとするでございますか。なあにすぐに

来るでござるよ。柘榴殿、お茶のお代わりを。砂糖ありありで
「はいはい」

その後二時間が経過し、瑠架子は紅茶を何杯も飲み、昼食まで食
べた。（瑠架子は卓袱台。私はテーブルで食べた）

それでも明朗が来る気配はなく、先程から何か変化があるとすれ
ば、うちの砂糖入れが空になったことくらいだ。

食後の一服と言って瑠架子は煙草とマッチ箱を取り出す。彼女は
愛煙家だった。

マッチ箱はどこかの飲み屋の物だろう。《BAR・Horse
s》なんて書かれている。真っ黒のデザインで、なかなか洒落だ。
男性だけでなく女性が持つても違和感がない。

私は座椅子から立ち上がると、木造テーブルに置いてあった灰皿
を卓袱台まで持って行ってやった。もちろん、そのまま畳の上に腰
を据えることはせず再び座椅子に戻った。

紫煙をくゆらせながら瑠架子は畳に手を着き、身体をのけぞらせ
た。のんびり屋の彼女もさすがに明朗がなかなか来ないことを気に
始めたのだろう。

そんな時だった。

「のお！」

瑠架子が奇声を上げて身体を跳ねさせる。

「拙者の印籠がバイブレーションでござる」

何を言っているのかさっぱりわからないので、私はただ奇異な視
線を彼女に向けるしかない。そしてこの女、やたらカタカナ言葉の
発音が良い。

瑠架子がポケットから取り出したのは 携帯電話だった。印籠
ってそのことかよ。

「申す申す」

もしもしていいじゃないか。と思ったが、彼女は自称侍だ。変なこだわりを持つているのも理解しているので何も言わない。

「おお。これはこれは林檎殿。あ、いや、すまぬでござる。昼食は外で済ませてしまったでござる。うむ、事前に連絡しておくべきでござったな失敬した。いやいや、そこら辺のジャンクフードでござるよ。ってあ痛っ！」

手元にあつた冷房のリモコンを投げつけてやった。

もう十月なので三桜が手配した冷房も使う機会がない。だからといってリモコンを投擲に使うものではないのもわかっている。人の手料理をジャンクフード呼ばわりする奴は例外ね。

「い、いや。なんでもないのでござる。ところで林檎殿、明朗 小僧くんは今どこに居るのか御存知でござるか？ うむ……え？ いやしかし午後から……あれ？ ああ、しまった拙者としたことが。そういうこととござったか。あいわかりもつした、では」

通話を終えた瑠架子は、携帯電話を折り畳んでポケットに戻す。そして煙草の灰を灰皿に落とすと、私の方に顔を向けた。

「明朗少年は予定が入ってござった。拙者が勘違いしていたでござる」

大体会話の内容で把握できていた。

まったく。無駄な時間を過ごしちゃったじゃないの。

「そしておそらく、明日も忙しいでござる」

「そうなの？ まあ仕方ないわね」

「うむ。では早速行こうではないか、柘榴殿」

瑠架子は胸元から閉じた扇子を取り出し、少し開いて口元に当てる。ずっと思っていたが、侍というよりも艶のある仕草が多い人だ。

「行くつて、図書館？」

「でござる。クレープ屋は次の機会にして、閉館する前に向かうでござるよ」

「やたら急かすわね。別に構わないけど」

「善は急げ。思い立ったが吉日」

「そうね」

「時は金なり。金は諸悪の根源」

「何が言いたいのよ」

「何か言いたかったのでござる」

じゃきん、と扇子を開く瑠架子。取り出したのは鉄扇の方だったのか。彼女はいつも普通の扇子と、この鉄扇の二種類を携帯している。

煙草をくわえた口の前でそれをまたバチンと閉じる。

閉じた扇子を灰皿の上にかざし、今度はゆっくりと開く。

綺麗に輪切りされた吸い殻が皿に落ちた。

瑠架子曰く、口紅のついた吸い殻を人前に晒すのは嫌なのだとき。

ともかく。私はこの日、一人の人斬りを連れて図書館へ行くことにした。

カオナシの情報。まあ、私にとっては有益な情報となったのは事実だ。

兎にも角にも私はカオナシという妖怪の恐ろしさを知ることになる。

PUNICA【カオナシとは】2

「お姉ちゃん！」

ひのえと駅を降りてすぐ。駅構内で誰かを呼ぶ大声を聞いた私と瑠架子は足を止めた。

私達の他にもぞろぞろと電車から降りた乗客は誰もがその声はどこから発せられたのか視線を向けていた。

小学生だろうか。小さな男の子が、人目もはばからず「お姉ちゃん！」とまだ大声を出しながら大きく手を振っているのが見えた。明らかに、私と瑠架子の方を見ている。

私達は顔を見合わせ、互いに知り合いではない事を確認し合った後、人違いではないかと再び男の子の方を見る。

その子は手を振りながらこちらへ歩いて来るところだった。

お姉ちゃんとは私か瑠架子の事か？

男の子は私達の前で止まると　瑠架子ではなく、私を見上げた。

「お姉ちゃん、あの時はありがとうございましたっ」

と、言われても……。

私はこの子を知らないし、もちろん何かをしてあげた記憶も無い。どう思考を巡らしてもただの人違いだという結論に到ってしまうのだが、男の子の方は至近距離に居ながらまるで疑いもせず私を知人だと認識しているようで。

怪訝な顔をする私の方がおかしい感じになっている。

「柘榴殿、本当に見知らぬ子なのでござるか？」

隣から小声で言ってくる瑠架子も、私が忘れているのではないか

という疑いを持ってしまっている。

純真無垢な少年の笑顔は、それくらい素敵なものだった。

「いやはやお主、さすがにまずいでござるよ……」

「何がよ」

「いくらこちらの世界といっても、少年に手を出すのはちょっと…」

…」

「まずその発想がおかしい！」

明らかにこの子は一般の子供。私と関わる機会なんて微塵もない。私に少年趣味はもちろん無い。

あの時がどの時かも知らないし、私が並折に来てからまだ四ヶ月くらいしか経っていない。その間に関わりのある人間を忘れてしまっただけで、まっとうな記憶力の問題があるわけじゃない。

にこにこ向けられる笑顔。矢神聖歌の件もあって人当たりの良い笑顔というものにはまず警戒してしまう。見たところなにやら膨らんだりユックサックを背負っており、これから電車に乗ってどこかへ向かうのだろうと予想する。

「ええと……」

私は膝を曲げて少年に顔を近づけ、

「こんにちは」

とりあえず挨拶をするしかない。

自信たっぷりで見つめてくるこの子に対して『人違いじゃない？』とはさすがに言い辛く、どうしたものかと困り果てる。

すると私が挨拶しただけでも満足したのか、少年も頭を下げた。

「僕のこと覚えていないんじゃないかって思ったけど、良かったー」

覚えていない。けど、君の笑顔がそれを言わせてはくれないのよ

少年よ。

なにか些細なことで私の顔を覚えられたのか。それなら私が覚えていないことも有り得る。この子もそれを承知して、一か八か声を掛けてみたのだろう。その勇氣に乾杯。

「お姉ちゃんのおかげ。これ、あげる！」

と言つて渡されたのは飴玉。実に子供らしいじゃないか。

やはり全く身に覚えがないけど、お礼を言つて受け取つた。

隣で溜架子が唇に人差し指を当てながら「いいでござるなあ。僥倖でござるなあ」とか言っているが無視。

「その体躯にしては大荷物だけど。これからどこか行くの？」

そう訊くと、少年はなぜか寂しそうな顔をした。

「うん。あのね、おじいちゃんの家に行くんだ」

「遠いの？」

「九州」

九州？ ああ、ずっと南じゃないか。そりやまた長旅だ。

周りを見渡してもどうやらこの子、一人だ。

「遠くまで行くのね。一人だけで？」

「うーんとね、違うよ」

「そっか、なら安心ね。気を付けてね」

少年は大きく頷き、彼の腕の太さに合わない腕時計を眺める。電車の時間を確認したらしい。彼がリュックサックを背負い直した際、隙間からなにか白い布が見えた。それで中の荷物を包んでいるのだろう。

彼は「そうだ！」と、思い出したように荷物を胸の前に持つてきて中を漁りだす。

取り出したのは　この歳の少年らしい、戦隊物のヒーローが描かれたハンカチ。

なにかを包んでいるようで、大事そうに丁寧にそれを開いて私と瑠架子に中身を見せてくれた。

「あのね、ここに来る途中で見つけたの」

「あら綺麗ね。良い香り」

「ほほう、強い芳香でござるな」

六枚の白い花弁。つやのある花だった。

「お母さんもね、お姉ちゃんに『ありがとう』って言ってたよ」

「そうなの」

「この花。お姉ちゃんも好きって言ってたもんね」

「え？　え、ええ……」

私は花に詳しくはない。瑠架子の言う通りそのジャスミンのような白い花は香りが強かった。

彼はきのえと駅まで路面電車で移動し、そこから乗り換えてこの街を出るのだそうで、そろそろ時間だと言って私達は少年と別れた。この街を離れる人。それを見送るのは、なんだか不思議な気持ちだった。

べつに彼は並折の住人ではなく表側の住人なのだから、この街を出ることがどれだけ特別なことなのかは知らないだろう。知らなくていいことだ。

「あの花から取れる山梔子しそぎはよく漢方薬に用いられるでござるな。なかなかの苦さでござる」

「瑠架子、今の花を知ってるの？」

「乙女たる者、花の種類くらい知っていて当然でござるよ」

「侍なのか乙女なのかはつきりしなさいよ」
「乙女侍。で、「じざる」」

何その新ジャンル。

ともあれ結局人違いの感が否めなかったし、それを少年に言う事も出来なかった。

正直に言うべきだったのかもしれないが、あの子がお礼を言いたいという気持ちを晴らすことができたのだから、あれで正解だったのかもしれない。

改札口を抜ける少年の後ろ姿をもう一度見送って、私と瑠架子は駅を出た。

ひのえと駅を出て商店街を抜けた先。そこは昔からある商店街とは違い、デパートやファーストフード店の立ち並ぶ近代的な街と化している。山を切り開いて作られた土地で、少し離れた場所には新築の家屋やマンションのある住宅地まで作られた。少し前の地図だと載っていないだろう。

その中に大きな図書館もあった。作り直されたからまだ新しい建物だ。もちろん《並折図書館》なんて名前ではなく、《表側の図書館》として多くの人々に利用される立派な公共の施設である。

私と瑠架子が行こうとしているのはそこではなく、《作り直される前》の図書館に用があった。

もちろん表向きにはとづくに取り壊されて今は無き建物とされている。だからこの地に住まう一般人は、この街に図書館が二つあるとは知らないだろう。この在る筈のない図書館こそ、《並折図書館》と呼べる。変な言い方をすれば裏図書館。

並折に限らずこういった場所は世界中あらゆる土地に存在する。例えば、世間的には廃墟としかみなされていない場所。よくオバケが出るとか噂される場所でもある。それは魔術的・呪術的に人払いの処置が施されているもしくは、霊的媒体の作用によるものだ。こちら側の人間でないと意味のない場所なので、興味本位で一般人が立ち入ったところで損をするのが関の山。その古い図書館も、商店街と開拓街のちょうど境界にあたる場所に建っている。

境界は実に都合の良い立地条件だ。

二つに隔てる線というのは特殊な力を帯びる。万物には区切りというものが必在し、多在するのがこの世の理だからね。陰陽然り。あちらと、こちら。それを区切る線は意識から逸らすのに適している。境界線上こそ我々の世界では意識すべき観点であり、注視すべき場所なのだ。そのくらい重要なものね。

ともあれ誰もが『古い方の図書館はもう壊されて存在しない』と思っているその並折図書館もそういった認識から隔離された場所であるということだ。

「まあこの図書館も、一般的に利用されていた頃はコソコソと地下に足を運ばなければならなかったようでごさる」

「結界寮としてもひのえとの土地開発には益があるのね」

「いや、まあ……うむむ」

「どうしたの」

「実は先月、結界寮の事情で……病院を一つ大破させてしまったの
でござる」

「ぶっ！」

暴れすぎだろっそれは。

そういえば病院も開発に合わせて新しくなったんだっけ。すごく大きな病院が高台にあるって聞いた。

図書館と同じように、古い方の病院もこちら側の医療施設として心置きなく利用できるようになった筈。それを……大破させてしまふとは。

「いや、大破させたのは新しい方でござる」

「おい！」

「仕方なかったのでござるよ」

「あたしが言える立場じゃないけど、こうやって結界都市として土地を裏で仕切っている以上、もうちょっと結界寮も表側に気を遣った方がいいと思う！」

商店街を歩きながら私は声を荒げ、それに反応した小柄のポニーテールがびくんと揺れた。その髪型は彼女曰く、サムライヘア。でもただのポニーテール。

ちょうど一軒の小さな本屋があったのでそこで新聞を購入する。聖歌が居なくなってから新聞を読む機会が少なくなったので知らなかった。

うむ。もう記事は小さくなっているが、病院の修理状況について書かれているのを見つけた。先月の事件だからさすがに写真まで載っていないか。つちのえとで起きた工場の事故の方が記事欄のスペースが大きいや。

「結界寮もそれなりに重く受け止めているでござるよ。しかし結界都市は勢力として内部ばかり気にしているわけにもいかぬでござるからな」

「そつちもなにかと大変そうね」

「うむ。苦勞が絶えぬでござるよ」

両手にクレープを握った女が吐いていい科白じゃないと思う。

ちなみに両手に一つずつ、ではない。両手に二つずつ。四つのク

レープを持っている。しかも全部同じ味なのだからもはや何も言いたくない。

普段より幸せそうな顔（目を凝らして観察しないとわからない表情変化）で、そこいらの若者と変わらないダラダラ歩きをしていた瑠架子だが、いきなりその歩き方が変化した。

これは容易にわかる変化だ。

膝から下を遊ばせるように振る気の抜けた歩き方から一変。靴の踵と爪先をしっかりと接地させ、股関節から背筋を駆使して素早く歩き始めた。私も合わせて歩行速度を上げる。

一定の間隔で口を付けていたクレープも瑠架子の意識から外れている。

一体何事かと彼女を見ていた私の視線に瑠架子の視線が重なるなり、彼女は小声で言った。

「……問おう柘榴殿。お主が知りたがっている力オナシというものは何でござるか？」

「妖怪」

何だ？ と訊かれても、並折に棲む妖怪としか答えようがないのでそのまま言った。

どうやら瑠架子が足を速めたのは気持ちの高ぶりに起因しているようで、若干強張った面持ちになっている。これも微妙な変化だけだ。

「柘榴殿は力オナシという妖怪を求めて並折へ来た、という解釈でよろしいか。そして並折の図書館にその文献が残っている」

「だから私達は図書館に向かっているんじゃないの。今更なによ」

瑠架子の表情は、青褪めたものになった。これははっきりとわかる変化だ。

「妖怪力オナシというのは、滅びた妖怪では」
「ない。現代でも、この街のどこかに居る筈の妖怪よ」
「ありえないでござる！」

急に大きな声で言われたので、さすがに驚いた。いつもは言葉に感情をこめない瑠架子が、声を張り上げるなんて初めてだ。

私が何も言えずに隣の顔を見つめていると、彼女は構わず続けた。

「この結界都市に妖怪は存在せぬ！ そんなことはあつてはならんでござる！ もし、仮にその妖怪が現代も尚生き続けているとしたら、結界寮は　この街は　地獄絵図と化している筈！」
「……どういうこと？」
「いいでござるか柘榴殿」

瑠架子は人格が変わってしまったように肩を上下させて呼吸し、眉間に皺を寄せた。

「どうやら私は彼女の怒りに触れたらしい。いや、これは怒りというより、恐怖。彼女の恐怖心を煽ったということが。」

「並折の妖怪については知っているでござるな。生まれつき能力を携えていたがゆえ、人々から忌み嫌われた者達。いわゆる能力者というやつでござる。八月の一件ではその妖怪の能力を垣間見たでござるな」

妖怪雨女か。あの時はたしか聖歌が安永筆・豊房で能力だけを顕現させ、江本佐々奈に与えた。

佐々奈の感情に反応し、長い間雨の日が続いたっけ。

「あんなもの、能力の一部にすぎぬでござる。能力だけ蘇らせたと

て、それを使いこなせる能力者がおらぬのでは発揮できぬでござる。だが、垣間見せた能力の一部だけでも並折という街に限定して気候を変えてしまうほどの力。柘榴殿、勘違いしてはならぬ。並折の妖怪とは、現代に跋扈する呪詛能力者などとは比べ物にならないほど強大な者達だったのでござる。ある者は指先一つで地を揺らし、またある者は一呼吸で生命を枯らした。一人一人がこの世界を滅ぼしかねない能力者だったのでござる。ただの妖怪ではなく、並折の妖怪。此処に集った者達は、人々だけでなく」

「同じ能力者　妖怪からも忌み嫌われた？」

「……そもそも妖怪それ自体は本当に作り話を起源としているのかもしれないでござる。そこに実在する能力者が混じってしまったという説もある。ただ確実に言えるのは《並折に集った能力者達はどいつもこいつも一人一人が大量殺戮兵器のような連中だった》ということでござる」

不思議には思っていた。能力者という存在は、今では呪詛を宿した者達くらいしか存在しないと思っていた。

生まれつき何らかの能力を持っている者が居るなんて、聞いたこともなかった。

純血一族や死使十三魔のように呪詛を宿しているわけではない。何かのおかげで能力を得る彼らとは全く異なる存在なのだ。

雨女の能力だってそうだ。雨を降らす？　身体から毒を出すのはわけが違う。あれが能力の一片なのだとしたら、並折で生きていた雨女は、もっと凄まじい降雨被害をもたらす者だったのかもしれない。

でも　カオナシ伝承によれば、その大量殺戮兵器のような連中はカオナシを除いて全員死んだとされている。実際に怪遺産という死の証も遺されている。

カオナシと、もう一人の生き残り　雪女は、まだ現代に存在しているわけだ。

そして瑠架子は、妖怪が並折に存在しているのはありえないと言った。

「たしかに並折の妖怪が強大だったとしたら、カオナシも然りよね。地獄絵図を作り出せることも解ったわ。でも何故、並折に存在できないの？」

「結界でござるよ。並折には、強大な妖怪が跋扈できぬよう何者かが封印の結界を張ったのでござる」

「ちょ、ちよつと待ってよ。この街が結界都市って呼ばれているのは、結界寮の結界屋が結界を張っているからなんでしょ？ その封印も結界屋が張ったの？」

「否。封印結界が施されたのは遙か昔。結界屋はそこに感知結界と呪詛弱効化結界を付け足したにすぎないのでござるよ。しかも封印結界は古式術法の地形活用型に解除条件付きという代物。さすがの結界屋でも解除方法はおるか、その術式や仕組みもわからないお手上げ状態でござる」

瑠架子の話からすると、この並折はもともと、強大な妖怪　カオナシが跋扈できないように結界で封印していた街だったということか。そこに結界屋が目を付け、封印結界をベースに感知結界と呪詛弱効化結界を上乗せしたと。

つまり、この結界都市は、古代と現代の結界師二人による多重結界都市ということなのか。

・ 妖怪封印結界

これに、

・ 感知結界

・ 呪詛弱効化結界

が加わった三重の結界。

これが魔都並折を驚異の土地たらしめているもの。
いやちよつと待て。

「瑠架子。古式結界は妖怪を封印するだけでしょ？ ならカオナシが存在することだって有り得るじゃないの」
「否、否、否。こんな凄絶極まりない結界、たとえ封印であったとしても存在していられるわけがないでござるよ。豆腐を鑄造プレス機で押し潰して『はい封印』って言っているようなもんでござる。これでもまだ存在し続けているのだとしたら。それこそ、そのカオナシは世界を終わらせる力の持ち主でござる。この並折とて人の住める土地ではいられぬでござるよ」

結界の力が強すぎて、封印どころか滅びてしまったのか。
それが事実ならカオナシはもう……。

「う……」

（ち、ちがう）

なんだ？

私の記憶ではない光景がフラッシュバックしてくる。
瑠架子の顔が消え、商店街の光景が消えた。
カオナシの存在有無について、私は何故か確信を持っている。
強大な妖怪は存在していると尚も断言できる。
私がそう言える理由が不明瞭なのに、私は何かを知っている。
眩暈がする。ちかちかちかちか。

私はひのえとに居る筈なのに、私の目は違う光景を映す。
嫌だ。この部屋はもう見たくない。

暗くて、独りで、静かで、寒い。

その中で私は誰かを見つめている。

青い髪。白い肌。

骨の芯まで凍えて身体が軋む。

素早く画面を切り替えるように、一人の女性を見る角度が変わる。

ちかちかちかちか。

私は、私は、私は、私は。

雪のような女性の奥に。

そこに。

ああ、やっぱり。

私が居た。

（ がっ、ぎ、お、終わらない。あの人は、終わらない。だって、だって、だって、あの人は、ずっと、ずっと、永遠に、私ばかりを…… ）

私の顔が潰されると、いつも彼女は私に背中を向けて、私を見た。

そうよ、いつだって。

私の顔を潰したのは、あいつ。

（あいつ？ あいつ。あいつだ。あいつ！ あいつが私の顔を！）

知っている。私はあいつを知っている。

『 またお前か。グレナデン 』

たしかにこの目で顔の無い奴を捉えていた。

『 俺が求めているのは番だと言っているだろう 』

封印？ 封印だって？ あいつはそんな生易しい処置じゃ揺らぎもしない。

『気に入らねえな、その態度。その目つきと鼻につく耳障りな口振り』

寄るな。寄るな。寄るな！

『潰れる』

？。

『ははははは、何？ 何だつて？』

、
っ？

！

っ！

『くははははははははは！』

『くっはははははは！ 小賢しいんだよ娘。小生意気なんだよ娘。お前にはソレがお似合いだ。苦しいか、息ができないか、何も見えないだろう聞こえないだろう嗅げないだろう。おやおや綺麗な肌が台無しじゃないか。引っ搔いても引っ搔いても爪に肉が詰まるだけだぞ。ほら刃物を貸してやる。息がしたけりやそれで自分の綺麗なっぺりさっぱり何も無い顔に、穴を開けるんだな』

『はっ。本当にやりやがった。醜い様だ』

『自分の血で溺れてやがる。どうしようもねえな、馬鹿女』

「畜生……畜生あの野郎！ ちくしょう！」
「ど、どうしたでござるか柘榴殿っ？」

握ったナイフの感触も、自分で切り裂いて作った口の痛みも、溢れる血で胃も肺も埋め尽くされた苦しみも、確かに覚えている！

どうして覚えているんだ！
顔の無い、あの野郎の姿まで！

「意味わかんない意味わかんない意味わかんない、あたしの顔、顔を、よくも！」

「落ち着くでござる、これ、柘榴殿。拙者でござるよ。わかるでござるか？」

「わかってるわよ五月蠅いわね！」

「おおっ……ヒステリイというやつでござるか……」

正直、わかっていなかった。

私に声を掛けているのが瑠架子なのだとわかってきたのは、路地の隅にうずくまって悲鳴が呻き声に変わってきたあたりから。

どうやら私は歩いている途中で突然頭を抱えて叫びだしたらしい。驚いた瑠架子が何度も呼び掛けてくれたそうだが、私はどこかへ意識を飛ばしてしまっており、ひたすら『顔』と叫んでいたのだという。

その時の私は完全に自我を失っていた。

どうしてこのタイミングで在る筈のない記憶がフラッシュバックしたのかもわからない。

落ち着きを取り戻し、次に襲ってきた頭痛に苦しんでいると、瑠架子が自販機でペットボトルの水を買って戻ってきた。

「こつこつした事、よくあるのでござるか？」
「……無いわよ」

五百ミリリットルの水を半分ほど一気に飲み干し、力任せにキャップを締める。

阿呆か私は。

なにが『安息を生きる』だ。なにが『このままでいい』だ。いいわけないだろう。

私は番姉さんを殺し、カオナシも殺す。

動機の記憶がすっぽり抜けているが、私は此処に辿り着いた。本能でやって来たのだ。

どうりで不明瞭なわけだ。私は何者なのか、私は番姉さんとどこで知り合ったのか、私はいつから番姉さんの傍に居たのか。

「ふふ。あはははは」

全部、忘れている。

だが私は確かにカオナシに会った。奴に顔を潰され、死んだ。それが今ではちゃんと顔もあり、生きている。

これが何故なのかは知らない。この明瞭な感覚が偽りの物だとは思いついだが、たとえそうであったとしても、私の腹の底　心に深く擦り込まれた憎悪は拭い去れない。これだけでも十分な動機だ。雪女とカオナシ。この妖怪二匹が私に何をしたのか。それは殺す時に訊けばよいだけだ。

かちん。と、私の中で枷のようなものが外れた。

「瑠架子、カオナシは居る」

「……」

「絶対に居る。今もこの並折で、生意気にも口描いて呼吸してやがる」

「しかし……」

「地獄絵図？ あいつの地獄絵図がたったこれだけの血で描けるわけがない。あいつが大人しく息を潜めているのは何か理由があるのよ」

「お主、どうしたでござるか。カオナシについて知っていることを思い出したでござるか」

はつきりとは思いつけない。

だが、それに気付いたというのはとても大きい。

それは私の記憶が第三者の手によって何か手を加えられているという証明だからだ。

そんなことができるのは 番姉さんを置いて他に居ない。居るわけがない。

私を縛って傍に置いていたのは彼女なのだ。彼女だけなのだ。

私はカオナシに会った事があって、顔を潰された。そして雪女は私の記憶からカオナシを取り除いた。確証はないが、雪女が並折を悪く言っただけから遠ざけようとしたことや、今見た記憶の断片の理由としてはこれが最も有力だ。

「瑠架子。あたしに会った事ある？」

瑠架子は口を半開きにし、左目の瞼だけを持ち上げて怪しむように私を見てきた。

「今、会っているではないか」

そりゃそうだ。

質問を変えよう。

「《グレナデン》って名前、聞いたことある？」

私はこの街へ来て初めて、私が持っていたコードネームを口に出した。

でも私の物とは言わない。それにもう捨てたコードネームだ。

だから私が死使十三魔の元序列四位直下部隊構成員だとは瑠架子にはわからない。

「グレナデン？ シロップでござるか？」

「コードネームよ」

「ああ、コードネーム」

私は浅はかだった。

この御渡瑠架子を、嘗めすぎていた。

相も変わらず後悔した時には既に遅く……。

『しまった！』と、思った時には、

鉄扇の刃が私の頬を斬りつけていた。

御渡瑠架子を、敵にしまっていた。

「無論、知っているでござる」

瞬間　私は首を鷲掴みされ、商店街の脇道へと押し込まれた。

至近距離で見る瑠架子の目は殺気を帯びていて、そこに先程までの彼女は居なかった。

甘いもの大好き御渡瑠架子ではなく、殺し屋《艶斬り瑠架子》を、敵として召喚してしまったのだ。

建物と建物の間走る脇道　路地裏は、まるで世界が違った。

光は遮断され、影が重なり、一人の女が殺されようと誰もすぐには気付くまい。

私は馬鹿か。何があるうとこの街で いや、どこであってもコードネームは口にするまいと誓ったのに。誓いを破った結果がこれだ。

瑠架子はもう私を敵と認識している。

じゃきん、と開かれた鉄扇を三本の指で持ち、私の喉元に突きつけてくる。

「グレナデン。そりゃあ知っているでござる。死使十三魔、序列四位の直下部隊カクテルズ。その中に、グレナデンというコードネームは存在するでござる。浅はか極まりないでござるなお主は。グレナデンそれ即ち、《柘榴のシロップ》」

もともと天宮柘榴という名前は、コードネームを由来として私が自分で付けた名前だった。

自分の記憶を取り戻そうとしたがゆえに、こんな単純なミスを犯すなんて。やっぱり私もこの世界で生きていくのは向いていない。

「死使十三魔の手下が、並折に何の用でござるか？ いや、お主の用はカオナシとか申しておったな。ならば死使十三魔はカオナシを求めて何かを企てているでござるか」

喉に鉄扇の刃先が食い込む。

切れ味が良く、ちよっと押し込まただけで私の首の皮は切られ、痛みが走った。

「違う……あたしは、もう……」

「不覚であった。純血一族の件が続いていた為に、警戒を呪詛能力者に絞っておった結果寮の不覚。死使十三魔の下位部隊の侵入を許してしまうとは」

絶体絶命。

私の中で様々な思考が凄まじい速さで巡っていく。

これから私はどうなるのか。瑠架子は結界寮に報告し、私は捕獲される。死使十三魔について尋問を受ける。カクテルズという素性まで知られているのなら、謎に包まれている序列四位についても根掘り葉掘り吐かされるだろう。

そしてカオナシ。おそらく瑠架子は私の話を聞いているのでカオナシの實在する可能性について結界寮に再考を進言する。そうなればカオナシの文献を、その支配力によって並折中から掻き集めるだろう。

もう番姉さんを殺すどころではなくなる。

死使十三魔まで介入してきたと結界寮は認識する。純血一族に突かれてピリピリしているこの状況で。

さすがの結界寮も危険勢力二つを相手にはしたくないだろう。なら、当然私の手なり足なり目なり歯なりを奪って、私という本体と別に箱分けして全部死使十三魔へ送り返す。それがこの世界でよく取られる手法だ。見せしめとも言う。

送り返された死使十三魔の方は、結界寮に対して特に何もしない。だって私は勝手に抜けて勝手に結界寮に捕まった脱走者なのだから。脱走者に《それなりの》罰を与えて、終わりだ。

つまり、ここで結界寮に捕まったら、どちらにせよ私は。

「いやだ……」

「と申しても拙者はお主を結界寮へ連れてゆくでござる。抵抗するならこの手と」

右腕が扇子で叩かれた。

「この足を切断するだけでござる」

右足も扇子で叩かれ、ついでに扇子の柄で頬を殴られた。

「助けて瑠架子、あたしは死使十三魔を抜けたの！ 信じて！」

「それは拙者が判断する事ではござらん。拙者はただ危険勢力の構成員とおぼしき侵入者を捕獲し、連れ帰る。あとの判断は結界寮の裁定に任せるでござる」

「そんな……」

「お主とはもう話す口を持たぬでござる」

駄目だ、やはり瑠架子はただの刃。現場判断も至極単純なもの。完全に結界寮の駒と化している。こういうタイプに説得なんて無駄だ。

どうする。足掻いてみるか。

殺し屋に？ 人斬りに？ 喉元に刃を突きつけられたこの状況で？ それこそ彼女の言う通り、私が手足を失って終わりだ。

どうする。どうする。

どうしよう。どうしよう。どうしよう。

もはや私に成すすべはない。

「わかった……降参する」

「……」

「結界寮だろうとどこだろうと連行するといいわ」

「……」

「瑠架子？」

返事がない。なぜか喉元に当てられた鉄扇がカタカタと震えている。

「っ！」強い力で、私の腕が掴まれた。

反射的に身を強張らせた私だったが、その掴んできた腕も震えていることに気付く。

おそろおそろ瑠架子の方に視線を向け

私は見たものは

「っ、っ！」

呼吸ができずに混乱する、口と鼻のない御渡瑠架子の苦悶の表情

だった。

「瑠架子！」

「、つ、つー！」

ガラン、と鉄扇が地面に落ちた。

私を掴んでいた腕も離れた。

瑠架子は身をよじって暴れ、ばりばりと自分の口があるべき場所を引っ掻いている。

「しっかりと瑠架子！ なにこれ……！」

私は地面で転がりまわる瑠架子の上に覆いかぶさるように座り、彼女の顔を調べる。

鼻と呼べる突起が無い……。唇と呼べる形も無い。口と呼べる穴も無い。

のっぺりと、ただ肌があるだけ。強く空気を吸いたがる横隔膜の力で、そこがベコンベコンと激しく起伏を繰り返している。爪で強く引っ掻いた傷がいくつも付いている。

「ッ、ッ、ッ！」

ばんっ、ばたんっ、ばんばんばん！

ざりっ、ざりっ、ざりざりざり！

ばたばたばたばたばたばたばたばたばたばた！

苦しむ瑠架子の履物が地面を叩き擦る音が私の胃を押し潰そうとしてくる。

いくらなんでもひど過ぎる。むじ過ぎる。

髪を振り乱し、涙を浮かべて暴れる彼女は、私の腹を、腕を、肩を、無意識に殴りまくる。

どうにかしてあげたい。してあげたいけど。どうすれば……！

『ほら刃物を貸してやる』

私の表情は凍りつく。

『息がしたけりやそれで』

視線だけがじとりと横へスライドする。

『自分の綺麗のっぺりさっぱり何も無い顔に』

瑠架子の鉄扇が開かれたまま、転がっている。

『穴を開けるんだな』

これで 穴を、開ける？

手に取った鉄扇。ずしりと重い。

カッターナイフのような刃が何枚も連なった、瑠架子特製の殺人

鉄扇。

この刃で、瑠架子の顔に、穴を開ければ、息ができる？

そ、そんな残酷な真似、で、できるわけが……。

『どの口が言う。お前のその手は綺麗だとても？』

綺麗だなんて言わない！ だけど、私はこんなこと、したくない！

『出た出た。直接手を下した事がない者の詭弁。お前は直接殺めた

事がなかったとしても、指示をするだけだったとしても、残酷な、

こちら側の人間だよ』

しるをいしるをいしるをい！

『さあ、ほら、苦しんでいるぞ。息がしたい息がしたいと泣いているぞ。お前と一緒に茶を飲み、食を摂り、談話をした、御渡瑠架子』

『いいじゃないか。それで彼女の望みが叶うのだから。そもそも瑠架子はお前から四肢を切り取っても結界寮へ連れて行こうとした奴だぞ？　むしろ感謝される行為だろう？』

『おや。苦しみのあまり嘔吐したようだぞ。それが全部そのまま逆流して気管に入ったようだな。時間の問題か』
『安心しろ。舌も消しておいてやったから噛み切りはしない』

なんて、奴……！

瑠架子は狂乱し、馬乗りになる私を跳ね飛ばす勢いで海老ぞりになつては後頭部を何度も地面に打ち付けている。

鉄扇を握る手が震える……。

私にはできない。そんなことをしたって、瑠架子は助からない。

「ッ！」

「あう！」

瑠架子の振り回した腕が側頭部に当たり、バランスを崩した私は鉄扇を落としてしまった。

地面と鉄扇が接触した金属音が響き、意識が遠のき始めていた瑠架子は、反射的にそれを掴み取ってしまった。

「だ、駄目、瑠架子！」

私の声なんて届いていない。

ただ息のできない苦しみに苛まれ、握った鉄扇の感触は彼女の身に染み付いた扱い方を、そのまま行使させようとした。

「やめて……やめて……」

「ッ！　ッ！　ッ！」

瑠架子は迷いもなく鉄扇を閉じ、自分の顔に　突き刺した。

ざくり。

「　　ッフ、　　ッグ……」

「ひ……」

「　　ッブ、　　ッブギュ！」

ざくり、ざくり、ざく、ざく、ざく、ぐしゅ、ぐしゅ、

「瑠架　嫌あああああああ！」

ぐしゅ、ぐしゅ、ぐしゅ、ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅ！

「うわあああ！　うわあああああああ！」

私は顔を背けた。両手で耳を塞いだ。大声で悲鳴を上げた。

とても見ていられなかった。聞いていられなかった。

瑠架子が自分の顔に刃物を突き刺し、顔面から血飛沫が噴き上がり、それでも彼女は手を止めなかった。

何度も、何度も、何度も何度も何度も何度も！

抜いては突き刺すを繰り返した。

やがて　痙攣を最後に彼女の身体は動かなくなった。

「うっつ、うっつ……瑠架子……」

瑠架子が口のあった部分ばかり鉄扇で切り刻んだことで、彼女の頭部は上顎から千切れる寸前まで破壊しつくされていた。

赤い肉がびろんと広がり、歯が散らばり、首から上はもう　赤色のぐちゃぐちゃになっていた。

「ひどい……ひどい……」

仰向けの瑠架子のミニスカートは股間の部分を中心に湿り、地面にも染みが広がっていた。瑠架子は尿を垂れ流しながら悶え苦しんでいた。

肉片に包まれ、血塗れの手に握られた鉄扇から目を背け、私はゆつくりと瑠架子の身体から降りる。

そこらじゅうに撒き散らした血と尿の中で倒れる彼女の死体から離れると、路地裏の壁際に転がっている小さなバッグに手を伸ばす。瑠架子の物だ。

そこから彼女の携帯電話を取り出し、私の唯一知る十一桁の番号を、機械的に押した。

「……」

三度目のコールで相手は出た。

「はいもしもし。瑠架子さん？」

「……」

「あれ？ もしもし？」

「明朗……」

「ん、え？ その声はクロちゃん？ どうしたの！」

「瑠架子が……瑠架子が……」

「ちょ、ちよっと、クロちゃん泣いてる？ 何があったの？ クロちゃんっ？」

瑠架子が。

死んだ。

死なせた。

殺した。

殺させた。

私は見ているだけだった。

明朗にどう伝えていいのかわからなくて。頭の中がごちゃごちゃで。

何も言えなかった。

ただ、

これが、妖怪カオナシの仕業だということだけは確かだ。

だから私は、怖くて何も言えなかった。

PUNICA【カオナシとは】 3

私からの電話を受けて明朗がひのえと商店街の路地裏に到着した時。私は御渡瑠架子の死体近くで彼女の散らばった歯を一つ一つ拾い集め、片手の平に乗せているところだった。

ニット帽を深々と被った頭が私の顔を覗く。

「ク、クロちゃん……なに、これ」

可哀想な瑠架子。苦しかったでしように。怖かったでしように。痛かったでしように。

彼女を葬った奴は一度も姿を見せなかった。それがまた恐ろしい。この場に居なくとも人間を殺すなんて容易いんだ。

「これ……瑠架子さん？」

でもどうして瑠架子が殺されたのだ。

あの時、瑠架子は結界寮の住人としてその仕事を遂行しようとしていただけだった。

どうして私は生きていて、瑠架子だけが。

『お主とはもう話す口を持たぬでござる』

そう言ったからなの？ だから顔を消されたの？

その一言を言ったから、瑠架子はカオナシの殺害対象と認識されてしまったの？

じゃあ、瑠架子が死んだのは私が原因だ。

「一体何があったのクロちゃん！ しっかりしてくれ！」

瑠架子が死んでくれたおかげで、私はまだ目的に手を伸ばす事が

できる。

「はは、ははは……」 すごく笑える。

あのままだったら、私は結界寮に捕まっていたんだもの。私が死ぬ筈だった。

わかっていたことじゃないか。此処はそういう場所なんだって。

私は元々そういう女だったじゃないか。他人の犠牲を糧に生き延びる弱い女なのよ。

瑠架子だって、私が死使十三魔の関係者だと知った途端に態度を一変させた。容赦なく私を殺そうとした。

私が原因で瑠架子が死んだ。

だからなんなのよ。

瑠架子が勝手に禁句を口にしただけじゃないの。あんなに激しく何度も顔を破壊しなくなつて、助かつたかもしれないじゃないの。

混乱して恐怖して苦しんで、落ち着きを失つたのは瑠架子だ。生きていれば命に関わる出来事に遭遇する事なんて誰でも有り得る。

遭遇し、そこでうまく対処できなかった瑠架子が悪いんだ。

私はきっかけにすぎない。

私が強くないことくらい知っているくせに、危険勢力関係者だからと過剰に警戒したからだ。さつさと腕なり足なり斬り落として結界寮へ連れていけば良かったものを。そんな判断もできない馬鹿な刃。

そうよ。瑠架子はどうせ早々に死んでいた。結界寮にすべてを委ねた意思のない駒なんて、長く生きていられるわけがないじゃない。やっぱり貴方をきっかけとして気付いたものは間違っていなかったよ、響。

立ち回り方。瑠架子はそれが間違っていたから死んだの。そして

私は生きている。

私は……生きている。

生き……て。

「泣いてるだけじゃわかんないよクロちゃん！ 怖い目に遭ったのはわかる、瑠架子さんの有様からして、残酷な光景を見てしまったこともわかるよ！ でもそれをやった奴が近くににいるなら早く追わなければいけないんだ！」

違う……。

私の目に焼き付いているのは、頭から離れないのは、違う。

瑠架子が自分の顔を破壊する様じゃない。

私がシヨックだったのは、瑠架子の目。

殺し屋稼業に身を置き、艶切りの異名で知れたあの女性が、ひどく怯えた目で私を見つめていたことが辛い。

私を殺そうとしていたくせに助けを求めて涙を浮かべて。無表情を貫くのが特徴だったくせに、あんなに恐怖を曝け出して。死にたくないつて、私に目で訴えてきた。

なんだあれは。

並折の住人なら最期くらい《らしく》死になさいよ。

そういう場所で生きているし、それが当然だと覚悟して生きていたんでしょ？

一般的思考の私と違って、瑠架子は変態雑食厚顔無恥のファツキンビッチなんでしょう？

クレイジーな思考で日常生活に死が溶け込んでいるくせに、いざ自分が死にそうになったら恐怖するの？

都合のいいことだ。それじゃあまるで 《人間》 みたいじゃないか。

他人の死に碌な感想も抱かない奴が。死に際に見せた本性がそれ？ 私は認めない。それが瑠架子のデュアルフェイスだなんて絶対に認めないからな。

「僕がわかる？ ほら目線合わせてみて。駄目か、瞳孔が定まってい
ない。手が血塗れじゃないか、握っているのは 歯？ 瑠架子

さんのものか。集めてくれたんだね」

認めない。認めない。認めない。

そんな貌を見せられた私は決して認めない。

だってそうでしょう？ あんな目で見つめられて、恍惚の顔なんてできるわけがないじゃないの。私は 瑠架子を助けたいと思っ
てしまった。私まで怯えた顔になっていた。

そんなのありえない。

それではこの記憶が揺さぶられてしまうではないか。

私の物ではない私の記憶が瓦解してしまうではないか。

だって……だって……私も、瑠架子と同じ貌で死んだ筈だもの。

それを見たあいつは、私が最期に見たあいつは 嗤っていたもの！

どんなに助けを求めたって、苦しんだって怯えたって、あいつは、カオナシは、それを愉しむように嗤っていた！

でもその私は非情で冷酷で殺戮に魅せられた女だった。そう、この並折の住人共のように。

だから瑠架子もその時の私と同じ貌で死ななければならぬ。同じ貌で死ぬ筈なんだ。

「もしもし林檎さん？ 瑠架子さんが……死にました。え、死体状

況？ その……頭部が原形を失っています。近くに彼女の持ち物が落ちていきますので、御渡瑠架子に間違いないかと。顔を瑠架子さんの武器 鉄扇で切り刻んだみたいです。死体に刺さっています。

林檎さん、さっきたしか瑠架子さんに電話を掛けたって言っていましたよね。はい……えっ？ 外食？ 他には何か、あ、はい、そうですね。ええと、犯人は見当たらずです。

現場には 誰も居ません。僕は彼女から図書館に用があると聞いていましたから、手が空いたので様子を見に行こうと思っただけです。はい、現場はひのえと商店街から横道に逸れた路地です。目印

は薬局と靴屋の間の　はいその路地です。そうですね、図書館に向かう途中で襲われたものかと。回収の手配をお願いします。まだ死亡して間もないので、念のため回収班には護衛を。あとはひのえと駅から商店街にかけての警備要員を数人ほど寄越してください」

明朗が居る。誰かと電話で喋っている。

彼の足元で瑠架子が倒れている。閉じられた鉄扇をぐっちやくぐちやくの肉で包んで、両腕を広げて。

あ。明朗、そこ瑠架子のおしっこが広がってるよ。踏んじゃってるよ。

「自殺の可能性？　こんな方法では有り得ないですよ！　たしかに瑠架子さん自身の鉄扇でやられていますけど。とにかく回収した遺体を調べてみないと。林檎さんも早く現場検分に　はあ？　食事？　誰の？　梵さん？　はあ、忙しくて？　はあ、遅い時間に？　はあ、これから作り直す？

……もういいですわかりましたよ！　じゃあ梵さんの食事が済んだらすぐに来てください！　僕は犯人が近くに居ると仮定して周辺捜査に行きます！　現場をそのままにして離れますよ、いいんですね！　失礼します！」

明朗、怒ってる。

「まったく、やつぱりあの人達はどこがおかしい。頭の螺子が外れている。瑠架子さん、あんなに良い人だったのに……！」

おかしくないよ。

ここでは明朗がおかしいんだよ。

私もおかしいんだよ。

「さてと。クロちゃんそれ瑠架子さんの携帯だよね、ちょっと借りるよ。えーと、僕宛の発信履歴……あった。削除、と。これでよし。バッグから取り出したんだよね？ 戻しておくか。財布の中はー、おっと領収書が二枚。一つは洋服店のもの。二日前か。あと、駅前のパフェ店のもの。四つとはさすがです瑠架子さん。十五時……ついさつきか？ うーん、外食云々言ってたからなあ。全部捨てておくか。あとはー、周囲にクロちゃんの持ち物は落ちていない、と。うんオツケイ。鉄扇も血塗れだしどうやら指紋の心配は要らないね。さあクロちゃん立って。回収班が来る前にこの場を離れよう」

目の前に手を差し伸べられた。

明朗、笑ってる。

明朗の手。握ってみたい。

でも私の両手は瑠架子の血で濡れているから、こんな手では握れない。

力が出ない。

瑠架子から離れたくない。

待っていれば彼女が起きてくる気がした。そうしたら、どうしてあんな貌で死んだのか訊けると思った。

すると明朗は私の両脇の下に手を挿し入れた。腕が背中に回り、ぐいっつと強い力で身体が前に持ち上げられる。

私の胸と、明朗の胸が重なった。

「よいしょつと」

彼は私の両腕を彼の肩へと移動させ、自分の身体を反転。

私の胸は背中に当てられ、背後から彼を抱き締める形になった。

彼は背を折り曲げる。私の体重は完全に彼の身体に預けられた。

そのまま臀部に手が回り、私の身体が浮いた。

私はこれを知っている。

おんぶ。赤子を背で抱く形だ。

初めてだったが、不思議と安心する。

明朗の呼吸が胸から伝わってくる。人それぞれ呼吸のリズムが違うと肌で知った。

私の顎が肩に乗るように調節してくれる。

「どうして……」

「クロちゃん？ そりゃあ、瑠架子さんが奇怪な死に方をしてその近くに居たなら、結界寮の聴取を受けることになるからね。それってかなり面倒だよ。あとクロちゃんも首筋に傷がある。その形は鉄扇で付けられたものだよね。もしかしてクロちゃんと瑠架子さんの間でトラブルでもあったのかなって思ってたさ。もしそうならますます面倒だよ。あと、犯人の顔、覚えてる？ 何があったか話せる？」

「……話せるわけがない。」

私が死使十三魔の元構成員だなんて言えない。明朗は瑠架子と同じ結界寮の住人だ。事実を知れば、また惨劇が繰り返される。

無言で肯定も否定もしない私に明朗は何も言わず歩き出した。

路地の奥。さらに暗闇へ。

ここからでも図書館には着くと、彼は独り言のように呟いていた。

「なんで図書館に？」

「クロちゃんは図書館に用があつたんじゃないの？ 瑠架子さんから聞いたよ、カオナシという妖怪について知りたいんだって？」

「……ん、えっ？」

「だって僕が瑠架子さんに教えてあげたんだよ。あそこなら文献が残っているかもって」

びっくりして霧中のように朦朧としていた思考が晴れてきた。

「駄目だよクロちゃん、結界寮の人達でもカオナシについてはよく知らないんだから」

「でも明朗は知ってるのよね。あんた本当に何者？」

あはは、と彼は私を背負い直して笑う。

「僕が何者か。そうだなあ、僕が話したらクロちゃんも教えてくれる？」

「え……」

「クロちゃんが何者なのか。どんな理由で並折にやって来たのか。もっとクロちゃんのこと、知りたいな」

「う……」

正直……断りたかった。私が正直に素性を話せば、私と明朗の関係は崩れてしまうから。

彼は結界寮の住人として私を捕えなければならず、私は彼を退けなければなくなる。瑠架子の時のように彼が私に敵意を向けてくることになる。

そうなるのは、嫌だ。

「あたしのは、」

「話したくない？ そうだね、ごめん。並折に来る人にそれを訊くのはNGか」

「どうなんだろう……」

「じゃあクロちゃんも話ししてもいいと思ってくれたら。その時に、話してよ」

「うん……ごめん」

「謝らなくていいよ、当然だもんね。でも僕は、クロちゃんが何者であったとしても……」

「ん？」

「あはは、なんでもないよー」

そう言って明朗はまた笑う。

表情が見えないから彼がどんな感情を持っているのかわからない。顔に浮かべる表情はまず疑うというのに、それを見たがる私はやっぱり変だ。

でも何故だろう。

彼と話す時。彼と会う時。彼の顔を見ていたいと思うようになっていた。

明朗はいつも気遣ってくれる。この街で独りの私が頼れる存在。

「えーっと、何から話そうかな。やっぱ、能力者でもなく裏稼業でもない僕がどうして結界寮に居るのかだよ。簡単だよ。それは僕が地元民だからさ」

「地元民？」

「そう、言葉のまま。結界寮が並折にできた時　つまり管理人や結界屋がこの街に来た時に、この街の歴史を知っていて土地勘のある人間を欲したんだ。それで、僕が雇われたってわけ」

「じゃあ明朗は、ここが結界都市になる前から住んでいたのね」

「正確には……結界寮が来る前にも封印結界があったわけだから、結界屋さんによって本格結界都市化する前から。だね」

「ああ、そっか」

じゃあ明朗は結界寮ができたと同時に、こちら側の世界に入れられてしまったということになる。

それまでは表側で、一般人として生活を送っていたのだ。

何故こちら側に入ったのだろうか。彼が自分の意志で選択したのだろうか。いや、私が持っている結界寮の印象からして、明朗は無理矢理引き込まれたのだと予想する。

表側への配慮など、己が組織の為ならばいくらでも欠くことの出

来る連中だ。

瑠架子のように雇った裏稼業ですら意のままに操る駒にしか考えない。駒が死んだって意にも介さない。そういう奴らだ。

だから結界寮管理人 梵と林檎なら、伊佐乃いさのあけらう明朗という一般人を躊躇せず引き込むくらいはするだろう。それどころか脅してでも並折の案内人という人材を確保しようとしたに違いない。

「明朗は、表側よりも《こっち》の方が良かった？」
「……」

少し口籠もつたのは、考えたかったからだと思う。
でも彼は迷いのない口調で答えた。

「結果としては良かったよ」

過程ではたくさん悩んだかもしれない。苦しんだかもしれない。

そりゃそうだ。純血一族だの暗殺組織だの裏稼業だのという言葉が飛び交い、世界危険勢力なんて存在があつて、常軌を逸した人殺しが日常茶飯事で、超常異常が現実起こる世界だぞ。そんな世界にいきなり飛び込んで、すぐに適応できるわけがない。

結果としては良かった。

その言葉を聞いた私が哀しげに吐息を漏らすと、明朗は「ん」と吐息に相槌を打ってくれた。

「結界寮ができた当初、僕も少しの間は表側に居たよ。それから結界寮が独自の感知・呪詛弱効果結界を張ろうと動き出す際、土地に詳しい地元の人間が必要になったんだ。この街に既に張られていた妖怪封印結界をベースにしようとしたからね。そこで僕が結界寮に雇われることになった。

驚いたよ。自分の頭がおかしくなったのかと思った。だって普段

歩いている道に、ごく自然に死体が転がっているんだよ？　今までは気付かなかった、気付かなかったものが全部見聞きできるように なっちゃったんだ。その時に管理人として僕を引き入れた梵さんと林檎さんは言った。『これが街の真の姿』 『結界寮はこの荒れた街を統轄しなければならない』と。

だから僕も協力する事にした。裏側の文字通り無法者が表側の人間を殺す。表側の人々は警戒もできなければ死んだことすら無にされてしまう。認識できないのだから。それを防ぎたいと心底思った」

結界寮はやはり並折に必要な組織。明朗もそう思っただけで協力したんだ。

明朗の話の途中で、視界が明るくなってきた。前方を見ると建物の連なりが終わっている。隙間を走るこの路地裏も終わりだ。

しかし、路地裏の終点であり大通りに繋がる手前で。何故か明朗は立ち止まってしまった。

不思議に思っただけで私が首を傾げていると、ほんとうに小さな「でも……」という明朗の呟きが聞こえた。

「梵さんと林檎さんは、嘘を吐いていた」

「嘘？」

「僕を引き込むための方便だった。しばらく結界寮に居て気付いたんだ。《この街が裏稼業や無法者、能力者で溢れかえっていたのは、結界寮それ自体が原因だったのさ》」

「どういうこと……？」

「クロちゃんには一度話したことがあるけど。無音という異名で知られる梵さん。瞬撃という異名で知られる林檎さん。あの二人は、《ティンダロスの猟犬》に於ける最高戦力と呼ばれるチームに居た」

うん、確かに聞いた。七人一組の逸話だ。

「チーム解散後、二人はこの街へやって来た。僕の調べでは、あの二人が来るまでは此処は荒れていなかった」

「つまり 《無音》と《瞬撃》という異名に惹かれて、賞金目当ての裏稼業や賞金稼ぎが集まってきたと」

「名を売ろうとする能力者もね。だからこの街が荒れた原因は、そもそもあの二人だったんだ。結界寮が街を荒らし、結界を張って治め、一組織として膨れ上がったってことさ」

もう自分で歩けるから大丈夫だと言って、私は明朗の背から降りた。

今の話が事実なら、つまりこの並折を魔都にしたのはあの二人ということか。

並折はただカオナシという妖怪が封印されていただけの土地で、ここを裏世界の人間で溢れかえらせたそもそもの原因が、元ティンダロス戦闘員であるあの管理人達。

そして結界を張り、純血一族及び死使十三魔の干渉を避けるようにしてしまった。更には感知結界によって実質的な支配体制を整えた。

結界寮の目的は、並折の統治なんかじゃない。それは真の目的の過程にすぎなかったのだ。

梵と林檎。

あの二人はまだティンダロスの獵犬と繋がっているのか？

繋がっているのなら、結界寮の目的は ティンダロスによる日本制覇を前提とした拠点。無論それは純血一族の駆逐も意味している。

だが二人の独断だとしたら、目的は 一勢力としての独立。これも日本に拠点を置く以上、純血一族との対立を想定しているのは明白。今後の動き方によつては死使十三魔やティンダロスとも対立することも考えられる。事実結界寮は危険勢力相手だろうと侵入者は容赦なく排除する方針をとっている。

もつと違う目的が存在するのか？ 私の思考では到底辿り着けない何かがあるのか？

どちらにせよ並折は近い未来、激戦の地になるぞ。

それは明朗が最も避けたい未来である筈でしょう？

「ならどうして明朗は未だ結界寮に所属し、協力し続けているの？」

この問いに彼は

「秘密」

と、片目を閉じて白い歯を覗かせた。

もし瑠架子が私の隣に居たら、今の明朗の仕草を見て『ミステリアス』と言ったかもしれない。そんな雰囲気醸し出していた。

「僕の話はここまで。さあ行こう」

私の方を向いていた明朗はくるっと反転し、表通りを先に歩いてゆく。

今頃は結界寮の回収班が瑠架子の亡骸を見て言葉を失っているだろうか。

路地裏から出ると、つい今しがた起きた惨劇が悪い夢だったように感じられる。あれは現実ではないのだと、私が無意識にそう思いたがっているからなのだろうか。

瑠架子……。

彼女の死の様を目撃したショックは決して薄れていない。それでも明朗が傍にいただけで随分気持ち落ち着いたようだ。

先行する背中を眺めていると、ふいにその軸が揺れた。顔を上げて天を仰いでいる。

しかし彼が見ていたのはそんな遠きいや果てではなく、車道を挟んで向こう側にある電柱のほう。高所作業車が停まっている。電気工事かなにかだろう。

「電線が切れたんだ」

彼の言う通り作業員が断線した部分を調べていた。疲労断線か引張断線か知らないが、戸惑っている様子。商店街で断線だなんて。

電柱が少しばかり傾いているのもなんだか気になった。

商店街を逸れた道を進んだ先。民家の並ぶ中に、旧図書館は違和感なく建っていた。

築三十〜四十年くらいと思われる。小さな建物だ。

手入れされていないガラスは罅割れて汚れも目立ち、中を覗くとさえできない。

明朗が力いっぱい固い戸を横に引くと、重い音と共にもわっと埃が外へ飛び出してきた。

廃墟かよ。

私がそう呟くと明朗は小さく笑い、中へ入っていった。

案の定保管されていた本は全て新しい図書館へ移されており、中は蜘蛛の巣の張った空の本棚だけが並んでいる。本当に廃墟だった。

「本が一冊も無い図書館とは、滑稽ね」

「あはは。そんなこと言うと司書さんに怒られるよ」

なんと司書が居るらしい。

身体が透けていたり足がなかったりする司書だったらごめん。

そういう存在はおとなしく呪術師に処理されるべきだ。そういうえば私は見たことがないが、最近西洋でネクロマンサーが活発的に活動を行っていると聞いた。

聖歌は死霊より死体を扱った魔術という点ではネクロマンサーの類なのだろうか。傀儡屋を名乗っていた以上、死霊魔術師とは自称しないだろう。死体技術師だの死体美術家だの言いそうだ。三桜曰く傀儡には禁術を用いていたそうだから魔術師に違いないけど。

「で、そのオバケ司書はどこよ」

「僕なんだけど……」

「明朗オバケだったの？」

「オバケだなんて一言も言っていないんだけど！」

羽田立荘と同じように、一般的に使われなくなったこの旧図書館の管理も彼が押し付けられたらしい。

管理も何も、掃除なんかしていないし鍵だって掛けていないじゃないか。

「此処の事を知っているのって結界寮の住人くらいだし……こんな場所に調べものに来る人なんて居ないし……」

「なんだっていいわ。とにかくカオナシの文献とやらを出して

つて、そういえば明朗はカオナシを知ってるの？」

「うん、機会があつてね」

「機会？」

「そう。実はこの図書館を任せられることになった時、ついでに結界寮の倉庫にあつた書物も此処へまとめてしまったんだ。梵さんと林檎さんが読みもしないのに手当たり次第掻き集めたこの街の情報。

その中に、一通の手紙があつた」

「手紙？」

「遺書だよ。外界からやって来た研究者のものだった。なかなか面白い内容だったけど僕は興味なかったからそのまま図書館に置いたのよ」

「……もしかしてそれが？」

「うん、カオナシに関する文献。他にそれっぽい物も無いし、並折に存在するカオナシ関連の文献はそれだけじゃないかな」

確かに並折中の情報を掻き集めたのなら、そういうことになるか。明朗は埃だらけの受付台を乗り越えて奥に入る。そのまましゃがんでしまい、こちらから彼の姿が見えなくなった。

「えーと、どこだっけか」とか呟きつつ棚を漁り、「あった」と、これまた古いノートを一冊、台の上に置いた。

表紙には《貸し出し台帳》と書かれている。

「クロちゃん、そこに名前書いておいて」

それだけ言うと明朗は再び頭をひっこめて埃の園へ入ってしまった。

果たしてこんな場所で貸し出し台帳が意味を成すのか疑問だが、一応彼も此処では司書という立場だから言った通りにしよう。

「……へえ」

色々な名前が上から順に並んでいる。意外にも利用者はそこそこ居るようだ。

訪れる人がみんな埃まみれになっていることを思うと、なんだか笑える。

左から年月、名前、借りた本の名前。本の名前はアバウトに全部《資料》と書かれている。それでいいのか明朗司書殿。

ま、いいか。私もそう書こう。

ページをめくって一番新しい名前を探す。
あった。

年月は 《二〇〇四年、七月》。二年前か。それから誰も利用していないなら、そりゃあ埃も溜まる。

名前の欄には数字が書かれているだけだ。《三九五番》と書かれている。なんのこっちゃ。

で、借りた本はやっぱり《資料》。

その下に私も同じように二〇〇六年、十月と書く。名前欄には天宮柘榴。借りた本は資料、と。よし。

台帳を閉じて明朗を呼ぶと、埃のついた頭が台の下から現れる。彼はいつの間にか被っていたニット帽を脱ぎ、マスクを着けていた。埃対策か。準備の良い奴だ。

「あつた？」

「あつたよ。ほら」

明朗は書いた内容も確認せず貸し出し台帳を閉じて台の下に引っ込め、入れ替わりに色褪せた茶封筒を置いた。

封筒には何も書かれていないし雑に開けられた痕跡がある。先に読んだ明朗は遺書だと言っていた。

やっと辿り着いた。

カオナシの手掛かり。

胸が高鳴る。

「よ、読んでもいい？」

興奮を口に出すと、明朗に笑われた。

「読むために来たんでしょ？」

それもそうか。

「ただ、此処はちょっと埃が多いから、外へ出よう」

明朗の案内で、団地の片隅にある公園へ移動した。屋根とテーブル付きのベンチまである。子連れの母親が散歩をしている以外は特に目立つた人の気配もない。

私と明朗は封筒から出した数枚の便箋をテーブル上に並べた。

「それを読む前に、ちょっといいかな」

と明朗。

「カオナシの存在について、結界寮の人間で知る者はおそらく僕だけだ。内容から察するに、そのカオナシってのがすごく危険な奴と
いうのはわかった。だから、君に訊いておきたい」

「どこでカオナシを知ったのか？ それともカオナシを調べてどう
したいのか？」

「僕が知りたいのは後者だ。クロちゃん、君について僕は何も知らない。君が外界でどんな生活をしていたのかも知らない。ただ……
ただね……」

彼は両手を組み、一呼吸置く。

「君がこの街を破滅へ導くつもりなら、僕は君を敵としなければなら
ない」

「明朗……」

「君は、この街の 僕の敵かい？」

「あたしは」

「いや勿論的好奇心ゆえの調べものだったら問題ないし、こんな
ことも訊かない。でも此処は並折。生半可な覚悟で来る場所じゃあ
ないから」

「あたしには 外の世界に殺したい人が居る」

「殺したい人……」

「その為にカオナシの力が要るの。それだけよ。この街をどうこう
しようなんて意志は無いわ」

ただ…… 瑠架子の言っていたようにカオナシほどの妖怪が本気を
出せば、この街などひとたまりもないだろうけど。

まあ番姉さんを殺せなかったら、いずれ（といっても何百年後にな
るかもしれないが）並折どころかこの国も破滅するんじゃないか

な。あの人は人間が大嫌いだから。

ようするに番姉さんを殺すことを一番に考えるしかないわけ。

その為にはカオナシに会って殺す方法を知らなければ始まらない。それに伴う事象は全部保留だ。

だから私にこの街を破滅へ導く意志はない。間違っではない。

明朗も私の返事を受けて頷く。

悲しげな顔で何か呟いたようだが、

「……君達は……何度もそうやって……んでいくのか……」

私にはよく聞こえなかった。

とにかく今の私は手に取ったこの便箋にすべての興味を奪われていた。

私、カシアス・スレイヴはもはや生き延びる意志すら失せた。

こうしてなんとか筆を握ることはできているものの、片目と鼻、そして両耳を失った今。私にできるのは人生の振り返りと、私をこんな姿に変えた存在への悪足掻きくらいだ。

ある者達はそれを《破滅の物語》と呼び、またある者達はそれを《滅世録の使徒》と呼ぶ。どちらも同じ意味であり、この世から消してしまわねばならない存在である。

君達がどう呼んでいるのかは知り得ないので、簡単に言おう。生まれながらにして超常の力を持ち得た者。その中でも極めて特殊な 世界を終わらせ、創る可能性を秘めた者のことだ。

私はその研究に関与していなかったものの、噂は耳にしていた。だからこそ私は誰よりもあれを危険に思い、同時に魅力的だとも思う。

魅力的と文字にしてみても自分で笑えてきた。

さて。ここに書き綴る恐ろしい存在に関する私の記録が、もし後世に残っていたとして。

これをどこかで見つけ、読んでいる君は あれについて知りた
いと思っただろう。

ああ、是非知っておいてくれ。そして叶うなら私と私の助手の無
念を晴らして欲しい。

そつだな。まずは、やはり昔話から始めよう。

これは今からずっと前の話。

日本の、とある土地。

商いで栄えた町から山をひと越えふた超え。そこには小さな小さな集落があり、一つの村として体を成していた。

そんな村の外れに、不恰好で今にも崩れそうな家屋が一件。一人の男がそこに住んでいた。

家は村の中でも一際古くて小さくて、近くにこれまた小さな畑があつたとき。

村の子供たちが悪戯でもしたのか屋根には動物の糞や肥やしがあつて乗っていた。

男は頻繁に屋根に登っては掃除をし、草葺^{くさい}屋根の手入れをした。壊れた鍬^{くわ}や家具が乗っている日なんかもあつた。

鉄製の壊れた農具が投げ込まれ肝を冷やしたこともあつた。勿体ないと思つて再利用した。

男は村の嫌われ者。皆は彼の家に近寄ろうともしなかつたし、やつてくるとすれば悪戯目的の子供くらい。その悪童達も、彼が表に出てくると兎のように逃げ出した。

男は生まれつき顔が無かつた。目も鼻も耳も口もだ。

土地の住人達は、男の顔を見るたびにこつ言つたものさ。

『化け物』

そりゃあそうだ。

何のための顔だ？ そこにあるべき目と鼻と耳と口が無いんだ。

つるつるの、何も無い肌が貼りついていてるだけ。見えない嗅げない聞けない話せない食べられない。息すらできない。

でも、男は生きていた。

彼は彼なりの方法でそれらを可能にする術を持っていたのだ。

それは、架空の顔を《描く》こと。

呪文を書くように、彼は何もない己の顔に目と鼻と耳と口を描く事ができた。

男は魔の化粧　魔粧の術を持っていたのだ。

しかしその術、完璧ではない。

顔の部品は六つまでしか描けなかったのだ。

彼に術を与えたのは西洋の魔術師だったのではないかと言われている。

魔術師は、こう言った。

『それで十分』

男は手に入れた術で、なんとか生きていくことができた。

それでも土地の人々からは忌み嫌われた。

《妖怪》などと呼ばれたこともあった。

外を歩けば石を投げられ。

顔を伏せれば道を塞がれ。

顔を上げれば逃げられた。

たくさんたくさん傷つきながら、男は自分の畑で作物を育て、村の外れでひっそりと暮らしていたのだ。

ある日のことだ。

旅の者が村を訪れた。

男は自分には関係のない出来事だといつも通り食事の支度をしていた。

村の住人が、男の家へ旅人を連れてきた。

『この旅の人は、お前に用があるそうだ』

男は喜んだ。

来客なんて初めてだった。

聞けば旅の人は、日本各地で絵を描きながら旅をしているらしい。

男は二人分の食事を用意し、旅の人を快く迎えた。

旅人は男の顔を見るなり、笑顔で言った。

『なるほど噂通りの妖怪だ』

旅人は男のように妖怪などと呼ばれる人間を探して絵を描き旅をしていたのだ。

男は悲しかった。

それからまた時が経ち、村を今までにない寒さが包んだ。

吹雪で出歩くこともできず、男は火を焚いて冬が過ぎるのを静かに待っていた。

そんな日に、戸を叩く音。

訪問者に対してあまり良い印象がない男は、胃に重さを感じながら戸を開けた。

『こんにちは。こんな……妖怪ですが、どうか一晩宿をお貸しください』

さらりと述べた訪問者。髪の色は青い、女性だった。

男が驚いたのは髪の色ではなく、女の吐いた言葉。

妖怪。

彼女もまた、化け物と忌み嫌われ、定住することなく各地を転々と渡り歩いているのだという。男は同じ境遇、同じ苦しみ、同じ悩みを持つている彼女を迎え入れた。

彼女は雪女と呼ばれていた。

そして男は女から、同じ境遇の者達が集まる土地があることを知った。

その者達は妖怪と呼ばれ忌み嫌われることを受け入れ、人とは離れて暮らすことを決めた者達。同じ悩みで苦しんだからこそ、互いに助け合って生きようと集まったそう。

その話を聞いた男は雪女と共に、その土地へ行こうと決めた。

互いに助け合って生きる。男の夢見た生活がそこにあるからだ。雪女も賛成し、そして、言った。

『では、貴方の苦しみを少しでも減らしてから向かいましょう』

男を長年苦しめ続けた連中に、相応の罰を与えてやろう。彼女はそう言った。

連中が生き続けていれば男の心にずっと苦痛が根付き、苦しめ続けるだろうと。

罰を与える。

苦しめる。

……仕返しをする。

たしかに男はその方法を知っていたし、持っていた。でも何があろうとそうはしなかった。

悪いのは、皆と違って生まれてきた自分なのだと思っていたから。忌避されることは仕方のないことだと思っていたから。

それを雪女は否定した。

『貴方のそれは特別な力。魔粧の術とて、与えて貰ったのではなく、もともと貴方の力。その使い方を教えてもらっただけ。私も、貴方も、人を超える特別な存在。それを排他するのは愚行に他ならない。つまるところ、異なる存在を見下すしかできない連中なのよ』

同じ苦しみを味わってきた者の言葉。

今までずっと己を苦しめてきた連中に、どうして情など掛けてやる必要があるだろうか。

男の力は強くて大きくて、誰も持っていない特別な力。

そう。奴らは《持たざる者達》なのだ。

持てる者を妬む愚かな人間達だ。

翌日 男と雪女は、村から姿を消した。

その後、村からの作物が途絶えたことを不思議に思った隣町の商人が、吹雪が止んですぐに村を訪れた。

ひっそりと静まり返った村の中、声を上げれど誰も返事をしない。これはどうしたことかと、一軒の家屋を覗いた。

商人は中の様子を見るやいなや腰を抜き、言葉を失い、地を這うように大慌てで他の家屋も覗いて回った。

村人は全員、死んでいた。

誰が誰なのかわからない有様だったそうなの。

目も鼻も耳も口も潰されて。

村人みんな、顔が無かったのだとさ。

私と助手がその《妖怪が集まる土地》へ訪れた時、こんな昔話を聞かされた。

よくある作り話だと私達は話してくれた老人を嗤った。

なんでも《カオナシ》なる妖怪の話だそうなの。

妖怪？ 空想の化け物の話を聞かされたところで何の面白味もない。

私は組織で実在する化け物をたくさん見てきた。話に出てきた雪女も、私はもつと雪女らしい化け物を見知っている。

この日本という小さな島国。その中の《ナミオリ》という土地に遥々やってきたのは、組織の任務だった。

組織。

今となってはどうでもいいものだ。

私の仕事は、世界各地を飛び回って超常現象を調べ超常道具を回収すること。

ナミオリへ来たのは前者　つまり超常現象の調査だ。

我々は《グラウンドゼロ》と呼んでいたが、それは置いておこう。ともあれその調査過程で、気になるものを見つけた。

距離を置いた四つの場所に、見たことも無い魔方陣が描かれていたのだ。

専門の助手は、それが結界を成すためのものだと分析した。

魔方陣は、誰かが消そうと試みたのか幾つも傷がつけられていたが、どうやら結界には微塵も影響はなかったらしい。

非常に強力なものだと助手は言った。

現地人として同行してもらった　例の妖怪の話をした　老人

は、「絶対にその紋様を調べるな」「関わってはいけない」と、しきりに我々に忠告した。

老人曰く、その魔方陣はカオナシを封じ込めているものらしい。

封じているとはどういうことか。

私が問い掛けると、老人は何かを言おうとして　死んだ。

我々の前で老人の目が潰れ、鼻が削げ、口が裂け、耳が落ち、最後には頭部が果実のように弾け飛んだ。

絶句。

異常事態だ。

正体不明の攻撃と判断し、私は組織へ戦闘員の派遣を要請した。しかし無線は繋がらなかった。

ナミオリを出ようと一步外へ出た助手も、顔が潰れて死んだ。

手遅れだったのだ。

私達は老人の話を読み出した。

カオナシ。顔の無い人間の、強大な力。

とつくに私はその手中に嵌まっていたということだな。

実在したんだよ、その妖怪は！

私は急いで新たな現地人を雇った。若者だ。

カオナシと関わりたくないと言う者ばかりで苦労したが、やっと見つけた協力者だった。

その頃には十人近く居た私の助手も全員死んでしまっていた。

私と若者の二人だけだが、なんとかカオナシの呪縛から逃れる方法を探そうとしたよ。

若者は教えてくれた。

『カオナシは神様みたいなものだ。封印されていても手当たり次第殺したいと思えば、こつやつて封印から逃れて殺す。殺し過ぎた時は、また増えるまでじつと待つ。この街はカオナシのものなんだ』
だからできるだけ怒りに触れないように暮らし、何年かに一度は人間を差し出すという。いわゆる生贄だ。

私は彼の話聞いて気分が悪くなった。

カオナシが神だと？ これは能力者の所業だ。とてつもなく強い力を持った能力者の。

神などではない。ただ殺人を好む人間の所業なのだ。

私は若者にカオナシを殺す手はないか尋ねた。

私がこの街を出るには、もはや奴を殺すほかに手はない。

若者は言った。『ある』と。

四ヶ所に描かれた封印の魔方陣。これは日本で言う《九字切り》の法を用いているらしい。

そしてこの魔方陣は、それ自体がカオナシの存在と直結シンクロしているという。

つまり四つの魔方陣を消せば、カオナシは消滅するということだ。

これまで多くの者が試み、そして死んだという。私の見た魔方陣の傷は、一つ一つが過去の住人によって付けられたものなのだ。知った。

魔方陣を消そうとすればカオナシに殺される。どうすれば良いのか。

若者は 憐れむように私に言ったよ。

『この模様を消すには、カオナシの封印に用いた道具が要る』

それは何かと尋ねる。

『刃物。《鎖黒》という名の、小さな刃物』

トザク口。

その刃物こそ、カオナシを滅ぼす鍵だった。

それを使えばカオナシは手を出す事ができず、魔方陣を消す事ができる。

何処にあるのかと尋ねると、若者は悔しそうに言った。

『……並折の外。とある妖怪が、持ち出したんだ』

絶望だ。

つまり彼は、私には手に入れる事ができないと言ったのだ。

外部と連絡が取れず閉じ込められた私は、もう、どう足掻いてもこの並折から出られないのだ。

魔方陣の場所については、そうだな、伏せておこう。

トザク口を持たずして近付くのは危険だ。

雪女に連れられて街にやってきた顔の無い男。

断言しよう。奴は、これからもずっとナミオリで生き続ける。

奴が解き放たれず、この街だけで殺戮を繰り返すだけに留まることを切に願うばかりだ。

そしてあわよくば、トザク口を持つ者が、奴を滅ぼしてくれることも願う。

そろそろ、この目も両方潰れてしまう頃だろうか。口も消えてしまっただろう。どうやら私はここまでらしい。

こんな世界で私もまた多くの人間に死を与えてきた非情なる男だというのに。あまりに疑いなく人を信じてしまった結果か。

こんなものを書いたところで、この手紙だけでもナミオリを出られたらという願いが叶うわけもない。恐ろしい土地さ。運命まで縛ってしまったのだからな。

私のことも、助手達のことも、きつと外の世界では抹消されていることだろう。その影響も計り知れない。

実に残念極まりなく思う。

私の偉業、せめてこれを読んでいる君には覚えておいてほしい。

いや、知ってほしいと言うべきか。

私を既に知る者なら、これを読んで私との見えない繋がりを修復して欲しい。

私　カシアス・スレイヴは組織《死使十三魔》に於いて、呪詛能力者の助力を基に人間複製の研究を行っていた。何十回と失敗を繰り返したものの実用段階まで進み、複製人間による一個小隊を構成するに到った。

氷製人間部隊は我が人生の集大成にして、最大の罪。

どこぞで攫ってきた人間を元に呪詛能力で複製・生命維持を図った神をも恐れぬ所業だ。いや、神など居ないか。居たとすれば、私にこの程度の死に方をさせるわけがない。

兵隊として有能なモノにすべく腕力強化、脚力強化、洞察力、様々な処置をも試みた。

私は呪詛を身体に宿さずとも人を超える人を創造する術を見出したのだ。

私の他にも呪詛を宿さずして超常を目指す研究者は多い。最先端を歩んでいるのはおそらく傀儡屋あたりだ。

しかし。

私はそれをも超えた。

私の氷製人間は、死体人形などとは比べ物にならない優秀なシステムを有し、誇っているのだ。

プラン・ドウ・シー。基本中の基本、マネジメントサイクルとも呼ばれる。

計画し、実行し、反省する。これの繰り返しである。

人間の発展には欠かせないサイクル。P、D、S！

我々研究者がこの《PDSサイクル》を意識し続けるのは当然であり誰もがそうしているだろうが、偽物とはいえ仮にも人間を創造する者がそれだけに留まるなど愚かしかろう？

ともあれ如何せん《氷魂》という未知の概念で成り立つものなので今後も研究が必要な代物ではある。が、これも既に実用段階に入っているのでカクテルズ自体は いづれ 最強の部隊に成り得ると信じている。

彼らはもはや私が居なくとも完璧への道を歩み始めているというわけだ。今は呪詛能力こそが強さの象徴・筆頭とされている。それを覆す日がやってくる。私のカクテルズが超人の頂点に君臨する日が。

無論、実験過程で氷製人間に呪詛を宿すこともした。しかし適応する者は極めて少なく危険なため、あまり被験体を無駄にしたいくなかった。

まあ、呪詛で得られる能力は魅力あるものなので、氷製人間達の中でも希望者は居たわけだが。

結局適応者はただ一人。残りは廃棄した。

肌が白く、髪の青い、男の子。それこそ、まるで雪のような子だったと記憶している。

外見は彼女 協力してくれた呪詛能力者の特徴に酷似していた。適応できたことに関係していると思われる。彼は氷製人間且つ呪詛能力者として力を手に入れ、カクテルズから離れた。

そう、序列十一位の座と、《魔斧》の称号を得たのだ。

素晴らしい。挑戦心を褒め称えたい。

彼と、そしてカクテルズ。これらが、これらだけが存在し続けていれば、私の業もまた存在し続ける。

ああ。今更、残してきた我が子のことを考えている。駄目な男だな、私は。

あの組織はまだまだ大きくなるだろう。我が子は、私の研究を引き継ぐことになるだろう。そうさせられるだろう。あの子は賢い。

私の愛するイーヴァン。

お母さんのように、素敵な女性になるんだよ。

オルタ、私もすぐそちらへ行く。それまで、もう少し私達の娘を守ってやってくれ。

そしてあの子が

素晴らしき殺人鬼を、より多く生み出すことを共に祈ろう。

《一九八六年 カシアス・スレイヴ》

便箋の内容をすべて読み終えた私は、それを封筒に戻して明朗に手渡す。

彼は私がどんな反応を見せるのか様子を窺っているようだが、いたって平静を振る舞う。

「はい、ありがとう」

「う、うん。なにか参考になった？」

「まあまあ。本当に力オナシはこの街に居るようね」

「そうみたいんだけど、魔方陣だっけ？ そんなもの僕は見たこともないなあ」

「そっか……いい参考になったわ」

「それは良かった！」

「あたし、そろそろ帰るね」

「うん。僕は瑠架子さんの件で現場に戻らないといけなから、ここで別れよう。クロちゃんはなるべく商店街を避けて帰ってね」

「わかった。付き合ってくれてありがとう明朗。あと 助けてくれてありがとう」

ひらひらと手を振って、明朗は公園から出て行った。

残された私かというと、木製のテーブルに目を落としてその模様なんかを眺めている。

カシアス？ 聞いたことも無い。

あの手紙の書き手がカクテルズを生み出した？ 私の生みの親？

私が氷製人間？

ふーん、そうなんだ。

どうせ碌な出生ではないと思っていたから大して驚かないわ。私

は私。記憶がない方が問題よ。

カシアスとやらが組織したカクテルズ云々は、ぶっちゃけどうでもいい。協力した呪詛能力者というのもどうせ番姉さんの事だろう。彼は番姉さんと並折の雪女を同一人物だと思わなかったようだ。

まあカオナシについてもこの街に来てから知ったくらいだから無理もない。

カシアスの話は割と信頼性のある内容だった。カオナシを連れてきたのが雪女つまり番姉さんなら、その二人は私が思っている以上に深く関わり合っていることになる。

更に 鎖黒。

あの刃物をどうして番姉さんが大切にしていたのか、ようやくわかった。あれこそがカオナシの封印を解く鍵だったのね。

良いぞ。パズルが嵌まっていく。

鎖黒はこの街にある。なにせこの私が持ち込んだのだからね。

カオナシの封印を解けば、私はカオナシに出会う事ができる。

しかも！ 封印の魔方陣が消えるとカオナシも消滅する！

最高じゃないか。一石二鳥だ。

四つある魔方陣の内三つくらい潰せば会話くらいできるだろう。

聞きたい事を聞き出して四つ目を潰せばよいのだ。

カオナシはどう足掻いても並折から出られないわけか。封印の魔方陣と封印された妖怪をシンク口させるとは、えげつない結界だ。

奴はこの街で、瑠架子のように殺すことしかできないのだ。ざまあみやがれ。

さて、これでカオナシを追う必要はなくなった。

封印を解除する過程であちらから接触を図ってくるだろう。番姉さんを連れて来るとかなんとか言えば殺されずに済む。どうせ今も奴は私を観察しているだろうし、それでも殺せないもしくは殺さないのは何か理由があるからだ。

次の目的は、鎖黒の搜索。それと、魔方陣の搜索。

これらも手掛かりがほとんどない状況なわけだが。地道に探していこう。

そう。焦っては駄目。

焦ることだけは避けなければ。

慎重に、落ち着いて、冷静に。

私は絶対に焦らない。

(反省したじゃない)

「反省したじゃない」

(前回のあたしは)

「前回のあたしは」

(焦りすぎたのよ)

「焦りすぎたのよ」

(だから死んだ)

「だから死んだ」

(前々回の俺と前々々回の私は)

「前々回の俺と前々々回の私は」

(なんで死んだんだっけ)

「なんで死んだんだっけ」

ズキズキと頭が痛み、

私の胸は冷たく震えていた。

思い浮かんだ事がそのまま口に出てしまつのは、

次回への反省にしよう。

「次回への反省にしよう」

今回の私は、

天宮柘榴なのだから。

反省してちゃんと付けた、

唯一無二の名前なのだから。

PUNICA【カオナシとは】了

血鎖 其の少女、不要につき

純血一族、守野家当主。守野三桜。

背が高く髪は黒く長く、彼女を見る者には活発的な印象を与えると同時に、類稀なる美しさで魅了する容姿を持った女性だ。

彼女は今、彼女でも知り得ない土地に足を踏み入れていた。

家系の頂点に立つ彼女が知り得ない 普通なら知る事ができない土地ということはつまり、まず誰にも知られない土地と言っても良い。

「……くさい。ひどいにおいだ」

人一倍どころか意識すれば何十倍も鼻の利く三桜は顔をしかめた。底の厚いブーツで踏み締めた地面は腐敗した葉や何かの死体で覆われており、ぐじゅ、と嫌な感触で沈んだ。

身体を支える二足はぶよぶよとした腐葉土の上だし、周囲にはやたらと背が高い癖に骨のような枝しか付いていない木々。その木には有刺鉄線のように茨が巻き付いている。

常薄暗く陽の光は届かず、立っているだけだというのに不安感を煽ってくる空間だ。

自分をこんな汚らわしい土地に連れてきた男は、木を四、五本挟んだ先に居た。

男は丈の長い真っ黒な衣を纏っており、裾に汚泥が付いても気にする様子はなかった。

三桜が後から付いてきているかどうか、時折振り返って確認するだけで、黙々と森の中を進んで行ってしまう。振り返る度に見せる男のにやけ面に、三桜は嫌悪感を抱いた。

ここは昏黒坂家の土地。

純血一族の中でもひとときわ忌み嫌われる家系だ。

「お疲れ様です三桜様、到着です」

空気に含まれる血生臭さと生温かさが一層増してきたあたりで、昏黒坂家の使いの男は立ち止まり、そう言った。名前は昏黒坂霧馬と名乗っていた。

呼吸をするにも嘔吐感が伴う三桜は片頬をひくつかせつつ男のすぐ後ろまで進んだ。霧馬が気にもせず踏んでいるのが人間の腐った手だと気付いて舌を打つ。

「昏黒坂病院……貴様らの本拠地か」

金属は赤錆び、外壁は剥がれ落ち、蔦が屋根まで這っているきたならしい大きな建造物が見え、三桜は言った。

霧馬は鼻で笑った。

「まさか。此処はただの収容施設ですよ。なにせ病院ですから」

昏黒坂の口から病院という単語が紡がれる度、それを聞く者は不快感に苛まれる。三桜も例外ではなかった。

不似合にも程がある。白く清潔な施設の名を、あるうことが黒く病的な連中が拠点としている。

何度も反吐を吐かれ、反吐まみれで、しかも平気な顔で反吐をくつつけている。誰もが昏黒坂をそういう連中だと認識していたし、全く以てその認識に相違などない。

三桜とて当主ではあるがこいつらには近寄りたくもないし関わりたくもない。三桜だけではない。御上を除く全家系がこんな奴らと関わりたくはないのだ。

しかし今回ばかりはそうも言っではいられない。

「八汰祁は無事なんだろうな」

守野家の人間を人質に取られてしまったのだ。

昏黒坂家の要求は、三桜を昏黒坂病院まで来させることだった。だからこんなきたならしい土地に足を踏み入れ、守野八汰祁という家族を助けにやってきたというわけだ。

人質が無事か否かの問いに霧馬は答えず、また鼻で笑うだけで歩き始めた。

病院の正面玄関も、昏黒坂らしく不衛生極まりないものだった。入口から四方八方に引きずられた血の跡が伸びている。庇の支柱には、しがみついた時に付いたであろう手形がいくつも見られた。汚い土が張り付いて汚れたブーツの底を、支柱の角で器用に拭った。もちろん入口に自動ドアなど付いていない。もちろん手すり等のバリアフリーも設置されていない。

昏黒坂病院の正面玄関は分厚い鋼鉄の扉が取り付けられていた。三階建ての建物は、すべての窓に鉄格子が嵌められている。これでは病院というより監獄だ。

鉄の扉を開いた霧馬の後に続き中へ入った三桜は、まず耳を塞いだ。

凄まじい騒音だった。ここは何かの工場かと本気で思ったほどだ。鉄板と鉄板と叩き合わせたような音。電気鋸の回転音。嬉々とした奇声。絶叫。悲鳴。何か大きな機械のエンジン音。様々な音が混じった不快極まりない不協和音。

工場か監獄か。少なくとも病院などではない。地獄の類と言われた方が納得する。

霧馬は三桜に「拷問室が近いから」と、騒音の説明をした。どうやらこの男は病院に拷問室があるのは当然だと思っているらしい。受付カウンターに人は立っていないどころか、三桜が見渡した限りでは自分と霧馬以外に人の姿がない。あつたとしても昏黒坂の人間なのでむしろない方が良い。

動物の体液でも染み込んでいるのか、妙にべたべたと靴底に違和

感を貼り付ける廊下を霧馬は進む。

廊下にも一定の間隔で鍵付きの鉄扉が設置されていた。

「ここは監獄か？」

あまりにも内装が病院とは言い難く、内包する雰囲気がそれと酷似していたので三桜は問うた。

「はあ監獄。監獄とは、囚人を収容する、あれですよね」

前を向いて歩きながら、霧馬は気の抜けた声で返してくる。

「違うのか」

「囚人なんか此処には居ないんで。違いますね」

「……なら、あの悲鳴は誰のものだ」

「被写体の声でしょうね」

「被写体い？」

三桜は足を止めた。

後ろの足音が消えたので霧馬も止まる。

クソめんどくせえアマだぜ。と、三桜に聞こえる事を承知で彼は呟いた。

後ろへ振り返り、右手を振って大きく息を吐く。

「だからスナッフビデオの撮影でもしてんでしょ。そういうのを嗜好とする金持ちは多いんですよ」

「なるほど、資金源の一つというわけか。貴様らは変態共御用達の変態なわけだ」

「そうです。で、さっきの声は多分三番撮影室」
「拷問室だろ」

「三番拷問室からだと思いますよ。主に熱責めをする部屋なんです。オプションで解体もやります。被写体 焼死体と映像のセツトで御希望ってことらしいんで」

「その被写体はまさか攫ってきたんじゃないだろうな」

「人攫いもよくやりますよ。ただ今回は依頼主からの提供でして。娘さんらしいですわ。見たいと言っなら後ほどお見せしますよ。被写体にはそれまで耐えていてもらいましょう」

「……いいや、結構」

「そうだ、いつか撮影に協力してくださいよ。プロのカニバリストとして」

「貴様が犠牲になるというなら、喜んで参加してやる」

鋭い目で睨まれ、霧馬は口をすぼめて肩をすくめる。

そして近くの鉄扉に片手を添えた。

「まあ脱走を阻むためにこうした設備を設けている点では監獄と同じですね。やっていることは色々です」

「主に人間の身体を弄んでいるだけだろうが」

「やれと言われれば人外の身体でもやりますが」

三桜の全身を眺めながら口元をゆるませる。

が、彼女の口から「シィ」と威嚇するように息が漏れたので霧馬はまた前を向いた。

二人は再び粘つく廊下を歩きだし、霧馬が指を立てた。

「あー、言い忘れましたがうちの御頭 霧人様きじとはこのくらいの時間にお食事を摂られます。今日は御頭も昏黒坂病院まで足を運んでおられますので先に摂られたとは思いますが、もし待つことになったらご容赦ください」

無反応を装いつつ、三桜は目を細めた。

(昏黒坂霧人がここに……)

まあ守野家当主の三桜を呼びつけたのだから、昏黒坂家当主が来るのは当然だ。普通は当然と思う。しかし相手が昏黒坂であること

が厄介だ。

霧人。

予想はしていたが、いざあの男と面会する現実が近付いているのだと意識すると、自然と三桜の額に汗が浮かんだ。

昏黒坂家は異質だ。

一般人を犠牲とした稼ぎを行い、表社会の富裕層共を商売相手にするスナッフビデオ撮影など、純血一族ではまず容認しない。純血一族という裏組織の存在が表社会に知られるきっかけになりかねないからだ。だから多くの家系は裏社会での傭兵稼業を主軸としているというのに。

この家系だけは御上の命に従わず好き放題に暴れまわり、その拳動は放っておけば純血一族を危険に晒しかねない。

それを御上も咎めない。守野家はもちろん、他の家系でもそんな真似をすれば即処断されるものだ。

どの家系も口に出さないが明らかに昏黒坂家は御上に黙認されるケースが多すぎることを知っていた。何故かは誰も知らない。ゆえに、昏黒坂家の頂点たる男が御上に影響可能なほどの力を持っていると思わざるを得ない。

昏黒坂霧人。御上でも触れたがらない昏黒坂家を成した男。

そんな奴が守野家に接触を図ってきた。

不安や嫌な予感ばかりが三桜の頭を巡回する。昏黒坂に関わると碌な事がないのは有名だ。

(くそ……厄介な連中に目を付けられたもんだ……昏黒坂が守野に一体何の用があるってのさ。八汰祁の馬鹿もあっさり付け込まれやがって。こんな事態になるまで何をしていた)

文句を頭に並べつつも家系を守る立場としての悩みは消えない。

相手は昏黒坂霧人、何を要求されるのか想像もできず不安が増すばかり。

海外にいた三桜はここ数年の守野の活動をすべて把握できているわけではなく、把握できていないものの中に昏黒坂が取り入る隙があつたのではないかと疑つた。

それが何かも八汰祁が攫われてしまったことで知る術がない。

結局、こうして昏黒坂病院まで来てしまった。

勘の鋭い三桜は、すでに守野は昏黒坂の手の上にあるのではないかという良からぬ想像すら巡らしていた。

「どうしました？ 顔色が優れないようですが。腹ん中搔っ捌いて検査してみます？」

「黙れ弱肉が」

位置的には建物の中心くらいだろうか。表札が外されているので真偽は不明だが、扉が他の部屋と違う点から元は役員が使つていたと思われる部屋の前に二人は立つた。

「中に御頭がおります」

霧馬が扉をノックして横に立つ。一人で入れということだろう。

三桜は男に一瞥をくれて中に入った。

広い部屋の中心に黒革のソファが二つずつ、テーブルを挟んで向かい合わせに設置されていた。

その一つに、昏黒坂霧人は座っていた。

霧馬と同様に髪も瞳も漆黒で、爪も唇も黒に塗られている。瞳には生気の欠片もなく、視線が何処を向いているのか把握する前にこちらが吸い込まれてしまう。医者のように裾の長い衣を羽織っているのは霧馬と同じだが、彼はその上から腕、脚、腰、胸、首、あら

ゆる箇所には黒革のベルトをぐるぐると巻き付けている異様な格好だった。

霧人は三桜よりもずっと大きな黒革のブーツを履いた足を両方ともテーブルの上に乗せ、ソファの裏に片腕を回して三桜を迎えた。

「貴様が昏黒坂霧」

ガン！

三桜が口を開いた直後、霧人は片足の踵でテーブルを叩き、顎で向かい側のソファを指した。

『座れ』という意味なのだろう。

八汰祁を人質に取られている以上ここで暴れるわけにもいかない三桜は、霧人の態度には目を伏せて彼の向かい側に座った。

「よう守野のクソアマ。ここは室内だから小便はちゃんと便所ですてくれや」

「折角の煽り文句だが、私様は貴様とじゃれ合うつもりはないんでね。うちの八汰祁をさっさと返してもらおうか。無事に黙って返せば、御上への報告だけで済ませてやる」

「Oh」

霧人は両眉を上げ、口笛を一息分吹いた。

「それじゃあ何のために俺がわざわざ部下に攫わせてきたのかわかんねえだろ馬鹿か脳筋女」

「なんだ要求があるのか。私様の反吐でも欲しいのか？」

「胃と膀胱付きなら貰ってやってもいいぜ。今日の晩飯にでもしてやるよ。だが、てめえなんぞの汚ねえ内臓だけじゃあ返せねえな」

「おいおい私様をあまり苛めないでくれよ。貴様のように下種と下種の配合で生まれたとびつきりの下種を相手にするのは初めてでね。どんな汚物を捧げたら良いのか想像もできないんだよ」

「ああ、それはてめえの面の皮で事足りる。ケツを拭くのに使えそ
うだ。まあそれはいつでも手に入れられるからな、欲しいのは並折
の情報だ」

「おつといきなり下水管から予想外の単語が出てきて私様ビックリ。
並折だつて？ 貴様が知つてどうするのさ。まあいいや、何が知り
たい？ 並折の状勢かい？」

「入り方だ」

三桜の表情は凍りついた。

にやけて罵詈雑言を吐いていた口も一拍置いて閉ざされる。

「入り方……だと？」

「そう。てめえが御上から聞いた、並折への入り方」

「御上からは絶対に口外するなと申しつけられている。それは教え
られない。無理な要求だね」

「Hah、あのなあ」

「要求には応じない。八汰祁は返してもらつ」

三桜がそう言った直後。

メキィ！

霧人の右足が伸びて三桜の側頭部を薙いだ。

獣人の反射神経でも反応が遅れ、彼女は驚愕の顔でソファから転
がり落ちることとなった。

「ぐっ……は……！」

発達した僧帽筋のおかげで意識を保つてはいられるものの、こん
な強烈な蹴りを喰らったのは久々だった。常人なら頭が干切れ飛ん
でいてもおかしくない。

三桜は痛む首をおさえてすぐさま膝立ちに体勢を整えた。

獸人に蹴撃を見舞った霧人は、右足を宙に浮かべたまま左右に振り、テーブルの下に降ろした。身を起こし、頬に手を添え、彼を見上げる三桜に口を歪ませて見せる。

「たった今、守野八汰祁の処刑が決定した」

「貴様……！」

「取り引きは不成立、残念だな。つーわけで、ここからは脅迫へ移行する」

「ま、待て。八汰祁は」

「殺す。終わり。まあ良い判断だぜ守野の当主。御上の命令なら、一人の犠牲を払ってでも守るべきだ。てめえはよく頑張ったよ、あっさり要求に応じるようなら状況はどんどん悪化していくからな」
「頼む、八汰祁を返してくれ」

先程までの威勢はどこへやら。

頭を垂れて嘆願する守野三桜の姿に、霧人は拍子抜けた。

そんなにあの老人が大事か。家族愛ってやつか。そんなものを大事にする奴が、まだ純血一族に残っているとは。

馬鹿じゃねえのか。

霧人は包み隠さず嘲笑った。

「はは、ぎゃはははは。いいぜ、八汰祁については考えておいてやる。あんなジジイはてめえを此処に連れてくる為に攫っただけだしな。ついでに要求内容も柔らかくしてやる」

「……」

この男が、急に優しさを見せるのは気持ちが悪い。何かある。

三桜は霧人を睨み続けた。

「察しがいいねえ三桜ちゃん。八汰祁を返したところでてめえらのピンチは変わらねえ。なにせ俺達が握っている人質は、《守野家》そのものなんだからなあ」

漆黒の瞳。そのなかに赤い光源が揺らめく。

彼は一言、「呪詛鎮静の法」と呟いた。

「もちろん三桜の耳には届いている。

けれども彼女は身動き一つしない。

ただ、おびただしい量の汗が額ににじみ、頬を伝っていた。

守野家は純血一族という組織の傘下に入ってから、呪詛能力を本格的に実戦投入した歴史が、実のところ全家系で一番浅い。

獣人という能力を制御しきれなかったからだ。

獣化すると本能のまま人を喰らい、力尽きるまで暴走を続けてしまふ。過去の《十三家系血斗》では同族以外の者を皆殺しにすればよかつたので猛威を振るつたが、それらが統一されると同族殺しを避けるためにしばらく守野家は息を潜めることになった。獣化しても自我を保っていられる方法が見つかるまで。

その方法こそ、《呪詛鎮静の法》と呼ばれる術。

能力を全開放した時よりも強さは衰えるが、これによって守野家は自我を保つたままでの獣化を可能にしたのだ。それが今の守野家である。

この法は、解除法と共に秘術として術式法典に記載され、絶対に外へ漏れないよう守野の本家に保管してあつた。

術が外に漏れ、鎮静の法を破る術が知れ渡ってしまうと 守野家は暴走し、全家系から滅せられる。

「さあ大変なことになった。きひひひひひ」

「き、貴様、守野の本家に侵入したのは八汰祁を攫う為じゃなく…」

「…」
「そうとも。てめえらの大事な大事な術式法典を頂戴する為よ。おかげでうちの若い衆が十八人も死んだ」

こいつらは他家系をそれほど意識したりしない。利用できる駒程度にしか考えていない。

だから術式法典を悪用して守野を潰す気はないだろう。むしろ以前から法典の存在を知っていたのかもしれない。そして守野が利用できると思ったから行動に出た。

法典を奪取し、本家に取引を持ちかける。本家は当主の三桜と交換する条件を受け入れた。三桜本人には、《当主補佐である守野八汰祁が昏黒坂に誘拐され、三桜との交渉を望んでいる》と伝えた。そしてまんまと三桜は昏黒坂病院に来てしまったわけだ。

「法典は？」

「あ？」

「術式法典は？」

「守野本家に返すよう霧馬に言っている。心配すんなよ見たのは術式名称だけで詳細は見てねえ。同じ純血一族なんだ、仲良くいこうや。きひひ」

「そうか……」

三桜は頂垂れた。

安心したのか、絶望が押し寄せたのか、それとも両方が。なににせよ霧人にとってはなかなか愉快的な姿だった。

「つーわけで、てめえは俺の物になった」

霧人は気の抜けた女に歩み寄ると、その長い髪を鷲掴む。顔を上げさせ、三桜の頬にキスをした。

「御上の命令だとしても、主である俺には話せるよな？ 並折への入り方」

「……」

る音が聞こえた。

霧馬の冷たい視線を背に、彼女はひたすら叫び続けた。

部屋の中からはまだ守野三桜の叫び声が聞こえている。霧人の名を呼び、殺してやる、ぶち殺してやると。

それがまるで耳触りの良い音楽であるかのように、扉を背にした霧人は目を閉じて聞いていた。

再び目を開いた時。先程まで顔に張り付けていた笑みは失せていた。

ひどくつまらなそうで、どこか投げやりな視線を、どこへ向けるでもなくただ廊下の汚れに向けているだけ。

（人間つてのは人生のうちで何度も選択を迫られるもんだ。それが見えてしまう奴に、そのスリルは楽しめねえ。死使十三魔のツガイは 結界寮とか言っていたか、その並折内の勢力と純血一族が揉めているところを横合いから潰す。あの雪女が本当に考えているのはそういうことなのか？ 結界のおかげで俺の未来視も狂っちゃまって視えやしねえ。

とりあえずは場を荒らして様子見といったところだが、まさかうちの御上は本気で守野三桜を捨て駒に使うつもりなのか。守野家にしてもそうだ、あっさりと当主を渡しちまいやがって随分頭の悪い

）

ピピピ、ピソ。

霧人の腰に巻き付いていたベルトに何本もの亀裂が走り、千切れ

どうやら三桜からの反撃を何度か貰っていたらしい。
片眉を上げ、鼻で笑う。

（まあいい、白兵戦最強の駒は手に入った。誰もあの娘の価値をわかつちやいなえ、可哀想な女だぜ。どうせそのうち三桜を返せと守野家が言うてくるだろうが、そんなときや返してやるよ。死体になつてるだろうけどな。純血一族内は大方俺の予想通りに動いている。あとは 並折か。霧馬の調査報告が正しけりゃあ、やっぱりもう一度三桜をあそこへ送っておくべきだもんなあ。ついでに、ツガイの腹ん底が見えりゃあ上々。五位を仕留められりゃあ更に上々。つてな）

霧人は、あと一つ何か手を打っておきたいとも思っていた。

彼の中で一つモヤモヤしたものが引つ掛かっている。

そういつのを嫌い、放っておかない彼は、策を練らせたら純血一族参謀家系をも手玉に取るとまで言われる。

気になっているのは、やはり死使十三魔序列四位の件だった。

（ツガイは自分の直下部隊にカクテルズという連中を持っている。そいつらの中で、ツガイの侍女をやっていた奴が居た。だが今は居ない。このタイミングで侍女が変わったのは気になる。ツガイが殺すわけもないし、誰かに殺されたなら報復行動に出る筈だがそれも見られない。怪しすぎるんだよなあ。以前の侍女も今の侍女もコードネームが同じって点は怪しさ抜群だぜ）

黒い下唇を親指ではじき、考えごとを続けながら廊下を歩く彼の姿はだんだんと薄れていった。

（たしか そう、グレナデンだ）

ぎりぎりと歯を噛みしめる三桜の肩に霧馬は手を乗せた。

その手に同情なんて感情はなく、三桜は彼の「気が済んだらさつさとしてくれないか」という思いを受け取った。

もはや三桜は守野家当主という立場を失い、昏黒坂の駒となってしまうた。

ただ昏黒坂霧人の生み出す流れに身を任せるだけの 弱肉。

あの男は守野の人間をよく知っている。八汰祁を喰って、自分達が守野よりも格上なのだと三桜に言い聞かせたのだ。

強き昏黒坂。

弱き守野。

三桜は己が家系の未来を嘆き、悲しんだ。

「改めて自己紹介をしておこうかね。僕が、これから君に任務の案内をする昏黒坂霧馬だ」

「 任務か。私様にまた並折へ行けということだったな」

「ああ。僕と君が関わることなんて今後きつと無いだろうから、別に宜しくなくて結構。だけど御頭の命令はきっちり遂行してもらおう」

「私様が、ここで貴様を殺し、舌を噛み切って自害する可能性は考慮していないのか？ ん？」

「んははは、それはないね。君は今、死ぬ気なんてこれーっぽっちもないだろうからよお」

「……何故そう思う」

「それでも僕は昏黒坂の外交担当でもあるんでねえ。他の昏黒坂より他人の気持ち容易に読み取れるのさ。で、もし僕が君の立場だったら やっぱ死ねないんだよね。だって気持ち悪いじゃねえ

か！ 君さあ、気になることだらけだろ？ それにせつかく一生懸命、当主として家系の名誉の為に最前線で頑張ってきたのに、あっさりと捨てられるなんて納得いかねえだろ？ このまま死んだら、それこそ負け犬だぜ。んはははははは」

彼の言う通り。三桜は納得がいつていない。

というか、彼女が日本へ帰ってきてから予想もしていない事態が連続していて、こんな状況になっているのだ。彼女からすれば苛立たしいことこの上ない。

響を殺せという命令は嘘だった。おかげで三桜が海外から呼び戻された意味は無くなり、御上からの信用もがた落ちした。このまま再び海外へ向かうことになるかと思いきや、処分待ちのところ

八汰祁が攫われたという報告。

これも嘘だった。

自分の知らないうちに本家が襲われ、八汰祁が殺され、術式法典まで奪われていた。

当主たる三桜に、誰も報告を入れなかった。

それどころか術式法典を取り戻すために、本家は勝手に三桜を交換材料として突きだしていた。

どいつもこいつも嘘ばかり。

悲しいやら怒れるやら情けないやら悔しいやら。

そんな感情が溢れているというのに自害なんてするわけがない。

三桜の心はあっさりと霧馬に読まれていた。

「いいじゃんいいじゃん守野三桜。そこで失望しないでさすがは元当主。うんうん、霧人様には従っていると見せかけてりゃいい。

家系から見放されても家系を想う。泣けるねー」

「心配するな。貴様も霧人もちゃんと喰い散らかしてやる。だから今は言われた通りにしてやるよ」

「んふ、あははは。身体洗って待ってるぜ」

霧馬は二本指を唇に当て、ちゅ、と三桜へキスを投げた。しかめ面の三桜を見てまた笑いながら、彼は部屋を出る。三桜も口の中で犬歯を舐めながら追従した。

「まず君と同行してもらおう者を紹介する」

廊下へ出て、やってきた方とは別の方向へ進み、二人は階段を上った。

それから渡り廊下を抜け、別棟らしき建物に入る。

霧馬曰く、別棟は《入院棟》と呼ばれているそうだ。三桜は牢獄と解釈した。

「昏黒坂の人間が二人……並折に……」

「ん、まあ、君に解り易いように昏黒坂の人間って言ったけど。二人は昏黒坂であって昏黒坂じゃあないのなあ」

「どういうことだ」

「家系内事情なんで、君が気にしなくていいことだ」

「貴様らは並折で何をしようとしている？ そのくらいは訊いても構わんだろう」

「うっせえなあ。死使十三魔の序列五位のことは知ってんだろ？」

「そいつをぶち殺すんだよ」

「……ちよつと待てオイ。それは序列五位が並折に居るということか？」

「ほーら食いつきやがっためんどくせえ。二人を並折に侵入させた後、こつちに帰還するか二人に同行するかは君に任せるから、気になるなら二人に同行しろよ」

本当に三桜のことを鬱陶しく思っているのだろう。霧馬は歩く速

度をはやめてポケットに両手をつっ込んだ。

五位の名を聞いて動揺した三桜は、霧馬に離されても歩く速度が変わらなかった。

彼女の横を、いくつもの《病室》が通り過ぎてゆく。

やはり扉は鉄製で、窓枠には格子が嵌められている。

中は真つ暗で様子を窺うことは難しい。三桜の目なら可能だろうが、今の彼女にそこまでする気はなかった。

守野のこと、昏黒坂のこと、自分の置かれた状況。悩みの種は尽きないのに、三桜はふと一人の少女のことを考えていた。

（柘榴、大丈夫かな）

あの子は臆病だ。臆病なくせにやたら強がり、意地っ張り。じ

やあその意地を張り続けるのかというのと、あっさり捨てたりする。

弱っちいやつ。

死使十三魔の序列五位が並折に居るなんて聞いたら、あいつはどんな顔をするだろうか。

もし知らなかったとしても教えてやったら腰を抜かすに違いない。澄ました顔で新聞を読みながら減らず口を叩き、しかし夜中にひとりトイレへ行けなくなるのだ。

三桜はクス、と笑みをこぼした。

並折に戻るのだから柘榴との生活がまた始まる。それを思うと、彼女は楽しみな気持ちが少しだけ込み上げてくるのを感じた。唯一の救いだった。

（会いたいなあ、柘榴）

恋い焦がれるように、ふてぶてしい少女の顔を思い浮かべる。

「おっと」

霧馬が二階最奥の病室前で足を止めていた。

三桜も追い付くが、彼は南京錠の外れた扉の前に立ったまま窓枠から中を覗いているだけだ。

「まだ取り込み中かな」

霧馬がそう言うので、三桜も気になって彼の後ろから首を伸ばした。

窓枠から中を覗くと、他の部屋と違って天井の電球が一つ点いている。

その直下 部屋の中心に、背の高い男の後ろ姿が見えた。

昏黒坂の人間なのだろうが 髪が、灰色だ。

全面均等な色合いではなくなんだか薄汚れた色合いで、それを誤魔化すためなのかオールバックに固めている。

「あいつは？」

「彼の名は《キリサメ》。君が連れていく者の一人。説明欲しい？」

「……見たところやはり呪詛憑き……なのになんだか奇妙な感覚を受ける。でも相当の手練れだねありゃあ。昏黒坂にこんな男がいたとは驚きだ」

「一応、昏黒坂の人間だが、昏黒坂の家名を剥奪された男だ。君の見立てどおり腕は一流なんで斬り込み隊長という使い方をしている」

「得物は……刃物か」

背中に二つ、腰にも二つの鞘を備えているのが見える。両脚の太ももと両腕の二の腕にも一本ずつ計四つの短刀をベルトで固定してある。確認できるだけでも長短八つの武器を装備している珍しい格好だ。

キリサメの姿を注視していた三桜は、明かりの届かない部屋の隅隅に気付いた。

「おい、あれはなんだ」

両手首を縛られ天井から吊るされた裸体の人間が、ずらりと部屋の壁に沿って並んでいるではないか。

どれも中年の男のようで運動不足甚だしい腹をしている。猿ぐつわを嵌められた顔は恐怖に目を見開き、キリサメに懇願の意を伝えようと荒い呼吸を繰り返しているようだ。

「何って、人間だろ」

「見たところ全員一般人のようだよ」

「それがなんだってんだよ」

キリサメは両手を腰に伸ばし、それぞれ長刀の柄を握った。

「まあキリサメは後回しにすつか。次行こう次」

霧馬は頭の後ろに両手を回し、三桜の隣を通り過ぎる。

中からは中年男共の絶叫が聞こえ始め、ビシヤリと窓一面に血がくっついて中が見えなくなった。

肉をミキサーに入れるところなるんだな。三桜はそんなことを思った。

「で、もう一人は何者なんだ」

更に階段を上り、三階の廊下を歩きながら訊く。

二階も静かだったが、この三階は二階とは比べ物にならない不気味さが漂っていた。

廊下の照明も切られており、先が見えないほどの暗さが覆っている。通り過ぎる病室からはぶつぶつと呟き声が漏れていて、この階には精神に異常をきたした者が閉じ込められているのだろうかと思

桜は思った。

「もう一人は、僕のおもちゃ」

「はあ？」

「名前は《昏黒坂霧鬼》。ちょっと遊び過ぎたんでところどころ異常があるかもしれないねえから、キリサメ一人だけ行かせようかと僕は思ってる」

「だが霧人は二人連れて行くよう言っていた筈だ」

「使い物になるかどうかもわかんねえ奴なんか連れて行ったって意味ねえだろ。御頭には僕から言いつもり」

その病室にだけは、名札が付いていた。

霧馬の言った二人目の名前が書かれている。

彼はポケットから鍵を出して南京錠を外すと、霧人の時と同じように扉の横に立って手で「どうぞ」と促した。

「貴様は来なくていいのか」

「僕の顔を見ると発狂しちゃうんでね。ここで待ってるわ」

自分の家族をおもちゃ呼ばわりとは。顔を見ただけで発狂するようになるまで、一体何をしたのか。

よその家系事情を気にしつつも、三桜は一人で部屋に入った。

暗闇の中。

空気に溶けてしまいそうな小声が三桜の鼓膜に届いた。

少女の声だ。

独り言だろうか。

窓際に備え付けられたベッドからだ。

カーテンを閉め切っている。開けたところで無情の鉄格子が現れるだけで、外の景色が希望を映し出すことはない。

ツンと鼻につく人間のおい。空気が生温かい部屋。

ベッドの上に声の主が横たわっている。

三桜はその枕元に立ち

絶句した。

「……たくさんの辛いことがあります。でもそれが人生です。生きていけば辛い分だけ必ず幸せは訪れます。それが人生です。たくさん辛いことだけ必ず幸せは訪れます。でもそれが人生です。生きていけば辛い分だけ必ず幸せは訪れます。でもそれが人生です。生きていけば辛い分だけ必ず幸せは訪れます。でもそれが人生です。生きていけば辛い分だけ必ず幸せは訪れます。それが人生です。たくさん辛いことがあります。でもそれが人生です。生きていけば辛い分だけ必ず幸せは訪れます。それが人生です。生きていけば辛い分だけ必ず幸せは訪れます。それが人生です……」

小さな唇が小さく動いている。

痩せ細った指。小さな手は胸の前で組まれているが、手の甲が歪に膨らんでいる。管が浮き出ているようだが明らかに血管ではない太さだ。よくよく見ると縫い跡がある。何かを埋め込まれたのか。

手首には鎖付きの腕輪を嵌められ、鎖はベッドの支柱に繋がっている。

まさかと思い足元を見ると、やはり足首にも同様のものが嵌められていた。

部屋の中にトイレが備わっているのでそこまで歩けるくらいの鎖の長さはあった。独房そのものだ。

服も着せられずバスタオル程度の大きさの布を一枚だけ掛けられた彼女は、畳まれた折り紙を胸に抱いていた。

伸び続けた黒髪は、一部分がベッドから床まで垂れている。
青痣だらけの顔。痣は顔だけでなく全身に見られた。
虚ろな右目はずっとカビの生えた天井を見続けている。もう片方の目は眼帯が付けられ、血が滲んでいた。
それは、見るに堪えない少女で。
三桜もどう声を掛けようかと戸惑った。

「昏黒坂、霧兎……だな？」

ギロツ。

呟いていた口を閉じ、見開かれた右目が三桜の顔に向けられる。

「私様は、守野三桜という」

じつと顔を見つめたまま霧兎は動かない。
小さな口が小さく動いた。

「……き、きょうは……なにもしない日だって……」
「は？」
「……きょうは、痛いことされない日……」

少女の目に涙が浮かぶ。

胸の前で組んだ手がカタカタと震えだした。

三桜はその手に自分の手を重ね、少女の頭にも手を添えた。

「しないよ。しない」

「……ほんとうに？ きょうはしない日？」

「うん、私様はお前と一緒に出かけをするために来たんだ」

「お出かけ？ 外に？」

「そうだよ。もう痛いことなんかされない」

「でも……」

霧兎は布を掴み、顔まで引き上げて覆った。

「大丈夫。お前に痛いことする奴には、もうさせないように言ったから。そいつもお出かけしていいってさ」

「でも……」

じゃら、と鎖が少女の胸を流れて音を出した。

「霧兎は、病気だから……」

「病気？」

「うん……」

「どんな？」

三桜は膝をかがめて霧兎の顔に自分の顔を近づける。

少女は布で隠していた顔を少しだけ出し、伏せた目をちらちらと三桜に向けた。

「あのね……誰にも言わない……？」

「ああ、言わない」

「毎日……赤いおしっこが出るの……」

ギッ……！

三桜は表情を崩さず、奥歯を食い縛った。

この痣だらけの身体を見れば、血尿が出るのは当然だ。

「あはは、大丈夫だ。外に出かければ出なくなっていくよ。私様も赤いおしっこ出たことあるから、同じだね」

「ほんとう？」

「本当だ。だから私様と、あともう一人いるんだけど、とにかく三人で出かけてくれるかな？」

「もうひとり？」

「キリサメって奴。その様子だと会ったことないだろ」

霧兎はしばらく呆けた顔で三桜の口の動きを見ていた。

「……うん……ない……」

「たぶん私様よりそいつと一緒に行動することが多い。仲良くしろよ」

「……わかった」

カーテンと鉄格子、鉄扉と南京錠で閉ざされたこの場所に一生を過ごす。その幸せなき現実と苦痛に満ちた未来がどれだけ少女の心を痛め付けたかわからない。

三桜はこの子がどれだけの間ここで過ごしていたか知らないが、霧馬の玩具にされてきた霧兎が今も正気を保ったままで生きていることが信じられなかった。

身体の傷を見たら瞭然。矢神聖歌の凄惨な縫い跡を見ても動じなかったが、あれは別だ。人間じゃあない。

霧兎の縫い跡は、身体のパーツを合わせるために縫ったものとは違う。手の甲には何かを埋め込まれた膨らみがあるのだ、腹部だって切り開いてなんらかの処置を施されているに違いない。

病院と銘打ったところで昏黒坂の施設だ。苦痛を与え悲鳴を愉しむ連中が、手術と称して身体を切り裂けば当然笑い声と悲鳴がこだましただろう。

霧兎にはその跡がたくさんあった。

片方の目は 霧馬に食べられていた。

「ほとんど寝ていたんだろう、立てるのか？」

言われ、筋肉の衰えた少女は腕を支えにして身を起こす。ぺた、と細い足を床に着けるが、立つのに苦労しているようだ。案の定、彼女の脚は筋力の衰えが著しかった。苦労しているのは筋力のせいだけではないらしい。両足十本の指に包帯が巻かれている爪でも剥がされたか。

「わかった、無理するな。お洒落な杖を買ってやるよ」

「ごめんなさい」

「気にすんな、仕方ないさ」

また霧兎をベッドに寝かせて肩を叩いた三桜は、「また後でな」と言って部屋を出た。

昏黒坂霧兎は三桜が去ったあと、また天井を見ながら彼女の姿を思い描いていた。

背が高くて、生気に満ち溢れていて、魅力的な女性。

人生のすべてに自信を持っているかのようなあの目の輝きは、一度見たらなかなか忘れられるものではない。

あんな風に生きられたらと、霧兎は憧れた。

期待感が膨らむ。

ずっとここに居なければならぬとは、彼女は思っていなかった。いつか出られる日が来る。そう信じて生きてきた。

たくさん辛いことがあります。でもそれが人生です。生きていれば辛い分だけ必ず幸せは訪れます。それが人生です。

こんなにたくさん辛いことを我慢してきたのだ。その分だけ訪れる幸せはどのようなものだろう。霧兎には想像もできない。手に握る折り畳まれた紙は、長い間彼女に握られていたので汚れている。何度も何度も読み返し、何度も何度も希望をもらった大切な紙。

「たくさんさんの幸せ……」

ほう、と期待の溜息が漏れた。

黙って天井を見つめていると、外から話し声が聞こえる。

さっきの三桜という人だろうか。別の人と言い争っているようにも聞こえる。

三桜の相手は聞きづらい声でもすぐにわかった。霧馬だ。彼の声は鼓膜に届くたびに霧兎を恐怖させる。だから間違いない、三桜と外で話しているのは霧馬だ。

霧兎は使い物にならないとか、役立たずとか言っている。それに対して三桜が怒鳴っているようだった。

部屋の隣や、廊下から聞こえてくる騒音には慣れている。自分に対する冷たい言葉にもだ。

今日は痛いことをされない日なのだ。

安心しきってはいないが、いつもより穏やかな気持ちで居られた。

三桜の声が大きくなっている。

霧馬の、他人を虚仮にする笑い声も大きくなっている。

そして　今まで有り得なかったことが起きた。

自分の部屋の壁が、凄まじい音をたてて砕けたのだ。

壁に埋まっていた鉄の芯が折れ、その一本がベッドの枕元に激突した。

霧兎は目を丸くするしかない。

驚きのあまり言葉を失い、壁に開けられた大きな穴を見る。穴から見える廊下には、さっきのかっこいい女性の姿。そして内側　霧兎の部屋には、昏黒坂霧馬が倒れていた。

「……ひっ」

霧馬の姿を見た霧兎は恐怖反応でベッドの端に退く。

いつもは恐怖する霧兎の顔を嬉々として覗いてくるのだが、今回は違った。

霧馬は霧兎の存在など意識から外れてしまっているようで、視線を穴の外に向けていた。

口元はにやついているが視線は殺気が籠もっている。

砕けた壁の粉末を浴びた霧馬は、衣に付いたそれを払いながら立ち上がるうとするも、ガクリと力なく膝をついた。

何が起こったのだ。

混乱する霧兎はただ見守ることしかできない。

三桜が壊れた壁に手を置き、中へ入ってきた。

「今のが、三倍三桜拳ね」

澄ました顔で霧馬に言う。

対する男は何か言い返そうとして、胃から上ってきた血に邪魔された。

「……ガッ……ハッ……」

びしゃ、と床に吐血する。

霧馬が床に膝を着かされている姿など、霧兎は見たことが無かった。

「昏黒坂の弱肉系男子かと思ったが、案外タフだね。どうせしばらくは立てないだろうから、勝手に霧兎を連れて行くよ」

「……んふ、んははは」

「服とか杖とか買い揃えなきゃいけないんだ。あとはー、そうだな。お泊りセット。女の子の基本道具は揃えないと。な？」

と言つて、三桜は霧兔の方を見た。

だが少女は身動き一つしない。

霧兔は霧馬の反感を買うことは避けたかった。彼の意思に背けば、相応の仕打ちが待っている。

ここで三桜に同調し、自ら彼女を求める行動はできなかった。

霧馬がこちらを見ている。

胸を押さえ、身動きできない苛立ちを視線に乗せて、霧兔にぶつけている。

三桜と霧馬。霧兔は交互に二人を見て、涙を浮かべた。

「……人間てのは。んはは……人生のうちで何度も選択を迫られるもんだ。御頭の言葉さ。覚えているかい、霧兔……教えたよな？」

霧馬の言葉に、霧兔は身体を震わせた。

三桜は黙って見ているだけで、動こうとしない。

「……ゲヘッ、ゲホッ。守野三桜が、昏黒坂霧馬を退けて、お前を連れ出そうとしている。見ての通り僕は動けねえ。さあ、お前次第だ、霧兔」

「……あ、う……」

「僕の意思に反するの……？ お前如きが」

守野三桜と昏黒坂霧馬。希望と恐怖の軋轢。

勝っているのは恐怖心だ。今までは霧馬に従い、反抗の意なんて示したこともなかった。それでも霧馬や他の昏黒坂の者達は容赦なく霧兔を痛めつけた。

反抗の意思なんてこれっぽっちも抱かなかった。もし今、ここで初めて彼に背いたら。その後待っている責め苦は今までとは比べ物にならないだろう。

爪を剥がされ、皮を剥がされ、身体にメスを入れられるよりも痛いことをされるかもしれない。裸に剥かれて廊下に吊るされ水や視線を浴びせられるよりも恥ずかしく苦しいことをされるかもしれない。体内に埋め込まれた機械よりも、もっと歪で禍々しいものを埋め込まれるかもしれない。

それを思うと、どうしても霧兎には希望を掴もうと手を伸ばす事ができなかつた。

『たくさんの辛いことがあります。でもそれが人生です。生きていけば辛い分だけ必ず幸せは訪れます。それが人生です』

いつも自分に言い聞かせていた言葉。
訪れる幸せは、いつ来るのだろうと毎日考えていた。

『たくさんの辛いことがあります。でもそれが人生です。生きていけば辛い分だけ必ず幸せは訪れます。それが人生です』

『信じて生きていけば、また会える。自分に負けるな。一緒に頑張ろう、霧兎』

(自分に負けない……一緒に……)

いつも心の支えとしていたボロボロの手紙。

何をされても霧兎はこれを握り締めて耐えた。

霧兎はかたく目を閉じ、「ふう、ふう、ふう、ふう」と呼吸を荒くした。手汗と血が染みこんだ手紙をぎゅうと握り、恐怖心と戦う。

そして、懸命に言葉をひり出した。

「い、いき、ます」

「……ああ？」

「い、いって……きます」

霧兎はベッドの支柱を支えに立ち上がると、おぼつかない足取りで三桜のところまで歩いた。

床に座り込む霧馬を視界に捉えながら、霧兎は、ここから出る選択をしたのだ。

「決まりだな霧馬」

ニツ、と笑う三桜。

自分の足で歩いてきた少女を、持ち上げて背中に乗せた。

霧馬は血を横へ吐き捨て、諦めとも取れる深い溜息をついた。

「勝手にしやがれ。任務内容はキリサメに伝えてある。あいつから聞け」

「やけにあっさり折れたな。ダメージで心が折れたか？」

「てめえのカス殴りなんざ屁でもねえよ。昏黒坂らしくて良いんじゃないの？ リスキーな選択には寛容なんだよ僕たちは」

苦し紛れの捨て台詞を吐く彼を残し、三桜は穴から廊下に出る。

背中に乗せた霧兎は額に脂汗を浮かばせ、まだ震えているようだった。

昏黒坂霧兎は希望を掴むため、選択した。

この選択が本当に彼女に幸せをもたらすのかは定かではない。

たしかに霧兎は昏黒坂病院の、暗い病室から出る事ができた。

しかし、これから彼女が向かう場所が、昏黒坂病院よりも危険な場所であることは間違いない。待っているのは結界都市、集いし

異形、そして……昏黒坂の標的、序列五位なのだ。

再び、そして今度は本格的に戦闘を前提として、純血一族の介入が始まる。

獣人 守野三桜。

昏黒の特攻兵器 昏黒坂霧兎。

灰刃 キリサメ。

いざ、並折へ。

達魔 私の愛しい雪の子です

「そう、アイスクャンディが好きになったのは、柘榴が似ていたからね。

冷やしておかなければ形を留めておけず、温かい舌で舐めたいと思いつつもひとたび舐めはじめると止められない。甘い味を楽しみながら、しかし訪れる味の終わりを意識せざるを得ない。

冷やし続ければ氷菓子それ自体の形は留めておける。だから私は美しい外見だけを愉しみ、味だけは我慢していた」

ペろ、と自分の指をひと舐めして見せた雪女。

思い出から生じた恍惚の吐息が、指先に白い灯火のように浮かび消えた。

「私が眠りにつく前 まだ三百九十五番が私の世話をしてくれていた時。

彼女の傍らには、まだ幼い柘榴が居た。珍しかったわ。自分で、自分に名前を付ける子なんて初めてだったもの。

なにもかもが今までにない初めてのことばかりで、あの子こそ、氷製人間の集大成だと思った」

「しかし無能だった」

暗闇のどこからか聞こえてきた言葉に、番は頷く。^{ツガイ}

頷いた様子は相手に見えていないだろうし、相手がどんな顔で話を聞いているのかも見えない。

ただ番は相手を知り尽くしていたし、相手が番の言葉一つ一つにどのような反応を示すのかも弁えていた。

「無能。能力を持たない子だから無能。ただ、今はその無能ゆえに大いなる波に揉まれつつも生きていられるのでしよう」

「極めて有能か、もしくはは無能。その二極でなければ生きていられないというのが、番様の見解ですか」

「そうね。あの子はどんな味のアイスキャンデーなのかわからない。いいえ、むしろ味のない澄んだ氷そのもの。味の見える氷菓子は誰もが舐めたがる。しかし柘榴は、見ている方が幸せな氷だもの。そう感じるのは決して私だけではない。誰もが本能的にあの子を好むと思うわ」

「……あまりに無能ゆえに警戒心を本能から除外させる。まるで一種の能力ですね」

「唯一の欠点は、その柘榴という氷菓子が死使十三魔製だということ。このブランド名は警戒心を呼ぶ。しかしあの子は極力それを明かさないようにしている」

「PDSサイクル……過去の犠牲を糧に、より完璧な遂行者を生み出すシステム」

「その呼び方はあまり好きではないわ」

室内温度は摂氏四度。

番は片掌に空気中の水分を集めて結晶の渦を作る。

手の中で氷晶の流れは輪を描き、たった一本の蠟燭に照らされたそれはさながらイルミネーションのように輝いた。

「PDSサイクルとは、つまるところ不完全な輪廻。しかし回数を重ねることによって一人を確実に完璧に近づかせることが可能。それを活かすことのできる応変さが求められるけど、天宮柘榴はできる。無能力であっても、呪詛能力者より優位に立てる場面が、状況次第では多くなる」

「状況次第とは、呪詛弱効果結界及び感知結界のある状況ということ

とですか」

「直球ね。その通りよ。有効な二極とは即ち《無能力》と《対能力》。半端な有能力はそれこそ雑魚同然。歯車の一つに過ぎないわ」

「無能力の天宮柘榴。ならば、対能力とは？」

問われ、番は氷晶の流れを消した。

「無能力はもちろん、有能力者よりも優れに優れた者のことね。対能力戦特化呪詛能力者。キャンセラーね。私も含む全呪詛能力者の脅威であり、文字通り最強を名乗るに値する存在と言える」

「キャンセラー。まさか……」

「そう、幸運にも味方。うちの序列五位よ」

「ぐくり、と息をのむ音が闇に響いた。

「質が悪すぎます……序列五位は……多重能力者ではないですか」
「だから最強を名乗る資格があるのよ。ただのキャンセラーなんて無害な無干渉者。能力者史上類を見ない多重能力者だから五位は五位なの」

「五位に対抗するには呪詛能力を使わずして勝利する手段が求められ、しかしその手段も呪詛能力を超えるものでなければならぬ」
「過去にそれを成し遂げたのは 純血一族の、あの家系が有名」
「……昏黒の狂人共ですか。ともあれ連中も結界都市に大勢で押し寄せる愚行には出ないでしょう」

「どちらにせよ純血一族なんて眼中にないわ。無能力者か、対能力者か、どちらかがカオナシに辿り着ければ私の勝ちよ」

「天宮柘榴と序列五位。二人とも、番様の意思で送り込まれたというのに、自分の意志で結界都市に向かったのだと思い込んでいる。それも計算のうちですか？」

「いいえ。最初のきっかけとして利用させてもらっただけよ。二極

同時に使えるなんてこの機会を置いて他にないでしょうから、絶対に失敗させたくないのは本音」

「……大丈夫ですよ」

部屋の隅　暗闇で話していた相手が番の座るテーブルに近付く。ウェーブがかったロングの髪をツインテールに縛り、黒いタイツの上にスカートを揺らす女の姿が明かりに照らしだされた。

どこかふてぶてしさのある顔。

でも彼女が臆病で意地っ張りであることを番は知っている。

そして、今までとは違い、好戦的であることも。

「天宮柘榴　もとい、三百九十六番が失敗して死んだとしても、次はあたしが並折へ行きます」

「そうね」

「あいつが死ねばPDSシステムによってあたしはより完璧に近くなる。柘榴より上手くカオナシを見つけやります」

「期待しているわよ。私の愛する雪の子。《三百九十七番目のグレナデン》」

求めるように前にかがんだグレナデンの頬を、雪女はやさしく撫でた。

ひんやりと、刺すように冷たい指先の流れに、超常の力の片鱗を感じ、あるいは強大な母に畏れを抱き、刺激的なスキンシップにしばし時を忘れた。

（私に名前なんていらぬ。番様の愛する私の中で、私がいちばん優秀なナツシング。その事実だけで　十分）

天宮柘榴など所詮はイレギュラー。勝手に自分で名前を付け、番に背いて勝手に飛び出した愚か者。そんな三百九十六番を、母なる

雪女はまだ愛してあげている。

その尊大な慈愛を一身に受けられたらと、グレナデンは希望の念を胸に抱き、天宮柘榴の抹殺を心に誓う。

「さあ番様、そろそろ横になりましょう。お体に障ります」

雪女は「ありがとう」と少女の肩に腕を回し、立ち上がる。

部屋を出る前に、グレナデンは番の座っていた椅子を確認した。折り畳み式のナイフらしき忘れ物があった。

「番様。これをお忘れに」

「ああ　ありがとう」

いつもドレスの中に携帯していたのだが、立ち上がったときに落ちたらしい。

グレナデンから受け取った番は、それを見つめながら少し考え、グレナデンの手に返した。

「貴女にあげるわ」

「で、でもこれは番様の大切な物なのでは？」

「いいのよ。貴女になら譲っても。それは鎖黒トザクロという名前で、私の力が少しだけ含まれている」

「ありがとうございます」

グレナデンは、すん、と番の香りをまとった鎖黒を鼻先に当て、嬉しそうに胸に抱いた。

(鎖黒……私だけの、番様からのプレゼント)

三百九十五番目の私はせっかちさん。焦って走って迅速に。足元よりも前を見て。あちらこちらに目だけを向けて。時間を割くこと最優先。だってはやく帰りたいから。だからみんなを信頼しきって。あっさり足元すくわれて。なんの成果も挙げられないまま。顔を潰されて死にました。

三百九十六番目の私は臆病さん。ゆっくりそつと冷静に。どれだけ時間を掛けてもいい。あちらこちらに恐れを抱いて。自分の安全最優先。だって死んだら悔しいから。やっぱりみんなを信頼しきって。やっぱりあっさりすくわれて。なんの成果も挙げられないまま。次の私に襲われました。

三百九十七番目の私は狡猾さん。するりと駆けて冷酷に。判断素早く落ち着いて。あちらこちらの把握に努めて。完全無欠の最優秀。だってそれが理だから。そしてみんなを信頼させて。あっさり足元切り捨てて。遂に成果を挙げられるのか。あとは私の運次第。

うぶぶ。

ただ「うづう」と唸るだけなのに、唇が震えてこんな声になる。
さむい。さむい。

「さぶぶ」

これは言ってみただけ。

たった一人分だというのに無駄に広い羽田立荘の中でこなす洗濯は手間が掛かる。

地球の温度が高くなっているとニュースではもっぱら話題だが、冬という季節はやっぱりやってきたし、雪もちやっかり降りやがる。洗濯物を干し終えた私はロビーで大きなストーブの前に立ち、赤くかじかんだ手をすり合わせていた。

ストーブは先月倉庫から引っ張り出してきた。急に寒くなった時に明朗を呼びつけて相談したところ、大きな業務用の石油ストーブが倉庫にあると言って出してくれたのだ。そうよ私が出したわけじゃないのよ。

とにかくこれは有難かった。ついでに私の部屋の分も出してもらったし。

夏に三桜が冷房を取り付けてくれたのだが、どうせなら冷暖房でお願いしたかったな。と、今更試してみるもあいつ自身は寒さに強いと言っていたので無駄だったかもしれない。
はい後悔してももう遅い。

あー寒い寒い。寒い。

特に考える事がないとこの単語ばかり反芻してしまうのは宜しくないな。

冷えた手が温まるまで、ロビー備え付けのテレビを見ることにした。

リモコンが見つからないのでダッシュでテレビの電源を入れてダッシュでストップ前まで戻ってくる。私ってこんなに素早く動けたのか、と自分で驚く。

最初に映ったのはコマーシャル。もう目に焼き付くくらい見たぞこれ。

地上デジタルなんたらがなんたらで、アナログがどうたら、ってやつ。日本国民全員がなにやら一斉になんかするらしい。大変な国ね。

ニュースが始まった。私はあまりバラエティ番組というのは見ない。というかテレビだって日本に来て初めて見た。最初は聖歌に電源の入れ方から教えてもらった。

私がバラエティを見ないのは、嫌な思い出があるからだ。

一度、夜中にここで三桜と一緒に見たのだが、なにかやたら面白かったので笑ってしまったのだ。私は声を出して大笑いとかあまりしたことがなかったので、「へひひ」みたいな、変な声が出てしまった。

それから一週間くらい三桜にからかわれ続けたという最悪の思い出。思い出しただけで穴があいたら引つ込みたくなる。

封印！

で、私はニュースを好んでみるようになったわけだが、なんとなくか、テレビで情報を収集するのは効率性に欠けるような気がするのね。

瑠架子も言っていたんだけど、インターネットの方が情報掲載量が圧倒的に豊富なのよ。まあ私にはそれをする環境が無いのでテレビの説明を聞くしかできないんだけど。

いやそもそも私が表社会の状況を知ったところでどうにもならない。

自覚しつつも視聴継続。

どこの県知事が逮捕されて、新しい知事に芸能人が立候補を表明したと言ってる。

その芸名を聞いてちょっと頬がにやついたのが悔しかった。

「はあ、食事済んだし洗濯終わったし、次は……」

掃除だ。ロビーと廊下のモップ掛け。

これ怠るとすぐに埃が溜まる。

掃除係だった三桜が四日間サボったらかななかの埃量になったのを覚えている。

だから三日もしくは二日に一度は掃除しなきゃいけない。

ターゲットネットクに首をうずめ、両手を脇の下に差し込んで移動することにした。

バケツいっぱい溜まった水を、えんやこらとロビーまで運び、モップを肩に乗せたまま一休み。もうこれだけで一仕事終えた感覚なんだけど。

とぶん、とモップを水に浸した時、羽田立荘の外に人の気配を感じた。

走っているらしきリズムの良い足音が近づき、私は玄関が開くまでそちらを見続けた。

「おはようクロちゃん！」

「おはよう明朗」

挨拶するなり（というか挨拶しながら）彼はロビーまで駆け上がり、ストーブの前に陣取った。境界寮があるという《かのえと》から寒い中を来たのだから無理もない。

私もバケツごとモップを隅に移動させ、畳敷きのスペースに座る。炬燵。という、テーブルと布団が合体した日本文明の結晶が置いてあるのだ。

「明朗も入りなよ。あつたまってるよ」

促すと彼は飛び込むように炬燵の中へ足を入れた。拳動が猫みただ。

彼は一度だけ立てかけたモップの方に視線を送り、掃除はいいのかと言いたそうだったが、結局何も言わずへらつと笑って私の顔に視線を移した。

半年くらい前までは明朗が来るたびに何をしに来たのか尋ねたものだが、大抵は特に理由がないので今では訊かない。ただこうして会いに来てくれることが、私としても嬉しかったりするのだ。

彼はマフラーを外して炬燵の上に置いたが、ニット帽と耳当てを外す前に蜜柑の入った皿に気付き手を伸ばしていた。

「すっかり冬ですなあクロさんや」

「そうですねあ明朗じいさん」

口をへの字にしてヨボヨボ声を出す彼に合わせて、私もいつもより穏やかな口調で言う。

老人になりきっている彼は水滴の張り付いた窓から外を眺め、林の木々を見つめた。霜が溶けて葉を伝い、ぴちよんぴちよんと一定のリズムで落下する様子を、二人でぼんやり観察した。

「ところでクロさんや」

「なんですかな？」

「飯はまだかの」

「食べてこいやー！」

柘榴婆さんは若返った。

仕方ないのでお昼に食べようと思っていた朝食の残り（昨晚の残りのシチュー）を温めて出してやった。

食事が目の前にやってくるのと明朗も若返り、外を眺めていたあの落ち着きはどこへやら、スプーン片手に大はしゃぎした。

こいつはよく食事の時にはしゃぐ男だ。

「やったね！ クリームシチューだ！」

「毎度毎度、そんな一皿でよく大喜びできるよね」

「ええ？ だって僕の好物じゃないか」

「嘘でしょ」

「嘘じゃないよ。羽田立荘に来ると高い確率でクリームシチューが食べられるのは嬉しいよ」

「高い確率って……」

「大体週に三回はクリームシチューだよね！ 最高だね！」

あれ。そんなに頻繁に食べてたっけ。

「夏なんて、三桜さん涙目になってたよ。『これは絶対に私様への嫌がらせなんだ。私様が綺麗すぎるからいけないんだ』とか言ってる」

うわ、私もちよつと覚えてる。

「なんだー、てっきり僕の為に作ってくれていたんだと思っていたよ」

「なananであんたの為に週三ペースでクリームシチュー作らなきゃいけないのよ。そもそも明朗の好物なんて聞いたことなかったし」

「あれれ、そうだったっけ。ごちそうさま！」

食べ終わるの早すぎるでしょ！

明朗はダッシュで台所に皿を片付けに行き、ダッシュで炬燵に戻ってきた。こいつもこんなに素早い動きができたのね。

勢いよく炬燵の中へ突っ込んできた明朗の足が私の足に当たり、

文句を言つと、彼は悪戯つぽく笑いながら指で足の裏をくすぐってきた。

「ちょ、ちょっとやめなさいよ」

「うりうりー」

「もう!」

足を引つ込めて胡坐をかく。

精神年齢が三桜並に低い男なのだ。もしかしたら三桜よりも低いかもしれない。

呆れながら蜜柑の皮を剥いていると、明朗は両腕を台の上に乗せてこちらの顔を窺ってきた。

「クロちゃんさ」

「なによ」

「そろそろ、居を移さない?」

「なんでよ。そもそもどこへ行けてのよ」

「結界寮」

「ふざけないで」

悪い冗談だ。

そう思ったが、彼はわりと本気のようにだった。

「羽田立荘は広すぎるよ、掃除だけでも大変でしょ。結界寮なら炊事洗濯掃除は林檎さんがやってくれるから楽だと思ふんだ。クロちゃんも並折にどんな目的で来たのか僕は知らない。けどさ、進展してないでしょ。結界寮ならクロちゃんの目的を果たすために力になれる人材が揃っていると思ふ」

蜜柑を一摘みし、口に放りながら片耳に聞いていた私は溜息が

出た。

「そもそもあたしは結界寮と関わりたくないの」

「……危ないから？」

「そうよ。明朗は上手に立ち回っているから平気なんでしょうけど、あたしはそんな自信ないわ。それに結界寮に入ることとは、その仕事を手伝わなきゃいけないでしょ。危険に自分から首を突っ込むなんて、御免よ」

何度も思ったことだし、明朗にだってわかっていることだ。

本当は私の方が言いたいくらいだ。『明朗、結界寮なんて抜けて、羽田立荘にいらっしやいよ』と。

羽田立荘は明朗が管理する結界寮の施設なのだから言っていることは無茶苦茶だし、現在の私は既に結界寮と関わりを持っている。でも私が言いたいのは住む場所云々じゃあない……つまり、その、うん。

なんだか私自身が矛盾していて頭がこんがらがってきた。

「僕にはどうしてクロちゃんがそこまで警戒するのかわからないよ。結界寮と関わっても関わらなくてもこの街に居る以上、リスクは誰もが等しく背負うもの。結界寮の仕事だって、適材適務の方針を続けている。つまり優秀な人ほど危険な任務に就く場合が多いんだ」

リスクの分散？ いや、調整か。

優秀な人間ほどリスクの大きな任務に就かせるなんて、それこそ駒の証明だ。好んで危険に飛び込みたがる奴なんて、そりゃ居るわけないか。

「カザラさん覚えてる？ 彼は優秀だった。だから式神侵入の時だって僕みたいな無力な奴に付き添うツーマンセルの行動を命じられ

ていたんだ。聖歌さんも単独行動を許された数少ない者の一人だった。彼女の能力を踏まえた上で、どんな危険な状況や侵入者に遭遇するかわからないこの街で自由行動を許可されたんだ。彼女もそれを希望していたし。僕が言いたいのは、この街のどこにも安全な場所なんてないってことだよ」

「等しく危険で、結界寮がそう調整している、と」

「……侵入者を駆除するのは、そもそも結界寮に対する攻撃を抑制する為だからね。結界寮に影響を及ぼさない程度の連中は、実のところ放置される傾向にある」

「その放置された奴らに結界寮でない者が襲われようと知ったことではない、と。それどころか結界寮の連中が襲うことだってあるわよね」

「……そういう仕組みさ。暴れたい奴は結界寮に所属した方が好き放題暴られる。管理統治なんて言ってるけど、結局のところ表側一般人を守る気なんてさらさらないんだよ。最優先は勢力の維持と拡大。この羽田立荘だって……僕が梵さんと林檎さんに頼んで結界寮管理下の建物ということにしてもらった。そうでなければ今頃はとつくに荒らされ放題だったよ」

なんとなくわかっていた。

私が今生きていられるのは、私が警戒しているからじゃない。

明朗が守ってくれているからなんじゃないかって。

だから明朗がどうしてこんな話を持ち出したのか理解した。

結局、今の私は結界寮の管理下に置かれているのだ。建物が壊れたら統界執行員が直しに来てくれるし、御渡瑠架子が見回りに定期的に立ち寄ってくれた。織神楽響の時もカザラ・イグニールが救出に駆けつけてくれた。

それは明朗が結界寮に所属していて、その明朗が羽田立荘の管理を任されているからなのだ。

私はそこに住まう誰かにすぎない。

リスクはどこに居ても同じ。ならば結界寮から距離のある場所で暮らすよりも、結界寮直下で暮らす方がまだ安全であり、どんなに異常な性格でも仲間として協力関係になる豊富な能力者たちを利用できた方が得策ではないか。明朗の提案は、つまりそういうことだった。

蜜柑をもう一つ摘まみ、口に放る。

「はあ。危険はどこに居ても同じって言われたら、あたしは何も言えないわ」

「ふふふ」

「でもやっぱり、ここを離れたくはないかな」

「そうだよ。クロちゃんは、危険とか抜きにしてここに居たい理由がある」

む、と動かす口を止めて明朗を見る。

彼も私と同じように蜜柑を口に放り、剥いた皮を手で弄んでいた。

「本音は、三桜さんを待っているんでしょ？」

「……」

「あはは、やっぱりそうなんだね。結界寮側の人間なら『くだらない理由』と口々に言うだろうけど、僕は好きだよ」

やっぱりとは？

無言を肯定と解釈されたのか？

いや、私は、呆気にとられたのだ。明朗は私の気持ちを言い当てたのではなく、自分でもわからなかった答えを彼が出してしまった。蒙昧と心の中に残るここを離れたくないという気持ちに理由を設けるなら、それだった。

三桜を待っているから。

そんなわけない、と即否定する余裕もなく、自分で驚いている。私自身、納得してしまっただから。

特にこれといった理由も明示せず、明朗の移住という提案を拒み続けていたのは、自分でもわかっていた筈のそれを否定したがる感情によって抑制され、無意識化していたということか。

「どうしてあたしが三桜を待ち続けていると思うの？」

おかしいでしょ。私自身もおかしいと思うもの。

あいつは純血一族で、一緒に行動すればそりゃあ危険回避の手段にもなるわ。でも同時にリスクを招く人物でもある。それならリスク回避を優先する私の思考が、あいつとの再会を望むわけがない。

「だってクロちゃん、今でこそ戻ってきたけど三桜さんが居なくなっただ直後は表情が暗かったよ？」

「あたしが？ まさか！」

「聖歌さんが居なくなっただ時少し表情が暗くなっただけど、それからすぐに三桜さんも居なくなっただ一人になっただからのクロちゃん、の姿はとても心配だった。食事を用意しすぎちゃって、僕が呼ばれることも多かった」

そうだったっけ。

そうだったかもしれない。

「三桜さんのこと好き？」

蜜柑の果汁が口から噴き出た。

「ば、馬鹿じゃないのっ？ あたしは女、あいつも女！ そんな感情あるわけないでしょー！」

ハンカチで明朗の顔を拭くと、彼はトマトのように真っ赤な顔になって手を素早く振った。

「そそそ、そういう意味で言ったんじゃないよ！ ほら、二人は仲が良かったから、友達　そう、友達として好きなのか訊いただけだよ！」

「え、あ、友達？　そうね……」

と、言われても。

三桜つて友人だっけ？

というか友人というのは、仲が良いから友人なんですよ。私と三桜はべつに仲なんて良くなかったわよ。他人を弱肉呼ばわりするしデリカシーに欠けるし、新聞を読む時も邪魔してきて鬱陶しかった。

三桜を友達だと思ったことはない。

でももう一度会いたいと思うこの感情はなに？

はい、また謎が生まれました。

「まったく……明朗があたしと三桜を見てそんなことを思っていたなんて驚きよ」

「だから違っつてば！　そりゃあ梵さんと林檎さんを見ていればそういう世界もあるんだなあ、って思うけどさ」

「あたしは同性を好きになつたりしない！　と思う！」

そもそも番姉さんの部屋が唯一の世界だった私は、異性と仲良くなることだって無かったのに。好きだのなんだのと、そこまで経験があるわけじゃないのよ。

だから……そうね。興味がないわけではない。

多少は自由になって、経験してみたいとも思った。

その、恋、とか。

知識はある。どういうものかもわかっているつもりだ。でも実際には、それがどんな状態になって恋と呼ぶのかまではわからない。蜜柑の残りひとかけらと口に放り、全力で無表情を保ちそっけない振りをしつつ明朗へ提案することにした。

「ね、ねえ明朗」

「うん？」

「デートしよっか」

「ぶほっ！」

明朗の口から蜜柑の果汁が噴き出し、私の顔にかかった。

彼は自分の口元を拭くより先に、傍にあったティッシュで私の顔を拭いてくれた。

その間も私はずっと横を向いて頬杖を付いていて、自分で言ったくせに動揺のあまり顔に果汁がかかったことなど気にもしておらず、明朗の言葉をひたすら待つばかりだった。

彼は気管に異物が入ったのか、むせ込みながら何かを言おうと必死だ。

「げほっ、げほっ！ あー、けほっ」

「……………」

「うん行こっ」

咳込んだ割にはあまりにもあっさりと言いやがったので、腕から頬がずり落ちた。

もっとこう、寒いから嫌だとか、炬燵でくつろいでいたいとか、面倒がられると思っていただけ……………。

そんなことはなく明朗はさっさと立ち上がってしまい、言い出しっぱのこちらが驚いて硬直している。

「クロちゃんいつも面白い物はひのえと商店街でしてるでしょ？」

「あ、うん。あそこで十分揃うから……」

「じゃあ今日は、その奥のもっと新しいところへ行こうよ！」

「新しいところ」

「そうそう。ショッピングモールだってあるよ！一緒に見て回ろう！」

「は、はい」

即決。即行動。

明朗に引かれるまま、寒さも忘れて炬燵を抜け出し、急いで支度をする。

私が部屋に戻っている間、明朗は羽田立荘の戸締りを確認してくれた。

まったく、何度も言うが、気の回る男だ。

私は無駄に何度も鏡なんか見たりして、やたら遅い支度だったというのに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8410q/>

嗤う魔性のデュアルフェイス

2011年12月19日02時54分発行